
ドラえもんとセーラーMoon

村上 妙夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラえもんとセーラーMoon

【Nコード】

N58210

【作者名】

村上 妙夏

【あらすじ】

22世紀でドラえもんの妹・ドラミが突然行方不明になったと、セワシから聞いたドラえもんは、大騒ぎ。ドラえもんは妹を探すために21世紀から、22世紀に帰還しようとする。その途中で彼はある不思議な声に導かれ、30世紀の未来のクリスタルトーキョーに迷い込む。そこでドラえもんが見たものは、クリスタルトーキョーの女王であるネオ・クイーン・セレニティが立っているのである。彼女は、20世紀の世界に危機が迫っていると語る。

その言葉を聞き、ドラえもんは、妹の手掛りを求めながら、途中で

加わったのび太やセワシと共に世界を救うため20世紀に向かう。

序章ドラミちゃんとセーラーサターン（前書き）

最初にセーラーサターンが登場します。

セーラーサターンは、先代のノラニヤークと同じ声がします。

誰でも、間違えそうだから、お気をつけてください。

序章ドラミちゃんとセーラーサターン

22世紀 町

ドラミは、夕方、夕食の買出しに町を歩く。今日の献立は、カレーライス（しかも野菜、中でもニンジン多め）である。カレーライスはほんの真心。誰でも、食べたくなるものだ。

ドラミは、マーケットで材料を買い始める。

「最近、セワシさんの偏食が前よりひどくなったわ。しっかり栄養をつけておかなくちゃ。」

文字通り、数量の野菜、中でも2・3本のニンジンを買うドラミであった。

スーパ―から出てきたドラミは野比家に帰宅をする。

そのとき

「・・・キテ・・・」

と声。

「えっ？」

不思議な声を聞き、咄嗟にドラミは立ち止まり、後ろを振り返る。声の主は若い娘のものだった。声の主はかなり落ち着いた感じの声だった。

「今の声、誰かしら？ 幼い女の子の声のようだね。」

ドラミは前を向き野比家に向かうのだった。

野比家 リビング

ドラミの手作りカレーを残さず食べ終え、セワシは満腹になったお腹を撫でる。

「ごちそうさまでした。って、あれ、ドラミちゃんどうしたの？ ポーっとしちゃって」

「えっ、あらセワシさん、ちゃんと野菜食べられたの。偉い、偉い。じゃあ、次は小魚に朝鮮ね。」

「ねー、どーしたの？何かあったの？」

テーブルに身を乗り出し、ドラミの顔を覗き込むセワシ。その表情は難しそうな表情だ。

「なんでもないわ、気にしないで。後片付けは私がやっておくから、貴方は、部屋に帰って、休んでなさい。」

「そう、じゃあね。」

しかめっ面でリビングを後にするセワシ。ドラミは夕食の後片付けをしながら、買い物で聞いた声を考える。

「私に来てって、どういことかしら。なんだろう、あの女の子みたいな声？」

「・・・キテ・・・」

「えっ、またあの声！？誰、誰なの？私を呼ぶのは！」
洗い物を中断して、ドラミは声の主を家中探し回る。

タイムワープの機械の近くまで、来たドラミは、必死に声の主を探す。しかし、声の主の姿は何処にもいない。

「この声は、いったい誰の声だろう。あつ、痛、何か踏んだわ。」

ドラミは片足を退けると、金色の羽のようなのが、床に転がっていた。思わず、羽のようなものを拾うと、何処から、ともなくまた声がした。

「ワタシトイツシヨニキテ。」

「えっ？」

ドラミが振り返ると若い少女の亡霊みたいな立体映像が現れる。その少女は10代前半の年頃だろうか、癖の薄いサラサラの黒いセミショートヘアの髪型だ。バトルコスチュームに近いセーラー服、そのセーラー服の胸元のリボンにつけてある結晶のようなブローチ、そして膝まで近い紐付きのロングブーツ、額にキレイな宝石をはめ込んだティアラ、両腕にやや長い白い手袋を装着している。そして、右手に長刀みたいな鎌を持っている。

それでも、少女は穏かな笑顔をドラミに見せている。

「はじめまして、私はセーラーサターン。土星を守護に持つ破滅と誕生の戦士よ。」

「私は、ドラミ。私に何の用なの？」

「そう警戒しないで。貴方をお願いがあるの？」

「だから、何の用なのよ!？」

「私と一緒にファラオ90と戦いたい。」

「どういうこと？」

「20世紀の世界では、ファラオ90によって、沈黙に閉ざされようとしているの。」

ファラオ90とは、タウ星系の生命体。

一度は私が滅ぼしたものの、再び世界を沈黙に覆うために復活したらしいの。

今、沈黙から世界を守るために私が倒さなければならないの。

でも、ファラオ90を一度、消滅させたとき、本来の体と魂とに分離してしまい、この通り、魂だけの存在になってしまったの。体と魂を融合するには、融合させることができる人物が必要なの。」

「じゃあ、私みたいに貴方の声が聞こえた人に貴方の体と魂を融合させることが、できるの？でも、どうやって、融合させることができるの？」

「簡単よ。私の本体に私の魂を届けるの。」

セーラーサターンは、目を閉じると魂が消えて、代わりに一本のスティックが床に転がる。

ドラミはそのスティックを左手で拾うと、スティックから、彼女の声が聞こえてきた。

「これを、今の姿の私に届けて。私の本体は、赤ちゃんの姿になっているの。」

そのスティックが反応すれば、また、私は、セーラーサターンになれるから。

お願い、私に力をかして。」

「・・・わかったわ。何が何だか判らないけど、絶対にファラ

オ90とかいうのを倒してみせる。

今、やらなかったら、22世紀の世界も私達もおしまいだね。それに、この金色の羽みたいなもの、何かわかるかもしれない。

行きましょう、セーラーサターン。20世紀に。」

「ありがとう、ドラミちゃん。」

その後、セーラーサターンの声は、スティックから消えてしま
う。

左手のスティックと羽のようなものを腹部の四次元ポケットに
入れ、ドラミは、タイムマシンに搭乗する。

ドラミは、ただ一人で20世紀に旅立つのだった。

序章ドラミちゃんとセーラーサターン（後書き）

次回から、ドラえもんが本番です。

まさか、あまりにもパニックになって自分を見失っちゃうみたいで
す。

誘拐なら、多分、地球破壊爆弾を出すでしょう。

あの子は、一体どーなるのでしょうか。

ドラえもんの相棒ののび太くんは、多分置き去りでしょう。

第一章セワシくんの情報（前書き）

のび太くんとうさぎちゃんは、ドジで、グータラだけど、素直でまっすぐなのが、いいところです。
私は、そんな2人が好きです。

第一章セワシくんの情報

21世紀 9月3日 練馬区のグラウンド

グラウンドで、10代前半の子供達が野球をしている。汗水流して、彼らは意気揚々としている。

「のび太、そっちに行ったぞ！」

野球チームのリーダー格・ジャイアン（剛田 武）が、歓声をあげる。

「オーライ、オーライ。ワー！」

ズデーン！

メガネの少年・のび太は、派手に転ぶ。ところが、のび太の手にはめているグローブには、ボールがしっかり乗っていた。更に左足は、三塁プレートに乗せたまま。

「アウトー！」

野球の審判は大声をだす。

「イッヤホーイ！」

子供達は、大はしゃぎ。のび太は、転がった状態のまま、ニコニコする。

野球の試合の結果は、3 - 9でジャイアン達チームの勝ちに終わった。

「イヤー、お前は、本当によくやったよ。僕らが野球の試合に誘った時、断られると思ったけど、最近はおkしてくれたよ。」

のび太の肩を軽く叩いたのは、小柄（がコンプレックス）な男の子スネ夫だった。

「だって、少しでも、体を動かさないと、いい気晴らしには、ならないんだもん。また、いつでも僕を誘ってね。」

「そりゃそうと、のび太、お前大分野球がうまくなったな。」

最近学校の成績だって、ちよとずつ良くなってるし。

やれば、できるやつだな。」

「そういう、きみだって、最近は、ちょっと痩せたんじゃない？」
確かにジャイアンは、大分、細くなっているようだ。ジャイアンはむっとして、のび太の頬を抓りだした。

「失礼なことというな！俺だって、たまには、運動してダイエットがしたいんだ！なんか文句あるか！？」

「はひー、ごめんなさーい！」

抓られた頬を放してもらいのび太は頬をさする。

「あー痛ー。あついっけなーっい。ママにお使い頼まれたんだ。それに、ドラえもんにあげるプレゼント買ってあげなきゃいけないし。」

ねえ、ジャイアン、お使いの帰りに君の家によつていいかな。」

「いいとも、この俺様が、最高の品物をつつてやるぜ。」

「ありがとう、ジャイアン。」

のび太は、お使いの籠をもって、グラウンドを後にする。

剛田家 商店

野球の後、ジャイアンは元気よく店に帰ってくる。

「たっだいまー。」

「おかえり、いい運動をしてきたじゃないか。」

「店番ばかりじゃ、体を鈍っちゃうからな。」

あれ、母ちゃん、今日は何処行くんだった？」

「ムクの散歩だよ。たまには、あたしが散歩にいつてやらないと、あの子拗ねちゃうよ。」

店番、頼むよ。」

「はーい。」

そのとき、店の方から、若々しい綺麗な女性が、訪ねる。その女性性は、腰を隠すような長い金色の髪を中国少女のようにシニヨン付のツインテールをしており、瞳は、サファイアのような青い瞳をしている。そして、白いワンピースの上に長袖の上着を羽織っている。白いハイヒールまで履いている。

彼女の押していたベビーカーには、色鮮やかな桃色の髪の子の赤子が乗っており、きょとんと、赤白い瞳で店を眺めている。

「こんにちは、今日は、いいお天気ですね。」

「ええ、いいお天気です。」

ジャイママは、女性と楽しそうに話をする。

その間、ジャイアンは、女性の押していたベビーカーの赤子を不思議そうな瞳でみている。

すると、彼女は、彼に抱っこをねだる。ジャイアンは、赤子を抱くと、赤子は、懐くようにジャイアンの頬を撫で始めた。

「おいおい、そんなに撫でんなよ。お前の兄ちゃんじゃあるまいし。」

「あらあら、うさちゃんたら、その大柄な子が気に入ったみたい。あははは・・・。」

ねえ、おばさんこの蜂蜜売ってくださいらない？」

「蜂蜜かー？いいね。お客さんにゆずっちゃおう。」

蜂蜜を買い、女性は赤子うさちゃんをベビーカーに乗せ、店を出る。赤子はニコニコ顔でジャイアンに手を振る。

「さてと、あたしゃ散歩に行くね。店番頼むよ。」

そのとき、店にのび太が入ってくる。

「こんにちわー。」

「おおのび太、いらっしやい。この中から、いいなと思うものを買いな。」

「じゃあ、散歩に行くから、店番お願いね。」

「おー、母ちゃんも、いい運動をしてくれよ。」

ブチ、ジャイママの血管が切れる。

「ターケーシー！」

1時間後

ボロボロになった、ジャイアンとおろおろしているのび太を残し、ジャイママはムクを連れて散歩に出かける。

「イテテ、そこまでやるか、フツー？」

「大丈夫？君も大変だね。」

「まあな、いつものことさ。それよりなんか決まったか。」

「あつそうだ。えつと何にしようか？」

のび太はある腕輪に目をつける。その腕輪は、2つで1セットの赤、青、黄、白の色とりどりの模様である。

「これにしよう。お代は、500円か。」

腕輪を買い、のび太は、店を後に自分の家に帰宅する。

とある屋根の上

その日は、のび太の家に居候している22世紀のネコ型ロボット・ドラえもんの誕生日。どうやら、のび太は、そのプレゼントを買いに行ったらしい。

当のドラえもんは、屋根の上で仲良しの猫達にそれぞれのプレゼントをもらって大喜び。

「わーい！みんなありがとう。」

最後にミイちゃんは、とても不思議な物を捧げる。

「あれ、ミイちゃん、これ何？三日月のオブジェ？」

彼の言うとおり綺麗な三日月のような石だった。

「ミイ？」

ミイちゃん本人もよくわからないらしい。

数秒後、ドラえもんは、プレゼントを持って、タケコプターで野比家に帰る。

野比家 のび太の部屋

のび太は、まだ帰ってない。

「おつかいにでも、いったのかなー？」

ドラえもんは部屋に入るなりゴロンと体を右横にして寝転がる。

そのとき、のび太の机の大きな引き出しがカタカタ揺れる。そして、中から、のび太の子孫セワシが飛び出す。さすがのドラえもん

は、びつくりして、飛び起きる。

「ドラえもん、大変だよ！」

「どーした、セワシくん？」

「ドラミちゃんが、いなくなっちゃった！」

「何だつてー！？どーいうこと！？」

「判らない。リビングに行ってみたら、ドラミちゃんの姿がないんだ。その証拠にドラミちゃんのタイムマシンがなくなっているんだ。」

「そんなー、何処にいったんだ？とにかく一旦、22世紀へ帰ろう。本当は、のび太くんたちにも、手伝ってもらいたいけど、この件ばかりには、巻き込みたくないんだ。のび太くんたちには、内緒だよ。いいね、セワシくん。」

「うん、判った！」

頷くセワシ。

自分のタイムマシンに乗るドラえもんとセワシ。同時にセワシは机の引き出しを閉める。

彼は22世紀へ戻る。

第一章セワシくんの情報（後書き）

家に帰ったのび太くんは、ドラえもんのスぺアポケットで彼の後を追うでしょう。

この先、のび太くんは、ドラえもんの心配したとおりになってしまいます。

果たして、この女性は、まさかうさぎちゃんなのか不明です。

第二章30世紀（前書き）

ちびうさちゃん、30世紀の未来から来たということは、あの子は、うさぎちゃんと衛さんの子孫ということになりますよ。彼らの娘ならば21世紀から来たということになりますよ。

第二章30世紀

21世紀 練馬区・道路

買い物を済ませて、のび太は、大喜びで帰宅する。

その時雨がザーツと降ってきた。

「わわわ、急いで帰らなきゃ。でも、変だな。今日は雨が降る予定はなかったはずだよ。」

相当、天候が不安定なんだな〜！」

ダッシュで帰宅しようとする、左横の塀から、金髪碧眼の女性が姿が見せる。途端にのび太は、彼女をみると立ち止まり、同時に女性もののび太を見ると立ち止まる。彼女は、子連れだ。

その女性はジャイアンの雑貨店の彼の前の客だった。

女性は、のび太を見て、口を開く。

「貴方は、野比のび太くんね。」

「え？」

「やつぱりそうだ。ドラちゃんのお友達ののび太くんだ。」

「あの、ぼくとドラえもんを知ってるんですか？」

そのとき、のび太の背後から黒い影がせまる。

「どうやら、今説明している暇はなさそうね。」

女性は、何も持っていないのび太の手をとる。

「ここは、危ないから、安全な場所に避難しましょう。」

「え、あのちよつと・・・？」

彼女に手を引かれ、のび太は右横の塀に入る。

黒い影の正体は、男性の姿をした白くて不気味な1つ目の怪物だった。

怪物は、忌々しい目で二人の後姿を睨みつつ見送るのだった。

時空間

セワシと共に22世紀へ戻ることになったドラえもんは、タイム

マシンで22世紀へ帰郷する。

「まったくドラミの奴、一体どうしちゃったんだ？急にいなくなるなんて。まさか、キッド（ドラ・ザ・キッド）のところに行ったんじゃーないよねー！」

「ないない。」

ドラえもんの目には、怒りの炎が燃えている。

「もし、そーだとしたら……打っ飛ばす！」

「ドラえもん、落ち着いて。」

さすがのドラえもんはカンカン。

すると突然、タイムマシンがひとりでに停止する。

「どうしたの、ドラえもん？」

セワシは自分のタイムマシンを止める。

若い女性の声が、タイムマシンのメモリーメーターから聞こえてくる。

「……ドラチャン……」

「えっ？」

「ドラチャン、聞こえますか？」

「誰、僕を呼ぶのは？」

「私デス、ドラチャン。30世紀ノ私デス。」

「『30世紀の私』っていわれも……」

「30世紀のクリスタルトーキョーにオイデクダサイ。」

メモリーメーターから、女性の声が途絶えてしまった。

「なんなんだ、今のは？とにかく、その30世紀のクリスタルトーキョーとかいうのに、セットしてつと。」

セット完了。

「いつてみようか。その30世紀にドラミもそこにいるかも、しれないだろうから。」

ドラえもんは、声の主の言っていた30世紀へ起動を取り戻したタイムマシンでむかう。

「ちよっと、ドラえもん、待ってよ。何処に行くの？」

セワシは再びタイムマシンを起動させドラえもんの後を追うが、あまりの速さに彼を見失ってしまう。

「……ドラえもん……」

セワシは、時空間に取り残されてしまったのだった。

ブーン。タイムホールの穴が開き、ドラえもんは、緑いつぱいの芝生に着地する。

「よし、到着つと。ここが、クリスタルトーキョーか。まさにクリスタルがいつぱいだ。」

ドラえもんの言うとおり、町中のほとんどがクリスタルにあふれているようだ。

まるで、神話が御伽話と思える町だ。

「さてと、声の主の女の人を探さなきゃ。ドラミが何処にいるのか何か知っているようだし。」

ドラえもんは、町中を探索し始めた。

クリスタルトーキョー内

クリスタルトーキョーは、ドラえもん達の故郷とは、比べ物にならないほど、綺麗な町だった。

「クリスタルが多すぎて、未来とは到底思えないよ。」

ドラえもんは、ある大きな建物に目についた。その建物はお城と思わせるほどかなり大きいのだ。しかも、やはりクリスタルで作られたものだ。

「あの建物にいつてみよう。」

タケコプターをポケットから取り出してドラえもんは、その建物に向かい飛び立った。

建物の近くまで来た彼は、改めてその建物みる。建物の周りには、草木や噴水などが所々あった。

「やっぱり、お城だったんだ。もう少し近づこう。」

もう少し近づくとドラえもん。しかし途中でタケコプターが止まっ

てしまった。電池切れだ。そして、

「ぎゃ~~~~~!!!!!!」

と、まっ逆さまに落ちるドラえもんであった。ドスーーンと地面に頭をぶつけるのであった。

落ちた場所は、緑いっぱいの大地だった。どうやら、城の中庭らしい。

「あたゝ、なんとか辿り着いたようだ。」

「痛いのは、こつちです。」

大きなたんこぶを作ったドラえもんの間近には、額に三日月型のイレズミみたいなものを身につけた灰色の仔猫が目を回してのびているのだった。おそらく、ドラえもんの硬い頭の下敷きになってしまったらしい。

「ごめんごめん、大丈夫？つて、猫が喋ったー！」

ドラえもんは、驚きつつ子猫を抱える。

彼の背後から、純白のドレスを身に纏った金髪（シニヨン付ツインテール）碧眼の女性が城から姿をだす。その気配に気付いたのか、ドラえもんは仔猫を抱えたまま振り向く。

女性はドレスを身に纏い頭部にティアラを装着している。

彼女は笑顔を見せドラえもんに呼びかける。

「ようこそ、わが城・クリスタル・パレスへ。」

私は、ネオ・クイーン・セレニティ。

お怪我はありませんか。」

「はい、大丈夫です。ただ、この子が失神してしまいました。」

「あらまあ、それは大変。どうぞ中へ。」

セレニティはドラえもんをパレスの中へ導く。ドラえもんは、そんなに悪い人じゃないと思ひセレニティの後を追ひ仔猫を抱いたままパレスの中に入る。

「一体、どんなことが起こるんだろう。」

ドラえもんは、ただ1人でどんな冒険をするのだろう。

第二章30世紀（後書き）

のび太くんは、21世紀で21世紀のネオ・クイーン・セレニティと力を合わせてドラえものの道具で戦わなければいけない羽目になるでしょう。きっと。

ドラミちゃんは、この先サターンと行動を共にして戦うのでしょうか。そしてセワシくんは、何処の時代に行ったのか。次で明らかになります。

第三章それぞれの使命（前書き）

自作を考えるのにすごく時間がかかりました。

母や兄の都合で真に申しわけありません。

いきなりダイアナちゃんが出てきて大変驚いたのでしょうか。

前話でドラえものの石頭を喰らわせるなんて可愛そうなことをしました。

ダイアナちゃんは、無事に救い出します。

第三章それぞれの使命

22世紀 野比家のマンション セワシの部屋

「ドラえもんまで、いなくなっちゃった。2人とも一体どうしちゃったんだよ。」

「こんなことだったら、のび太おじいちゃんに相談すればよかった。」

「ドラえもんの意見に上手く反対すればよかった。」

「ドラえもんを見失ったセワシはそのまま、22世紀に戻ってきてしまった。」

「ドラミちゃんといい、ドラえもんといい、何処に行っちゃったんだ？」

「セワシは机に顔を伏せてしまう。」

「キーキー、ギヤーギヤー、と鴉と猿が入り混じったような鳴き声が、窓の外から響いてきた。」

「顔をあげたセワシは椅子から立ち、窓のカーテンをそーっと開けた。見ると、翼の生えた白い一つ目の怪物が窓に数匹へばりついているのではないか。」

「なんなんだ、コイツら。気持ち悪いな……。」

「セワシは机に向かうとその上のレーザーガンを片手に窓にそれに向ける。出てきたところを仕留めるらしいのだ。」

「すると彼の部屋の鏡が急に光りだしたのだ。光と同時に青い瞳と金色のシニヨン付ツインテールの女性が、顔を覗かせている。」

「女性はセワシに真剣な眼差しをむける。」

「こちらに。」

「えっ？」

「はやく！」

「はい！」

「セワシは、鏡に向かって思い切り跳ぶ。」

途端にセワシの体は鏡を擦り抜けるかのように入っていく。

「わー！」

ドシンッとセワシは地べたに派手に転んだ。

「あ痛ててて、なんだ此処は？鏡の世界かな？」

「いいえ、此処はわが城・クリスタル・パレス。」

上半身を起こすとセワシは自分の目の前の金色の髪的女性を不思議そうに見上げる。

その女性は、金色のティアラを装着して純白のドレスを身にまとっている。

ドレスを着れば、王家の人と誰でも思えるのだろう。

女性は、優しい瞳をセワシに見せる。

「クリスタル・パレス？クリスタルだらけのお城はクリスタル・パレスっていうんだ。へー、綺麗なお城だなー。」

あー、それよりあの化け物は、どーなっただろう？」

セワシは、鏡で家の様子を伺おうとした。しかし、すでにそれは只の鏡として自分やこの場所の風景しか映っていないのだった。

「ダイモーンですか？大丈夫、ここに入れば貴方は安全です。さあ、あちらでゆっくりお話ししましょう。」

女性とセワシは鏡のある部屋を後にするのだった。

21世紀 東京の地下鉄

のび太と白いワンピースの女性は地下鉄に乗っていた。

2人は電車の座席に並んで座っている。女性が押しているベビーカーの赤子は、彼らの表情をきょとんと見ている。

「危なかったですね。のび太くん。」

「あの、どうしたんですか。急に僕の手を引いて。」

「貴方の後に誰かいたでしょう？あれは、ダイモーンという恐ろしい怪物です。」

「ダイモーン？そいつ、僕の後にはいたんですか？気がつかなかった。どんな怪物かはわかりませんが、どうもすいませんでした。」

「いいえ、貴方が無事でよかった。」

「間もなく十番街、十番街。……」

電車の合図が出た。

「もうすぐね。ご説明はクリスタル・パレスで聞かせておきます。」

「

十番街の駅前

「ここが、十番街？綺麗な結晶だらけの町だなー。」

「観光ができないのが、残念ですが先ずはクリスタル・パレスに向かいましょう。」

「はい。」

のび太は、荷物を左手にもち、女性は荷物を持ちベビーカー（ちなみに赤子はすやすやと眠っている）を押して彼女の言っていたクリスタル・パレスに向かう。

10分後

のび太一行は、結晶でできた建物に到着した。

「此処が、クリスタル・パレス？うつわ、なーんかすっこいところに来ちゃった！」

「さすがののび太くんも驚きでしょう。ふふふ、無理もないわ。」

「そんな、とんでもない。感動しちゃいました。」

「面白い子。さあ、中にまいりましょう。」

一行は、パレスの中に入るのであった。

パレス内

のび太は女性の後につづき、ある1つの部屋に足を踏み入れるのだった。

多分、子供部屋なのであろう。2人は荷物を部屋のテーブルの上

に置き、女性は赤子をベビーカーから

クリスタル製の揺り籠にそつと移すのであった。

「すいません。ここで待ってください。」

女性の言葉に頷くのび太。女性は子供部屋を退出した。

20分後

女性はこの部屋に戻ってきた。女性は純白なドレスを身にまとい、金色のティアラを装着する。まさに女王のようだ。

その姿にのび太は目を丸くした。

22世紀 クリスタル・パレス内

セワシは、パレス内の控え室でドレスの女性とお茶を飲む。

「申し訳ありません。こんな不慣れな城に招き入れてしまって・

・。

「いえ、僕の方こそお茶を入れてもらってありがとうございます。」

そういえば、自己紹介まだでした。僕は野比セワシです。」

「セワシくん？お久しぶり・・・とはいえもう覚えていないか。」

「え？」

セワシは、女性を見上げるのだった。その丸くなった目で。

「私は、このクリスタルトーキョーのクリスタルパレスに住む

女王、ネオ・クイーン・セレニティです。」

「え〜！？」

のび太とセワシ、それぞれの時代で驚いてしまう。

30世紀 クリスタルトーキョー・クリスタル・パレス 医務室
灰色の仔猫の怪我はあまり重くなかったので仔猫は手当ての後、
すぐに目を覚ました。

「ごめんよ、頭突き喰らわして。」

ドラえもんの方も軽かったので、殆手当ての必要はなかった。

「いえ、ご心配にはおよびませんのでご安心を。」

自己紹介が遅れました。わたくしダイアナと申します。ドラえもんさま。貴方様のことは、クイーン・セレニティからお聞きいたしました。」

「え？」

「まあ、無理もないでしょう。何せ初対面ですから。ドラちゃん、お願いします。私たちの世界、いえ、全世界をお救いください。」
「どういう事！？」

21世紀・22世紀・30世紀のセレニティは語り始める。

『かつて20世紀で宇宙との戦いがありました。』

破滅と平和どちらが訪れるか、それは激しい戦いでした。

嘗て私たちは、破滅を世界から守るためにある敵の組織と戦いました。その組織の名は……デス・バスターズ。』

「『デス・バスターズ！？』」

「まさか、さっき僕の部屋の窓の外で騒いでたあのダイモンとかいう怪物は……。」

「僕を襲おうとしたあのダイモンとかいう化物は……。」

「『デス・バスターズが送り込んだ奴なのー！？』」

「『ええ、その通りです。』」

セレニティは再び語り始める。

『デス・バスターズは、世界を破滅に導くためにウィッチーズ』

が率いるダイヤモンドを使い、人間のピュアな心の結晶を取り込もうとしたのです。組織の首相ファラオ90のパワー増幅のために。

ファラオ90は、タウ星系の生命体。強大なファラオ90の前に絶体絶命のピンチを迎える私たちの前に1人の少女が舞い降りてきた。少女の名は、セーラーサターン。破滅の戦士と云われてきた彼女はその破滅の能力を使い、自らの命と引き換えにファラオ90を倒しましたが、間一発のところを私が救助致した。

ですが、ファラオ90は再び世界を導こうと自力で復活してしまいました。」

「だから、のび太くん。」

「貴方の安全のために此処に私達としましょう。セワシくん。」

「いやだ、そんなことできつこない!」

「セワシくん」「のび太くん」

「僕がこんなところで隠れていたら、世界は崩壊しちゃうじゃないか!?世界だけじゃない、ドラえもんや、しずかちゃんたちだって!」

「パパもママも、そしてドラミちゃんも失いたくなんてない。」

「僕は、世界の平和や、人類の防衛のために戦う。たとえ貴方に止められても、僕は戦う!」

2人の決断に戸惑う22世紀と21世紀のセレニティ。

「お願いです。ドラちゃん、20世紀に行ってファラオ90を倒

してください。本当は私が行きたいところですが、此処を離れることができないのです。」

「わたくしからもお願いします。スモール・レディやその仲間たちをお助けください。」

「スモール・レディ？」

「20世紀に修行に出している私の娘です。どうか、娘を守ってあげてください。」

懇願するセレニティとダイアナ。

「……わかった。世界の平和、のび太くんやセワシくん、僕の仲間やドラミ、それにみんなのために僕は戦う。」

ドラえもんは、ポケットから三日月の石を取り出し、見つめる。

「それに、この石の謎のことだって、ドラミの手掛りのことだって、何かつかめるかも知れない。」

「「だったら、僕たちも行くよ。ドラえもん。」」

ドラえもんたちが医務室の扉のほうをみると、のび太とセワシが立っている。

2人の決意に負けたのかそれぞれのセレニティは、ドラえもんの居場所を教えさまざまな場所に通じる鏡を通して彼らを30世紀のクリスタル・パレスに送り届けた。その部屋で2人は合流して互いの出来事を話し合った。

「セワシくん、のび太くん。」

「何故此処に？」

「ドラえもんを探しにきたんだ。」

「話は聞いたよ。ドラえもん、世界やドラミちゃん、そしてみんなを破滅から守るために一緒に戦おう。」

「……うん、判った。」

クリスタルトーキョーの公園

セレニティとダイアナはドラえもん一行を見送りに来た。

「のび太くん、セワシくん、ドラちゃん、スモール・レディをお

願います。」

「……はい!」」

元気よく返事をする、一行は公園にあるタイムホールに入った。一行を見送りセレニティたち。

セレニティは片手の写真を見つめる。写真にはドラえもん、セウシ、のび太と自分と仲間達が映っていた。宴のときであろう。

「あの子達、前より逞しくなったわ。ねえ、ダイアナ?」

「ええ、私もそう思います。」

クイーンとダイアナは青空の太陽に微笑みを向けるのであった。

第三章それぞれの使命（後書き）

いよいよ。始まりました。ドラえもん一行のタイムトラベル。彼は、果たして無事にドラミちゃんに会えるのでしょうか。なお、あの桃髪の赤ちゃんはちびうさちゃんかもしれません。果たしてドラえもん達はうさぎちゃんとどのような出会いを果たすのでしょうか。

第四章 20世紀到着（前書き）

ついにドラえもんたちとうさぎちゃんたちが20世紀で出会いを果たします。

今度はどんな冒険を体験するのでしょうか。そしてちびうさちゃんはどうな友達を作るのでしょうか。

ちびうさちゃんの成長ぶりにも期待してまいります。

第四章 20世紀到着

20世紀 十番街

月野うさぎは無邪気で元気な中学3年生の娘。実はこの娘は十番街の英雄の少女セーラームーン。彼女は1年前からセーラー戦士をやっている。数多くの戦闘を繰り返しては、様々な仲間と出会い不思議な黒猫ルナに貰ったブローチを成長させた。

彼女達は、破滅の組織デス・バスターズと激しい死闘を終え、ごく普通の女子中学生の生活を送っている。

娘は、息を弾ませて学校からうちへまっすぐに戻る。

月野家・玄関

うさぎは意気揚々を家に入る。

「たっだいま〜!」

「おかえりなさい。おやつのホットケーキが山のようにあるわよ。」

「

育子ママが笑顔で長女を迎える。ところが。

「残念だけど、遠慮しとくわ。そのホットケーキ全部、進吾やちびうさに食べさせてあげて。」

「い〜じゃない。受験生なんだからパワーの1つでも補給しとかなきゃ。」

「受験生でもダイエットをしないといけないの。じゃね〜!」

育子ママの制止を振り切りうさぎは靴を脱ぎ、2階へ向かうとする。

「むか〜。なんだよ。冷酷うさぎ〜!ここんところ成績が良くなつてきて、パパもママもホクホクしていたのに、家の手伝いや勉強ばつかでちつとも人のことわかってくれない。」

弟の進吾は姉を後ろからしかめっ面で睨みつけた。

「大体、こんな大量のホットケーキ2人で食べたら、お腹を壊し

て病院送りになったらどうすんだよ。そりゃ、最近痩せてきたのは、いいことだけだよ。」

「おゝほっほっほ、譲って貰えてありがたく思いなさい。じゃね。」

弟をからかうかのようにうさぎは笑い、2階に行こうとした。腹が立った進吾は姉に噛み閉めた歯を向けるのだった。

2階・廊下

自分の部屋に向かううさぎの前に桃髪の赤白い瞳の小さな女の子が恨みがましい表情で立ちふさがった。

「うさぎったら、また育子ママの作ったホットケーキをあたし達に押し付けて。たまにはホットケーキだけでも食べなさいよ！」

「しょうがないでしょ、これ以上甘いもの食べたら、アンタの玩具みたい顔が丸くなっちゃうじゃない。」

「なによ、最近は勉強や家事のお手伝いばかりじゃない。少しは息抜きぐらいしろ！」

「まあまあ、私はこれでも受験生だから。デス・バスターズもいなくなつて平和じゃない。これでちびうさも気ままに修行ができるじゃない。これ以上文句ばかり言つてると素敵なレディーになれないわよ。さあさあ、下でママのホットケーキを進吾と二人で鱈腹食べておいで。それじゃ、失礼しまゝす。」

ちびうさの髪をもみくちやにした後、自分の部屋に入るうさぎである。

「うさぎのバカ！」

ちびうさの怒声が家中に響く。

うさぎの部屋

うさぎが部屋に入ると額に三日月のイレズミみたいなものを付けた黒猫のルナがベッドの上でうさぎを迎えている。

「ただいまー！」

「おかえりー。またうさぎちゃん、進吾くんやちびうさちゃんを怒らせたな。受験生だからって、たまには、のびのびと遊んでくればいいのに、例えば衛さんとデートするとか。」

「なに言ってるんの、まもちゃんたら、すぐ私の誘いをことわるんだもん。そんなケチンボなんかとデートする権利なんてないわよ。」

「まったく、うさぎちゃんは、デス・バスターズの戦いから略1ヶ月経っているというのに、勉強や家事の手伝いばかりでちっとも面白くないわ。そりゃ、セーラー戦士としての自覚は持ってるけど、少しは遊んでおいたほうがいいを。」「しょーがない、アルテミスのところで遊んでこよう。」

ルナは仲良しのアルテミスのところに行こうとする。

そのとき、うさぎの学校のセーラー服の胸のリボンに付けてあるブローチが淡く光りだした。

「あれ、ブローチが光ってる。どうしたんだろう？」

うさぎは不思議に思いブローチを左手で外し右手で開く、見ると中の銀水晶が淡く点滅している。

「なんか、淡く光ってる。何に反応してるのかな？」

うさぎは不思議に思ったうさぎとルナは部屋を見回す。そしたら、うさぎの勉強机がカタカタを揺れだす。

「机がどうかしたの？」

うさぎは大きな引き出しを開ける。すると中からルナに似たボールが引き出しから表れる。

「あら、ルナPボールだ。」

ルナPはちびうさの万能アイテムの1つである。ルナPはデス・バスターズの戦いの後、未来に一時帰還したちびうさが30世紀に残してきたもの。それからは時空を超えて配達をするようになってるはずだ。

「でも、手紙はないわよ。」

「あっほんとだ。」

「・・・こら、待て〜！」

と、怒鳴り声が引き出しから聞こえた。続いて青いダルマのような人形が飛び出した。

ダルマによく似た人形はルナPを執拗にうさぎの部屋の中で追い掛け回した。

うさぎもルナも突然の出来事に腰を抜かした。

「ドラえもん、待ってよ〜。」

「ボール相手にムキになんないでよ〜。」

と、情けない声を出しながらメガネの男の子と橙色の服を着た男の子が引き出しから出てきた。

「ん〜、なんだかわかんないけど、ルナPを捕まえましょう。」

「わかったわ。」

うさぎはブローチのふたを閉めてリボンに戻し、両手でルナPを捕まえた。

しかし、ダルマによく似た人形は突然、うさぎに飛び掛ってきた。すかさず、メガネの少年は人形の尻尾を引っ張った。人形の動きは止まる。

橙色の服の少年は人形を抱えうさぎのベッドに移す。

2人の少年はうさぎに向かい合った。

「あの〜、君たちは一体？」

「すみません。驚かしてしまって。あとルナPを捕まえてくれてありがとうございます。」

「いいのよ。いきなり机の引き出しから人や人形が出てくるなんて夢みたいなことよくあるのよ。」

自分の言葉にはっとしたうさぎは引き出しの中身を探り出した。引き出しの中は次元空間のようになってた。その空間に乗り物が置いてある。たぶん一行はそれに乗って此処にきたらしいのだ。

「ねえ、おじいちゃん。あの女の人、セレニティさんに似てない？」

「僕もそう思う。」

ひそひそ話す少年たちにルナが割り込む。

「貴方達、セレニティのことを知ってるの？」

「え、あ、うん。」

「そういえば、自己紹介まだだっけ。ふふ、あたしは月野うさぎ。この子はルナ。」

「人間の言葉を話す猫はルナっていうんだ。」

僕は野比のび太です。21世紀から来ました。」

「僕はセワシです。22世紀から来たのび太おじいちゃんの子孫です。」

つで、あちらで横になつてゐるロボットはドラえもん。22世紀のロボットです。」

「あの猫ちゃん、ロボットだったの。それで尾を引いたら動かなくなるんだ。もう1回引くと動くかな？」

うさぎはベッドの上にいるドラえもんの尻尾を引っ張った。するとドラえもんはまた動き出した。

「おー、やつぱり。」

「あれ、僕何やってたんだろう。」

「おはよう、ドラちゃん。」

「ドラちゃん？つて、セレニティ！？どうして？」

「ドラえもん、違うよ。この人はうさぎさん。」

「はじめまして、月野うさぎです。」

「はじめまして、僕ドラえもんです。」

うさぎもドラえもんも互いにあいさつする。

「あの、どうしてルナPボールを追いかけてたの？」

「うーん、それは・・・」

ドラえもんたちはうさぎ達にこれまでのことを話す。

「そんな、ファラオ90が復活したなんて・・・」

「信じられないわ。」

「信じる、信じないも、僕たちは君たちの時代に来る前にルナPボールをセレニティの娘さんに届けるように頼まれたんだよ。もし

もの時にあの子に必要なだから。でもそのボールが動き出して僕は
てんでこまだったよ。」

ドラえもんはルナPを腹部のポケットに入れていたらしいのだ。

「だからって、ね。」

うさぎは部屋の有様を目にやる。相当散らかっているのだ。

「それより、スモール・レディって子は、何処にいるんだい。」

「スモール・レディ・・・？あー、ちびうさね。今下でママの手作
りホットケーキをやけ食いしてるわ。」

「だれが、やけ食いよ？」

部屋のドアの前にはちびうさが白い大きな皿にのせたホットケー
キとグラスに入ったアイスティをお盆をのせたお盆を持ってうさぎ
を睨みつけた。

「あれ、ちびうさ何時の間に。」

「育子ママがアンタにホットケーキ持って行けって言ったのよ。

進吾くんは文字通りホットケーキのやけ食いでお腹壊して、育子マ
マの付き添いで病院に行ったわ。ホントにも。」

そのちびうさにルナPボールがとんできた。彼女はそれを懐かし
そうに抱きしめる。

「君がスモール・レディ？」

「うん、そうだけど。うさぎ、この猫さんとこの人たちは。」

「詳しい事情は後。それよりなんか食べようよ。」

「え、言われてみれば・・・。」

グ。この3人は空腹だった。

1階・台所

ホットケーキはまだたくさん残っていたのでドラえもんたちはう
さぎに紅茶を入れてもらい、うさぎたちとホットケーキを満腹にな
るほど食べつくした。

「そういうことか。」

「うーん、ねえちびうさ、ファラオ90のこと、みんなにも話し

たほうがいいわ。」

「そうね。なんとしてでもあいつをやっつけなくちゃ。行きましょう、うさぎ！」

「おうよ。っとその前に……。」

「……だよな。」

うさぎの部屋は未だごちゃごちゃだった。

うさぎたちは台所で固まってしまい、苦笑いした。

第四章 20世紀到着（後書き）

この話はデス・バスターズ編とヘル・デステイニー編の中間の話です。

うさぎちゃんとドラえもん一行はどんな冒険をするのか気になります。

第五章火川神社は大騒ぎ・前編（前書き）

ドラミちゃんは再登場します。ドラミちゃんはセーラーサターンの頼み、ドラえもんは30世紀のネオ・クイーン・セレニティの頼み（のび太とセワシも一緒）で世界を沈黙と破滅から守るために20世紀末期にやってきました。ドラえもん達とセーラー戦士達のタッグで世界を救えるでしょうか。

第五章火川神社は大騒ぎ・前編

20世紀 三原台病院の屋上

ブーン。タイムホールが開き、その穴からドラミが出てきた。

「此処が20世紀の時代か。なんか平和そうな時代ね。」

ドラミは屋上から青空、賑やかな町、そして楽しそうな人々を格子から眺めるのだった。

ドラミは屋上で深呼吸した。

「世界の平和のためにも、頑張らなくちゃ。」

キーっと、ドアが開き、白身がかった銀髪の男性が人形みたいに可愛い赤ちゃん（ちなみに女の子）を右手に抱いて屋上にやってきた。赤ちゃんはドラミを見るなり嬉しそうに手を振っているのだ。

「おやおや。ははは。こんにちわ可愛いお嬢さん。」

「こんにちわ。ドラミと申します。」

「ドラミちゃんっていうのか、私は土萌創一。この子は娘のほたる。よろしく。」

「いえ、こちらこそよろしくです。」

ドラミと土萌は握手をかわす。

「ほたるちゃんか、なんかセーラーサターンに似ているわ。ひよっとしてこの赤ちゃんがセーラーサターの本体なの。」

月野家 玄関

ドラえもんがルナPボールを追い回したせいでうさぎの部屋は嵐の形跡になっていた。うさぎ一行は力を合わせて部屋の片付けをやり遂げた。そのあとうさぎはセーラー服から紫のジャケットと赤いミニスカート姿に着替えた。セワシは進吾の服（緑の襟の水兵さんが着ているような服）を貸してもらい着替えた。

「これから、どうする。うさぎちゃん。」

「簡単よ。レイちゃん家に行って敵の居場所を突き止めるのが1

番よ。」

「そっか。レイちゃんの占いなら敵の居場所だけでも、掴めるもんね。」

「だったら、みんなにもレイちゃん家に集まってもらいましょう。」

「そうと判れば火川神社にレッツゴー！」

うさぎ一行は仲間に連絡してから火川神社に向かうのだった。

十番街通り

「ねえ、うさぎちゃん。」

「何よ、ドラちゃん？」

「僕下ろしてよ。」

ドラえもんはうさぎの腕に抱えられている。

「何、言ってるのよ？『動いて喋る猫の人形が出た』なんて知らせが出たら、大騒ぎになるでしょう。アンタは黙って人形の振りをしていればいいのよ。」

「あれ、うさこ何やってんだ？」

彼女の背後から男性が呼びかけてみる。彼女はその声に振り向く。呼びかけた男性はうさぎの恋人のタキシード仮面こと地場衛だった。衛は不思議そうな表情だ。

「あれれ、まもちゃん。大学の帰り？」

「ああ。ん、うさこ、どうしたんだ。その人形は？それにその子たちは？」

その時、衛の足に激痛が走った。なんとちびうさが衛の足を踏んでいた。

「まもちゃん！あたしのこと忘れてない？」

「あゝ、ごめんごめん。」

「もも、まもちゃんたら、最近はうさぎにはっか構って。あたしのこと、全然見てない。」

ちびうさは膨れてそっぽむく。

「まあまあ、ちびうさちゃんそう怒らないで。」
ルナは彼女をとりなす。

「それはそーと、その子達のことは神社でお話いたします。」
衛は不思議に思いつつうさぎたち（ちびうさはぶすつとしている）と共に火川神社を目指した。

火川神社前

「ドラちゃん達、この石段を上がればレイちゃんの神社よ。」

「うわー、結構高い。」

「わっ、なんか面白い狸の人形だな。人の言葉が話せるなんて。」

「狸じゃなくて、猫よ。ネ・コ！」

うさぎは、むっとしているドラえもんを抱えながら、険しい目で衛を睨みつけた。

「ははは、どっちでも、いいじゃんか。それより、早くレイちゃんの所へいこう。」

衛を加えた一行は神社の鳥居をくぐると二羽のカラスが一行目掛けて襲い掛かってきた。

「ひえ〜！」

うさぎたちは腕で顔をガードした。ところが。

「イテイテ、何すんだよ。」

襲い掛かっているのはドラえもんのみだった。

ドラえもんはあまりの痛さにうさぎの腕から擦り抜け右のほうへ一目散に行ってしまった。

あっけにとられるうさぎたち。そんなうさぎに誰かが左肩を、
「ねえ、ねえ。」と左の人指指で突く。振り返ると同年の女の子・水野亜美が吹きだしそうな表情でうさぎを見ているのだった。

火川神社 裏庭

ドラえもんは、必死でカラスたちから逃げ回っていた。しかしどうしてもカラスたちは襲うので遂にドラえもんはカンカンになった。

「あつたまきた〜！」

ドラえもんはポケットから空気大砲を取り出した。空気大砲を力ラスたちに発射する。さすがのカラスたちも怯えだして、木に退散した。

そのとき、背後から1枚の御札がとんできて彼の後頭部に張り付いた。それでもドラえもんはめげずに目を吊り上げ後ろを振り向いた。

張つたのは神社の娘、火野レイだった。

「何すんだ！」

「それは、こっちの台詞よ。狸の化物。」

「狸じゃない。僕は未来から来た猫型ロボットだ。」

「どう見ても狸じゃない。なに、アンタ、私のお札を張られても平気なの。」

「当たり前だ！僕は猫型ロボットだ！あんな古臭い紙切れで僕が死ぬか。」

「あんな古臭い紙切れとは何よ！？可愛いフォボスとデイモスを苛めたくせに！」

「あのカラス2羽に散々突かれたんだぞ！君が責任持つてあの2羽仕付けしろ！」

「な〜んですって〜！」

等々取っ組み合いの大喧嘩になってしまった。

そこへうさぎたちが駆けつける。亜美もうさぎに事情を説明してもらい共にドラえもんを止めに来た。

うさぎと亜美は痣だらけのレイを前後から押さえ、のび太とセワシは瘤だらけのドラえもんを背後から押さえ喧嘩は一応収まった。その時、ヤッホ〜！と元気そうな金色のハーファップヘアの女の子が左手のバスケットを振りながら、未だフォボスとデイモスが隠れている木から半分だけ姿を見せた。そのバスケットから、痛い、を連呼している男の子の声が聞こえてきた。

「美奈子ちゃん・・・」

レイは呆れつつ女の子・愛野美奈子を見つめるのだった。

レイの部屋

ちびうさは手元に戻ってきたルナPを救急箱に変えて、のび太やセワシと一緒にドラえもん和レイの喧嘩の後の傷の手当てをした。もちろんドラえもんは、札をうさぎに剥がしてもらった。

「全く！ドラえもんは短気だな。神社の巫女さん相手にムキにならなくていいのに。」

「すいませんでした。レイさんでしたっけ、ドラえもんがとんだご迷惑をおかけしました。」

「いいのよ。セワシくんだけ、私もついカツとなって、その妖怪と喧嘩しちゃった。」

「ちよつと、レイちゃん。妖怪じゃなくてネコ型ロボットよ。しかも22世紀のよ。ドラちゃんが妖怪と勘違いしてフォボスたちが襲ってくるなんて信じらんない。」

「しょうがないでしょう。こいつ狸みたいな体系してるもんだから。」

「狸じゃないってば。」

「まあまあ、3人共（ちびうさも含めて）落ち着けっで。」
衛はちびうさ・うさぎ・レイの口論の仲裁をする。

美奈子のバスケットに入っていた三日月のイレズミみたいなものつけた雄の白猫アルテミスはレイのベッドの上で数量のコブを押えている。多分美奈子のバスケットの中でぶつかり捲っていたらしい。
「えつと、ドラえもん・のび太くん・セワシくんかな？君達は未来から来たんだってね。」

「うん、そうなんだ。」

「詳しいことをあたし達に教えてくれないかしら。」

「私達だって、戦わなくちゃいけない理由だってあるかもしれないし。」

そのとき、レイの部屋の障子が茶色のポニーテールのスタイル抜

群の長身の娘によって開かれた。開いたのは、去年、十番街に引越してきた木野まこと（愛称まこちゃん）という名前の娘だった。まことは

右手に大きな箱を抱えている。

「遅れてごめん。h・m・が長引いちゃって。」

まことは、はっつはっつと深呼吸している。

「いいいの、いいの。とりあえず座ってゆっくりしていつて。」
レイの勧めでまことは障子を閉めて机についた。

「よし、これで全員集合。ささ、まずは自己紹介から始めましょう。」

ドラえもんたちは互いに自己紹介をする。そしてドラえもののび太・セワシはこれまでの事情をうさぎ達に話す。

「なるほど、デス・バスターズが復活したのか。」

「はい。あっそうそう、もう1つ話さなきゃいけないことがあるんです。この三日月の形をした石です。」

ドラえもんは腹部の四次元ポケットから三日月型の石を机の上に置いて、のび太たちに見せた。

のび太とセワシを除く全員の表情が曇る。

「これって、私がなくした聖杯の欠片だわ。」

「聖杯の？」

「「欠片？」」

第五章火川神社は大騒ぎ・前編（後書き）

次回ドラえもんたちがダイモーンと激しいバトルをします。
この先どうなることやら次回をご覧ください。

第六章火川神社は大騒ぎ・後編（前書き）

ドラえもん一行の3つの使命を果たさなければならなくなりました。聖杯の欠片集め。ドラミちゃんの搜索。そしてデス・バスターズの打倒。この3つを一行は無事に果たせるのでしょうか。

第六章火川神社は大騒ぎ・後編

聖杯とは、世界に、いや宇宙に破滅と平和を導く神秘的なアイテム。善い心の持ち主が使うと平和を齎すが、悪い心の持ち主が使うと破滅に導くという、無限の力を持っている救世主のアイテム。

デス・バスターズは世界を沈黙に満たすために、この聖杯を探しているのだった。聖杯は1度はセーラームーンに守られたが、最終的に頂点のファラオ90の手に渡ってしまう。

火川神社 レイの部屋

うさぎ達はレイの部屋でドラ焼きを食べながら聖杯のことを話した。ドラ焼きはまことが家庭科の時間で作ったものだが、いっぱい作り過ぎてしまいうさぎ達に食べてもらおうとわざわざ箱の中に入れておいた。ドラえもんもうさぎもドラ焼きが好物なので仲間と分け合いながら、2・3個も食べた。特にうさぎは数日間おやつを食べなかったため、2・3個も食べられたのだった。

「その聖杯が欠片になるなんて・・・。」

「きつと、ファラオ90が滅びたと同時に聖杯は壊れて、その欠片は様々な時代に飛び散ったらしいわ。」

「さっきの銀水晶の点滅は聖杯の欠片に反応したんだわ。」

「だったら、その銀なんとかで聖杯とやらの欠片を探せばいいんじゃない。」

「だね、ファラオ90を倒すにはまず聖杯を直さなきゃいけないんだ。」

「おし、まずは聖杯の欠片を集めましょう。そして本当のメシアに届けてあげましょう。」

ルナもちびうさも衛もうさぎがいつもの自分を取り戻してよかったと思った。

「それより、問題はこの3人を誰が引き取るか話をしたほうがい

いんじゃないか。」

まことの言葉に一行は黙りこくってしまった。うさぎは思わぬ考えを出す。

「ドラちゃんは、ちびうさの人形ということでしたら簡単楽勝よ。」

「ドラちゃんもともとママに頼まれたんだもんね。よろしくねドラちゃん。あたしのことはちびうさと呼んでね。」

「こちらこそ。ちびうさちゃん、よろしくね。」

握手を交わすドラえもんとちびうさ。

「だったら、俺がのび太くとセワシくんを従兄弟ということで引き取るというのはどうかな。」

「だったら、よろしく願います。」

「本当はうさぎさん家に留まるつもりだったんですが、1番の仲良しの衛さんだったら、いつでもドラえもんに逢えてうれしいです。」

のび太とセワシの居候先が決まり2人は喜ぶがちびうさは複雑な気持ちだった。

「あ、そうだ。ちびうさちゃんに渡すものがもう1つあるんだっ
た。」

ドラえもんは四次元ポケットから手紙をとりだす。ちびうさは手紙をドラえもんに貰い封を開けて、中身を出して読む。

『スモール・レディへ

ドラちゃん達から聞いたとおり、世界に危機が起こっています。そのため、このルナPボールを貴方に送ります。

万が一ピンチに陥ったらルナPに強い想いを注いでください。貴方の強い想いに反応するとルナPは貴方に相応しいアイテムに変わります。

負けないで。貴方には大勢の素敵な仲間がいるからには、大丈夫です。

私の可愛いスモール・レディ。ドラちゃん達と力を合わせて世

界を救うのです。私達はいつでも貴方の味方です。

頑張ってください。

ママより。』

「ありがとう、ママ……。」

母の励ましの手紙に思わずちびうさは手紙を抱きしめる。逆さまに抱きしめたため挟まっていたもう1枚の紙が机に落ちた。それに気付いたセワシは紙を拾いそれを読んだ。

『追伸

友達探しの修行はどうですか。またには里帰りしてもいいですよ。未来に帰るときはお友達をママ達にご紹介お願いします。』

その手紙にセワシ以外の全員、思わず部屋中のあちこちでズッコケルのだった。

「やつぱり、うさぎだな。」

アルテミスの言葉に頷くルナ。その2匹をうさぎは睨む。ドラえもんは未来のクイーン・セレニティは実は意外と陽気な人だと思った。

そのとき、怪しい人影がレイの部屋に侵入してきた。人影は棒のような網を出して、一行に襲い掛かった。うさぎ達は四散してうまく避けるがのび太をセワシは呆気なく捕まってしまった。

「セワシくん！のび太くん！」

「どらえもん。」

2人は必死になってもがきまくるが網はうまく取れない。

「ちよつと、アンタ！何すんのよ！」

うさぎは侵入者を怒鳴りつける。侵入者の正体は以前にも火川神社に出てきたダイヤモンド・和風系のミクージだった。

「アンタは、セーラーウラヌスやセーラーネプチューンが倒したダイヤモンド？」

殆どのダイヤモンドはセーラームーンに倒されたが、その内2体は別の戦士に倒されたのだ。ミクージ（実際に倒したのはセーラーウラヌスとセーラーネプチューンである。）はその一体だ。

「私のことを覚えてくれたな。戦士たちよ。用があるのはその三日月の石だ。」

やはり、ダイモンは聖杯の欠片を狙っているのだった。ミクージはジャンプするのび太とセワシの前に下りて、両腕で2人を持ち上げる。

「こいつらを助けたいのならその石を渡しな。」

彼女は2人を人質に取った。

「渡しちゃだめだ。それを渡したら・・・」

「喋るな。」

2人を人質に取るミクージが許せないドラえもんは遂に怒った。

「この化け物！のび太くん達を放せー！」

ドラえもんはミクージに石頭を向けて全速力で突進した。彼女に石頭をお見舞いした。ミクージはその衝撃で2人を手放した。2人は床に落ちた。

「イテテ、ありがとうドラえもん。助かったよ。」

「なんの、なんの。」

「この化け狸めが、やったなー。」

「猫型ロボットだ！そっちそのび太くん達に手を出して。」

睨みあった2人は部屋を飛び出し、裏庭に出た。

「まずいことになった。このままじゃドラえもんが危ない。俺は彼を援護するからその間に変身するんだ。」

「わかったわ。変身したらすぐに追いつくわ。でも、あまり無理だけはしないでね。」

「ありがとう、うさこ。」

見詰め合う2人。だが、思わぬ邪魔が入ってしまった。ちびうさのび太・セワシである。

「まゝもゝちゃゝん。」

「「助けてください。」」

「「ごめんごめん。」」

衛は赤いバラを懷から一本取り出すとタキシード仮面に姿を変え

る。あまりの衝撃にのび太もセワシもあっけにとられてしまう。タキシード仮面は黒い杖で網を切断すると2人は自由になった。

タキシード仮面はドラえもんを追い、部屋を出た。

「なんだかよく判らないけど僕達が部屋の外で見張りをしておきます。」

「うさぎさんたちは早く変身してください。このままでは、他の人を巻き込んでしまう恐れがあります。」

「判ったわ。ありがとう。」

のび太とセワシは部屋を出て障子を閉めて、外を見張る。

「ドラちゃん、セワシくん、のび太くん、まもちゃん、ありがとう。さあ、みんな変身よ。」

『わかった。』

「ムーン・コズミックパワー！」

「ムーン・プリズムパワー！」

うさぎとちびうさは変身ブローチを頭上に掲げる。

「マーキュリー・スターパワー！」

「マーズ・スターパワー！」

「ジュピター・スターパワー！」

「ヴィーナス・スターパワー！」

亜美・レイ・まこと・美奈子は変身スティックを頭上に掲げる。

『メイク・アップ！』

掛け声と共に、うさぎはセーラームーンに、ちびうさはセーラーちびムーンに、亜美はセーラーマーキュリーに、レイはセーラーマーズに、まことはセーラージュピターに、そして美奈子はセーラーヴィーナスに変身する。

直後、障子が開く。

「おまたせ、2人とも。」

見張りを終えたのび太たちは今のうさぎ達の姿を見て目を丸くした。

「これ、うさぎさん。」

2人は戸惑いつつ彼女達と一緒に裏庭の方へ向かった。

第六章火川神社は大騒ぎ・後編（後書き）

いよいよセーラー戦士とドラえもんたちの共闘が始まります。
ドラえもんとうさぎちゃん達は前書きに記してある使命を果たせる
のでしょうか。ちびうさちゃんのパワーアップもちよっと気になり
ます。

第七章火川神社で大暴れ（前書き）

ドラえもとセーラー戦士がダイモーンとのバトルを繰り広げます。そういえば、エイルとアンの2人はどの星で魔界樹を育てているのでしょうか。

なんだかちよつと気になります。

第七章火川神社で大暴れ

火川神社 裏庭

その裏庭でドラえもんが彼を追ってきたタキシード仮面がミクージと戦っている。

「薄汚い狸め、よくも邪魔をしてくれたな。」

「狸、狸、言っくな！のび太くんやセワシくんになんてことをしてくれたんだ！」

「やかましい。これでも食らえ！」

ミクージは頭部に付けてある注連縄を彼らに向かって振り上げた。その時。

「ピンク・シュガー・ハート・アタック！」

セーラーちびムーンが飛び出しピンク・ムーン・スティックを掲げ、無数のハートの列で注連縄を弾き飛ばす。

「何者？」

ドラえもんがタキシード仮面の後にはちびムーン以外のセーラー戦士が腰に両手を当てるミクージを睨む。

「私達の大切な仲間、のび太くん達を盾に取った上にドラえもんを上げるなんてファラオ90が許しても、私達が許したりなんてしないわ。」

「ドラちゃん達とは初対面だけど、友達であることに変わらないわ。」

『愛と正義のセーラー服美少女戦士！』

「セーラームーン！」

「セーラーちびムーン！」

「月に代わって！」

「御仕置よ！」

「ドラえもん、大丈夫？」

「のび太くん、セワシくん。2人とも無事だったんだね。」

「あつたりまえだよ。それよりドラえもん、僕達も。」

「わかった。無敵矛と盾！」

ドラえもんは矛と盾の1セットずつをのび太とセワシに与えた。ドラえもんも矛と盾を持ち、3人でダイモーンに立ち向かう。

「ふん、そんな小道具で私に勝てると思っただか！」

ミクージは再び注連縄を振り回した。3人はそれを別々に防いで弾く。

彼女達も負けてはいられない。

「あたし達も加勢するぞ。シュープリーム・サンダー・ドラゴン！」

雷の龍がミクージを包み、彼女に電気ショックを与える。ショックの後、ミクージは目を回した。

「シャボン・スプレー・フリージング。」

数量の泡がミクージを取り囲み、凍りつかせる。

「いつくぞー！クレッセント・ビーム・シャワー！」

光の雨がミクージに降り注ぐ。

「貴様らー！」

さすがのダイモーンも怒り出した。

「セーラームーン、このヒラリマントを使って。」

ドラえもんは、ヒラリマントを取り出してセーラームーンに放り投げる。

セーラームーンはマントを両手でしっかり受け止めた。

ミクージは彼女に向かって突進をした。

セーラームーンは闘牛士のようにヒラリとかわす。

ミクージが突進した先はルナPを抱えた、ちびムーンが立っている。

「食らえ、ルナPシュート！」

ルナPを足元に置き、ちびムーンはルナPをサッカーボールのように強く蹴る。

ボールはミクージの腹部に命中して、ミクージは飛ばされる。セ

ーラームーンはヒラリマントでダイモーンを空中に放り投げる。そして。

「りん・ぴょう・と・しゃ・かい・じん・れつ・ざい・ぜん！ むん！ ファイヤー・ソウル・バード！」

お札と融合した炎は火の鳥となり、地上から舞い上がり、ミクージを飲み込んだ。

火傷だらけのミクージはスピードを変えずに落ちる。賺さずタキシード仮面が杖を如意棒のように伸ばし、ミクージを突いて神木に貼り付けにした。

「勝負あり。セーラームーン、君の出番だ。」

「はい。」

しかしミクージは胸元を開けて、黒い光をタキシード仮面に放った。胸元には黒い星の痣があった。

「ぐあー！ー！」

光に当たった、タキシード仮面に結晶のような宝石が現れた。それは、人間のピュアな心である。結晶はミクージに向かい寄ってくる。ミクージはそれを手にした。

心を奪われた彼は、力尽きて倒れてしまう。同時に杖は手から離れ、ミクージは杖から開放され、自由になり、地面に着地した。その光景を見た、セーラー戦士達（特にセーラームーン）とのび太とセワシは硬直した。

「うそ、こんなことって……。」

「セーラームーン、固まってちゃだめだ。あの結晶が何か判らないけど、奴からそれを取り返すんだ。」

ドラえもんが呼びかけるがセーラームーンは動かない。

ちびムーンもその光景をみて、わなわなと震えだした。

「そんな……。まも・ちゃん。」

散々うさぎばかり構う衛に苛立っていたが、それでも好きだった。「やだよ。死んじゃやだよー！ー！」

ちびムーンは絶叫した。そのとき、ルナPの月のシンボルが輝い

た。

「ルナP・・・ひょっとして、ママの言っていたあたしの強い
想いつて。よしーか八か。」

ちびムーンはルナPを弾ませる。

「ルナP変化ー！」

ルナPを上に取り上げるとルナPはうさぎが無くしたのと同じ聖
杯に変化した。聖杯は彼女の前に舞い降りた。

「これは、聖杯？未来の？」

ちびムーンはその聖杯を両手にする。胸のブローチの銀水晶が輝
く。

「ちびムーン、どうしたの？」

聖杯も輝きちびムーンを光で包む。

「きゃあっ、ちびムーン！」

「セーラームーン、だめだ。」

ちびムーンに駆け寄ろうとするセーラームーンの片足をドラえも
んは押さえた。

「ちびムーン！」

セーラームーンは絶叫する。

光の中

ちびムーンは光の中で聖杯を抱えて目を閉じている。すると聞き
覚えのある女性の声がした。

「スモール・レディ。」

その声で彼女は目を目を開いた。聖杯から声がする。

「ママ、ママなの。」

「スモール・レディ。ルナPボールが貴方の強い心に反応して未
来の聖杯に変わりました。この聖杯で自分の力を信じて戦うのです。
自分の為だけではなく、自分を信じてくれる人の為に使うのです。

私はいつでも貴方の味方です。」

「ありがとう、ママ。あたし、頑張る。」

ちびムーンは聖杯を掲げて、呪文を唱える。

「クライシス！メイクアップ！」

ちびムーンの腰のリボンの先は長くなり、色は白くなる。

ひらひらの袖が加えられ、スカートが色とりどりに並べられる。

ティアラの宝石が三日月型になる。

チョーカーの色が黄色になる。

セーラーちびムーンは、スーパーセーラーちびムーンに二段階変身をする。

第七章火川神社で大暴れ（後書き）

ちびムーンがとうとうパワーアップします。その時はどんな技を披露するのか次回で明らかにします。

ところでドラミちゃんは土萌親子と一緒にどうしてるのでしょうか。

第八章 スーパーセーラーちびムーン（前書き）

今思ったら、ジャイアンの妹のジャイ子ちゃんが活躍のシーンが映画以外、いまひとつありません。

ジャイ子ちゃんの本名はなんでしょう。気になります。
最も脇役のジャイ子ちゃんも出してみたいと思います。

第八章スーパーセーラーちびムーン

火川神社・裏庭

光の中から蝶を思わせる少女が表れた。その少女はスーパーセーラームーンとよく似ている。それでも、ちびムーンの面影は残っている。ちびムーンはスーパーセーラーちびムーンに二段階変身した。

「ちびムーン、貴方・・・」

「ちびムーンが・・・。」

「変身した・・・。」

のび太一行はパワーアップしたちびムーンの姿に呆気にとられた。ミクージは、表情は全く変えない。

「どんな姿でも同じだ。死ねい！」

ダイモーンはスーパーちびムーンに襲い掛かってきた。しかしスーパーちびムーンは、ピンク・ムーン・スティックを彼女に突き付けた。呪文を唱えだした。

「ピンク・シュガー・ハート・エイク！」

巨大なハートの列がダイモーンを跳ね飛ばした。飛ばされたダイモーンの手から心の結晶が飛ぶ。マーズはそれを両手をそっと受け止めた。ダイモーンは頭から茂みに突っ込んでしまった。

「すごい、まるで本物のプリンセスみたい。」

ヴィーナスは、目を丸くして呟いた。

「セーラームーン、今度こそチャンスよ！」

「今なら、トドメがさせるよ！」

「判った！」

ルナとアルテミスに促され、セーラームーンはハート・ムーン・ロッドを構える。同時にミクージは茂みからゆっくり出る。

「ムーン・スパイダル・ハート・アタック！」

巨大なハート型の光の塊がミクージを襲った。

・・・ラブリー！・・・という叫び声を残してミクージは元の神木

になった。神木から卵が表れ真つ二つに割れ、お化けの影が出て消えた。

スーパーセーラーちびムーンはエネルギーを使い果たし、セーラーちびムーンの姿に戻る。その後、体を崩し、ジュピターに抱きとめられる。ちびムーンは安心したかのように眠りだした。

マーズは心の結晶をタキシード仮面に戻し、タキシード仮面は息を吹き返した。

「うん？おや、私はどうしていたんだろう。」

「無理をしないで、タキシード仮面様は心の結晶を奪われたんですよ。」

「そうか、すまない。きみ達に心配をかけた。」

「いいえ、ちびムーンが心の結晶を取り返してくれましたよ。」

マーズは顔をジュピターの腕の中のちびムーンに向けた。タキシード仮面は不思議そうにちびムーンを見た。ちびムーンが助けてくれたのか。と思った。

セーラームーンはちびムーンの顔を覗きこむ。ちびムーンは、一瞬目を開け、ありがとう、ママ、という言葉を残し、再び目を閉じた。

「ママ・・・？」

セーラームーンはポカーンとなってしまう、のび太達とちびムーンを抱えたままのジュピターを加えたセーラー戦士たち、そしてタキシード仮面は笑い出してしまった。寝ぼけて、彼女をママと思ったちびムーンだった。

その時、突然一行の前にピンクの大きなドアが現れた。どこでもドアだ。ドアが開き女の子が白い袋のようなものを持って現れた。

「ジャイ子ちゃん！？」

「ドラちゃん、のび太さん、偶然ね。こんなところで会えるなんて。よかった。のび太さん、探したのよ。」

女の子はジャイ子というのだ。ジャイ子は顔や体系はジャイアンと瓜二つだ。何故なら、二人は兄妹だ。つまり、ジャイ子はジャイ

アンの妹だ。

彼女の言葉にのび太は？と思った。セーラームーンはのび太の肩を突付きひそひそ話を始めた。

「ちよつと、のび太くん、誰その子？」

「僕の友人、ジャイアンの妹のジャイ子ちゃん。漫画家を目指してるんだよ。」

「漫画家かー？大変そうな子ね。なんかほつとけないわ。」

「のび太さん？」

彼女の一言で2人はひそひそ話を中断した。

「ああ、ごめんごめん。それでご用件は？」

「家の店でポケット落としたでしょう。あたし、それを届けに来たの。」

ジャイ子が持っていたのは袋じゃなく、四次元ポケットのスペアだった。のび太は大慌てで自分のポケットを調べた、ポケットがやはり無くなっている。

「もう、おじいちゃんしつかりしてよー！」

セワシに怒られてしまうのび太であった。

「あの、貴方は？」

「のび太おじいちゃんの子孫のセワシだよ。」

「えへ、あたしジャイ子です。」

セーラームーン（寝ているちびムーン以外）一行はくすくすと笑ってしまう。ただ、マーズから鋭い指摘があった。

「この有様、おじいちゃん達になんて説明しようかしら。」

裏庭は見ての通り、荒され捲った後が残っていた。

「アタシ達、随分と罰当たりな事をしちゃったね。」

「うん、確かに。」

一行は裏庭で呆然とするのだった。

回想

21世紀 東京 剛田商店

ジャイアンはいつものように店番をしている。

「ただいまー。」

「おかえりジャイ子。」

妹のジャイ子がスケッチセットを持って帰ってきた。多分、また写生にでも行ったのだろう。

「どうだった、なんかいい絵が見つかったか？」

「ううん、急に雨が降ってきて中止になっちゃった。」

見ての通り外は雨だった。そのとき、電話が鳴りジャイアンは受話器を取り、耳に当てる。

「はい、剛田……。あれ、父ちゃん、どうしたんだお迎えか？　ほうほう、うーん、どうしようかー？　のび太の忘れ物を届けなきゃいけないし、それに店番もあるし……。」

ジャイアンの手にはスペアポケットが握られていた。多分のび太が落としたものだろう。その時、ジャイ子がスケッチブックで、あたしが届けておげようか？　と書いた紙を兄に見せる。

ジャイアンはそれに頷き、判った、といい、電話を切る。

それから、ジャイアンは、父ちゃんを迎えに行ってきます。という置手紙を残し、ジャイ子にポケットを渡し別れる。

道路

ジャイ子はポケットを持つてのび太の家に行こうとした。その時、ぎゃーと悲鳴が聞こえた。殺しかと思つて来て見ると、白い1つ目の化け物が男性の口から結晶のような物を吸い取り飲み込んだ。男性は倒れてしまった。化け物はジャイ子を見るなり襲い掛かってきた。ジャイ子は夢中になって逃げ出した。

空き地

「なに、あの化け物は？」

ジャイ子は空き地の土管の後に隠れた。

「どうしよう。あ、そうだ、これで逃げればいいのよ。」

ジャイ子はどこでもドアを取り出した。ドアの向こうに逃げ込んだのだった。

回想終了

十番街 グラッチェガーデンズ

戦いが済んだ頃には、既に日が暮れていた。ジャイ子を加えたうさぎ達一行は外食することになった。

ちなみにちびうさはまだ寝てる。

「ふーん、それでこの町に来ちゃったの？」

「うん、あたし、逃げながらその化け物たちが人々から、結晶を取っているところをみてしまったの。」

「デス・バスターズの奴ら、聖杯だけじゃなく、ピュアな心も狙っているのか。」

「しかも、数多くの時代でピュアな心を次々に。」

「さらに、聖杯の欠片も探してるなんて。」

「こりゃ、早いところ聖杯を直さないとイケないな。」

衛・レイ・美奈子・まことは項垂れる。

「ねえ、ジャイ子ちゃんだったけ？」

「はい、本名は剛田 武子っていうんだけど、ジャイ子でいいわ。」

「

「ジャイ子ちゃんはおたし達と一緒に住む？」

「それは、ありがたいけど。ドラちゃん、壁紙ハウス持つてる？」

ジャイ子の質問にドラえもんは、はっとした。

「その手があるんだった。」

一同は思わず、椅子から転げ落ちる。ウェイター、ウェイトレス、他の客は周りを見ている。ザワザワ声で、ちびうさは目を覚ました。

「あれ、みんなどうしたの？」

ちびうさの隣には苦笑いしたウェイターが立っていた。

ちびうさは寝ぼけつつ、注文書を読み、オムライスとサラダを頼んだ。

20分後

結局、のび太達は壁紙ハウスで月野家に居候することになった。

ドラえもんは、散々うさぎ達にこっ酷く怒られた。

ちびうさはいくと、ジャイ子と親しくなっていた。ジャイ子は小4で、ちびうさは小2でも、年は近かったため、すぐに打ち解けられた。ジャイ子はちびうさが寝ている間にちびうさの寝顔を描いていた。ちびうさはその絵が大変気に入り、思い出の品として絵をもらった。

美奈子はセワシとちびうさを見て、質問した。

「そういえば、今回の手紙は半分はまともだったけど、そのとき追伸も加えて、全部ひらがなだった？」

「美奈子ちゃん、あのね。」

「そういえば、カタカナとかも混じってたよ。」

「漢字もあったよ。一生懸命なものもあったし、ほら。」

ちびうさは手紙を美奈子に渡した。美奈子が見たところ確かにカタカナもあった。漢字もあったが、やはり無理して書いた漢字もあった。おまけに誤字もあった。

「まるで、のび太くんだよ。」

と、ドラえもんが呻くしまつであつた。

「ほつといてよ。」

のび太は怒った。

「とにかく、まずは聖杯の欠片を探しましょう。」

「そうだね、それにドラちゃんの言っていたドラミちゃんって子の消息も気になるし。」

「みんな、ありがとう。」

ドラえもんは涙ぐむ。

「ドラちゃん、アンタの妹は絶対に見つけてあげる。そのかわり、聖杯の欠片探しを手伝ってね。」

「わかった。ドラミに会えるなら、僕、何だってする。」

「僕も戦うよ。しずかちゃん達のために。」

「僕だって、世界いや未来の平和のために戦うよ。」

「私だって、こんなところでよくよしてらんないわ。」

「のび太くん、セワシくん、ジャイ子ちゃん。よし、みんなやるぞ。」

『おーっ!』

ドラえもん一行と、うさぎ達は新たな決意を固めるのだった。

第八章 スーパーセーラーちびムーン（後書き）

遂にジャイ子ちゃんがこの話で行動を共にします。絵に自身があれば、うさぎちゃん達をモデルにしてみたいです。

ちびうさちゃんとは何か気が合いそうです。そうすれば、ちびうさちゃんの思い出がまた1つできちゃいます。

ちなみにジャイ子ちゃんはジャイアンより1つ年下と思われます。めざせ、少女漫画家ジャイ子。

ジャイ子ちゃんの本名は不明だから。私が名前をつけてあげたんです。

第九章もう1つの敵（前書き）

いよいよ、ドラえもん和ドラミちゃんの感動の再会。そして、セーラーサターンの復活。ちびうさちゃんとほたるちゃんは念願の再会ができるのでしょうか。

エイルとアンの再登場もです。

彼らはまたセーラー戦士達と戦う羽目になります。

第九章もう1つの敵

深夜 三原台総合病院・土萌の個人病室

ドラミ・土萌・ほたるは病室の中で眠っている。ドラミは昼頃、土萌の腕の中でヌイグルミの振りをしてこの病室に入ることができた。猫のヌイグルミが喋って歩いていたら、大騒ぎになるのであるうから、ほたるのヌイグルミの振りをするようになった。

ほたるは、就寝時間までドラミにあやしてもらっていた。ドラミは子守用ロボットの補助役だった。幸い個室であつたため、誤魔化しが聞きやすかった。

ドラミはポケットからスティックを出した。スティックが反応すれば、ほたるがセーラーサターンの本体であるに違いない。スティックをほたるの前に翳した。ほたるは目を覚ましてしまい、スティックをドラミから取り、魔法の杖みたいに円を描いた。

その時、病室の窓ガラスが割れて、ローマ神話の月の女神ディアナによく似た娘が乱入した。娘は髪を伸ばして土萌を締め付けた。急に土萌が苦しみだした。まるでエナジーを吸われるかのようだ。

「土萌さん!？」

ドラミはほたるを抱きかかえている。

「ド・ドラミちゃん。ほたるを連れて逃げるんだ。ほたるを守つてく・・れ。」

「でも、・・・」

「頼む、ほたるを頼む。」

ドラミは戸惑うが、今はサターンの復活が先だ。

「わかりました。」

ドラミはほたるを抱えて病室を飛び出す。土萌は微笑みながら気を失った。完全にエナジーを吸い尽くされてしまったのだ。娘はドラミの後を追った。

中庭

ドラミとほたるは何とか怪物から撒いた。

「はあはあ、はー危なかった、なんなのあの怪物は？いきなり襲い掛かってきて、土萌さん、大丈夫かな？」

化け物はローマ神話のディアナに似ている若い娘である。

ドラミはほたるを抱えて近くのアスレチックに向かおうとする。だが、化け物に気付かれてしまう。ドラミはほたるを木の後に隠して、怪物に立ち向かう。

「貴方が何者かは知らないけど、この子には手をあげないで。」

「ディアーナ！」

ディアーナと名乗る娘はドラミに突進してきた。ドラミはポケットを探る。

「パーフェクトボーリング！エイ！」

ボーリングの玉は、ディアーナの足を掬おうとした。ところが、ディアーナは跳んだ。そして、弓矢を取り出しドラミに矢を放とうとした。

「痴漢撃退バリア！」

スピード方のブローチを取り出して、赤いバリアを張る。ところが、矢はバリアを破り、ドラミを襲った。そこへ、1本の薔薇が矢を弾いた。

薔薇を投げたのはタキシードの青年だった。

「病院で可憐な乙女及び哀れな怪我人や病人を襲い、エナジーを奪いまわるとはこのタキシード仮面が許さん。」

「ぐぐぐ……。」

ディアーナはタキシード仮面を睨みつけた。ディアーナは髪を彼に伸ばしてきた。しかし、金のブーメランが髪を切断した。更に髪を殆ど刈ってしまう。彼女は尼さんのように丸坊主になった。

ブーメランが金色のティアラに戻り、持ち主はそれを受け止め、ティアラを額に戻した。ティアラの保持者は、セーラー服の娘だった。

「この病院で怪我人や病人のエネルギーを奪い、拳句の果てに小さな女の子や赤ちゃんを襲うなんて、いい度胸よ。しかも、貴方は以前、私達が倒したカーディアンじゃないの。」

ディアーナは、『R』の57話の冒頭で倒したカーディアンだった。

「カーディアンだか何だか知らないけど、悪さなんかするんじゃないぞ!」

娘の足元の人形が喚きだした。

「愛の正義のセーラー服美少女戦士、セーラームーが月に代わってお仕置よ!」

セーラームーンが髪を切ったのだった。彼女の他にもドラえもん（人形の正体）、のび太、ジャイ子、セワシ、ルナ、そしてタキシード仮面が空飛ぶ絨毯に乗っているのだった。

「お、お兄ちゃん、なんで20世紀にいるの。」

「お前は、ドラミじゃないか。」

「ドラミちゃんって。」

「はい、あのロボットが僕達が探していたドラミちゃんです。」

「案外、可愛い子じゃないか。」

「「タキシード仮面（さん・様）!」」

「これは失敬!」

「ドラミ、待ってて。今助けるから。」

絨毯はのび太達が降りられる低さまで降りて、のび太一行は降りた。しかし、ディアーナはドラミを素早く捕まえてしまった。

「しまった、ドラミちゃんが。」

「くっ。」

さすがのセーラームーン達も手が出せないようだ。その時。

「ピンク・シュガー・ハート・アタック!」

背後からほたるを抱いたちびムーンが必殺技を放った。ハートの集団がディアーナを襲い、その衝撃でドラミは開放された。ドラミはドラえもんのところによった。

「人質を取るなんて卑怯すぎるわ。」

ちびムーンはそのままカーディアンと向かい合う。

「ドラミ、よかった。無事だったんだ！」

「お兄ちゃん。」

二人は抱き合った。その光景をディアーナと睨み合うちびムーンを除いたセーラームーン達は見つめている。ほたるの額に光のマークが現れる。

「えっ、何？」

ちびムーンはほたるを見る。セーラームーン達も見つめる。

「ほたるさん。まさか彼女が。」

手に持つてるスティックも光り、2つの光はディアーナを自分達から引き離すかのように弾き飛ばした。そして光はほたるを包み、ちびムーンの腕から離れるかのように少し上昇する。

光の中

ほたるは座った状態で浮遊しながら自分の前に現れた、少女を見つめる。セーラーサターンだ。サターンはほたると向かい合う。

「土萌ほたる、いえ、私の本体。いよいよ、貴方が本格的に戦うことになりました。世界を沈黙から救うために。そのスティックはリップ・ロッド。これで変身をするのです。キーワードは『サターン・プラネットパワー！メイクアップ！』です。」

サターンはほたると融合する。ほたるの目が閉じる。ほたるの脳裏の中で何かが描かれた。

ちびうさとの出会い、セーラームーンとの戦い、そしてミストレス9を倒したこと。その他が浮かびだす。

「ちびうさちゃん。」

ほたるは目を開いた。気がつけば、12歳前後の少女になっていた。

「ちびうさちゃんや、うさぎさん達が助けてくれたように私がみんなを助けてみせる。」

ほたるはリップ・ロッドを握り呪文を唱えた。

「サターン・プラネットパワー！メイクアップ！」

中庭

光の中から白い鎌を持つ少女、セーラーサターンが現れた。

「沈黙の星、土星を守護に持つ、破滅と誕生の戦士セーラーサターン。」

「ほたるさんが変身した。」

「ありがとう、ドラミちゃん。私を守ってくれて。そしてセーラームーン、セーラーちびムーン、ありがとう。」

サターンはドラミ、セーラームーン、ちびムーンの顔を見て、礼を言った。ムーンとちびムーンはいいえと言うように首を振った。2人はなにもしてないらしい。

「私はまた、ほたるちゃんに会えただけで十分だよ。」

ちびムーンはサターンと抱き合う。ディアーナは2人に襲い掛かろうとした。それを察したサターンはサイレンス・グレイブを構える。すかさず、ドラえもんの石頭が飛んできた。

「何だか知らないけど、2人とも逃げるんだ！」

それでも、カーディアンはあきらめない。何しろ髪を刈られて怒っているらしいのだ。再び彼女達に襲い掛かる。

「サイレント・ウォール」

鎌から紫の玉が現れ、ドーム状のバリアーとなり自分達を包んだ。バリアーに強い電気が流れカーディアンは弾かれた。それでも、カーディアンは立ち上がり、サターンに襲い掛かった。サターンは鎌を構え、ディアーナに突進をする。

「沈黙の技を受けてみよ。」

サターンは鎌を振り上げる。カーディアンは遠くに飛ばされ、左膝の内側に掠り傷を受ける。

「あの人、強い。」

ジャイ子はわくわくする。一同もその光景に見とれる。

「セーラームーン、この隙に攻撃よ。」

「わかった。ほたるちゃん、いえセーラーサターン。貴方の力をもう無駄にはしないわ。」

ハート・ムーン・ロッドを構える。

「ムーン・スパイラル・ハート・アタック！」

ハートの集団がディアーナを包み込む、
「クレンジングー！」
！、と叫び声を残し、カードとなり地面に突き刺さる。直後に黒く変色した。

病室

土萌は息を吹き返した。

「ほたる」

何かを思い出したような表情だった。

屋上

赤白い髪の娘と青白い髪の少年は哀しげな表情で見下ろしている。

「また、あの子達と戦うことになった。」

「しょうがないよ、全て魔界樹の為にエナジーが必要だよ。魔界樹がどうしたのか知りたいし。」

「ねえ、エイル。どうして、魔界樹がエナジー集めろって言ったのかしら。」

「判らないよ。空から卵のような物が魔界樹に進入して魔界樹が女の人のようになったんだ。それを知るにはまず大量のエナジーが必要だ。」

それより、アン、あの2人の他の青年と少女達は一体何者なんだ。

「

セーラームーンとルナは判るがタキシード仮面、ちびムーン、サターンは初めてだ。

「判らない、青年の方は衛さま、いえ、衛さんと声が似ているし、小さな女の子の方は、月野さん、いえ、うさぎちゃんにそっくり。」

あのサターンって子だけは判らない。」

「うーん、残りの子供達も判らないが、ただ、あの狸は、21世紀中期のイタリアで捕まえた狸に似ている。仲間かな。」

「判らないわ。」

「一旦、イタリアに帰るか。」

エイルとアンは屋上から去るのだった。

第九章もう1つの敵（後書き）

ドラミちゃんとドラえもんが念願の再会を果たしました。
セーラー戦士7人はこの試練をこなせるのでしょうか。

第一〇章おかえりほたるちゃん（前書き）

ドラえもん一行とドラミちゃんは感動の再会を果たし、セーラーサターンは復活を遂げました。ちびうさちゃんの思い出もまた1つ増えます。

21世紀中期のイタリアといえば、ジェドローラがいるところかもしれません。

ジェドローラは、まさか敵に捕らえられているのかもしれませんが。はてさて、ドラえもん達は新たな使命に挑戦しなければならない羽目になりました。セーラー7戦士とどう戦うのか気になります。

第一〇章おかえりほたるちゃん

20世紀末期 見原台総合病院 中庭

カーディアンを倒したセーラームーン一行はセーラーサターンと再会する。

「ありがとう、ほたるちゃん。助けてくれて。」

「私こそ、ありがとう。守ってくれて。こうして、貴方方に会えて光栄です。ちびうさちゃん、また会えたわね。」

「会えてよかった。ほたるちゃん。あ、そうだ。デス・バスターズが……。」

「知っている。私も、感じたわ。私は沈黙から世界を救うため、蘇ったのよ。ただ、転生のときに体と魂が分離していたから、戦うことができなかったのよ。」

「自分の力じゃ融合はできないの？」

「ええ。あら、そういえば、貴方達は確かドラミちゃんの友達・」

「」

「自己紹介が遅れました。21世紀初期からきた野比のび太です。」

「」

「わたし、剛田 武美。ジャイ子です。こんばんわ。」

ジャイ子はお辞儀をする。

「22世紀からドラミちゃんを探しにきたセウシです。」

「ドラミのお兄ちゃんのドラえもん。」

「私は、土萌ほたる。セーラーサターン。」

「セーラーサターン、どうやって復活したんだ？」

「私が本体と融合するには、させてくれる人物が必要なんです。それで、私の声が聞こえる人を時空を超えて、探していたんです。でも、私の声が聞こえた人物が見つかりました。それがドラミちゃんです。」

「それで、ドラミちゃんがいなくなったのか。」

「セワシさん、お兄ちゃん、ジャイ子さん、のび太さん、心配かけてごめんなさい。私、どうしてもこの羽のことが知りたかったもので。」

ドラミはポケットから金色の羽の石を一行に見せた。

「これって、聖杯の欠片じゃない。じゃあ、貴方がそれを持ってたの。」

「何処にあったの？」

「ワープホールの部屋に落ちていました。」

「やっぱり。」

セーラームーンはルナと顔を合わせる。

「時代のあちこちに散らばったんだわ。」

そのとき、後から土萌の声がした。

「ほたるー。ドラミちゃん。」

土萌が車椅子に乗って、笑顔で2人を探しにきた。

「パパだ。」

「ホントだ。ほたるちゃんのパパだ。」

サターンとドラミは土萌に駆け寄る。

「2人とも、無事だったんだ。特にほたる、成長したのか。」

「ええ。ドラミちゃんのおかげよ。」

「ありがとう。ドラミちゃん。」

「いえ。土萌さんがぶじでよかった。」

「あの一。」

「あれ、君達は。」

月野家 うさぎの部屋

うさぎ達は、窓を開けて部屋にこっそり部屋に入る。

実はルナは、深夜、調査をしており、途中で怪しい気配を感じてうさぎ達に知らせた。うさぎ達は起きて、ちびうさを起こした。ちびうさはルナPボールを空飛ぶ絨毯に変えて、衛も誘い、病院に向かった。途中で銀水晶が反応した。欠片は病院内にあると思ったの

だ。

「ふぁー、なんか疲れた。」

「深夜にカーディアンが現れて、いい迷惑よ。でも、あいつは確かにセーラームーンが倒したはずなのに、なんで生き返ったのかしら。」

「カーディアンが出てきたということは、またエイルとアンに何かあったんじゃないかしら。」

「とにかく、あのおじさんに事情を話して置いたし、おじさんも協力することになって、ラッキーだったよ。」

「そうね、今夜、ほたるちゃんはまだちゃんの家に泊まることになったし、明日は教授が退院することになったんだから。あの人の記憶が戻ってきてよかった。」

「すいません、うさぎさんの家に泊めてもらって。」

ドラミも結局、彼女の家に居候することになったのだ。羽の正体もはつきりして、彼女達と共闘することになったのだから。

「ううん。気にしないで。アンタ、やっぱりお兄ちゃんといった方がよかったのよ。」

「そう。じゃ、おやすみなさい。」

「おやすみ。」

うさぎ一行は床に就くのだった。

「エイルとアン、どうしてまた人間のエナジーを取るようになったのかしら。カーディアンのこと、明日、みんなに話そうと。」

ちびうさの部屋

ちびうさはほたるとの再会で大喜び。そのことで、未来に手紙を書いたのだった。

『拝啓、ママへ。』

ルナPボールをありがとう。おかげであたしもパワーアップしました。それに、お友達がまた1人できました。ジャイ子ちゃんという漫画家さんです。ジャイ子ちゃんに眠っているところを絵に描か

れちゃいました。漫画の主人公にされた気がします。

そして、ほたるちゃんです。ほたるちゃんはデス・バスターズのせいで不幸を背負ってしまい、おしまいにセーラープルト達に命を狙われてしまい、大変でした。でも、今はアタシ達の友達です。これから、カーディアンやその指揮者達と戦わなければなりません。

スモール・レディは負けません。うさぎやほたるちゃん、それにドラちゃん達もいます。

もし、クリスタル・トーキョーに何か起こったら、すぐに駆けつけます。

お元気で。

彼処スモール・レディ」

「ふう。おかえりほたるちゃん。それにしてもプー、一体どうしてるんだろう。」

ちびうさは窓から夜空を眺めるのだった。

21世紀中期 イタリアローマ ビルディング最上階

白い肌した緑のビキニ姿の女性が管みたいな蔓でビルで働いていた人々のエナジーを吸収していった。

「ねえ、マカイジュン、貴方は私達とずっといつしょよね。」

「一緒よ。これからもずっと。」

「マカイジュン、すまない。ディアーナが失敗した。セーラー戦士達に邪魔をされた。しかも、セーラームーンは前よりパワーアップしている。」

「だったら、こちらもぐずぐずしてられないわ。エナジーが満タンになったら、セーラー戦士達たちを殺してやるわ。」

「うぐぐ。」

1体のネコ型ロボットが蔓に捕まり呻いている。

実はこのマカイジュンは、エイルとアンが育てている、魔界樹から誕生した、ダイヤモンドだった。このダイヤモンドはピュアな心だけ

じゃなくて、エナジーまで取ろうとしているのだった。そのダイモンと戦おうとしたのは、ある1匹のネコ型ロボットだった。名前はジェドーラ。ドラえもん達の学生時代の友人だ。

ジェドーラは様々な道具で立ち向かおうとしたのだが、エイルたちが放ったカーディアン（それがディアーナ）に捕えられてしまった。幸いロボットだったから、エナジーも心の結晶も奪われずに済んだが、強い攻撃力の前に倒れてしまった。

ジェドーラは魔界樹の予備の木の蔓に、体中拘束されて捕まっており、気を失っている。

「ド・ドラえもん。」

ジェドーラは友の名を呼んだ。

「エイル、この狸はどうしよう。壊したほうがいいんじゃない。」
「僕は、ネコ型ロボットだ……。これ以上御前達の好きにはさせない。」

ジェドーラはとぼけた顔で、アンと向き合った。彼は、元気がまだ残っているのだ。

「やれやれ、しょうがない。別のカーディアンを送ろう。」

「だったら、サターン対策に必要なカーディアンを送りましょう。」

「エイルはカードを数枚とりだす。アンはそのカードを1枚ひいた。上半身が女性で下半身が鳥の姿をした生き物の絵柄のカードだ。」

「いでよ、わが僕、カーディアン・シンガー！」

エイルは葉で出来た笛を鳴らし、カーディアンを召還する。カードは左が銀色、右が金色の鳥の翼のセイレンになった。

「シンガー。」

「このカーディ안의歌は強烈でどんな厚い壁も易々と壊してしまつすごい威力の持ち主だ。これで奴らに勝てる。」

「シンガー、あの子達のエナジーを奪ってやりなさい。いいわね。」

「そうは、させませんよ。」

ジェドローラを捕えた木以外の木の数本の内の1本の上から若い娘の声がした。漆黒のベリーロングヘアをハーフシニヨンにした、ノースリーブのセーラー服を着用して、赤い宝珠に乗せた大きな鍵を片手にしている。

「何者だ！？貴様！」

「時を司るセーラープルト、この愛すべき地球を、貴方の思い通りにはさせません。」

「他にも、セーラー戦士がいたのか！？」

「仕方ない。シンガー、あの女を先にやっておしまい。」

「シンガー！」

セーラープルトと名乗る娘とカーディアンの戦いが幕を開く。

第一〇章おかえりほたるちゃん（後書き）

ジエドーラの運命はいかに。うさぎちゃん達はエイルとアンを救うことができるのでしょうか。

ついでだから、猫型ロボットを全員集合させましょうか。

第一〇・五章セーラーブルート（前書き）

ちびうさちゃんの友達の1人、セーラーブルートこと冥王せつなさん。

前回のラストで出しました。

そのせつなさんが生きている。禁忌技のタイムストップを使ってしまったというのに、ということが私が推理してみましよう。

第一〇・五章セーラーブルート

セーラーブルート・冥王星を守護に持つ、時空と変革の戦士。時空の扉を懸命に守っていたらしい。

本来ならば、時空の扉を離れるのは禁忌の筈だが、デス・バスターズと戦うためにネオ・クイーン・セレニティに許可を貰い、20世紀末期に来たのだった。最初、一番の顔なじみのちびうさを初め、うさぎ達セーラー戦士（もちろん、ブローチを取り上げられたうさぎ）や、衛は変身前のせつなを知らなかったのだ。

ブルートは、聖杯が現れた後、セーラーウラヌスやセーラーネプチューンと行動を共にしていながらも、セーラームーン達（特にちびムーン）のお手伝いもしていた。ブルートはセーラームーンが真の救世主だと薄々思っていた。

デス・バスターズの最終決戦時、その本拠地の無限学園にヘリコプターで潜入する時、無数のダイモーンの襲撃でヘリコプターが爆発する時、ウラヌスとネプチューンを助けるために番人の禁忌の1つ・タイムストップを使ってしまう、爆発に巻き込まれて命を落としてしまう。

その後、彼女は21世紀の中期で転生して、現在はイタリアの大学に通っている。ちなみにご存知の通り、ダイモン及びカーディアンが暴れまわっており、一人で戦い続けていたのである。

第一〇・五章セーラーブルート（後書き）

20世紀末期でもう1つの使命でうさぎちゃんたちが悩んでいます。セーラー7戦士はどうエイリアンとデス・バスターズに立ち向かうのでしょうか。

ちびうさちゃんがせつなさんと、ドラえもんがジェドーラと感動の再会が近づきます。

第二章タイムテレビ（前書き）

ドラえもんとうさぎちゃん達はそれぞれの仲間との再会を果たしました。

今まで登場しなかった仲間を加えて、ドラえもん達の冒険はまだまだ続く。

第一章 タイムテレビ

20世紀末期 2日目の朝 月野家 うさぎの部屋

チチチチ、チュンチュンチュンチュン、小鳥と雀の鳴き声、そして、リリリリ、目覚まし時計の音でうさぎは目を覚ます。うさぎは学校に行く準備をする。ベッドの近くの壁紙ハウスに入っていた、のび太も目を覚ます。

「おはようございます。これから、学校ですか？」

「おはよう、のび太くん、昨夜は大変だったわね。あふ、おかげで今日は寝不足よ。」

あーそうそう、いいキミ達。アタシとちびうさが学校に行っている間は、絶対に外に出ないように。変挺りんな服着た子供達と動いて喋る猫の人形が出てきたなんて通報が出たら、大騒ぎになるのよ。いいわね。」

「判りました。」

「よろしい。朝ごはんはどうする？」

「グルメテーブルかけがあるから、大丈夫です。」

「ならよかった。行つてきまーす。」

「行つてらっしゃい。」

うさぎは1階のリビングに向かう。

1階 リビング

リビングには、腹痛が治った進吾が座りながら、うさぎを睨んでいた。

「悪かった、悪かったって。そんなに怒ることないじゃん。」

「怒るさ。この大馬鹿うさぎ、死ぬかと思つたぞ。」

「まあまあ、進吾、うさぎもこうして反省していることだし、許してあげなさい。大体、ママが大量にホットケーキを作るから、こうなつたんじゃないか。娘のダイエットを考えてやりなさい。」

姉弟の喧嘩を仲裁したのは謙之パパだ。パパの言葉に育子ママは睨む。

「そういう風にアンタが甘やかすから、うさぎがケチになるんじゃないの！」

「そうだ、そうだ！謙之パパはうさぎお姉ちゃんに甘すぎる！」
ちびうさも講義する。さすがの謙之パパもタジタジしてしまう。
「いつものパターンだ。」

十番中学校 中庭 昼食

亜美とまこと、うさぎはお弁当を食べながら、ほたるとドラミのことを話した。

「それで、ほたるちゃんは今、どうしてるんだい。」

「まもちゃんのマンションに預けているの。そういえば、今日は退院だから、また親子仲良く暮らせるんじゃないのかな。」

「うさぎちゃんの言うとおりだ。土萌教授は1ヶ月を入院してたからなあ。もうだいぶましになったろう。」

その時、黒い大きな穴が開き、そこからスーツ姿の黄の猫型ロボット、桃色の猫型ロボット、そして、のび太と年代代の女の子が出てきて、うさぎの後ろに降りてきた。うさぎは一瞬、ぞわっとした。
「どうした、うさぎちゃん。」

「大丈夫、うさぎちゃん。」

亜美とまことが呼びかける。

「な、なんなの？一体？」

うさぎが振り向くと黄の猫型ロボットが謝罪か以来をするかのよううにうさぎに迫ってきた。

「びつくりさせてごめん。この時代に匿ってくれ！」

「お願いします。」

桃色の猫型ロボットは土下座をした。

「う、うん、わかった。とりあえず、場所を変えましょう。」
「それがいいわ。」

女の子は同意した。確かに中庭では、人が多すぎた。

屋上

「まずは、自己紹介だ。僕はパワえもん。22世紀の子守用ロボットだ。」

「私はノラミャーコ。ダンシングロボット。」

「じゃあ、ドラちゃん達の親友ね。」

「ドラえもんを知ってるのか。」

「ええ、あの子達は、家で大人しくしてるわ。『達』っていうのは、のび太くん、セワシくん、ジャイ子ちゃん、あと、ドラミちゃんも。」

「のび太さん達もそこにいるのね。よかった。」

うさぎ達は、パワえもんの出した。グルメテーブルかけでお弁当の続きを食べている。ちなみに、パワえもん達は、頼んだメニューを召し上がっている。

「ところで、貴方は・・・。」

「源じずかです。さつきはすいません。」

「いいのよ。突然の訪問者はもう慣れてんのよ。あ、そうそう。」

アタシ達も自己紹介まだだった。アタシ、月野うさぎ。」

「水野亜美。よろしくね。」

「アタシは、木野まこと。まこちゃん。」

自己紹介を終えた後、昼休み終了のチャイムが鳴る。

「わわ、大変。ごちそうさまでした。話は後で聞くから、ドラちゃん達の所に行ってなさい。じゃね。」

「じゃあ、アタシも。」

「私も急がなきゃ。」

うさぎ一行はパワえもん達を残して、それぞれの教室に戻る。

うさぎの部屋

ドラえもん達は、グルメテーブルかけで昼食を取っていた。

『ごちそうさまでした。』

「お腹いっぱい。なんか部屋の中にいるのも退屈ね。」

「ジャイ子さん、しょうがないじゃない。下手に外をうろつけば、大騒ぎにならだけじゃない。ここは辛抱よ。」

「だつて。」

ジャイ子は膨れてしまう。時には、散歩はしたいが、ちびうさと違って、のび太達は誤魔化せにくい未来人である。特にドラえもん達、ロボットは。

その時、うさぎの机がカタカタ揺れた。引き出しが開いて、パウえもん達が飛び出してきた。

「パウえもん、ノラミヤコさん」

「それに、しずかちゃん。」

「のび太さん、やっぱり此处にいたのね。」

突然、しずかの荷物が動いた。

「ごめんなさい。すっかり忘れていたわ。」

荷物を開けるとイヌのペロ・小鳥のチツチ、ピー子ちゃんが出てきた。

「この子達も一緒に来ちゃった。えへ。」

しずかは舌を出す。

「ねえ、のび太さん、このロボットたちは？」

「あ、そうかジャイ子ちゃんは初めてだっけ。」

「お兄ちゃんの友達のパウえもんさんとノラミヤコさん。」

「よろしくね。」

「いえ、こちらこそ。」

「なになに、今日はやけに賑やかなね。」

下で昼食を済ませたルナが部屋に入ってきた。

「ああ、ルナ。ちようどよかった。」

「な、なんなの。貴方は？」

「紹介するわ。のび太さんの彼女のしずかさん。」

「やめてよ。彼女は。」

しずかは照れて両手で顔を覆う。

「ドラちゃんの友人のノラミヤコさんとパワえもんさん。」

「この子は、喋る不思議猫のルナちゃん。」

「はじめまして、ルナです。よろしく。」

ルナは丁寧な頭を下げる。

「それで、みなさん、なんの御用で？とにかく、壁紙ハウスの中で話しましょう。」

壁紙ハウスの中

パワえもん達は全てをのび太達に話した。

「なんだってー。22世紀の町が凶暴な怪物たちに襲われたー！？」

「ああ、おかげで数人の人々が次々と倒れていったんだ。」

「それで、ドラえもん達を頼ってきたのか。」

「でも、どうしてしずかさんまで？」

「実は、21世紀に行く時、誤ってしずかちゃんの家のお風呂に侵入しちゃったの。」

「なんですと。」

ルナ達は固くなる。

「私、最初、またのび太さんが覗きにきたのかと思ったわ。」

「本当にごめんな。」

「いいのよ、気にしないで。」

ノラミヤコさんから事情は聞いたけど、私の家の外に化け物が現れて、ペロ達を連れて此处に逃げてきたの。でも、よかったのび太さん達に会えて。」

「しずかちゃんこそ、無事でほんとによかった。」

見詰め合う2人。

「それにしても、ダイモーンが貴方達の時代で暴れてるなんて、当分、元の時代には戻れないわ。」

「なに、ダイモーンって？」

ドラミ達は、パワえもん達にこれまでの出来事を全て話した。

「世界を救うには、聖杯つてのが必要なのか。」

「わかったわ。私達も手伝うわ。」

「ピーチッチ。」

「ワンワン。」

「ピー子ちゃん達も行きたいって。」

「じゃあ、決まりね。うさぎちゃん達が帰ったら報告しようつと。」

ルナは壁紙ハウスから出てきた。

そこに衛・ほたる・退院した土萌が笑顔で迎えていた。

「衛さん達、いらつしゃい。」

「邪魔するよ。ルナ。」

のび太達も出てきた。

「教授、退院おめでとうございます。」

「ありがとう、のび太くん。」

土萌の怪我はよくなっていた。

4時間後 うさぎの部屋

うさぎとちびうさ達が帰ってきて、パワえもん達と互いにこれまでの出来事を話し合った。

「なるほど、そういうことか。しかし22世紀って変わってるわね。こんな出来損ないの狸や薄汚い犬のロボットを作るなんて。」

「犬じゃない。ネコ型です。」

「狸から離れる。」

ドラえもん達は膨れてしまう。特にドラミ。

「まあまあ。」

ほたるとしずかは取り成す。

「それで、まずはエイルとアンの居場所を突き止めればいいのね。」

「そういうことになるな。」

「ねえ、エイルとアンで誰？うさぎ達の友達？」

「まあ、そういうことかな。あのね。」

エイルとアンは実はある美しい星の植物・魔界樹から生まれた宇宙人。ところが故郷の星で戦争が起きてしまい、全滅。最後まで生き残った宇宙人（それがエイルとアン）は魔界樹と放浪の旅に出た。魔界樹やアン達・エイリアンはエナジーがないと生きられないので、エナジーを集めていたが、最終的にセーラー戦士達と和解して魔界樹を浄化してもらい、宇宙へ旅立った。

「そうだったの、可愛そうに。アタシ、そのエイルとアンと話がしたい。」

「私達も彼らと友達になりたい。」

「ちびうさ……。判った。みんな、一緒にエイルとアンを説得しよう。」

「オー！」

「だったら、僕の仲間たちにも協力してもらおう。みんなとても頼もしいんだ。そういえば、あいつらどうしてるんだろう。」

ドラえもんは、ポケットを探り出した。

「タイムテレビ！」

「わあ、パソコンだ。」

「似てるけど、これはテレビなの！」

「そっか、ごめんごめん。」

うさぎはタイムテレビをパソコンと間違えてしまう。

「ほんとにもー。えつとまずは21世紀中期のイタリアっと。」

テレビの画面には、数本の植物が立った風景が見られる。その木には。

「ジエドローラ！？」

「え！」

ドラえもんの友人のジエドローラが拘束をされていた。

第一章タイムテレビ（後書き）

パワえもんとノラニヤーコが登場。そしてしずかちゃんも登場。なんだかどどん仲間が増えてきます。そうなたら、この3人はそれぞれ、どこで居候するのでしょうか。

第二章タイムワープ（前書き）

ジエドーラがカーディアンに捕えられて、ドラえもん一行は吃驚仰天！

一行はタイムマシンかちびうさちゃんの時空の鍵で助けに向かうこととなります。

一行は無事にアン・エイル・ジエドーラを救えるでしょうか。

第二章 タイムワープ

うさぎの部屋

「ジェドーラ？」

「学校時代の僕達の友人だよ。一体どうしちゃったんだ！」

「ねえ、そのジェドーラって子の他に誰かいるみたいだ。」

「え。」

よく見るとジェドーラ以外に白い肌の緑のビキニの女性とエイル・アンがいた。女性は蔓で左袋萩の内側の黒い星の痣で侵入者の男性のピュアな心の結晶を奪い取っている。

「これは、ダイモーン。」

「これもダイモーンなの。」

「ええ、ダイモーンは人のピュアな心を狙っているのよ。」

「もしかしたら、ジェドーラは聖杯の欠片を持っているんじゃないかしら。」

「判らない。」

ドラえもんはタイムテレビを止めてポケットに戻る。

「ドラちゃん、行きましょう。ジェドーラさんというロボットを助けに。」

「はいはい。」

声を出したのはちびうさだった。

「こういうときは私の出番でしょう。」

「出番って、ちびうさちゃんかな？ どういう意味だい、それ？」

「簡単よ。」

ちびうさは得意そうな笑みを見せる。

公園のボート置き場

ムーニー一行は、変身してそこに集まった。もちろんドラえもん達も一緒だ。

「こんなところへ連れてきて、なにするの。」

「まあ、見てて。」

ちびムーンは時空の鍵を取り出した。時空の回廊を通って行くつもりらしい。

「なるほど、その手があったか。さすがちびうさ。」

「どこぞの青狸と違って。」

「むっ。」

ドラえもんはマーズを睨む。

「そんなことしなくてもタイムマシンで行けばすぐだろうに。」

「いいのよ。マシンは一個以上あってもそんなに乗れないでしょ。行ったり来たりなんて、かえって面倒なことになるじゃない。」

確かにドラミのタイムマシンがあってもそんなに数人は乗れないのだ。

「それじゃ、ちびムーンお願いね。」

「私、初めてなの。タイムスリップは。」

ほたるは、タイムスリップが今回で初めてなのだ。土萌は後で娘達を見送った。

「みんな、娘を、ほたるをお願いします。ほたる、いつてらっしやい。」

「パパ、行つてきます。」

「それじゃ。時の護人よ。時空の扉天空を裂き我に開け放て。我は汝の名を呼ぶ。全能な時の神。護人の父クロノスよ。我を導きたまえ。我を守りたまえ。光の道を我に。」

光の柱が現れ、一行を包む。一行はその柱に連れられ、天空に上る。天空に消えた後、柱も消える。

「がんばれよ。ほたる。」

土萌は、彼等を見送った。

21世紀初期 学校の裏山

「はあ、はあ……とジャイアンは愛犬ムクを連れて裏山を登る。」

散歩に連れていた母は怪物に心を奪い取られて、倒れてムクだけが逃げ延びてきた。父はジャイアンと合流後に心を取られて、ジャイアンは逃げ出し、ムクと合流した。

「くそ、なんだ、あの化け物は？いきなり襲い掛かりやがって！のび太はちゃんとジャイ子にポケットを届けてもらえたんだろうか。」

「おい、剛田くん。」

「おい、その声は。」

ジャイアンとムクが振り返ると同級生の出来杉英介が猫のチルチルを抱えたスネ夫の手を引いて裏山に登ってきた。

「出来杉！スネ夫も。」

「ジャイアン、無事だったの。」

「ああ、無事さ。お前達も大丈夫か。」

「うん、なんとか。」

「ねえ、ジャイアン。あのお化けたち一体何者なの！？」

「俺にも、判んねえ。一体、何なんだ。」

「とにかく、山の頂上でドラえもん達を待とう。」

裏山の頂上

ジャイアン達は頂上に登ったものの、ドラえもん達は来ない。

「くそ。一体どうなってやがる。ドラえもん達はどうしたんだ。」

「まさか、怪物たちに襲われたんじゃ・・・。」

「大丈夫だよ。ドラえもんの道具で返り討ちに遭ってるに決まってるよ。」

「だといいんだけど。」

その時、数匹の化け物が襲い掛かってきた。

「うわー、僕ら絶対絶命！」

その時、金色の光が一直線に怪物たちを襲う。怪物たちはブロンズ像になった。

「あれ、こいつら固まつてる。」

「クンクン。」

「ニャーニャー。」

ムクもチルチルも匂いを嗅ぐ。

「お前達、大丈夫か？」

彼らが見上げると、紳士風の服装を纏った紫の猫型ロボットが空を飛んでいる。片手には金色のステッキを持っている。その杖で怪物たちをキンキンにしたらしい。ドラえもんの友達の怪盗ドラパンだ。

「うん、ありがとう！」

「礼は、いい。そっちにドラえもんは来てないか？」

「いいや、来てないよ。」

「そうか。すまん。この時代は危ないから別の時代に非難しよう。」

「

彼の背後には、タイムホールが開いている。

ドラパンは下に下りて、ジャイアン達の頭にタケコプターをつけた。出来杉、ムクを抱えたジャイアン、チルチルを抱いたスネ夫、そしてドラパンはタイムホールに入る。その直後にタイムホールは消える。

21世紀初期 イタリア ビルディング最上階

カーディアン・シンガーとブルートは対峙しようとしている。

「シンガー！」

「待ちなさい！」

「ん。」

「おお・・・」

シンガーの後離れた所に、セーラームーン一行が表れた。

「君達は・・・？」

「ジェドーラ心配しないでくれ。この人たちは、悪い人たちなんかじゃない。」

「その通り。」

「アン、エイル。やっぱり、この騒ぎの元は貴方達だったの。」
「やっと、お友達になれたと思ったのに。」

「なんで、こんなことするんだ。」

「ダイムーンに手を貸すなんてどうかしてるわ。」

「うさぎ達を裏切るなんて許せない。」

「これ以上、貴方の好きにさせないわ。」

『愛と正義のセーラー服美少女戦士、セーラーチームが。』

「月に代わって。」

『お仕置きよ!』

「うさぎちゃん、みんなどうして此処が?」

「エイル、アン。君達は間違っている。魔界樹を育てるために宇宙に旅立ったはずだ。もうこんなことはやめてくれ。」

「衛……さん……なのか。」

エイルの問いにタキシード仮面は頷く。

「セーラームーン、スモール・レディ。何故此処に!?! いけませ
ん。お逃げなさい。」

「プー、貴方どうして此処に?」

ちびムーンはプルートに駆け寄ろうとしている。

その時、シンガーがちびムーンに襲いかかるうとしている。

「スモール・レディ!」

ちびムーンは嫌さず、ルナPを取り出す。

「ルナP変化!」

ルナPは聖杯になった。

「これは、聖杯。」

プルート、シンガー、アン、エイル、マカイジュン、そしてのび太達以外の一同が驚く。ちびムーンは二段階変身をする。

「クライシス!メイクアップ!」

ちびムーンはスーパーセーラーちびムーンになると、ピンク・ムーン・スティックを取り出す。

「ピンク・シュガー・ハート・エイク!」

巨大なハートがシンガーを弾き出す。シンガーは蔓と衝突してしまい、その振動でジェドローラを押えていた蔓が緩み、ジェドローラを解放した。

「ジェドローラ！」

「まって、ドラちゃん。」

「なに、ジャイ子ちゃん。止めないでよ。」

「迂闊に行動したら、あたし達、あのカーディアンとか言うやつに捕まるのが目に見えてるでしょ。」

「じゃあ、どうしたら・・・。」

「アタシ達に任せて。あのカーディアンはアタシ達が食い止めるから、貴方達はあの子を助けてあげて。」

「でも・・・。」

「大丈夫。どんなことがあっても、帰るときはみんな一緒よ。アタシ達仲間だもん。」

セーラームーンの可愛い笑顔にドラえもんは負けた。

「判った。ありがとう。セーラームーン、キミに何度も助けてもらったよ。だから、今度は僕が助ける番だ。耳バンDX！これを耳に張れば、特定の音が聞こえなくなるんだ。」

「なるほど、マーズのお札より頼りがいがあるわ。」

「なんですって。もう1回言って御覧なさい。」

マーズはムーンの頬を抓りだした。

「すいません。」

「ドラちゃんに言われて見れば、あのカーディアン、ギリシヤ神話に出てきたセイレーンに似てるわ。歌を歌われたら、おしまいだわ。」

「確かに、ジャイアンの歌やしずかちゃんのバイオリンよりも強烈な音波をだすかもしれないよ。」

「ちよつと、のび太さん、どういうことよ?。」

時空間内

「フエックシユン！」

「おや、ジャイアンとやら、風邪でも引いたのか。」

ジャイアンは鼻を軽く押える。

「いや、誰かに噂された気がするんだ。」

21世紀中期 イタリア ビルディング内

「それじゃ、いきますか。スーパースーラーちびムーン、これを両耳につけてなさい。」

「判った。」へなんか面白そう」

セーラームーン一行は耳バンDXを耳につけて、カーディアン達に戦いに挑む。

「ドラえもん達は、私と一緒に彼を助けに行こう。」

「すいません。何から何まで。」

「いいじゃない。仲間が多いほど、ジェドローは助かるわ。」

「そうだよ。ドラえもん。」

「うん、判った。」

「でも、こっちのダイモーンはどうしよう。」

「私が食い止めるわ。」

「チチチチ。」

「ワンワン。」

「チツチちゃん達も戦いたいわ。」

「ありがとう。」

セーラーチームvsシンガー、ドラミ&動物隊vsダイモーン、

ドラえもん一行&タキシード仮面のジェドロー救助隊が今、行動を起す。

第二章タイムワープ（後書き）

エイルとアンの感動の再会。果たして一行は彼らを止められるでしょうか。

あのダイモンやカーディアンを無事に倒せるのでしょうか。

第一三章エイルとアン（前書き）

遂に始まった。エイリアンとの再戦。そして、ジェドーラの救出。事情の知らないセーラーブルートを加えたセーラー戦士達は、彼らを説得できるのでしょうか。

結果が気になります。

第一三章 エイルとアン

イタリア ビルディング内

ドラミとペロ達は、マカイジユンと対峙する。

「やる気かしら。お譲ちゃん。痛い目に逢うから早く逃げちゃいなさい。」

「そうは行かないわ。貴方が何者だろうと、私達は負けはしない。」

「だったら、キミから倒してあげるわ。」

マカイジユンは葉の手裏剣を投げ始めた。ドラミ達は、それを痴漢撃退バリアーで防ぐ。

ドラミは、空気ピストルを出して、マカイジユンを撃った。マカイジユンはよろめく。

賺さず、ペロは噛み付き、ピー子とチッチは突きだした。

その間、タキシード仮面達は、ジェドローラの元に辿り着けた。

「大丈夫か、ジェドローラ？」

「ドラえもん、パワえもん、ノラニヤコ、それにセワシくん。」

うん、大丈夫だよ。ありがとう。後、キミ達もありがとう。」

「お礼は、結構だよ。私は、タキシード仮面。彼らはのび太くん、ジャイ子ちゃん、そして、しずかちゃん。ドラミちゃんと戦っている動物達は、彼女のペット達だ。」

タキシード仮面はジェドローラを抱えた。

一方、耳バンDXを付けたセーラー戦士達はシンガーと戦っている。シンガーは超音波を放つ。ところが。

「ホントだ。みんなの声が聞こえるのに、カーディアンの歌が聞こえない。」

「今のうちに、攻撃しましょう。」

「判った。バーニング・マンダラー！」

八つの火の輪がシンガーの金の翼に火傷を負わせた。

「スパークリング・ワイド・プレッシャー！」

電気入りのラグビーボールがシンガーの喉に命中した。喉が痺れては声は出せない。

「ヴィーナス・ラブ・ミー・チェーン！」

「シャインアクア・イリユージョン！」

ヒカリのハート型の鎖と水の鎖がシンガーの手足を縛めた。

サターンはサイレンス・グレイプでシンガーの銀の翼を刺した。

「よし、チャンスだ！」

セーラームーンはハート・ムーン・ロッドを構える。

しかし、シンガーは予め用意していた、2つの羽をセーラームーンに投げつけようとした。

賺さず、戦いに参加してなかったセーラープルートがガーネット・ロッドを構えて、攻撃する。

「デッド・スクリーム。」

赤紫の玉が飛んできて、シンガーを飲み込んだ。

シンガーは、声も出さずにカードに戻った。

「あらら、勝っちゃった。」

耳バンドXを取りながら、ムーン達は、呆気にとられる。しかし、プルートは彼女達の前に降り立つと厳しい目を向けた。

「これは、一体どういいうつもりですか？こんな所にやってきて。何かあったら、どうするのですか。」

「だって、あのジェドーラって子、放っておくなんてできなかつたんもん。」

「あらら。君達仲間割れ。」

セーラー戦士が振り返ると、ペロ・チッチ・ピー子・ドラミがマカイジュンの操っている蔓に捕えられているのではないか。

「しまった。ドラミちゃん！」

「おっと、動いちゃだめよ。動いたら、この子達が死んじゃうのよ。」

「あの、ドジ犬。」

「猫だつてば。」

「どうでもいいでしょ！そんなこと。」

「まあまあ。」

ムーンとマーズの漫才をちびムーンが止めた。

「この子達を助けたければ、聖杯の欠片をちょうだい。」

「聖杯の欠片……。」

「デス・バスターズの戦いの後、それぞれの時代に飛んでいったの。」

「私達はその欠片を探しにもこのイタリアに来たのです。」

「そうですか。ん、貴方はセーラーサターン。どうして此処に。」

「彼女のお陰です。」

「話してる場合じゃないよ。ドラミちゃん達を助けなきゃ。」

「そうね。」

その時、前方から2羽のカラスが飛んできた。レイの家のデュモスとフォボスだった。レイ達と一緒にきたのだ。彼女達はマカイジユンを蹴り始めた。その隙にアルテミスとルナが蔓を引き裂きドラミ達を救った。

「デュモス、フォボス。そうよ。あの子達がいたんだわ。」

マカイジユンは怒り出した。その時、背中に激痛が走った。ジェドローラが巨大フォークで彼女の背中に切り傷を付けた。ジェドローラは弱ってもまだ戦う気だ。

「貴様！」

「へへへ、さっきのお返しだよ。さあ、ハートの杖を持ったお嬢さん、君の出番だよ。」

「うん、でも……貴方達が……。」

「彼らは私達を守るから、攻撃を。」

タキシード仮面はペロを、ドラえもんはドラミを、パワえもんはチッチとピー子を、のび太は頑張り顔のジェドローラを抱える。そして、しずかはフォボスとデュモスを肩に乗せて守っている。ジャイ子、セワシ、ノラニャーコは頷いている。

「みんな。」

『セーラーMoon』

ちびMoon達も真剣なまなざしを向けている。エイルとアンも。

「お願い。うさぎちゃん。」

「アン？」

「戦つてくれ。」

「エイル？判ったわ。」

セーラーMoonはハート・Moon・ロッドをダイモーンに向ける。

「Moon・スパイラル・ハート・アタック！」

「これは・・・。」

マカイジユンの脳裏に移ったのは、セーラー戦士達の戦いの事、アン達のこと、そして古里のこと。その他の思い出である。

「ありがとう。セーラーMoon。ラブリー！」

マカイジユンは、目になった只の植物とダイモーンの卵に分離する。

「あれは、魔界樹。」

後に残ったのは、たくさんのピュアな心の結晶であつた。景色は元のビルの中身になった。

続いて人々のエナジーは戻ってきたのだ。

「魔界樹がまた浄化されたから、人々が元気になったのね。」

「これで、またいちからやり直したな。」

「ええ。」

エイルたちはセーラー戦士とドラえもん一行に向き直った。

「ありがとう。セーラーMoon、そして、異世界の訪問者達よ。

魔界樹をまた、浄化してくれて。」

「いえ。それより、何があつたの。」

エイルとアンはこれまでの出来事を説明した。

彼らは魔界樹を静かな場所で育てる星を探している途中でダイモーンの卵に魔界樹が取り付かれ、ダイモーンになってしまい、ピュアな心を求めて、彼らと宇宙に帰って来たのだった。しかし、魔界

樹の性能も残っていたため、生物のエネルギーまで求めることになったらしいのだ。その時、住処にしたのが21世紀中期のイタリアのビルディングなのである。

「可愛そうに、魔界樹のためにエネルギーやピュアな心を集めてたんだ。」

「ありがとう。おちびちゃん、優しいのね。」

「そういえば、君はセーラームーンに似てるけど、もしかして。」

「アタシは、30世紀のうさぎとまもちゃんの1人娘、プリンセス・うさぎ・スモールレディ・セレニティ。」

「うさぎさんと衛さんの娘さん。」

「うん、よろしくね。」

スーパーチビムーンは握手を求める。アン達も握手を求める。しかし、プルートのガーネット・ロッドでさえぎる。

「理由はどうあれ、貴方方がダイヤモンドに協力したからには、成敗させてもらいます。」

『ええ！？』

ムーン一行は驚く。

「プー、何も殺さなくてもいいじゃない。」

「いえ、このままだとまた、人々のエネルギーが吸われてしまいます。」

「アンやエイルは、確かに生命エネルギーがないと生きられないが、だからといって、殺すことはないだろう。」

「だったら、私に任せてください。」

「サターン？」

「私が、貴方方を浄化します。」

サターンは、サイレンス・グレイプを2人に翳す。

「アン・エイル、貴方方はダイヤモンドに利用されたことを認めます。貴方方は確かに、カーディアンという怪物でエネルギーを取ろうとしました。しかし、最後はセーラームーンに助けを求めました。したがって貴方方は、此处で人間としての生活を送るのです。」

サイレンス・グレイプが光り、彼らを光で包んだ。光の中から、うさぎより年上の少年と同年代の少女が表れた。2人は始めての自分の姿を見る。

「これが、僕達の姿。」

「生まれ変わったのね。私達。」

「これからは、2人で仲良く、普通の植物になった、魔界樹を育ててください。」

サターンは、微笑んだ。新たな朝日を迎えて、2人の新生活が始まろうとしていた。

第一三章エイルとアン（後書き）

シンガーとマカイジュンは仕留めて、エイルとアンは人間に魔界樹は普通の植物になりました。果たして、聖杯の欠片はジェドーラが本当に持っているのでしょうか。

用語集（前書き）

作中に様々な用語がでてきたから、私が説明します。

用語集

ルナPシュート・・・セーラーちびムーンのオリジナル技。ルナPボールをサッカーボールのように蹴りだし、敵にダメージを与える。

ルナP変化・・・ちびうさがルナPボールをいろいろな道具や人物に変える術。例えば、救急箱や傘、武器に変化できる。中でも、聖杯に変える事ができる。ちびムーンがスーパーちびムーンに変身する時はこの術を行う。

スーパーセーラーちびムーン・・・ちびムーンがルナPボールが変化した聖杯の力で二段階変身した姿。略して『スーパーちびムーン』。

容姿は、スーパームーン（正確にはスーパーセーラームーン）に類似する。

ヘル・デステイニー編及び原作オリジナルだったが今作で登場。後にSSに登場。

ピンクシュガー・ハートエイク・・・スーパーちびムーンがピンクムーンロッドを使った必殺技。巨大なハートの列を相手にぶつける。威力はあまり変わらないが、射程は長くなった。これは、あくまで『ピンク・シュガー・ハート・アタック』同様、物理的な攻撃技。ヘル・デステイニー編オリジナル技だったが、今作で使用。

20世紀末期の銀水晶・・・うさぎがブローチに収めている、聖石。敵を浄化させたり、変身の補助をしたりする。今作では、聖杯の欠片探しに使っている。

30世紀の銀水晶・・・ちびうさがブローチの中央にはめている、銀水晶。力はうさぎのと同じ。ただし、元々聖杯を持っている為、聖杯の欠片に反応はしない。

ディアーナ・・・Rの初期「エイリアン編」で倒したカーディアンの中の1人。アニメでは殆ど語られなかったが、今作で登場。ギリシヤ神話のディアーナの容姿を持つ、三日月のような髪型をしたカーディアン。弓術が得意。髪を使って、エナジーを吸収できるが、髪をムーンの「ムーンティアラ・アクション」で刈られ、サターンのサイレンス・グレイプで足に傷を負わされ、ムーンに倒された。

シンガー・・・今作オリジナルカーディアン。金と銀の翼を持つ、ギリシヤ神話のセイレーンの姿をしたカーディアン。その名の通り、歌で相手を金縛りにする（云わば超音波）。その威力はサターンの「サイレント・ウォール」を破れるほどの強さの筈だが、ドラえもんの道具、耳バンドXで逆に防御され、プルトの「デッド・スクリーン」で倒された。なお、倒される前に喉がジュピターの技で痺れてしまったため・・・クレンジング・・・と叫べなかった。

マカイジュン・・・今作オリジナルダイモーン。エイルとアンが育てようとしている魔界樹から誕生した。黒い星の痣の位置は左袋萩の内側。魔界樹と同じ性能が残っている為、エナジーも吸収する。誕生後、彼らと共に、21世紀中期のイタリアにやってきた。植物を操る術を持っており、ドラミ達を盾にしようとしたが、ジェドールとフォボス達の妨害を受けて、セーラームーンに浄化された。その後、魔界樹は只の植物となり、人間として生まれ変わった、エイルとアンに育てられる。

リップ・ロッド・・・太陽外部戦士が変身する時のアイテム。サターンのリップ・ロッドはドラミがほたるにあげてしまったもの。

サイレンス・グレイプ・・・長刀に類似する。サターンの鎌。防御技を出したり、相手を転生させる力がある。敵を斬りつけることも可能。

用語集（後書き）

他にも、用語がありますが、第2弾は絶対にあると思います。
次は、ドラえもんズ編になるでしょう。

第一三・五章はるかとみちる（前書き）

ジャイアンくん・ムク・スネ夫くん・チルチル・出来杉くん、そしてドラパンはダイヤモンドに追われる身になってしまった。

彼らはのび太くん達が、セーラームーン一行と行動を共にしていることを知らずに何処に逃げ込むのでしょうか。

第一三・五章はるかみちる

時空間

ジャイアン一行はドラパンのタイムマシンで怪物たちから逃げ出した。

「ねえ、剛田くん、これからどうする。」

「わかんねえ、一体何なんだ。あいつらは？」

「それより、ジャイアン。この犬なんとかしてくれ！」

泣き顔のドラパンはムクに懷かれていた。ドラパンは、犬と餡子入りのどら焼きと暗所が大の苦手だった。ムクに懷かれても嬉しくないのだ。

「ごめんごめん。ムク、ドラパンの操縦の邪魔しちゃだめだぞ。」

ジャイアンはムクをドラパンから離れた。スネ夫はドラパンの顔をハンカチで拭いてあげた。ムクに舐められたらしいのだ。

「ドラパンは、犬がだめなんだ。」

「ほつとけ。それより、ドラえもんは何処だ。訪ねてきたと思ったら急にいなくなりおつて。そのうえ、急に空が曇つて、怪物共が現れおつた。一体なんなんだ。あいつらは？ドラえもん、見つけたら惟じゃおかんぞ。」

「まあまあ、それよりあの時代が安全そうだよ。」

「よし、その時代へ行こう。」

一行はタイムマシンを進ませた。

20世紀末期 横浜 ホテル内プール

ブイーン。タイムホールが開いて、一行はその時代に着いた。

「ここなら、大丈夫だ。」

「わー、気持ち！ねえねえ、気分転換に水遊びしようよ。」

「賛成。あの時代の空気が悪くなっちゃったし、思い切り遊ぼう。」

「おー!」

ジャイアン達は、ドラパンの着せ替えカメラで水着に着替えて大はしゃぎをした。一方ドラパンはプールサイドに座っている。

「やれやれ、ドラえもんの間は個性がありすぎる。」

その時、彼の背後に栗色のショートカットのボーイッシュの娘が声をかける。

「ちよつと失礼。君とお仲間さん、おちびちゃんのお友達。」

「はい?」

ドラパンは振り返ると娘はホルターネックの赤橙のビキニと黄橙のローレグを着用している。その上に、橙のシャツと橙赤のサンダルを着用している。

「あの、おちびちゃんとは?」

「だって、君達未来から来たんだろう。30世紀の。」

「確かに我々は未来人だが、22世紀と21世紀初期から来たものだ。」

「なるほど、それはごめん。」

「あら、はるか、誰と話してるの。」

はるかと呼ばれる娘に声かけたのは、緑青のセミロングウェーブの乙女だ。乙女は橙みの黄のバッククロスのビキニをつけ、黄みの青のヒモパンの上に青みの黄の布を巻いている。上着はフード付の橙みの赤で、サンダルは水色だ。

「みちるか。この未来の狸さんと話してるんだ。」

「誰が、狸だ。」

「あら、喋った。」

その時、みちるの足元でムクが尻尾を振っている。

「あら、可愛い犬ね。」

「ひー、犬恐れ。」

ドラパンははるかにしがみついた。

「どうして?可愛いのに。」

はるかたちは、ムクを撫でた。その時、ジャイアン達が来た。

「オイ、ムク、友達ができたのか。」

「この子、ムクっていうの。」

「はい、そうですけど、あの何方？」

ジャイアン達は、互いに自己紹介した。そのあと、これまでの事情を話す。

「なるほど、そんなことがあったのか。」

「道理で、波に以上が起きたわけだわ。」

みちるとはるかとは真剣に悩んだ。

「あの、お姐さん達、一体？」

2人は顔を上げる。

「君達が襲われた怪物は、デス・バスターズの怪人・ダイモーン。僕達はデス・バスターズを倒す任務を受けた戦士なんだ。」

「デス・バスターズ？そんなの知らないぞ、俺。」

「とにかく、この人達と行動してドラえもん達を探そうよ。」

「僕もスネ夫くんの意見に賛成。こんなところで遊んでも、元の世界に帰れないよ。」

「私もだ。そいつらの野望は我等が頂く。」

「だよな。のび太達のために戦う以外方法はなさそうだ。」

はるか達は、笑顔を作る。

「キミらの友達想いには負けたよ。」

「決まりね。」

夜10時

みんなが寝静まった頃、ジャイアン達は、海岸にやってきた。

「それじゃ、辛い旅になるかも知れないが、デス・バスターズと戦おう。」

「おーよ。」

「それじゃ、はるか。」

「うん、みちる。」

左手のこぶしを重ねる。スネ夫は彼女達の手首の腕時計を見る。

「ねえねえ、みちるさんとはるかさんだっけ。その腕時計は・・・あつ判った。それで正義の味方に変身するんだ。いやー、僕って感激、正義の味方に会えるなんて。」

「いや違うよ。」

「変身するのは、これで。」

はるかたちは、小さな杖を出す。

「こつち・・・なのね。」

「ふふふ、面白い子ね。」

2人は杖を握る。

「ウラヌス・プラネットパワー！」

「ネプチューン・プラネットパワー！」

「メイクアップ！」

はるかやセーラーウラヌスに、みちるはセーラーネプチューンに変身した。

「新たな時代に誘われて、セーラーウラヌス、華麗に活躍。」

「同じく、セーラーネプチューン、優雅に活躍。」

ドラパン達は、目を丸くする。

「変身した。」

「驚いたようだね。」

「いえ、感動しました。」

「個性的で面白い子達。」

「では、行きますか。」

「うん、デス・バスターズを倒そう。」

一行はタイムホールに入る。穴は閉まる。

彼らの旅は、今、始まったのだ。

第一三・五章はるかみちる（後書き）

みちるさんとはるかさん、遂に登場。ジャイアン達やドラパンと行動しちゃいました。セーラー戦士が揃えば、お茶の子芥々です。今回は、セーラー戦士達の聖杯の欠片探しのはじまりです。

第一四章タイムトラベル（前書き）

聖杯の修理に専念するうさぎちゃん達一行は、ジェドローを訪ね、はるかさん達は、ドラパン達とそうとも知らず、デス・バスターズを倒しに行きました。果たして、一行の運命はどうなるでしょう。

第一四章タイムトラベル

21世紀中期 イタリア 夕方 飲食店

この時代は、うさぎ達の時代と違いロボットの存在は受けられるが、セーラー戦士のことは、秘密なのだ。戦いを終えたうさぎ達一行は大きな飲食店に泊めてもらった。幸い部屋が数個空いていたので、うさぎ達は、大助かりだった。部屋は、くじによって決められた。ただ、ドラえもん達ロボットは、ジェドローラの部屋で、ルナ達動物は、店の店長の部屋で寝ることになった。亜美たち四守護戦士チーム、ちびうさ・ジャイ子・セワシ・ほたる・せつなチーム、そしてのび太としくか・うさぎと衛（のび太とうさぎにとってはラッキーだった）のチーム。店のクルー、特に店長は元氣だが、親切なので、うさぎ達セーラー戦士の件は守ってもらえた。

なお、せつなとは、セーラープールの通常時の姿である。フルネームは、冥王せつな。衛と年の近い大学生である。せつなは、ちびうさにとっては、姉のような存在である。

リビング

うさぎ達は、ジェドローラと夕食の手伝いをして、みんなで食事する。食事中にジェドローラやせつなに聖杯のことを話した。

「それで、僕がその欠片を持っているって言うのか？」

「そうなの。」

「どう？うさぎちゃん。」

ルナは下からうさぎに尋ねる。うさぎは制服（実はうさぎ達は、制服のまま来てしまった）の胸元のブローチを見た。ブローチに反応はなく、うさぎは首を振った。

「残念だね。それで、聖杯はいくつに分かれたんだい？」

「判らない。ブローチに反応していることと、時代中に散らばったことだけしか知らない。」

「でしたら、夕食後、ガーネット・ロッドに銀水晶を翳してみたらいかがですか。」

終了時間 店

うさぎ達は、店に集まった。せつなはガーネット・ロッドを出し、うさぎは銀水晶をブローチごと翳した。ロッドと銀水晶が輝き、それぞれの時代の国の風景が映し出された。300年前のスペイン、米ソ冷戦時代のロシア、清王朝末期の中国、古代のサウジアラビア、20世紀後半（うさぎ達とほぼ同じ時代）、そして、22世紀前半（多分セワシ達とほぼ同じ）のアメリカ。

「それぞれの時代の国に聖杯の欠片があるというわけね。」

「だったら、明日の朝、聖杯の欠片探しに行こうよ。」

「待つてのび太くん。」

「なに、亜美さん。」

「みんなで行くのは危険よ。此処は、私達セーラー戦士、一つの時代1人で搜索したほうがいいわ。みんな一緒だと、時間が掛かるわ。」

「亜美さんの言うとおり、分かれて探したほうが早く見つかるわ。」

「あたしも賛成。此処は、誰がどの時代に行くか決めましょう。」

「じゃあ、私は、古代のアラビアを探索する。」

レイは、古代アラビア。

「アタシは、そうだな。300年前のスペイン。」

まことは、300年前のスペイン。

「あたしは、米ソ冷戦時代のロシア、あの時代の犬さん達と行動を共に出来るから。」

美奈子は、米ソ冷戦時代のロシア。

「私は、清王朝末期の中国の方を調べてみる。」

亜美は、清王朝末期の中国。

「私は、22世紀前期のアメリカ力を調べてみます。」

ほたるは、22世紀前期のアメリカ。

「だったら、アタシは、20世紀後半のブラジルを探してみる。あたしだって、セーラー戦士の1人だもん。特別扱いなんてもう卒業よ。」

「そうよね。貴方には、ルナPがあるものね。よし、ちびうさ、いつてらっしゃい。」

ちびうさは、20世紀後半のブラジルを搜索することになった。

「ところで、アタシは？」

「うさは、此処にいて。私達の誰かと同行すると、銀水晶をとられる恐れがあるわ。」

「デス・バスターズはもしかしたら銀水晶の力を利用するらしいわ。」

「大丈夫。俺が守ってやるよ。」

衛はうさぎの肩を抱く。

「よし、決まり。みんな！明日に向けて、準備だ！」

「オー！」

レイたちは、拳を上げる。

「ちよつと、まった。」

「なによ。アルテミス。」

「僕達は、どうなるんだよ？」

「あ・・・、そういえば。」

「貴方達の役割忘れてた。」

ルナや、ドラえもん達が、残っていた。

レイ達がタイムワープ前に、護衛を付けておかねばならない。やはり、レイにはデュモスとフォボス、美奈子にはアルテミス、ちびうさには、ルナPという護衛がいる。問題は、亜美・まこと・ほたるの護衛が誰がするかだ。

「どうする、ルナ？」

「うーん。」

「しずかちゃんのペットなんてどうかな。」

「えー、ピー子ちゃん達を？」

「そうだよ。護衛には、やっぱり動物が付き物だよ。」

「だったら、私は、ピー子ちゃんと。」

亜美は、ピー子ちゃん。

「あたしは、ペロと行こうかな。だって、ペロ。キミみたいな犬は特に頼りがいがある。」

まことは、ペロ。

「じゃあ、私は、チツチと行きます。よろしくね、チツチ。」

「ピピ。」

ほたるは、チツチと。

「となると問題は僕達か。」

「のび太くん・しずかちゃん、そしてルナは此処でうさぎちゃんを守護する。」

「ごめんね。みんな。」

「大丈夫だよ。心配しないで。」

「そうよ。うさぎちゃん。彼らは、貴方が心配なのよ。」

「後は、僕たちか。」

残ったメンバーは、ドラえもん・ノラミャーコ・セワシ・ジャイ子・パワえもん・せつな・ドラミの7人だ。ちなみにジェドローラには、店がある。

「おーい。ジェドローラ。」

「あ、店長だ。」

店にゴツツイ体格をした、ちよび髭の30代半ばの男性が入ってきた。この人が飲食店の店長だ。

「話は、聞いた。お前さんら、聖杯の欠片とか言う奴を直すんだって。」

「はい。」

「ジェドローラ、お前も行け。店のことと嬢ちゃんは、俺らが守る。」

「すいません。店長。」

「いってことよ。」

店長はガッツポーズをする。

「えーっと僕は、まことちゃんと一緒にスペインに。」

「よろしく。でも、アタシは、まこちゃんでもいいよ。」

「いやいや、まことちゃんの方がかわいいよ。」

「じゃあ、アンタはジェイちゃんってことで。」

「よろしく。まこことちゃん。」

「えーっと、アタシはー。」

「ジャイ子ちゃんはアタシと一緒に、漫画のアイデアにちょうどいいじゃない。」

「じゃあ、ちびうさちゃん。よろしく。」

「私は、ロシアに行くけど、ドラえもんはどうする。」

「僕もロシアに行く。」

「じゃあ、決まりね。」

「セワシくんは、誰と行きたい？」

「亜美さん、ぼくも中国に連れて行ってください。」

「わかったわ。」

「だったら、僕は、レイさん達とサウジアラビアに行く。」

「私と？うーん、いいわ。君とつてもしっかり屋さんだから、気に入っちゃった。」

「へへへ、よろしく・・・。」

実は、性質の悪いもの同士が気が合うのだ。

「私は、アメリカに行きたい。」

「また、一緒ね。ドラミちゃん。」

「私もアメリカへ向かいます。」

「全員、意見が纏ったようね。」

アメリカチーム

セーラーサターン・セーラープルート・ドラミ・

チツチ

中国チーム

セーラーマーキュリー・ピー子・セワシ

ロシアチーム

セーラーヴィーナス・ドラえもん・アルテミス・

ノラミヤールコ

スペインチーム

セーラージュピター・ペロ・ジェドローラ

サウジアラビアチーム

セーラーマーズ・フォボス・デイモス・パウえもん

ブラジルチーム

セーラーちびムーン・ルナPボール・ジャイ子

という、グループ分けができた。

ただ、もう1つ問題があった。

「時代に着いた時、どーやって、欠片を探すの？」

「それは……。」

「よし、僕に任せて。光羅針盤！」

「なにそれ？」

「何かを探したい時、その羅針盤に強い気持ちを持てば、探したいものが何処にあるか、中央が反応するんだ。光の指す方に探したいものがあるんだ。」

「なるほど、念の為、探検セットを持っていくといいよ。なにか役に立ちそうだから。」

ドラえもんは、探検セットと光羅針盤を配る。レイたちは、それを荷物に入れた。

翌日 裏庭

うさぎと衛・ルナ・のび太としずかはマーズたちを見送りにきた。
「みんな、気をつけてね。」

『任せて（ください）！』

チーム（ブラジルチームを除く）それぞれは、タイムベルトでそれぞれの時代に向かった。

ブラジルチームは、時空の鍵でブラジルに向かった。

みんな、がんばってね。〜

うさぎは、ただこの飲食店で衛たちと待つのであった。

第一四章タイムトラベル（後書き）

探検セットのことが気になりますか。

多分「のび太とアニマルプラネット」と同じ種類だと思います。

次話の前に種類を教えます。

探検セット（前書き）

探検セットの種類を紹介します。

今作は、アニマルプラネットに出てきた道具と同じです。

探検セット

探検セット・・・以下のひみつ道具6点、で構成される探検道具のセット。手のひらサイズの「コンパクトケース」に収納して持ち運ぶことができる。

蓑虫寝袋・・・キャンプのときにでも、使える道具。蓑虫みたいに天井に吊るして寝ることも可能。

圧縮非常食三十食ぶんつめあわせ・・・缶詰などの各種非常食の詰め合わせ。

どろ水浄水器・・・外観から判断する限り、取水口から取り入れた水を濾過して飲み口から真水を得ることのできる道具の可能性がある。マーズの水筒のような道具。

糸なし糸電話型トランシーバー・・・「糸なし糸電話」を模したトランシーバー。無線通話機能に加え、指定した「糸なし糸電話型トランシーバー」のもとへ地面を転がって移動するという機能を持つ。

警報用打ちあげ花火・・・非常時に打ち上げて、周囲に警報を出すことのできる花火。

ミニカラオケセット 歌詞カード付・・・外観から判断する限り、携帯用カラオケの可能性がある。ヴィーナスが歌の練習の時に使う。

探検セット（後書き）

これで、うさぎちゃん達と離れていても連絡が出来ます。

マーズ達は、どんな冒険をするのか。楽しみになってきます。ドラえもんズは、次回から1体ずつ登場します。ドラえもんズとの出会いを得て、彼女達は、新たな困難に立ち向かいます。

第一章奪われた銀水晶（前書き）

ジャイアン達とはるかさんたちはデス・バスターズの打倒に向かいました。聖杯が欠片になったことも知らない一行は、一体どうなるのでしょうか。

また、うさぎちゃん達と衝突しなければいいのですが。

第一五章奪われた銀水晶

飲食店 裏庭

「行っちゃったな。あいつら。」

「はい。でもドラえもん達がいるから、大丈夫ですし。うさぎさんの代わりに光羅針盤がある限り、聖杯の欠片なんてあつという間ですよ。」

「それなら、いいけど・・・。」

うさぎは、とても不安だ。そんな不安そうなうさぎの足をルナは、引つかいた。

「なに、くよくよしてんのよ。うさぎちゃんらしくない。」

「ルナちゃん、怒らないで。うさぎさんも今は、あの人たちを信じて私達は、ここで待ってましょう。」

「うん、判った。早く、聖杯を直して真のメシアに渡さなきゃ。」

そのメシアなら世界を救えるわ。」

「幻の銀水晶で聖杯の欠片が探せるなんてことが、敵に知られたら、確かに銀水晶を悪用されるわ。ダークキングダムや、ブラックムーンみたいに。」

うさぎは、ブローチに嵌めてある銀水晶を見つめる。

裏口の扉から、人影が覗いている。

裏口内

「聞いたか、スネ夫。」

「聞いたよ。ジャイアン。あのうさぎって人、銀水晶で聖杯の欠片を探してるんだって、その聖杯をメシアにあげれば、世界は救えるんだって。」

「デス・バスターズもいちころだ。」

「このことをウラヌス達に知らせるから、ジャイアンは出来杉くん達に知らせて。」

「おうよ。」
「それじゃ、報告だ。」

屋根裏部屋

ウラヌス達は、既にこの時代のイタリアに来ていた。タイムホールはこの部屋にあったのだ。そこから、一行は出てきた。

「なんだって！」

「聖杯が、欠片になって！」

「「あちこちの時代に散らばった！」」

「はい。」
「どうしたんだ。この人たち、聖杯について何か知ってるようだ。」

スネ夫は、聖杯の件を彼女達に話した。途端に顔色が変わった。

「しー！姐さんら、大声だすな。」

「ごめんなさい。」

「その聖杯について、何か心当たりはあるのか。」

「そうなんだ。実は・・・。」

ウラヌスとネプチューンは、世界を沈黙から救うために任務を受けた戦士だった。最初に三つのタリスマンという、アイテムを探ること、第二にタリスマンで聖杯をつくること。そして、メシアを探して聖杯を渡すこと。その聖杯は、筆頭のファラオ90に奪われてしまった。ファラオ90は、セーラーサターンによって倒されたのだった。

「そのファラオ90が倒されたときにその聖杯が壊れてしまったっていうんだ。」

「そういうことになるわね。」

「銀水晶が欠片に反応してるってことは、あのねえちゃんが救世主ってことじゃねえか。」

「そういうことだ。でも、今度ばかりは、あの子達を戦いに巻き込みたくない。」

「聖杯が直つたら、元の時代に帰しておかないといけないわ。」

「だったら、あのねえちゃんから、ブローチ取り上げといたほうがいいんじゃないか。」

「その手があったか。よし、私に任せろ。」
名乗り出たのは、ドラパンだった。

うさぎ達の部屋

うさぎ達は早朝に見送りに行ったので、二度寝することになった。ドラパンは、そーっと部屋に忍び込みうさぎの寝ているベッドに近づいた。丁度、うさぎが左横に寝返ったため、胸元のブローチが見えた。ドラパンは、素早くブローチを奪って部屋を出て、屋根裏部屋に引き返した。

屋根裏部屋

中では、ウラヌス達が、笑顔でドラパンを出迎えた

「お待たせ。」

「ありがとう、これで聖杯の欠片が探すことができるわ。」

「ねえ、この宝石はどうやって外すの。」

「金の杖を使えばいいんじゃないか。」

「よし、やってみよう。」

ドラパンは、キンキンステッキをブローチに振るう。すると、ブローチから、七色の光が現れた。光は小さな七つのハート型の宝石になって、下に落ちた。

「なんだ、こりゃ。」

「さあ。」

ジャイアンとスネ夫は腰を抜かした。

「きれいな石だ。待てよ、これで聖杯の欠片とやらを探せばいいんじゃないか。力はちよつと弱まってるが、探すだけことは、できるよ。」

「それじゃ、何処にその欠片があるかしらべようか。みちる鏡を。」

「判った。」

みちるは、手鏡を取り出す。その間にドラパンは七色の石の一つをブローチに収めようとした。収めようとしたのは、藍の石だ。その石が鏡と共に反応した。鏡に映ったのは、清王朝末期の中国、300年前のスペイン、古代アラビア、20世紀後半のブラジル、米ソ冷戦時代のロシア、そして、22世紀前半のアメリカだった。

「どうやら、欠片はそれぞれの時代にあるみたい。よし、こうなったら、手分けして探しましょう。」

「えー、みちる姐さん、そんな残念なこというなよ。みんなで力を合わせないといけないのに。」

「ジャイアンくん、それとこれとは違うんだ。みんなで探すより分かれて探したほうが手っ取り早いよ。」

「そうだよ。聖杯の修理が早いほうが世界が救えるよ。」

「判った。じゃあ、俺はブラジルに。」

「僕は、ロシアだ。」

「じゃあ、僕は・・・、えっと、アメリカを搜索だ。」

「私は、中国を調べてみる。」

「僕は、スペインに。」

「そして、私は、アラビア。よし、決まり。」

ドラパンは、紫の石とブローチ（ブローチは予備）を。ジャイアンは、橙の石。スネ夫は、緑の石。出来杉は、赤の石。ウラヌスは、黄の石。そして、ネプチューンは、青の石を取る。

「念のために探検セットは持っておけ。自分の身を守るには、これ以外はない。」

彼らは、探検セットを所持した。そして、ドラパンは、タイムベルトを5本出し、ジャイアン達に配った。

「準備完了。レッツゴー！」

ジャイアン達は、時空に旅立った。

第一章奪われた銀水晶（後書き）

ブローチを取られてしまいました。うさぎちゃん達がこのことを知ったら大騒ぎです。

銀水晶はハート型の虹水晶になってしまい、当分彼女は戦えません。うさぎちゃん、起きたらピンチです。

第一六章復活ムーン・スティック part 1（前書き）

うさぎちゃんは、変身ブローチと銀水晶をドラパンに取られてしまい、戦闘不能になってしまします。もし、ダイモーンが来たら彼女は、当分はドラえもんの道具で戦わなければなりません。
どうする、うさぎちゃん。

第一六章復活ムーン・スティック part 1

ロシア 冬 大通り

ドラニコフは、ウルフマンシリーズのヒーローを演じている俳優ロボット。次回のウルフマンは、かわいいヒロイン役が必要なのだ。ドラニコフは、ヒロインをスカウトするために散歩している。

「がうがう、がうがうがう。（参ったよ、来週までにヒロイン役を探さないと監督にどやされるよ。）」

ヒロイン役に相応しい女の子は、そう簡単にいないのだ。しかし、1週間以内に見つからなければ、罰として、ドラニコフ得意のコサツクダンスで町内1週の刑になってしまう。

公園

「がう、がうがう。（は、もう疲れたよ。）」

ドラニコフは、公園のベンチに座り込んでしまう。

その時、凍っていた池の中で、腰まで掛かる金髪の少女、見覚えのある2体のネコ型ロボット、そして三日月型型のマークをつけた白猫が凍っていると大騒ぎ。

池へ駆けつけたドラニコフは、目が出るほど、びつくりした。ドラニコフは、市民の人と力を合わせて、友人達を救い出した。氷の中で少女と猫と友人2人は目を回して気絶していた。

「ががががう！（早く会社につれて帰らなきゃ！）」

ドラニコフは、市民の人の手伝いで、会社まで一行を運んだ。その公園の木の木陰から、愛らしい娘の顔が、悪意を満ちた笑みを浮かべた。

会社

市民の人々数人と一緒に白猫連れの少女と友人達を会社まで運んだ。ジャイアンと瓜二つの監督、ジャイポラ監督に説明してもらい、

凍った彼女達をたらい一杯の湯に入れた。次第に氷は溶けたが。

『アチチチチツチ！』

彼女達は、飛び上がった。

「がうがう。（気がついた。）」

一行は、ビタンと地面と衝突した。その後、ドラえもんは、素顔でドラニコフを怒鳴りつけた。

「何が『気がついた。』だ！僕達を殺すか！ドラニコフ！」

「まあまあ。」

怒るドラニコフをノラミヤーコは押える。少女も白猫も起き上がる。

「あいてて、どうやら、無事にロシアに着いたようだな。落ちたところが冷たい池の中だなんて。アレじゃ、凍え死ぬよな。あれ、ドラえもん、どうしたんだ。」

「がう。」

ドラニコフは、ドラえもんを擦り抜け猫に駆け寄る。

「あれれ、ねえドラちゃん。この子は？」

「こいつは、ドラニコフ。この時代で俳優さんしてるの！」

ドラえもんは、ぶすつとしたまま答える。

「がうがうがう。」

「ねえドラちゃん、この子なんて言ってるの？」

「『大丈夫。』って言ってるんだけど。そうか、ヴィーナスには、ドラニコフの言葉が通じないんだった。それじゃ、翻訳こんにやくレモン味！これは、生でも食べられるこんにやくだから心配ないよ。しかも、通常の3倍だからロシア語も通じるよ。」

「そうか。では早速。」

ヴィーナスは白猫とノラミヤーコと3等分して食べた。

「うーん、この婚約ホニヤク、確かにレモンの味だわ。」

「ヴィーナスちゃん。翻訳こんにやくよ。」

「そそっかしいな。」

ノラミヤーコ達は、ヴィーナスに突っ込んだ。

「えっと。私は、セーラーヴィーナス。この子はアルテミス。」
「ドラニコフだっけ。よろしく。」
「こちらこそ。」

その時、ジャイポラ監督が様子を見に来てくれた。

「大丈夫か？ あんたら。おっ！」

「ええ、大丈夫です。ありがとうございます。」

監督は、ヴィーナスを見るなり目を輝かせた。

「ここに、この子だー！ この子をヒロイン役とする！」

「はい？」

ヴィーナスもアルテミスもドラえもん達猫型ロボットも首を傾げる。

屋上

「映画のヒロイン役？」

「そうなんだ。今度のウルフマン作品は、『ウルフマンと金星の王女』という名前だ。その作品のヒロインとしてあんたに出てもらいたい。な、頼むよ。」

「うーん。何を当ってくれませんか。」

突然ドラニコフがヴィーナスの片手を引いて、ひそひそ声でお願いした。

「僕からも頼むよ。このままだとコサックダンス町内1週の刑になっちゃうよ。」

「コサックダンス町内1週の刑？」

アルテミスは想像した。確かに疲れるがとても恥しそうな御仕置だ。

さすがのアルテミスはヴィーナスを説得せざる得なかった。ヴィーナスの肩に乗って囁いた。

「ヴィーナス。此处は黙ってこの人たちに協力しようよ。」

「何言ってるの。聖杯の欠片探しは、どうするのよ？」

「撮影しながら探せばいいだろう。」

「ああ、それなら納得。」「判りました。やらせてください。」
「ありがとう。」

監督はうれし泣きをした。

山小屋の前

ヴィーナスとドラえもん一行は、撮影に為に山に登り合宿をすることになった。

「よし、みんな。今日は、ここで撮影することになった。今回は、盛大な作品を作るから、気を抜くなよ。もし、気を抜いたら・・・、腕立て5000回の刑だ！」

「はい！」

「腕立て5000回？厳しい」

ドラニコフたちは想像した。特にドラニコフは、コサックダンス町内1週よりもきつそうだと思った。

その時、20代前半の銀色のストレートロングヘアの黒人の若者が小柄な男の子の手を引いてやってきた。ヴィーナスはその若者の顔に見覚えがあった。

「クンツァイト？」

地球のプリンス・エンディミオンの4人の部下の一人クンツァイトと瓜二つだ。

「監督。」

「どうした。クンツァーツ。」

「迷子の子供を保護しました。」

「どれどれ。ん、お前は、スネルバーグ？」

「えっ？ジャイアン・・・じゃないよね。」

「あれ、スネ夫くん？」

「ドラえもん？お前、無事だったのか？よかったー！」

スネ夫はドラえもんを抱きつく。

「スネ夫くん？」

ヴィーナスの隣にクンツァーツという若者が来た。

「この子は、キミのお友達だったのか。」

「うわっと。」

ヴィーナスは赤面で驚いた。

「驚かしてごめん。俺は、クンツアーツ・アイシーズ。大道具係りなんだ。」

「いえ。あたし、セーラーヴィーナスです。こちらこそ失礼しました。」

ヴィーナスは、ぺこりと頭を下げる。

「おお、なんだなんだ。2人ともすっかり仲良しになったのか。」

監督はヴィーナスとクンツアーツをからかった。

「「いえ、まだあつたばかりで。」」

監督は、スネ夫の手をとった。

「さつきはごめんな。俺の作品のシナリオを盗もうとした奴に似てたものだからつい。」

「ううん。こちらこそ、親友に似てたもので。」

「よかったね。スネ夫くん。」

「あ、そうだ。あんたにこれを渡すんだった。」

監督は、ヒロインの役割の書いた紙をヴィーナスに渡した。

「これが、あたしの役ですか？えっと、名前は・・・、ビーナか。」

「

ヴィーナス達の山小屋の中

「えっと、キミの名前は、確か・・・。」

「骨川スネ夫です。」

「スネ夫くんね。あたしヴィーナス。この子はアルテミス。」

「よろしく。」

「みゃー。」

「こいつは、チルチル。」

チルチルはアルテミスとすっかり仲良くなった。

「ふふ。ねえ、スネ夫くん。貴方、どうして此処に来たの。」

「実はね、練馬区で恐ろしい怪物に襲われたんだ。なんとか、学校の裏山まで、逃げて来たんだけど、そこにも怪物が現れて、もうだめかと思ったとき、変な光に飲み込まれてそれで此处に迷い込んだんだ。」

「そうだったの。ねえ、スネ夫くん。一緒にその怪物と戦おうよ。」

「えっ、でも……。」

「大丈夫よ。私達は仲間よ。怪物が滅べば元の世界へ帰れるわよ。ねえ。」

「うーん。判った。一緒に戦いましょう。」

「そこなくちや。」

「なあ、ヴィーナス、歌はもう決まったかい？」

「え？」

ヒロイン役は、歌がなければ成り立たないのだ。台詞はともかく。問題は、テーマソングだ。

「うーん。どうしよう。」

そこへ、クンツアーツが入ってきた。

「ヴィーナスだっけ、失礼するよ。実は、監督から様子見るようにいわれたんだ。」

「クンツアーツさん。あたし、どんな歌を歌えば、いいのでしょうか。」

「歌か。ヒロインの特徴は、神秘的でシリアスな感じだからな。なんかこう神秘的な感じのする歌で通さないと、視聴者さん達に悪いよ。」

クンツアーツも悩んでしまう。すると、ノラミヤコは、アイデアを出した。

「だったら、ヴィーナスちゃんの思うとおりの歌で通せばいいんじゃない。」

「自分の思うとおり。」

「いいね。ヴィーナスさん。自分でいいなと思う歌を歌いましょう。」

うよ。」

「うん、判った。ありがとう、スネ夫くん、ノラミャーコちゃん。そして、クンツァーツさんも。」

ヴィーナスは、クンツァーツにウィンクする。彼は、彼女の笑顔に照れてしまう。その時、光羅針盤と虹水晶がドラニコフのマフラーに入っている光に反応していることに全員気がつかなかった。

その窓の外から、ドラニコフ達を見守ってた娘が覗いていた。顔や髪型は、スカーフやグラスで見えなかったが、多分亜麻色の髪でスパイであろう。

「うふふ。まさかこんなところでセーラー戦士たちと遭遇するなんて思わなかったわ。だけど、有名人達や、可愛い男の子のピュアな心をとってもおかしくないわよね。よし、撮影時に潜入しちゃお。」

その娘はなんなのかは、大体の想像はつく。

そのことは知らないヴィーナスの歌の稽古は今始まる。

第一六章復活ムーン・スティック part 1（後書き）

ヴィーナスちゃんが初めて、映画に出演しちゃいます。彼女は、どんな歌を歌うか。楽しみです。

第一章復活ムーン・スティック part 2 (前書き)

ヴィーナスちゃんが歌の練習を始めました。一体どんな歌を歌うのでしょうか。私なら愛をこもった歌がいいと思います。

第一七章復活ムーン・スティック part 2

山小屋 夕方

ヴィーナスはドラえもんに貰った探検セットの1つ、ミニカラオケセットで練習することになった。

「えっと、歌は何にしようか。」

ヴィーナスたちは、スネ夫から借りた歌のカatalogを見て、悩む。ドラニコフは、ピンときた。

「これにしようよ。」

ヴィーナスたちは覗き込む。

「『逢いたいから』?」

「知ってる。『ガリバーボーイ』の後期のエンディングテーマだよ。これなんか、愛があつて、ヒロインらしいよ。」

「うーん。とりあえず歌ってみよう。」

早速、ヴィーナスは歌ってみる。

「逢いたいから もっと傍で 体中 溢れる衝動 逢いたいから
ずっと傍で 貴方に 気持ち伝えるから

いつだって 違う空を眺めてる 貴方を追いかけていた 我儂
な 人だなと思うだけで 逢えばケンカばかり だけど 歩く道の
途中で 貴方に追いつきたくて 同じ夢を 見つけたいと思った
逢いたいから もっと傍で 何処でも 飛んでいけるよ 逢い
たいから ずっと傍で 貴方の 夢を見届けるから

抱きしめて 止まらずに駆けてくから この想いを受け止めて
世界中 探しても見つからない 貴方より大事な人は 夢が あ
ることだけじゃ 僕は我慢できないよ 叶わせなきゃ つまらない
と 笑った

逢いたいから もっと傍で 体中 溢れる衝動 逢いたいから
ずっと傍で 貴方に 気持ち伝えるから

この愛 止められない この愛 止めたくない 誰も 邪魔させはしない

逢いたいから もっと傍で 何処でも 飛んでいけるよ 逢いたいから ずっと傍で 貴方の 夢を見届けるから

逢いたいから もっと傍で 体中 溢れる衝動 愛が胸を 叩いてるから 今すぐ 貴方に逢いたくて」

ヴィーナスは歌い終えた。その時、いつの間にかスタッフ一同（もちろんジャイポラ監督やクンツァーツも）が小屋中に響く拍手を送っていた。

「わわわ、監督さんたちいつの間に！」

「綺麗な歌が聞こえたから、こっそり入ってきちゃった。」

「あらまあ。」

「この歌なら、人生ばら色だ。イヤッホー！」

監督は大喜びだ。

「いい歌だったよ。ヴィーナス。」

「そうかな。」

翌日の朝 森の中

等々撮影が始まった。ドラニコフとヴィーナスの出会いのシーンから始まった。

ビーナ「おやめなさい。狼男。」

ウルフマン「がうー。」【ビーナを睨みつける。】

ビーナ「この森の動物達は、ただ悪魔に操られただけなのです。」

ウルフマン「ががががうー！」

ビーナ「動物達は私が浄化します。」【ビーナは、歌を歌う。とたんに動物達は正気に戻る。】

ウルフマン「がう。」

ビーナ「この子達は、正気になりました。」

「カット。ヴィーナスちゃん、ドラニコフ、ちょっと待ってて。お客さんが来たから。みんなは、休んでくれ。」

ジャイポラ監督は、小屋の中に入る。ヴィーナスたちは、首を傾げる。

小屋の中

お客さんは、亜麻色のセミショートウェーブの娘だった。かなり若くて愛らしい表情はまさにアイドルに近い。名前は羽生美々。

「撮影の見学ですか？」

「はい。一応アイドルですが、次回のミュージカルまでにネタを考えなければいけません。」

「映画の撮影の場面を参考にしたいんですね。」

「はい。」

「よし、わかりました。」

森の中

ジャイポラ監督は、美々に見学させた。

「お待たせ。見学したい女の子と喋ってしまつて。」

「いえ、いいんです・・・。」

ヴィーナスは娘を見るなり、固くなった。続いてアルテミスも娘を見ると固くなった。

「はじめまして、羽生美々です。」

ぺこりとお辞儀をする美々。実は彼女は、ウィッチーズ5のミメツトに似ているからだ。

「へーまさか、ミメツト？」

それでも、ヴィーナスは美々にお辞儀をする。

スタッフと役者は仕事を続ける。その後、美々は町に帰る。また来るつもりで。

夕方 撮影現場

チルチルは、こっそりアルテミスを森に連れて行った。翻訳こんにやくを食べたため、普通の猫と話が出来るからだ。

「アルテミス、どうしたんだ。あの女の人と何かあったの。」

「いいか、チルチル。あの女には気をつけるんだ。」

「どういうこと、あの人まさか。デスなんとかの手下。」

「ミメットっていう、魔女だ。あいつはウィッチーズ5の1人だ。」

「大変だ。かかか監視をしないと。」

チルチルは、カタカタ震えてしまった。

そして6日後最終日

いよいよ本番がやってきた。アルテミスとチルチルの監視も最後になるらしい。

「どうしたの。チルチル達、あのお姐さん睨んで。」

「監視だよ。スネ夫くん、敵がいつでるか判らないから、気をつけるんだ。」

「うん、判った。」

そして、ラスト場面。

ビーナ「ありがとう。ウルフマン。貴方のおかげで無事に金星に帰れます。」

ウルフマン「がうぐぐぐ。」「涙を流すウルフマン。』

ビーナ「どんなに離れていても貴方に会えたことは忘れません。」

ビーナとウルフマンが抱き合うシーンとビーナが金星に戻る場面でエンディングが出る。

「カット。」

「2人ともお疲れ様。いい演技だったわよ。」

ヒロインの親友役を演じていた女性は褒める。

「ありがとうございます。撮影の見学のお礼にいいものを見せ

ましょう。」

美々は服を脱ぎ上げる。美々は、アイドル歌手と思わせる衣装を身に着けた。

「なんだ、お前は！？お前もダイヤモンドか！？」

「私は、その指揮官よ。狸ちゃん。」

「何だとー！」

「私は、ウィッチーズ5のミメット。ダイヤモンドはこの中よ。」

ミメットは、旅行用の銀の金属製のトランクを出して蓋を開ける。

「いでよ。ダイヤモンド！」

中から、鵜の形をした煙が出て、煙から派手な衣装の女性がでてきた。

「う・タヒメー！」

「う・タヒメー。その仔狸ちゃん達を大人しくさせて。」

「了解。殺人ソング！」

う・タヒメーは歌でドラえもん一行やスタッフや役者達の耳を麻痺させた。クンツァーツは耳を塞げたが、う・タヒメーに捕まってしまった。

「う・タヒメー。最初にその人のピュアな心を奪い取ってあげて。」

「はい。」

う・タヒメーは口からピュアな心を奪い飲み込んだ。

「ウゲ、なんてやつ。心を飲み込んだ。それにしても、ダイヤモンドって、コイツみたいな派手な衣装来たやつもいるのか。」

クンツァーツは倒れてしまった。ヴィーナスは、わなわなと震えた。ドラニコフは、もう堪忍袋の緒が切れてしまった。

「クンツァーツさん……。イタ……。」

ドラニコフは、ヴィーナスの片足を踏んだ。

「ばーっとしてないで。その女からあの結晶を奪い返すんだ。」

「ニコちゃん。うん、判ったわ。」

ヴィーナスたちの戦いは、今始まる。

第一七章復活ムーン・スティック part 2（後書き）

ヴィーナスちゃんは、ヒロイン役を演じることになったのは、いいけど、可愛い魔女・ミメットが割り込んで大騒ぎ。ドラえもん達は、ミメットとどう戦うのでしょうか。

第一八章復活ムーン・スティック part 3 (前書き)

堪忍袋の緒が切れたドラえもん達は、ミメットと戦闘になります。
クンツァーツの心を取り戻せのでしょうか。

第一八章復活ムーン・スティック part 3

撮影現場

「ダイモーン、ミメット！あんた達いい加減にしなさいよ！クンツァーツさんのピュアな心を横取りするなんて卑怯にもほどがあるわよ。このセーラーヴィーナスが金星に代わって天罰します！」

「あらあら、怖い顔。アンタよくそんな顔でヒロインを演じられたわね。」

ミメットはセーラーヴィーナスを嘲笑う。

「黙れ、小悪魔！ドラニコフ達役者さんやスタッフの人が頑張って作った撮影を台無しにした上に、クンツァーツさんの心を奪い取って、やるんなら先に僕の方をやればよかったんだ！」

ミメットやダイモーンをスネ夫が怒鳴りつけた。

「スネ夫くん。」

「アルテミス言うとおりだった。僕がもっと警戒していればあの人は倒れずに済んだんだ。」

「にやあにやあ。（僕も悪かったよ。）」

チルチルはスネ夫を慰める。

「ありがとう。チルチル。」

「ふふん、面白いことを言う坊やね。いいでしょう。坊やの心も奪ってあげる。う・タヒメー。」

「ラジャー！」

う・タヒメーは、殺人ソングを放つ。

「何の、耳バンドX！」

ヴィーナスたちは、嫌さず耳バンドXを装着したが、う・タヒメーのソングは強烈で反対に耳バンドXが壊れてしまった。さすがにヴィーナスたちは崩れてしまった。

「きやはは、いい気味。私も本気を出そうかしら。」

ミメットは杖を取り出した。

「チャーム・バスター！」

大量に黒い星がヴィーナスたちを襲った。ヴィーナスたちは飛ばされてしまう。中でもドラニコフは、飛ばされたショックでマフラに閉まっていた杯の足みたいな金属と先が三日月の杖が出てきてしまった。

ヴィーナスとスネ夫が顔を上げる。

「あら。」

「あれは。」

「「聖杯の欠片。」」

「こんな所に聖杯の足の部分があつたなんて、探す手間が省けたわ。」

ミメットはすぐに聖杯の回収に向かった。ドラニコフは、足の部分を見る。ちょうど丸かったから、口元が狼みたいになり、尾が出てきた。変身したのだ。

「どうしたの、ニコちゃん？ニコちゃん、なんか別人みたい。」

「ドラニコフは、満月みたいに丸いものを見ると狼になる体質よ。」

「

「なるほど。」

ミメットは、驚いてしまう。ドラニコフは、懷に杯の足を隠し、杖を片手にミメットに立ちはだかる。

「なに、こいつ！う・タヒメー、そいつらをお願い。」

「ラジャー！」

う・タヒメーは、再びソングを放とうとするが、いつの間にかノラミヤーコが後に回り込み、長い尾で猿轡をする。続いてチルチルは胴体で目隠しをする。

ミメットはドラニコフと対峙している。

「アンタねー！私を怒らせるとどうなるか判ってんでしょね。」

「がうー！」

「チャーム・・・」

呪文を唱えようとしたところでドラニコフは三日月の杖でミメッ

トの杖を折る。

「私の杖が……。よくも！」

残った長さの杖でドラニコフを叩こうとしたがコサックダンスでかわされる。

「ヴィーナスちゃん、攻撃を！」

「クレッセント・ビーム！」

ビーナスのビームが、う・タヒメーを貫く。

「ぐわー！」

う・タヒメーはマイクに戻ると、卵が割れて、中から鵜の煙が出て消える。

スネ夫は心を回収してクンツァーツに戻る。

ミメットは、ドラニコフを杖で殴ろうとしたがかわされてばかりだ。とうとうドラニコフは、唐辛子を1つ食べて強烈な炎をミメットに向けて放った。

「キヤー！」

ミメットは、炎に飲み込まれてしまった。

「やった！ミメットを倒したぞ。チルチル、ノラミャーコ、えらいぞ。」

「えへへ。」

「にゃん。」

ノラミャーコとチルチルは照れた。ドラニコフも元に戻った。

翌日映画館

「ウルフマンと金星の王女」の初上映が始まった。結果は大成功だった。

喫茶店

「いやー、君達のおかげで助かったよ。」

「それは、よかった。」

「そういえば、あの怪物と娘はどうなったんだ。」

「さあ。」

「がうう。」

ヴィーナスたちは、冷や汗だ。

「なんにせよ。どうもありがとう。」

「いえ。」

ヴィーナスは、あの人が気になりだすようになった。

「よかった、よかった。聖杯とかいう奴の破片は見つかったし、ドラえもんに会えたし。」

「そうだね。」

「がうがう。（一件落着。）」

聖杯の欠片はこれで3つも手に入れられたのだった。

「ところで、ドラニコフ。キミの持つてるそれはなんだ。」

「がう、ががががうがう、がう。（これ、ヒロイン役探す途中で、拾ったんだ。）」

「どれ。ややこれは、ムーン・スティックだ。もしや、ダークキングダムが倒れた時、スティックは時をこえて、この町に落ちたんだ。」

「なんだか、知らないけど。持ち主に返してあげようよ。」

「そうだね。」

ムーン・スティックも見つかリアルテミスは嬉しそうだ。

21世紀中期 イタリア 飲食店 うさぎ達の部屋

「ない、ないない。」

うさぎは探し物をしている。ベッドの下からルナが出てくる。

「此処には、ブローチは落ちてないわ。」

「変ね。どうしてうさぎさんのブローチが無くなっているのかしら。」

「判らない。」

「ひょっとしたら、デス・バスターズに嗅ぎつけられたんじゃない。・。」

「もし、そうだったら、大変なことになってるわ。」
うさぎは、ブローチを無くしてしまい、絶望になっている。

第一八章復活ムーン・スティック part 3（後書き）

今回はドラミちゃんとキッドが感動の再会を果たします。
その場につさぎちゃんがいなくてラッキーでしょう。

第十九章恋するドラミちゃん part 1（前書き）

ドラミちゃんとキッドの感動の再会です。

そういえば、ウィッチーズ5は、魔女が5人でしたっけ。実際に6人だったらウィッチーズ6ですよ。

第十九章恋するドラミちゃん part 1

22世紀前半 西部 荒野

ドラミたちは、開拓惑星ウエスタンにやってきた。

「ここが、22世紀前半のアメリカね。なんかメキシコみたいな風景ね。」

「感心はいいですから、早く聖杯の欠片をみつけねば。」

そのときサターンの右肩のチツチが羽ばたき始めた。案内するかのように行き先を導いた。一行は小鳥の後を追う。向かった先には町が見えていた。

町 保安官の家

「大変でっせ、あんさん。バーに強盗が現れましたで！」

馬方ロボット・エドは、保安官室に駆け込んできた。中では、保安官代理のドラ・ザ・キッドが出来杉とトランプをしている。実は、彼は家の前でうろついてキッドに保護されたのだ。出来杉は、ドラえもんを探しに来たと嘘をついた。正直に言えばキッドも巻き添えが食うと判断したからだ。

「何だと！出来杉！オメー、ここでいい子にしてろ。」

「うん、気をつけて。」

エドにまたがったキッドは、バーに向かった。出来杉は、窓からキッド達を見送った。

「フアイト！」

「一発！」

キッドたちは大空へ飛び立つ。・・高いトコ、コワイ！・・というお約束の台詞をキッドは残して行った。

バー

ドラミ一行は、バーの前に着いた。チツチはサターンの右肩の上

に戻ってきた。

「このバーに何か用なの？」

その時、一行のお腹が鳴った。彼女達は空腹なのだ。

「今、思ったら……。」

「私達……。」

「お昼……。」

「……まだだった（でした）。」「……」

「チチ。」

ドラミを戦闘に彼女達はバーに入る。バーでは、たちの悪いおじさんたちが騒いでいる。強盗らしい。

「なに、このおじさん達……。」

「おお、姉ちゃんらこんなところになんの用だ。昼飯か？」

「だとしたら、どうです。」

「なんかこの娘っ子、神秘的つつつか、暗そうじゃん。」

「暗くてすいませんでした。」

サターンは、鎌を構える。男達は銃で迎撃する。

「危ない！」

ドラミは、叫んだ。しかしサターンは鎌をバトンのように回して弾をはじき返した。サターンは鎌で頭らしい男の頭を殴った。幸いみねうちだったので、男の頭にタンコブが出来た。

「み・みねうちだったか。」

手下の男共は苦笑いした。サターンは、キッと男共を睨みつけた。

「おい。お嬢ちゃん。俺達が悪かった。だ、だから、命だけは……。」

。。

サターンは構わず鎌を振る。

「ギャー！」

数分後

他の男達は、目を回して失神した。

「大丈夫です。全員、みねうちです。」

「確かに・・・。」

ドラミとチッチは目を丸くした。ただ、プルートだけは、ムツとした。

「セーラーサターン。幸いみねうちだったからよかったものの、刃に当たっていたら、彼らを殺していましたよ。」

「まあまあ、セーラープルート。」

サターンを叱りつけるプルートをドラミは取り成す。プルートは、ドラミを睨む。

「貴方は、黙りなさい。こうなったのも貴方がサターンの復活の手助けをしたからです。」

その時外で、

「トーチャーク！」

と元気な声がプルートの説教を遮った。声の主は、バーの扉を威勢良く開けた。

「こら、オメーら悪事もほどほどに・・・ってあれ？全員伸びちまつてる。」

「何者ですか、貴方は！？」

プルートはガーネット・ロッドを構える。キッドも負けずに空気砲を構える。

「そういう姐ちゃんなんなんだ。こいつらの仲間か？あん！？」

「キッド？」

ドラミは呟く。呟き声に反応したキッドは空気砲を黒いカウボーイハットにしまう。

「ドラミ・・・なのか？」

「キッド！キッドー！」

ドラミはキッドに抱きつく。キッドはそんなドラミに戸惑う。

「おい、ドラミ？オメーなんで此処に？」

「あの一。」

「あれ、もう一人いるのか。」

「はい。」

サターンもバーにいたのだ。

昼食

応援が来て、強盗達は全員捕まったのだ。

ドラミは、デス・バスターズのことや、聖杯のことをキッドに話した。事情を知り、キッドも搜索に協力してくれることになった。

「それで、その聖杯の欠片はどう探すんだ？」

「簡単よ。この羅針盤を使うの。」

サターンは光羅針盤をキッドに見せた。羅針盤はキッドの帽子に反応した。

「貴方、もしかして。」

「ああこれか？」

キッドは帽子の中からドラミとおそろいの金の羽の石を出した。

やはり聖杯の欠片の1つだ。

「やつぱり。キッド、これどうしたの。」

「これか、此処にくる途中で拾ったんだ。拾ったあと、変な白衣着た女に襲われたんだがな。」

「白衣の女の人？」

「赤い髪を三つ編付きのサイドシニヨンにした女だよ。石をよこせて言われても、渡せねえもんだから。空気砲で脅かして、バーに向かったんだ。」

「それって、もしかして……。」

「ウィッチーズ5の1人じゃないの」

ドラミとサターンのひそひそにエドが割り込んだ。

「なんでつか？ウィッチーズ5と言うんは。」

「デス・バスターズに配属する5人の魔女です。かなり恐ろしい魔女です。ご注意を。」

「お、おう。プルートだっけ？ご注意ありがとうな。」

「いえ。」

保安官の家

がちやり、キー、ドラが開く。

「キッド、おかえり。」

出来杉が出迎えると、ドラミ・エド・キッド・そして小鳥を肩に乗せた黒いセミシヨートの少女とダークグリーンの髪の乙女が立っていた。

「ただいま。」

キッドの部屋

ドラミは、サターンとプルートを紹介してこれまでのことを話した。キッドは今日の出来事を話した。

「それじゃあ、その魔女さんは人間のピュアな心を狙っているのか。」

「それだけでは、ありません。世界が沈黙に覆われれば世界は終わりです。」

「うええ、そりゃ恐いぜ。」

「だから、私達で世界を沈黙から救うのです。」

「なんだか、よく知らないけど、僕も戦うよ。」

「ありがとう、出来杉さん。」

ドラミは出来杉に微笑みをかける。キッドは横から膨れる。そんな中出来杉のポケットの宝石が光っている。しかし、当の出来杉を含めてだれも気付かない。

夜

ドラミは腕組をしてむすつとした。

「なんで、キッドと一緒に寝なきゃいけないのよ？それも・・・」

ドラミは、ベッドの上に腰掛けていた。

「なんで、一緒のベッドなのよー！」

ドラミの喚き声は部屋いっぱいに響き渡る。キッドを耳を押える。「うっせーな。しゃあねえだろう。あの姐ちゃんがお前の傍にい

てやれって言ったから。第一さあ、出来杉もいるだろう。」

出来杉は、ベッドの上で寝息をたてている。

「確かに。出来杉さんいるわね。」

「なあ、ドラミ。あのサターンって娘、プルートの姐ちゃんに睨まれてないか。」

「ええ、いわれてみれば、セーラーサターン、セーラープルートになんか警戒されている。サターンはただ悪い人に利用させてしまっただけなのに、どうしてプルートに警戒されているの？」

「あの娘、どうみても穏やかな性質を持ってる。あの鎌は、ちょっと恐いけど、とっても強かったぜ。」

「私もそう思う。あの人、悪人を浄化させたりのできるの。人を守る力だつてあるのよ。サターンは優しい人よ。」

「だよな。つたく、あの姐ちゃんなんでそんなことが判らないんだ。今日だつて強盗団を殺さず、捕まえてくれたじゃんか。」

キッドはベッドに寝転がる。

「プルートは、今サターンを見張ってるけど、あの人はそんなこととはしないわよね。」

ドラミは天井に背を向けてベッドに倒れこみ顔を上げた。

「しねえしねえ。会って間もねえ女の子を殺せつこねえよ。大体、あの娘はドラミに助けを求めてたんだろう。」

キッドはドラミの片手を取る。

「そうよ。最初は、一緒に戦つてつて言われた時は、吃驚したけど、真実を知った時は、私が頑張らなきゃと思つてたけど、お兄ちゃんやのび太さんたちの一緒だった時は、一人じゃないと思った。そして、今はキッドもいる。聖杯を欠片も手に入つたし。」

欠片は、ドラミのポケットに入っている。ドラミはキッドに微笑みを見せる。

「なー、ドラミ。」

「ん？」

キッドはドラミの手を握る。

「オメーの事は絶対に俺が守る。オメーがどこに行こうと、俺はオメーと一緒にだ。」

一瞬ドラミは戸惑ったが、キッドに「……ありがとう。……」と言い微笑んだ。キッドはドラミと唇を重ねる。

そのまま、ドラミは瞳を閉じ、唇を離してもらい一緒にシーツに包まってもらった。

10分後

二人は眠りに就いた。

出来杉は、ロシアのスネ夫に糸なし糸電話で連絡した。実は狸寝入りだった。

「骨川くん、骨川くん。」

出来杉くんか、参ったよ。聖杯の欠片を探している人が他にもいたよ。はるかさんたち以外のセーラー戦士やデス・バスターズがだよ。ドラニコフの奴、撮影の手伝いのお礼とかで欠片をヴィーナスさんに渡しちゃったんだよ。

「キッドは、ドラミちゃんに欠片をあげたんだよ。」

こっちもか。

「どうする。このままだと大変なことになっちゃうよ。」

しょうがない。隙を見て奪う以外方法はないよ。

「そうしよう。じゃあおやすみ。」

うん、お休み。

連絡を済ませ、出来杉は床に就いた。

第十九章恋するドラミちゃん part 1（後書き）

キッドの高所恐怖症も久しぶりです。

赤毛の女ってまさかプチロルだと思います。まさかシプリンも一緒だと思っています。

果たして、赤毛の女の子は誰でしょうか。続きはまた今度。

第二〇章恋するドラミちゃん part 2 (前書き)

赤毛の女は一体何者でしょう。

もし、あのプチロルだったら、身も蓋もありません。
ドラミちゃん達のアメリカでの戦闘が幕を開けます。

第二〇章恋するドラミちゃん part 2

翌日 保安官の家

保安官の孫娘・アニーが・・・ご飯ですよー！・・・と呼びかける。キッドはゲツと声を出す。

「どうしたの、キッド？」

ドラミは尋ねると、キッドはひそひそと、・・・あの人の作る料理は不味いんだ。・・・と言う。ドラミは首を傾げる。

食卓場

食卓には料理が並んでいる。それも、どれもおいしそうなものばかりだ。

「なんだ。なんの問題もないじゃない。」

「ここからが、恐ろしいんだよ。全員、胃薬飲んどけ。」

「どうして？美味しそうなのに。」

サターンは料理の一つを試食する。途端にサターンは、ウツと声を残し、気を失う。

「ああああ。いわんこつちゃない。」

「でも、残しちや悪いから。食べちゃいましょう。」

「バカチンがー！んなことできるか。」

「せにはらは、耐えられないよ。」

出来杉も賛成してしまう。結局全員で食べる羽目になってしまった。

朝食後

ドラミは、アニーの後片付けのお手伝いをした。アニーは、料理が苦手でもキッド達のために毎度、作っているが、何回やつても同じだった。

「ねえ、ドラミちゃん。どうやったら、ドラミちゃんみたいに美

美味しい料理作れるの？」

「・・・あの。アニーさん、話が見えないんですが。」

「だって、ドラミちゃん、夕べは美味しい料理が作れたじゃない。」

「

「そうね。材料の分量や火加減・水加減を間違えなければいいし、それになにより真心があれば美味しい料理ができます。」

「そう思ってたやってみたけど、なかなか作れないのよね。」

「アニーさん・・・。」

「さて、洗濯物を干しましょう。」

アニーは、食卓場を後にする。その食卓場の窓から、白衣の一人の愛らしい少女が覗いている。少女は裏口に向かう

裏口

アニーは大量の洗濯物を干している。

「あーあ、今日は珍しくキッドたちが食べてくれたものの、ドラミちゃんみたいに上手に作れない。おじいちゃんが倒れた時だっておじやを作ってたあげたら、ますます具合を悪くしちゃった。こんなんじゃないいお嫁さんにはなれない。」

アニーは一枚のシーツに頭を埋める。

その間に少女は、一枚の紫のハンカチに卵を取り付かせる。その間少女は、裏口の戸に隠れる。

そのハンカチだけとなったとき、アニーはそれに触れる。するとハンカチは、恐いお面を被ったマントの女性に変わる。

「ハーチーフ！」

アニーは吃驚して表に一目散で逃げた。女性は後を追う。

玄関前

「あゝ。いい天気。」

ドラミは、外に出るなり背伸びをした。すると、アニーが駆け込んだ。

「ドラミちゃん、助けて！」

「どうしたんですか！？」「ふまさか、ダイモーン！？」
そこに怪物が迫ってきた。

「やつぱり。貴方なのね！？ダイモーン！電気大砲！」

ドラミはポケットから空気砲に良く似た道具を取り出し、左手にはめ、ダイモーンに向かって放った。砲から電気の塊が飛び出し、ダイモーンに命中する。ハーチーフの覆っていた、マントと仮面は消滅する。マントと仮面の奥には、青い衣装を纏った踊り子風の可愛らしい女の子がいた。これが、ハーチーフの本当の姿だ。ハーチーフは上半身だけを起こすとドラミを睨みつけた。

「まだ、懲りないのね。それじゃあ……。きゃあ。」

右手で他の道具を出そうとしたところを、杖を持った少女に首の紐を掴みあげられた。

「あらあら、だめよ、ハーチーフ。こんな仔犬ちゃんなんかに邪魔されちゃ。」

ドラミが振り向くと紅の三つ編付きのサイドシニヨンの少女が杖を持ってドラミを捕まえていた。

「誰が、仔犬よ！？なんなの、貴方まさかウィチーズ5の……！」

「プチロルよ。アンタには、黄狸ちゃんを誘き寄せる罠になってもらいましょう。」

「卑怯よ。ドラミちゃんを返して！」

アニーは、ドラミを取り返そうとするが、ハーチーフの4本の帯に捕まってしまった。

「貴方は、私の相手をしていてね。」

ハーチーフは、右の布をチラつとずらすと星の痣が見える。痣からの黒い光がアニーに当たり、ピュアな心を奪った。

「アニーさん！」

「どうした、ドラミ！？」

キッドがドアを開けて飛び出した。もちろん、出来杉やサターン、

チツチも一緒だ。

「キッド！アニーさんが！」

いつの間にかアニーは開放され、倒れている。ピュアな心を失ったからだ。キッドは、アニーに駆け寄り呼びかけるが、反応はない。「くそ、オイそこの女！手に何持つてるかあ、知らねえが、お嬢さんのものを返しやがれ！」

「くくく、威勢のいい狸ちゃん。」

「キッドー！」

「やい、テメー！ドラミを放せ！つて、テメーはあの時の女。」
キッドは、プチロルに見覚えがある。

「覚えていたようね。その子は、ちよつとの間こつちで預からせてもらうわ。返して欲しかったら、聖杯の欠片を持って、単独でバーにいらつしやい。もし、できなかつたら、この子を壊すわ。」

「なんてひどいことを。」

「ひどいもくどいも私は本気よ。じゃあね。ハーチーフ、その子供達をお願いね。」

プチロルはドラミを連れ去り、飛び去った。

「キッドー！」

「ドラミー！畜生、あのアマ！」

キッドは、聖杯の欠片がドアの前に落ちてることに気付き素早く拾い、四次元ハットに収めて、バーへ駆け出した。エドに乗らず。

「あつ、キッドー！」

サターンは呼びかけるがキッドはもういない。出来杉はがっかりした。

「僕としたことがあそこに欠片があつたなんて知らなかった。」
その時、ハーチーフがサターン達に帯を投げてきた。サターンは出来杉を抱えて避けた。

「危ない危ない。出来杉くん、ダイモーンは、私が食い止めるから貴方は、プルートを連れてきて。チツチは、エドを。」

「はい、判りました。」

出来杉はプルートを、チッチはエドを呼びにいった。

馬小屋

二人とも幸いここにいたから、二人で知らずことができた。

「状況は判りました。出来杉さんとやら貴方は此処に隠れてください。」

「はい。」

プルート達は、馬小屋を後にした。

「あの人は、ああ言ったけど、今は聖杯の欠片を探す以外のことはないんだ。」

出来杉は、こっそりと馬小屋を出ようとした。戸を開けると、ロボ口になったスネ夫の顔があった。

「わー、骨川くん！？どうしたの、その顔！？」

「ごめん出来杉くん。連絡取つてるところをヴィーナスさんたちに見られたんだ。」

そういつて、スネ夫は倒れた。彼の後には、恐い顔の人影一行が立っていた。ただし、狼に良く似たネコ型ロボットだけはしじみみしていた。

玄関前

ハーチーフは自分の分身でサターンを苦戦させた。サターンは、グレイプで分身を消しまわるが全く限がない。

「はあはあ。ピュアな心を返しなさい。」

「だめよ。これ返したら、プチロル様に搾られるわ。」

「冗談じゃないわ。ファラオ90のパワー拡大のためでもピュアな心を取るなんていけないことよ。」

「んもつ、生意気ね。だったら、これでどう。」

ハーチーフは、帯を振る。そこへ、

「デッド・スクリーム。」

淡紅色の球体が帯を消す。

「セーラープルート！」

サターンは微笑む。しかし。

「勘違いなさらないでください。私はアニーさんの心を取り戻しに来ただけです。」

セーラープルートはまだほたるを警戒したままだった。ハーチーフは、サターン達を睨み付けた。

「ちょっと。余所見してないでこっちの相手してよ。」

その時、ハーチーフの前に巨大な炎が現れた。ハーチーフは、炎に飲み込まれて、卵とハンカチに分離した。炎を出したのはドラニコフだった。

「ダイモーンが。」

「大丈夫。サターン！」

ドラえもん一行が駆けてきた。

「ドラちゃん、ヴィーナス、アルテミス、ノラミヤコちゃん。」

「よかった。無事だったのね。」

「はい、ただ……。」

「ただ……？」

ドラニコフは、ピュアな心をアニーに戻すと、アニーは幸せそうな顔で眠っている。

「ドラミが、さらわれた？」

ドラえもんは、蒼白だ。

「ごめんなさい。私が付いていながら。」

「サターンさんだけのせいじゃないよ。僕だって、ドジだよ。」

「え？」

玄関から頬がはれた出来杉とボロボロのスネ夫が出てきた。

「出来杉くん？どうしたの？その顔？」

「いや、実は……？」

スネ夫は、こっそり出来杉に連絡しているところをドラニコフに見つかりヴィーナス達にばれてしまい、最終的に問い詰められ、本当の事を話してしまい、虹水晶を取り返された。もちろん、出来杉

も同じく。

「そうだったのですか。私も本当は貴方方を巻き込みたくないのですが、そこまでプリンセスを思ってたらっしやるのなら、怒る必要はありません。」

「怒るの!」

「がう。(落ち着いて)」

「とにかく、早くドラミちゃんを助けなきゃ。」

「せや、急ぎまほ。」

全員は、頷く。ドラミとキッドの運命はいかに。

第二〇章恋するドラミちゃん part 2（後書き）

アニーさんは、なんとか救われましたが、ドラミちゃんがプチロルに捕らえられてしまいました。やっぱりあの女性はプチロルでした。ということとは、シプリンも一緒ということです。

またあのコンビネーションで大苦戦です。キッドは無事にドラミちゃんを救えるのでしょうか。

第二章恋するドラミちゃん part 3 (前書き)

プチロルに捕らえられたドラミちゃんは、いまや囚われのお姫様。
白馬の王子様・キッドは魔女のプチロルからドラミちゃんを救える
でしょうか。

第二章恋するドラミちゃん part 3

バー

プチロルは、自分と同じ髪の色を三つ編へアバンドにした女性に捕獲したドラミや聖杯の欠片のありかを話した。

「それで、その仔犬を餌に欠片の持ち主を誘い出そうとしているのね。」

「はい、カオリナイト様。」

「うぐううぐうぐうぐ。（私は猫型ロボット。）」

ドラミはというと、手足や体を拘束され、長いリボンで口元を塞がれ猿轡をされていた。おまけにテーブルの1つの上でねかされている。

「ご丁寧に身動きがとれないようにしちゃって。」

「この子のはあの狸にとって大事な存在です。ですから、こうすれば狸も大人しく聖杯の欠片を渡すでしょう。」

「なるほど。」

「ところで、何故今回は、私達姉妹別々に行動しなきゃならないのでしょうか。」

「支配する時代は6カ所だから、当然貴方達は魔女6人だから、別々は当然でしょう。姉がいなくても十分強いパワーができるじゃない。」

「はい、かしこまりました。」

プチロルと姉は、双子の魔女でたいいは行動を共にしているが、今回に限って別々に行動することになった。

「むぐむぐ。」

ドラミはまだ抵抗していた。しかし縄は解けない。

「ふふふ、安心して仔犬ちゃん。もうすぐ、キミの王子様が迎えにくるわ。」

左手でドラミの右頬を撫でる。

その時、ドアが乱暴に開いた。開けたのは、キッドだった。

「約束通り1人で来たぜ。」

「あらら、ようやく王子様のご到着ね。随分早かったのね。まさか護衛さんを数名つれてくるとは思わなかったわ。」

キッドの後には相棒のエド・3人のセーラー戦士と3体のネコ型ロボット・2人の小学生、後猫2匹（1匹は喋る）と小鳥1羽。

「すんまへん、あんさん。ワテらも来てしまいまひた。」

「1人でドラミちゃんを助けるよりみんなで助けた方が早いよ。」

出来杉達に説得されキッドも考え直した。その時、カオリナイトはサターンの素顔を見たほたと瓜二つだ。

「あら、誰かと思えば土萌教授の娘さんのほたるさん。貴方もセーラー戦士だったの。」

「ええ、でも今は、沈黙と破滅と誕生の戦士・セーラーサターン。カオリさん。貴方もデス・バスターズの仲間だったのね!？」

「ええ、私はカオリナイト。デス・バスターズの幹部。」

「今度は、2人係で私達に挑もうというのね。」

「あらあら、私はただ魔女達の様子を見に來ただけ。プチロル、私はこれで失礼するから、聖杯の欠片を回収しなさい。」

「了解。」

それだけいうとカオリナイトは、姿を消した。プチロルはドラミを片手に抱えて奥に入ろうとした。

「ちょっと待て!ドラミをどうする気だ。」

「決まってるじゃない。楽しいところへ連れて行くのよ。」

そういうとドアを開けて、奥に入った。

「オイこら!待ちやがれ!」

「あつキッド!」

ドラえもん達は、プチロルを追うキッドを追い奥に入った。

異次元空間

ドラえもん達は、空間にいた。風景は薄気味悪い悪魔の森だ。森

の向こうにドラキュラ城のような城が見える。

「なんだ、此处？」

「プチロルの作った異次元です。どんなダイモーンが出てくるか判りませんから、ご注意を。」

「後、プチロルには、お姉さんがいるから、例えドラミちゃんの所に着いたとしても、あのコンビネーションにあつたらひとまりもないわ。」

「コンビネーションか？確かに恐いな。」

「ヘン。だからといってこんなことで諦めたら、男がすたるぜ。」

俺は、ゼツテードラミをあのアマから救い出して見せる。」

そついうとキッドは城に向かって歩みだした。

「僕だつて、ドラミが人質にされてじつとなんかしてらんない。」

ドラえもんも歩き始めた。もちろんヴィーナス達も。森には、なんの以上もなく一行は無事に城の近くに辿り着いた。城に行くにはこの高き坂を登って行かなくてはならないのだ。途中で高所恐怖症のキッドが目回して、倒れて滑り台のように滑り出して、地面に頭をぶつけてしまうほどの高さだ。

「どうするの？登ろうかしら。それともどこでもドアで行こうかしら。」

「そのほうがいいわ。ドラちゃんお願い。」

「うん。」

ドラえもんは、どこでもドアを出して城の中に入ろうとした。しかし。

「えー！？何これ！？さっきと同じ場所じゃないの！？」

「どうやらこの空間では、ドラえもんさんたちの道具は使えないようですね。」

「そんなー。」

がっかりするヴィーナスたちのよそにキッドの体はカタカタ震えていた。遂に切れてしまった。

「もーこうなりや自棄だ！登つてやる！おりや~~~~~！」

キッドは、全速力で坂を登り始めた。

「ドラミのためだ~~~~~！」

続いてドラえもんも猛スピードで登り始めた。

「ドラちゃんとキーちゃんすごい。」

「キーちゃん？」

「キッドさんのことですね。」

「じゃあ、私も今度からキーちゃんって呼ぼう。」

坂の上

ドラえもんもキッドはタイミングぴつたりに登っている。

「なんで、お前まで登ってくんだよ!?」

「それは、こっちの台詞だ!」

「ドラミを助けるのは俺だ! 万が一、魔法でネズミを出されたらどうすんだよ!」

「よく言うよ! 高いところ駄目なのにこの坂に登って!」

言い争いながら二人は等々城に辿り着いたが門に顔をぶつけて失神してしまう。後から来たサターンたちに起こされる。ブルートにくすくすと笑われる。

「御2人共、ドラミさんのことが気になってたんですね。面白い方々。」

ドラえもんもキッドが黙ってしまふ。

その時、門がギーッと開いた。

「門が・・・。」

「開いた。」

「もしかしたら、ドラミちゃんに会いたいならどうぞ。 っと言ってるんじゃないのかな。」

「もしそうなら、このまま乗り込んでやる。」

「待ってる、ドラミ! 絶対に助けてやるからな。」

サターン一行は、プチロルの城に入るのだった。その後、門が閉まる。しかし、ドラニコフはまだ外にいた。何かを探すように城の

裏
に
行
っ
た
。

第二章恋するドラミちゃん part3（後書き）

ドラミちゃんを救うために、城に入り込んだドラえもん達。道具が
使えなくても、プチロルを倒せるでしょうか。

第二章恋するドラミちゃん part 4 (前書き)

いよいよ、魔女・プチロルとの大戦です。お姉さんのシプリンが力オリナイトの命令を無視して、こっそり現れるのかもしれませんが、もしそうになったら、一溜りもないでしょう。

キッド達は、無事にドラミちゃんを救えるでしょうか。

第二章恋するドラミちゃん part 4

城の大広間

キッド達は、城に入って何か罠がないか、警戒した。

「別になんの仕掛けもないようだ。」

なんか随分と簡単な試練だった。それでも、キッド達は奥に進んだ。すると、途中で道が二つに分かれてしまった。

「うーん、どっちに行けばいいんだ。困ったな、この次元の中じや尋ね人ステッキも使えないし。」

「だったら、私に任せて。」

サターンはサイレンス・グレイブを地面に立てて離れた。グレイブは、右側に倒れた。

「なるほど、こつちか。」

一行は、右に進む。今度は、別れ穴が出た。しかも2つとも大人が潜り抜けられるほどの大きさだ。これでは、道に迷ってしまう。そこでサイレンス・グレイブの出番。ドラえもん達は、サターンの武器サイレンス・グレイブを頼りに迷い道の試練を乗り越えた。

大きな部屋の門の前

ドラえもん達は、ついに此処にたどり着いた。

「此処にドラミがいるんだな。」

「ええ、その通りです。」

「よし・・・。」

「お待ちください。私は、別にドラミさんを許したわけではありません。彼女には、償いがあるために我々に協力してもらいます。」

「プルトの姐ちゃんは、素直じゃねえな。」

キッドは、呆れつつ扉を開ける。一行はその部屋に入る。

部屋の中

中は、サーカスのような風景だった。部屋の置くに黒い自由の女神の像があった。その上にプチロルが座っている。

「いらっしやい。白馬の王子様とその護衛さんたち、よくここまでたどり着いたわね。」

「ヤイ、プチロル！ドラミはどこにやった！」

「お姫様なら此処にいないわ。知りたかったら、殺さずに私に勝ちなさい。」

「ヘン、望むところだ！」

キッドは空気砲を構えて、プチロルを撃とうとしたが、やはり反応がない。

「おっと、言い忘れたけど、射的ならこれを使つて。」

プチロルは、1つのレーザーガンを放り投げた。それをキッドは受け止めた。

「なるほど、レーザー戦でこの俺に挑もつてのか。」

「大当たり。光線には光線よ。もし、私に負けたら、アンタの持つてる聖杯の欠片を全部渡してもらわよ。」

「上等だ。掛かって来い！」

「キーちゃん私も戦うわ。」

「僕だつて。」

サターンとドラえもんの参戦をキッドは断った。

「気持ち、ありがてえけど、これは俺とプチロルの1対1の対戦なんだ。相手が魔女だろうと何だろうと、射的なら負けないぜ。」

キッドはプチロルに向き直る。

「そこなくちゃ。」

サターンとドラえもんは納得する。

「わかった。キッド、此処はきみに任せるつと、言いたいところだけ。」

ドラえもんはキッドの胸倉を掴んで睨みつけた。

「もし、ドジったら、石頭食らわせるよ！」

「はい、判りました……。」

キッドは胸倉を離してもらい、深呼吸した。

「OK！それじゃ、勝負と行きますか。」

プチロルは、いきなり光線を放った。キッド達はそれを避けた。

「キタネー！殺すか！」

キッドは、負けずに光線を放った、プチロルはすばしっこい速さで交わした。キッドはプチロルの後に回り、レーザーガンを構えた。

「貰った！」

レーザーガンを発射する。光線はプチロルを爆破させたようだった。煙が出る。

「やりー！」

ところが、プチロルがいない。

「消えたか。どこに逃げた！」

「逃げてないわよ。いやね。」

プチロルはキッドの真上で浮いていた。杖でキッドを殴り飛ばす。

「ぐわっ！」

キッドはドアの数m離れた場所に飛ばされた。

「キーちゃん！」

「くそ！キタネエぞ！単独で飛べるなんて聞いてないぞ。」

「私は、魔女だもの。ほうきで空を飛ぶとは限らないわよ。それに、キミは高所恐怖症で空中戦が苦手でしょう。私から逃げる時に、高いところワイイーって言ってたの私、知ってる！」

キッドをせせら笑うプチロルだった。

「このアマ、聞いてやがったのかよ！」

「遊びは終わりよ。」

キッドの前に降り立ち、プチロルは杖をキッドに向けた。

「さよなら、狸ちゃん。」

「待ちなさい！」

扉を開けたのはヴィーナス同様金髪碧眼のセーラー服の少女だった。

「うさぎちゃん！？」

「うさぎちゃんっていうんでつか？かわええな。」

「お前は！？」

「たーーーーー！やーーーー！」

うさぎは、プチロルに体当たりを食らわせたその衝動でプチロルの杖が跳び、自由の女神の額に刺さった。女神の像は、砂になって崩れ落ちた。

プチロルは、キッドの数m近くに飛ばされ、像の崩壊を見た。

「なんてことを、あれを壊されては、道具を使えなくなってしまう。」

「原因は、あの像だったのか。」

なにはともあれ、これでドラえもん達は、戦えるのだ。

「ドラえもん、大丈夫。」

うさぎの後から、入ったのは、のび太、しずか、ルナ、そして、タキシード仮面。チッチは飼い主と再会して大喜び。

「のび太くん達、どうして此处に？」

「此处にくる時、不思議な光に導かれて、この世界に来たんだ。」

「光の原因は、ムーン・スティックの反応だったわ。あれが、私達を導いてくれたのよ。」

のび太達の会話にスネ夫と出来杉の顔が青ざめた。のび太を2人を捕まえた。

「出来杉、スネ夫！君達がうさぎさんから虹水晶とブローチをくすねたのか！最低な奴らだな！」

のび太は、2人の頬を片方ずつ殴った。

「だって、野比くん。こうでもしないとこの人の為にならないんだよ。」

「そうだよ。あのお姐さんを巻き込みたくないんだ。」

「煩い！あの人が戦えなくなったらどうするんだよ！後でうさぎさんに謝れ！」

「はい。」

「のび太さん、何もそこまで怒らなくてもいいじゃない。」

「悪いけど、しずかちゃんは無言で。」

「判った。ごめんなさい。」

のび太に謝るしずかだった。

うさぎは、そんなのび太を笑顔で見守り、プチロルに向かい合った。

「プチロル、貴方のお姉さんは、今はいないからドラミちゃんを人質に取ったり、秘密道具を使えなくしたことはわかってるのよ。」

「ぐ！」

「なんだって！」

「ドラミちゃんが塔に隠されてたことだって判ってるのよ。」

「なぜ、それを。」

「とらわれのお姫様が塔に幽閉されてることは、良くあるパターンよ。」

「ちっ！」

プチロルは舌打ちして杖を取りに行った。

「うさぎだったな。ドラミはどうしてる？」

「安心して。もう救い出して、部屋の外で待ってるわよ。」

部屋に入ってきたのは、ドラニコフと問題のドラミだった。

「ドラミ、ドラニコフ。」

「キッド。キッドー！」

ドラミはキッドに抱きついた。キッドはドラミを抱きしめる。

「ドラミ、オメー無事だったのか。」

「ドラニコフさんが、うさぎさんたちを塔まで案内してくれて、助けてくれたの。」

「なるほど、道理でドラニコフがいないわけだ。」

ドラニコフは頭をかいた。自分なりに謝罪をしているらしい。

「よく、お姫様を救い出せたわね。でも、変身できない、貴方に私が倒せるわけがないわ。」

プチロルはようやく杖を回収して戻ってきた。

「うっせー！何が、聖杯の欠片を渡してもらった！ざけんな！今

度こそ決着をつけてやらあ！」

キッドも負けずに空気砲を構えるが、サターンが割り込んだ。

「待って、ここは私が食い止める。貴方はドラミちゃんを守ってあげて。」

「冗談じゃねえ。これは、俺の戦いだ。コイツとの蹴りは、まだ終わってねえ。」

ブルートはキッドをなだめた。

「貴方は、もう十分にがんばりました。後は、我々に任せてください。」

「だったら、私も戦う！」

ヴィーナスも同じ意見だ。

「みんな。判りました。行きましょう。キッド、うさぎさん。」
「がう。」

ドラミは、うさぎの手を引き、ドラニコフはキッドを担いでタキシード仮面の元へ向かった。

「うさこ、キッドとやら、怪我はないか。」

「ああ。でも、あいつなんか許せねえぜ。」

「いいじゃない。キッドが無事でよかった。」

「オメーが良くても、おらあよくねえ。ああ、あいつにイチョガツンと言ってやりてえ。」

「いいのよ。さて、キミ達。」

うさぎは、スネ夫と出来杉を睨んだ。スネ夫達は、必死で謝罪した。

「まあ、謝るなら許すけど、償いだけは、してもらっわ。」

「例えば、どんな？」

「そうね。あたしの言うこと、聞いてもらいましょうか？」

「ひー、ごめんなさーい！」

一同は、呆れている。

サターンたちとプチロルの戦いが始まった。

第二章恋するドラミちゃん part 4（後書き）

いよいよ、プチロルの最終決戦。全員また、一緒の戦闘になりそうです。

第二章恋するドラミちゃん part 5 (前書き)

プチロルとの最終決戦。そしてドラミちゃんの運命のストーリーのクライマックス。

うさぎちゃんは、果たして聖杯の欠片を探せるのでしょうか。

第二三章恋するドラミちゃん part 5

城の一室

サターンたちがプチロルに戦いを挑む。

「あら、やる気かしら。」

「やる気も何もあたしたちは、絶対に負けたりはしないわ。ヴィーナス・ラブ・ミー・チェーン！」

光の鎖をプチロルははじき返した。

「こんな程度で私に歯向かうの？つまんない。」

プチロルは、ヴィーナスに向かって光線を発した。

「サイレント・ウォール！」

紫の球体がヴィーナスを守った。

「あら、それダダの鎌じゃなかったの。」

「これは、防御や他人の転生にも使えるの！」

「なら、これはどう？」

光線は、サターンを襲うとしたが、サターンはかわした。

「デッド・スクリーム。」

赤紫の球体が現れ、プチロルを包もうとしたが、逆に光線で消されてしまった。

「無駄よ。その程度で私は倒れないわ。」

その時、キッドの空気大砲がプチロルの背を打った。

「痛いじゃないの！？バケダヌキ！」

「誰が、狸だ！ドラミのお返しだ！」

「何を！」

プチロルが光線を放とうとしたところドラニコフの持っているムーン・スティックが輝いた。同時にキッド・ヴィーナス・うさぎが持っている聖杯の欠片、ドラえもんが持っている、虹水晶が光り、うさぎの前に集まった。光はうさぎを包む。光の中から、純白のドレスを着たうさぎと同じ髪型の少女が表れた。ムーン・スティック

はドラニコフのマフラーから離れて少女の前に現れた。少女はスティックを握る。

「これは……。」

「セレニティ。」

うさぎは、プリンセス・セレニティになった。

「これが、うさぎさん。」

「今よ！」

サターンは、鎌でプチロルの杖を真つ二つにした。

「しまった！」

セレニティは、ムーン・スティックを両手で突きつける。

「ムーン・ヒーリング・エスカレーション！」

スティックから光が出てプチロルを押した。

「キヤー！何この力は！？」

続いてキッドが空気砲を構える。

「滅びろ！プチロル！ドカーン！」

空気砲は、プチロルに命中する。

「キヤー！シブリーン！」

プチロルは光に飲まれて消滅した。

「やった。」

「プリンセス、よく頑張りました。」

プチロルの消滅後、風景は、バー内になった。同時にセレニティは、うさぎに戻った。うさぎは笑顔だ。

「ここは？」

「プチロルが倒されたから戻ってくれたんだ。」

その時、バー内では一斉の拍手が響いた。バーの常連客（中にはアニー）とクルー達だった。

「ブラボー！」

その時間は、みんなで魔女退治の宴を行った。

翌日 保安官の家の前

アニーとの別れの時が来た。

「もう行っちゃうの？」

「そういうこと。ただ永遠ってわけじゃなくて、また戻ってこれるってことさ。」

「そう、じゃあ気をつけてね。」

「おうよ。」

一行は、家を後にした。

荒野

「さて、これからどうしよう。」

「そんなの簡単よ。虹水晶の捜索に行くのよ。」

「うげ、なんだかんだでややこしい試練ができたわね。」

「しょうがないよ、ルナ。元はといえば・・・。」

のび太は、スネ夫と出来杉を見る。うさぎも見る。

「そうよねえ。」

「うわあ、ごめんなさい。」

「お詫びに残りの水晶のありかを教えます。」

「その虹水晶はどこにあるのですか。」

スネ夫たちは、ありかを教える。うさぎたちは頷く。

「なるほど、みんなと同様それぞれの時代に行ったのね。」

「聖杯の欠片と銀水晶の捜索をまとめて行うのか。」

「まあ、いいじゃねえか。ドラえもんズも全員揃えば怖いものな
しだ。」

「そうね。」

見詰め合うキッドとドラミをドラえもんは、じとと睨んだ。が
うさぎに押しのけられた。

「なんだかんだ言っ、アンタにも恋人がいたの？このこの。」

「こんなガサツガンマンとはそんなじゃないわよ。」

「ガサツで悪かったな。」

「何よ。アニーさんと楽しそうに話して。」

「まあまあ、喧嘩しないで仲良くしなさいって。」

ちやかすうさぎは、キッドとドラミの片手を取って無理矢理握手をさせる。二人は、顔を赤くして下をむいた。その時、ドラえものの丸い手がうさぎの髪を引っ張った。

「人の断りもなくキッドたちに握手をさせるな！」

「いいじゃないの。あたしゃ愛のキューピットよ。」

「どこがよ（だ）。」

ルナとアルテミスは無言で突っ込んだ。

一同はくすくす笑う。

「さて、次の時代へ行こうか。」

『はい。』

一行は、キッドのタイムマシンで次の時代に向かった。

第二章恋するドラミちゃん part 5（後書き）

運命のお姫様ドラミちゃんの幕はこうして閉ざされました。
次は、マーキュリーちゃんのチャイナアドベンチャーです。

第二章湖の魔女Ⅰ（前書き）

マーキュリーちゃんのチャイナアドベンチャーが始まりました。
そういえば、来年の4月に小説家になろうが終わるんだっけ。なん
だか淋しい気がします。

第二章湖の魔女I

清王朝末・中国・上海・音里

セワシとマーキュリー・ピー子は、音里という村に来た。その村は名前の通り、音に満ち溢れていた。

「なんだか賑やかな村だな。お祭りみたいだ。」

「芸術がいっぱい溢れてのんびりしていきたくらいよ。」

「のんびりしてたら、聖杯の欠片をデス・バスターズの魔女さんに横取りされるよ。」

セワシは、なかなかしつかりしてたから、マーキュリーに突っ込みを入れたくもなるであろう。

「判ってるわよ！もう！」

マーキュリーは、膨れてしまった。

その時、ある家の方で綺麗な曲が流れてきた。セワシ達は壁に耳を当てて様子を伺った。続いて威勢のいい声が聞こえた。うさぎの悪友の海野と同じ声だ。

「ひよつとして、海野くんのご先祖様？そんなわけないわ。元々

海野くんは日本人ですもの。あははは。」

「ちよつと、そこのお嬢さん！何立ち聞きしてるのよ！」

家の窓が開き、淡い栗色のロングウェーブの若い男性が顔を出した。

「わあ、ごめんなさい！僕達は、村に迷い込んだ旅人です！」

「見れば、判るわよ。特にその服装！」

マーキュリーとセワシは、服装を見る。確かにこの時代の国にはない服装だ。マーキュリーはその青年を見て、きよとした。ダーク・キングダムの四天王のゾイサイトに似ている。ただ髪は毛先の近くでまとめている。

「お嬢さん、なにキョトンとしてるの！？こっちなさい。」

青年はマーキュリーたちを家の中に引っ張った。取り残されたピ

「子は、大空へ飛び立った。」

マーキュリー達は、青年にお説教をせれて、ぺこぺこ謝った。青年の隣には、黒いシニヨンの少女が立っている。

「兄様、もうそれくらいにしましょう。」

「そうね。」

「あの、もしかしてその子音楽の練習をしていたのですか。」

「まあ、そうね。この子、練習中に失敗したから、びしっと注意したのよ。」

「そうだったんですか。」

「ところであんた達、名前は？私は添採炭。この子は従妹の添茶御茶御。二人とも親が他界したからこの家でくらしてるのよ。」

「それは、気の毒に。私は、セーラーマーキュリー。この子はセワシくん。」

「セワシです。よろしく。」

「いえ、こちらこそ。」

セワシと採炭は頭を下げあう。

「そしてこの子は、ピー子ちゃんって、あれ、ピー子ちゃんがない。」

「えー。」

「もしかして外に落ちたんじゃ・・・。」

「落ち着いて、まだ外にいるかもしれないわ。」

採炭たちは、外に出るが、ピー子の姿はない。

「どうしよう。」

「とにかく、手分けして探しましょう。」

「判った。私とセワシくんは村中探すから、アンタは茶御茶御と林の方を探して。」

「はい。ありがとうございます。」

「でも、あまり深く入っちゃだめよ。」

「判りました。兄様。」

採炭とセワシは村、マーキュリーと茶御茶御は林を探すことにな

った。

林の中

マーキュリーと茶御茶御は林の中を搜索中。

「ピー子ちゃん。ピー子ちゃん。」

呼んでもピー子はいない。

「どこに行っただろう。あの湖に近づいたんじゃないわよね。でもその子は鳥だから。襲われる心配はないわ。」

そのとき、林の奥から・・・アチャー・・・と掛け声が聞こえた。

「何、この声まさか。」

マーキュリーは、光羅針盤を出す。羅針盤は、左横に反応した。

「もしかして、ダイモーンが聖杯の欠片をもう持ってるんじゃない？」

マーキュリーは駆け出し、茶御茶御も後を追った。

マーキュリー達は、茂みに身を隠し、掛け声を聞いた。

「カンフー使いのダイモーンなんて、初めて。とにかくなんとかしなくちゃ。」

「あの、おねえちゃん・・・。」

「大丈夫。私を守るわ。」

マーキュリーは立ち上がった。

「シャボン・スプレー！」

数個の泡を飛ばし、目くらましをした。

「よし、次は。シャボン・スプレー・フリージング！」

冷気の泡を飛ばした。大きな氷が出た。

「今だわ。」

マーキュリーは、目くらましの中に入った。ところが凍ったのは、カンフーの特訓用の案山子だった。

「どういうこと！キヤー！」

目くらましが消えた。消したのは、大きな葉っぱのような扇を持った、中国服のネコ型ロボットだった。ネコ型ロボットは、かなり

ムスツとしている。

「ネコ型・ロボット？」

「誰が、ダイヤモンドですか？失敬な。」

「あら、聞いてたの？」

「当然でしょう。全く。」

「まあまあ、落ち着いて、王ドラさん。」

「王ドラ？」

「うん、王ドラさん。修行の旅をしてるんだ。」

「ふみゃー。私、女の子は、だめです。ショートヘアのお嬢さん以外の。」

「あら・・・。」

王ドラは、茶御茶御の近くでくねくねしてしまう。

マーキュリーは、ピー子がいなくなったことを話した。

「そういう事情でしたら、私も搜索に向かいます。」

「ありがとうございます。」

「よかったね。おねえちゃん。」

「ただし。貴方、マーキュリーと言いましたね。小鳥の他に何を探してるんですか。」

「えっ、それは・・・。」

「まさか、私の袖の中に隠しているものを取ろうというんじゃないでしょうね。」

「ううう。」

光に気付いたため、とうとう、マーキュリーは、聖杯の欠片とデス・バスターズのことを話してしまった。

「それなら、そうと早くいつてくださいよ。」

王ドラは、右の袖からハートの宝石を取り出した。間違いなく聖杯の欠片だ。

「そう、それよ。よかった。」

その時、糸なし電話が反応した。

「セワシくん。なに、ピー子ちゃんが？よかった。こっちは、聖

杯の欠片が見つかったわ。それじゃ、今から戻るわ。」

マーキュリーたちは、茶御茶御たちの家に引き返した。

木の陰から15歳前後の白衣を着た、水色がかった少女が覗いた。
「うふふ、あの狸が聖杯の欠片を持つてるとはね。まあいい、あのシニヨンの小娘に心だけはいたただくわ。」

少女は、茶御茶御を狙うようになった。

第二章湖の魔女Ⅰ（後書き）

ゾイサイトの瓜二つの青年と遭遇しちゃったマーキュリーちゃんは、
ピー子ちゃんを探しに林に出てきてしまいました。
茶御茶御の言ってたあの湖とは、一体何でしょう。

第二章湖の魔女EE（前書き）

ウィッチーズ5の1人・ビリユイと戦闘が近づくそうです。そして、湖の秘密も解き明かされることになるでしょう。

なお中国少女チャオチャオの本名及び設定は不明だから私が作りました。

第二十五章湖の魔女II

村

セワシと採炭は、村の市場でピー子を見つけたという知らせを受け、マーキュリー・茶御茶御・王ドラは市場に来た。

「マーキュリー、こっちこっち。」

「ピピピピ。」

セワシは彼女達を手招きした。なんとピー子はマーキュリーと御揃いのセーラー服でセミロングの娘の掌に乗っている。その娘に見覚えがあった。

「セーラーネプチューン。」

「お久しぶり。セーラーマーキュリー。」

ピー子は、ネプチューンの掌から、マーキュリーの肩にとまった。

「このバイオリン引きのお姐さん、ネプチューンっていうの。」

「お友達ですか？」

「まあ、そんなところかな。」

採炭は、一行の会話に加わった。

「この女の子、なにやら面白いものを下げていたけど、バイオリンっていうの。」

「バイオリンは、芸術道具・楽器の一つです。」

「ほー、何だか面白い子ね。そうだ、あんた達、お願いがあるの。」

「

「えっ？」

マーキュリーたちは、首を傾げる。

採炭の家の中

お願いというのは、この村に年に1度開かれる音楽大会が6日後に開催させるから、せめて茶御茶御とチームを組んでくれという事だ。

「でも、私、楽器を持っていないんです。」

「楽器なら、貸してあげるわよ。」

「それならいいんです。」

マーキュリーは、そわそわしている。

「もー、引っ込み思案な子ね。少しは、セミロングのお嬢さんを見習いなさい。」

「まあまあ。この子には、私から言っておきますから。」

5分後 茶御茶御の部屋

マーキュリーとネプチューンは、茶御茶御の部屋に泊まることになった。茶御茶御は、一階で練習をしている。

「マーキュリー、せっかく友達になれたんだから、一回でもいいから、やってみましょう。」

「でも……。」

「なんでもいいじゃない。例えば、吹奏楽器がいいんじゃない。」

「吹奏楽器か。とりあえず、出るだけ出ます。」

「これで決まりね。」

「じゃあ、採炭さんに話してきます。」

マーキュリーは、採炭の部屋に行こうとした。そこをネプチューンに肘を取られた。

「まって、貴方にもう1つ話があるの。」

「話つて?」

「今度の戦いのことだけど、これ以上貴方達を巻き込みたくはないの。」

「どうして?」

「デス・バスターズは、貴方達のお陰で倒せて、貴方達と和解はできたけど、今回だけは、巻き込みたくはないのよ。お友達にづらい思いはさせたくないのよ。」

「そんなこと言ったて、私達は、聖杯を直して、真のメシアに返しておきたいだけよ。だれか判らないけど、ネプチューンから聖杯

を返してあげて。」

「そのメシアだけど、うさぎには、聖杯が直るまで内緒よ。真のメシアはやっぱりあの子なのよ。」

「うさぎちゃんが？それで銀水晶に聖杯の欠片が反応したんだ。」

「貴方の気持ちには、負けたわ。せつかくだから、このままボデイガードしちゃいましょう。」

「ありがとう。何から何まで。」

「いいのよ。そうだ、うさぎにあつたらこれを返さなきゃ。」

ネプチューンは、ポケットからハートの宝石を取り出した。

「それは？」

「うさぎのブローチの銀水晶の欠片よ。」

「虹水晶じゃない。どうして、また戻ったか知らないけど、うさぎちゃん、怒るかな？」

マーキュリーは、心配になってきた。

一階 居間

マーキュリーは、つちぶえを吹くことになった。

「よし、これで今年の大会には、出られそうだわ。」

実をいうと家は、骨董品屋で、見つけた瀬戸物や楽器などを売っているのよ。ただ、中には、土産や飾りとかもあるのよ。」

「それで、家の中にあちこちに楽器が所々飾ってあったんですか。」

「そういうこと。あそうだ。ネプチューンだっけ、試しにバイオリンとかいうのを弾いてちょうだい。」

「判りました。でも、私、実はあまり上手じゃないんです。」

そういいながら、バイオリンを取り出して弾いた。その音色は、海風に揺れるような音色だ。セワシや王ドラも聞いていた。特にセワシ。

「おばあちゃんと比べ物にならないほど上手だ。」

その音に釣られて茶御茶御はクゴを奏で、マーキュリーはつちぶ

えを吹いた。ちなみに茶御茶御はクゴを弾いていた。

3人とも遂に合奏を始めてしまった。それも意気投合している。採炭達は合奏に聞きほれてしまった。

演奏の後、採炭は拍手を送った。

「素晴らしい。これなら優勝間違いなしだ。」

「あの・・・採炭さん・・・。」

「いいのよ。最初はネプチューンのヴァイオリンだけを先に聞きたかったけど、3人一緒でも問題なしよ。」

「そうかな。」

「ところで優勝するとどんな賞品がでるんですか。」

「高級の皿がもらえるところかな。」

「そんなに値打ちが高いんですか。」

「その通りよ。まあ、優勝していようが参加賞が出ていようが、ようは人々に演奏を聞かせるだけよ。」

「マイペースな人ね。」

「なんかうさぎちゃんみたい。」

6日後 大会の日

今日まで練習を重ねていたネプチューン・マーキュリー・茶御茶御は、最後に演奏することになった。

「なんだか、緊張してきた。私演奏初めてなんだ。」

「私は、楽器なんて吹いたことなかったから、最初は緊張したわ。」

「最初は、誰でも緊張するものよ。私だって初めてのバイオリンのコンクールの際は緊張したんだから。」

そんな中、採炭に呼びかける者がいた。採炭や茶御茶御を子供のようになつて可愛がっている、商人だ。

「何かお話でしょうか。」

「実はよ、またあの魔女が出てくるんだ。」

「あいつですか。」

「おうよ。しかも今度はあの茶御茶御ちゃんを湖の近くまでつれて来いって話だ。」

「いくらなんでも、酷すぎます。」

「じゃねえと、全員皆殺しの刑になっちまうぜ。」

「どうしよう。」

そんなことをしているうちにとうとう彼女達の番が来た。

「いよいよね。」

「うん。」

3人娘の演奏が始まった。ネプチューンのバイオリンはこの世の国では、聞いたことない音色だったため、特に視聴者達の心に刻み込まれた。マーキュリーのつちぶえは、初心者ながら丁寧さを表している。そして茶御茶御のクゴは、多くの心に笑顔を齎すほどの音色を奏でた。大勢の声援と拍手が送られる。なかでも、審査員は、いい笑顔を見せた。

「優勝は、世にも珍しい合奏で観客を笑わせた、添団である。」
観客の盛大な喜びと拍手が響く。ところが商人と採炭が焦ったような顔を見せた。

「茶御茶御ちゃん、喜びのところ悪いが、あんたが生贄になることになっちまった。」

「ええ？」

林の近く

茶御茶御はおじさんに連れられて林に入った。マーキュリーたちはただ見送る以外なかった。

採炭の家 採炭の部屋

商人もあんなに茶御茶御を可愛がっていたのに、その女の子を生贄に出してしまった。

「一体、何があったんですか？ よりにもよってあんな小さな女の子を生贄にするなんて。」

採炭は村の真実を語った。

数ヶ月前にある一人の魔女が現れた。その魔女はどんな願いを叶えてくれる魔女だが、それには、人間の魂が必要だった。村人達の願いは、村に幸せがくることだ。その魔女は、月に1度、林の湖で生贄の儀式をすることになった。生贄になるのは、十代の少女達だった。すでに何人の村娘が生贄にされていた。

「だからって、あんな年端もいかない女の子達を生贄にするなんて酷すぎます。」

「まあまあ、王ドラ。」

怒る王ドラをセワシはなだめる。

「その村の女の子達は、どうしたんですか。」

「彼女たちは、今病院で休ませてるわ。」

病院の病室の1つ

採炭は病院に王ドラ一行を案内した。ご覧の通り村娘達が眠っている。中にも自分達と変わらない年頃の女の子もいた。

マーキュリーやネプチューンは、王ドラにお医者かばんを借りて少女の様態を調べた。死んではいないが、意識がないのは確かだ。

「本当に魂を抜かれた後だわ。もしかして・・・。」

「ええ、村の女の子達はピュアな心を奪われたのかもしれないわ。」

「もし、そうだとしたら、採炭さんの言っていた魔女って・・・。」

「「ウィッチーズ5!?!」」

「だとしたら、茶御茶御ちゃんが危ない!」

「セワシくん、採炭さんや王ドラと一緒に彼女達をお願い。」

「ピー子ちゃんも!」

「ぴぴぴ。」

「判った。」

「ごめんね。村の為に。」

「いいんです。私達2人で茶御茶御ちゃんを探してきます。
ネプチューンたちは、セワシ達を残して、林に向かう。
果たして、彼女の運命は。」

第二章湖の魔女ⅠⅠ（後書き）

マーキュリーちゃん達の魔女退治が次回で始まります。
再びビリユイとマーキュリーの戦いが始まります。今度はネプチューンも一緒です。途中で王ドラを駆けつけたりもします。

第二十六章湖の魔女ⅠⅠⅠ（前書き）

遂にウィッチーズ5の魔女のビリユイとの対決が幕を開けます。
様々なハプニングがあり、小説の書き直しが多すぎるのがしばしば
ですが、こんなことでへこたれる私ではありません。

第二十六章湖の魔女IEI

林の湖の前

商人に連れられ茶御茶御は、湖の前に立つ。その横に水色がかつた銀色のセミロングの少女が立っている。その様子をネプチューンとマーキュリーが木の陰から覗いている。

「あれは、ビリユイ？やっぱり、ウィッチーズだったんだ。」

「どうやって、女の子のピュアな心を奪っているのかしら。」

「それじゃあ、生贄の儀式を始めましょうか。」

ビリユイ少女が指を鳴らすと、人魚の姿をした少女が湖から姿を表した。

「う・ンディーネ！」

「ダイヤモンドじゃないの？」

「まさか、この子のピュアな心を飲み込もうとしてるんじゃないのかな。」

う・ンディーネは茶御茶御を顔をはさむと口からピュアな心を取り除き、飲み込んだ。商人は無言で悲しげな表情を浮かべつつ目を背けた。

「ごめんよ。茶御茶御ちゃん。」

茶御茶御は、倒れてしまった。

「やっぱり。ダイヤモンドとウィッチーズが原因なんだわ。」

「誰、そこにいるのは！？」

「気付かれた。」

「出てきなさい。木の上の狸！」

「狸？」

「まさか？」

木の上から王ドラが素早く降りてきた。

「何が狸ですか？失礼な。」

「やっぱり。」

「犯人は貴方達でしたね。村の女の子の心を奪い取るなんて残酷にもほどがあります。」

王ドラは商人をキツと睨みつけた。

「貴方も貴方ですよ。小さな女の子を生贄にするなんて。」

「威勢がよろしいこと。だったら、君から倒してあげる。幸い口ポットだから、簡単に始末できるわ！モザイクバスター！」

ビリユイの腕輪から結晶が出てきた。

「危ない！」

商人が王ドラを庇い、結晶があたり行動不能に陥ってしまった。

「おじさん！」

マーキュリーが声を出してしまい、ビリユイに気付かれた。

「おお、お嬢ちゃんら、アンタらも心配で来ちゃったか！うぐぐぐぐぐぐぐ……。」

「ああ、なんてことを……。」

「セーラーマーキュリー、セーラーネプチューン。お前達も来たのか。ふふふ、光栄だわ。この狸は私が始末するから、お前は、小娘達を始末なさい！」

「村の女の子達の為に、水でも被って反省しなさい！」

う・ンディーネは、口から水を出した。二人はその攻撃をかわす。

「それでも、くらいなさい！シャボン・スプレー・フリージング！」

マーキュリーは、冷気の泡を出す、ダイヤモンドは、ジャンプして魚の尾でマーキュリーの頬を打った。

「なんてやつ。ディーブ・サブマージ！」

ネプチューンは海の球体で応戦しようとするが、長い髪でガードされてしまった。

「髪でガードができるなんて……。こうなったら、髪を切りましょう。シャインアクア・イリュージョン！」

水流が髪を弾き飛ばした。ところが、髪は元通りになってしまった。

「参ったわ。」

長い髪が二人を捕えた。

「捕まえたわ。」

「う・ンディーネ、せっかくだから、その二人のピュアな心を奪い取りなさい。」

「アチャー！」

王ドラを拳がビリユイを襲う。魔女は左手で拳を受け止めた。

「くう。」

王ドラはそのまま、地面に投げつけられた。その振動でダイモンの体は崩れ、二人は解放された。

「ビリユイ様。ひどいです。」

「ごめんなさい。」

「なんかよくわからないけど、助かったわ。」

「あーいたた。」

「なるほど。この怪物さんは、水の属性だから、地の上では、思うように戦えないんですか。地震が出るしね。」

「王ちゃん？」

「マーキュリー、ネプチューン、これは面白くなってきましたよ。ぬふふ。」

「何をわけの判らないことを。う・ンディーネ！」

「はあ！」

う・ンディーネは、マーキュリーたちに飛び掛る。速さは、とても遅いが。

「なるほど。攻撃の射程は長いけど、陸の上ではスピードが落ちるんだわ。」

「だったら、一か八か。シャボン・スプレー！」

大量の泡で目くらまし完了。

「何これ。これじゃ何も見えないじゃないの。」

「ホアチャー！」

王ドラのとび蹴りがビリユイの後頭部を蹴った。ビリユイが地面

に叩きつけられる。

怒ったビリユイは王ドラを追う。

一方ダイモーンは、目くらましでオロオロしている。その時、ネプチューンの手鏡から光線が発射した。

「サブマリン・リフレクション！」

光線はう・ンディーネの背に当たった。怒ったダイモーンは、水を吐く。ネプチューンは避ける。

王ドラを追っていた、ビリユイはモザイクバスターを放ち、王ドラはかわした。その時、水流が現れ、飲み込まれ、ダイモーンも大量の結晶の餌食になった。

「しまったー！」

「きゃー！」

二人は消滅した。商人も元に戻る。後に残ったのは、ピュアな心の大群と1匹のスナメリの子供だった。

「ダイモーンの正体はこの子供だったのね。」

「だから、ダイモーンになっても陸では戦いづらかったんだわ。」

「だとしたら、この子を回復させて海に返してあげましょう。」

「「ええ。」」

王ドラはスナメリの子をお医者カバンで治して、マーキュリー達は、商人と力を合わせて心を茶御茶御達に返してあげた。

スナメリでお座敷釣堀で海に帰してもらった。

元氣になった村娘達は、他の村人と力を合わせて、村を平和にした。

「魔女がいなくて、みんなのピュアな心があれば。」

「どんな困難だって乗り越えられる。」

音里の村に本当の平和が訪れた。村中に綺麗な音楽が流れてくる。

第二十六章湖の魔女ⅠⅠⅠ（後書き）

王ドラと水の戦士たちの戦いが終わり、村に平和を与えた。
もうすぐで、私も小説が書けなくなってしまうのかな。

第二十七章スペインのオカシナナ巻（前書き）

聖杯の欠片も大分集まってきました。

あと少しで聖杯の完成です。

今回のストーリーは、スペインでお菓子作りに挑戦するジュピターのお話です。

第二十七章スペインのオカシナナ壱

スペイン ドラセロナ

町の中で1人の少女が歩いている。少女は、茶色のフード付きローブを身にまといローブで目元を隠している。

その少女に、ある事件が降りかかる。

「大変だ！闘牛に使う牛が脱走したぞー！」

牛が逃げ出してしまい町は大パニック。牛が少女の前に現れる。

少女は逃げようとするが転んでしまう。牛は少女に襲い掛かってきた。が、すんでのところで茶色のポニーテールの十代半ばの女の子が牛の角を押さえた。

「今のうちだ。」

少女を抱き起こしたのは、頭に仔犬を乗せた薄橙の猫型ロボットだ。ロボットは少女を近くの洋菓子屋の中に隠す。女の子は片ひざを牛の顎にヒットさせる。牛は、目を回して気絶した。闘牛試合のスタッフの人が牛を回収している間に町の人から盛大な拍手が送られる。その時、薄橙のロボットが店から出てきた。

「ジュピター、牛は捕まったか。」

「ジェイちゃん、捕まえたよ。それよりあの子は？」

「今、ペロが付いているよ。あの子の怪我は、そんな大した怪我じゃなかった。」

「よかった。」

女の子はジュピターという名前だ。ジェイちゃんというのは、ジエドーラだ。彼女がほっとしていると、店から連れの子犬を抱えた濃い茶色のロングヘアの男性が出てきた。

「君、大丈夫か。」

「はい……。大丈夫です。」

ジュピターは顔が赤くなった。理由は簡単。ダークキングダムのカムフライトに似ているからだ。

「それより、此処に入ってきた女の子は、どうしてますか？」

「ジェニー姫か？大丈夫だ。」

男性はジュピターとジェドローを店の中に入れた。

洋菓子屋 厨房

フード付きローブの下は、愛らしい良家の子女だった。

「俺は、この店の店員のネフライター・アリエール。彼女は、ドラセロナの姫君の。」

「ジェニー・フルーチェです。危ないところをありがとうございました。」

肩まで近い赤い髪型を中央のツインテールにした緑の肩紐のない膝を隠すほどの長い丈のスカートのドレスを着た白い肌のジェニーは、オズオズと挨拶をした。

「いえ。姫様に怪我がなくて、本当によかった。あたし、ジュピター。セーラージュピター。この子は、友人のペットのペロ。」

「その名の通り、ペロペロ舐めるのか。コイツ、なんか姫様の顔を舐めてたぞ。当然、俺がおいでと手招きしたから、なつかれちゃったけど。」

「そりゃ、どうも。」怪我の心配してたのかな。あはは。」

「ぼくは、ジェドロー。趣味は御菓子作り。」

「御菓子作りか。そうだ、お前達に少し頼みがある。」

「頼み？」

数秒後

「パテシエコンクール？」

「そうなんだ。9日後にパテシエコンクールが開かれるんだ。ただ、コンクールに出場するには、3人以上でチームを組まなければならないんだ。」

「なるほど、アンタとジェイちゃん・あたしで丁度3人か。幸いあたしも料理とかに自信があるから、出られるってわけだ。」

「残念ですが、そのコンクールは中止です。」

「なんで？ ジェニーちゃんは、御菓子嫌いなもの？」

「そんな分けない。 ジェニー姫は偏食を知らないんだ。」

「実はワタクシは、そのコンクールの審査委員の一人です。」

「審査委員か。 コンクールは何処でやるの？」

「ワタクシの城の大広間です。」

「なるほど。」

「でも、町に災いが起きてしまうという時に笑うことなんてできません。」

「災い？ もしかして、人が眠りに就いちゃうとか？」

「はい。 わたくしはそれがいやで、コンクールを中止するまで帰らないと書置きを残して……。」

「待った！ 書置きてことは……！」

「家出！？」

「……はい。」

「それで、町をうるうるしていたのか？」

「うーん。 眠りの訳を覚えてくれないかな。」

その時、いつの間にか厨房にいた白い牛のような角を耳代わりにしたネコ型ロボットが、目に炎を灯して睨んでいた。

「いつまで、待たせんだよ！ ネフライター！」

「ごめんごめん。 エル・マタドーラ。」

「ったく。 ほらオヤジサンの御裾分け。」

エル・マタドーラは、白い箱を差し出した。 箱の中には、砂糖と小麦粉・それにバニラエッセンスが数瓶入っている。 そこをジュピター・ジェドーラ・ペロ（ジュピターの頭の上）も覗く。

「これだけの材料があれば、コンクールもあつという間だ。」

「あれ、ジェドーラ？ 来てたのか？」

「うん、暫くだね。 エル・マタドーラ。」

互いに手を取り合い、大覇者議した。

「あの、ジェイちゃん、その狸ロボット誰？ ドラちゃんのお兄さ

ん？」

ジュピターのポケにペロたちは、ずっこけた。

「違うわい！ダチだ、ダチ！おまけにネコ型ロボットだ。」

エル・マタドーラはジュピターを怒鳴りつけた。ジェドーラは押える。ジェニー姫は相変わらず、内気な表情だ。

「ごめんごめん。あつジェニーちゃん、さっきのお話だけど、眠りについて教えて。」

エル・マタドーラは、ジェニー姫を見るなり、口説き始めた。

「おお、誰かと思えばハニー姫ではございませんか。」

「ハニー姫？」

「いえ、ワタクシはジェニー姫です。」

「これは、失敬。似てたもので。」

「それで、お話だけど。」

「この町に魔女が現れたんです。」

「魔女？どんな魔女？」

「黄緑色の髪をシニヨン付きのツインテールの魔女です。かなりの怖い目つきをしていました。その人は私を狙うチャンスをつかっています。多分、コンクールに現れるかもしれません。」

「それで、お城を抜け出したのですか？」

「はい。」

「うーん、困った困った。」

困ったを繰り返すジェドーラは、いつの間にか厨房を歩き回ってしまった。

「魔女というとウィッチーズ5の魔女か。」へもしかしたら？
「ジュピターは羅針盤の様子を伺った。エル・マタドーラのポケットに反応している。」

「えっと、エルちゃんだっけ？」

「エルちゃん？なんだ？ジュピターとかいう女。」

「アンタのポケットの中の光るものをみせてくれないかな。」

「光るもの？このことか？」

エル・マタドーラは、ポケットから蓋のようなものをジューピターに見せた。

「間違いない。聖杯の蓋だ。」

「聖杯？なんだ、それ？」

「そのことについては、僕が説明するよ。」

「くんくん。」

既にジェドーラがぐたりとなり、ペロは寄り添う。

第二十七章スペインのオカシナナ壱（後書き）

スペインでも御菓子コンクールに出ることになったジュピター一行。
このままいけばジェニー姫は危なくなります。
ジェニー姫の運命はいかに。

第二十八章スペインのオカシナナ式（前書き）

魔女の出現で笑顔を失った王女ジェニー姫。ジュピター達は、彼女を無事に説得できるでしょうか。

第二十八章スペインのオカシナナ式

ドラセロナの洋菓子屋

ジェドーラは、エル・マタドーラに聖杯のこと、デス・バスターズのことを全て話した。

「その聖杯が直れば、世界に平和が訪れるってのか。」

「そういうこと、場合によっては、ジェニーちゃんのように笑顔をなくした女の子の笑顔も守れるんだ。」

「どういう条件の持ち主なら使いこなせるんだ。」

「さあ・・・。」

問題は、誰がそのメシアだが、そこまでは知らないのだ。

「メシアのことは心配ないよ。」

「あれ？」

一行が振り向くと栗色のショートカットの娘が裏口のドアの前で微笑んでいる。

「セーラーウラヌス？ どうしてココに？」

「聖杯の欠片を探しに来たのさ。これで。」

ウラヌスは懷から、ハートの宝石を出した。

「なんだよ。それ？」

「お団子頭のブローチから出てきたやつだよ。」

「出てきたって、それ虹水晶じゃん。」

「虹水晶？」

「うさぎちゃんの持つてる銀水晶の欠片だよ。」

「これが1個でも欠けてるとうさぎちゃんは、変身できないってこと?! どうしよう!」

シュポーとジェドーラの頭から煙が出てしまい、機関車みたいにシュポシュポと駆け出し、厨房の中を走り回りだした。さすがのネフライター達も目を丸くしてしまう。

「また、ジェドーラのシュップシュポが始まったぜ。昔から困る

「このダンスが止まらなくなっちまうぜ。」

「ジュピターの仲間は、随分と個性的だな。」

「ほつとしてよ。どうすんだよ！？銀水晶がないと当分变身できないじゃんか！」

ジュピターは、ウラヌスに食って掛かった。

「僕達だってこんなことはしたくはないけど、君達に今度ばかりは危険な目に遭わせたくないんだ。」

「どういうこと？」

ジュピターは、急に大人しくなった。

「真のメシアは、誰も死なせたくないと思う女の子なんだ。その子が特にまた悲しい思いをしてしまうから、この戦いから遠ざけようとしたかった。それだけなんだ。」

「うさぎちゃんを想う気持ちは判るけど、あの子は聖杯を本当のメシアに返したかっただけなんだ。」

「あの子がメシアである以上、あの子の笑顔を守ってあげたい。あのお姫様じゃないけど。」

「オイ！なんだかよく知らねえが、その石返して、土下座でもお辞儀でもなんでもいいから、メシアに謝れ！」

「エルちゃん、凄い迫力・・・」

エル・マタドーラに怒鳴られ、ウラヌスは納得した。そのとき、店の方から誰か訪ねてきた。

「ごめんください。」

ネフライターは、店の方に向かった。

ちなみにジェドローは、散々踊ったから目を回してのびている。

「ふみゃー、もうへとへと。」

「見事に踊ったな。」

「うん、確かに。」

厨房は、凄く散らかっている。店からネフライターが戻ってきた。

「姫様。陛下が雇った探偵の少女がお迎えに参られました。」

「お父様に雇われた探偵さん？」

「よかったね。お父さんが心配しているから、もうお帰り。」

ウラヌスはジェニー姫の背中を押した。

「でも・・・。」

「大丈夫。ちゃんとお話すれば、お父さんは許してくれる。」

ジェニー姫は、店に向かう。ジュピターはジェニー姫に声をかける。

「ジェニーちゃん！あたしたちは、アンタの見方だよ。魔女が現れたとき、あたしたちがその魔女をぶっ飛ばしてやるから。安心して、コンクールに出ておいで！」

ジェニー姫は、迎えの探偵に連れられて店を後にした。

その後、ウラヌスたちは散らかした張本人・ジェドーラと力を合わせて、厨房を掃除した。

エル・マタドーラは、用事を済ませて、自分のバイト先の店に戻った。

夜

店を閉めたジュピターたちは、コンクールに備えて御菓子作りの特訓に掛かった。

机にはたくさんの材料が盛りたくさん。

「これだけの材料があれば、失敗してもやり直しができるってなんだ。」

「やり直しだなんてお団子頭じゃあるまいし。」

「いいじゃない。念のためなんだから。」

「まあまあ、ケンカはやめて。コンクールまで時間はあるから、ゆつくり考えよう。」

「よし、それじゃあ準備開始！」

『オー！』

張り切るジュピターたちだが、思わぬ失敗続きの毎日だった。例えば。

「うえー、しょっぱー、ジェイちゃんこれ、塩だよ。」

「あやや、失敗。」

ジェドローラが砂糖と塩を間違えて入れたり。

「ウワー！」

ズテイン。ジュピターが生地の入ったボールを転んだ弾みにひっくり返したり。

「ごほごほ。」

ネフライターがオープンで生地を嗅がしたり。

ドカーン！

オープンの中が爆発したりなど。踏んだり蹴ったりだ。

コンクールまで後4日

失敗続きのジュピターたちは、体中痣や傷だらけになった。

「はー、あたしとあろうものが御菓子1つで失敗するなんて我ながら情けない。」

「嘆いてもいい御菓子は作れないよ。気晴らしにどこか遊びに行こうか。」

闘牛場の観客席

大勢の観客の声援が鳴り響いていた。

ジュピターたちは、ウラヌスに連れられ、闘牛場の観客席に座っている。

「どうして、闘牛の試合なの。」

「スペインで大人気の競技だから。」

ジュピターは緊張している。なぜなら、殆どの観客は、ジュピターが牛を捕まえたことを知っている。輪に囲まれてしまうことが目に見えている。そんなジュピターに自分と同年代の少女が隣の観客席に座っている。その隣にゴッツイおじさんが座っている。ジュピターとジェドローラは、ひーと顔が引きつった。

「オヤジサン。」

「おー、ネフライターくん。君も来てたのか。」

「こんにちわ。あら、そちらの人たちは・・・。」

ジューピターは大慌てで説明しようとする。

「グループの仲間です！今度、御菓子のコンクールがあるので・・・！」

「あのコンクールか？」

「はい。」

「メンバーは3人以上でしたね。あら、自己紹介が遅れました。

ネフライターさんが経営している店の常連客かつ、ココの闘牛場の近くの肉料理店のウェイトレスのカルミンです。こちらは、店長である私の父です。」

「よろしく。」

「どうも。」

「この前は、御裾分けをありがとうございました。」

「何、気にするな。お互い様だ。」

「はははははは。」

「お、そろそろ始まるぞ。」

試合が始まろうとしている。

途中で花を売っている娘が人々に花を売っている。珍しい花だ。幸運を呼ぶ花だそうだ。水も肥料も要らない花だ。値段はそう高くないから、人々は買えた。

「水も肥料もいらない、格安の幸運の花なんて聞いたことないぞ。でも、此花どこかで見たような。」

そのうち、カルミン親子にもまわってきた。

「そういえば、御菓子のコンクールについてだけど、どんな御菓子を作るの？」

「それなんだが、手詰まりなんだ。」

「どうして？君御菓子作りに関してはいい腕してるだろう。」

「作ってはいるんですが。今日まで5日間失敗ばかりでして。」

「失敗は成功の元というじゃねえか。誰でも失敗はするさ。失敗しても懲りずに御菓子を作ってるじゃねえか。その根性で御菓子を

作りなよ。」

オヤジサンはネフライターの頭を撫でる。

いよいよ、最後の挑戦者が表れた。エル・マタドーラだ。

「エルちゃんも出場してたんだ。」

「おうよ。だから、見に来てやったんだ。」

「じゃあエルちゃんも店で働いてるの。何の担当なの。」

「皿洗いだ。」

「うえ、せこそう。」

ジュピターは思わずズツコケル。

試合の場

エル・マタドーラは愛用のヒラリマントで牛と対峙している。闘牛の試合の殆どは、ヒラリと赤い布でかわし、最終的に闘牛の剣で牛を刺殺する。その通りに、エル・マタドーラが牛を倒した。

人々の声援が響く。その時、カルミンの持つてる花が光りだした。ウラヌスは、逃げるようにジュピターの手を引いて、ジェドーラ達も後に続き、試合場に逃げた。

「こら、部外者がこんなところに来るな！」

エル・マタドーラが怒鳴るが観客席から、悲鳴が響き悲鳴の後にピュアな心が大量に浮かんでいる。そのピュアな心を娘が星の中に溜め込んでいる。

「あれは……。」

「ウィチーズ5？」

花売り娘の正体は、ウィッチーズ5のテルルだった。

「これでよしと、次は……。」

「待てこら！」

「あら、気づかれちゃった。」

エル・マタドーラは、テルルを睨んでいる。

「何の真似かしらんが、人々の魂取るなんて残酷すぎるぞ！」

「やる気かしら。ごめんね。キミと遊ぶ暇ないから、あの子と遊

んでね。じゃねー。」

テルルは、逃げ出した。

「オイ待て！グオ！」

地面が揺れて中から筋肉質の女性が姿を出した。

「アイアンダー！」

地中から、ダイヤモンドが出てきた。ジュピターたちは、どう戦つか。

第二十八章スペインのオカシナナ式（後書き）

そつえば、今月はドラミちゃんの誕生日でしたね。今回の映画では、出演しなかったね。次は、ロボット学校七不思議かパラレル西遊記のリニューアルに出演するかもしれません。

第二九章スペインのオカシナナ参（前書き）

アイアンダーは、ジュピターがパワー負けしちゃったダイヤモンドです。攻撃能力は怪力技です。素材はまさかと思いますが、アイロンですか？

第二九章スペインのオカシナナ参

闘牛場の試合場

アイアンダーが出現した。ジュピター・ウラヌス達は、どう立ち向かうか。

「なんかどこかで見たと思ったら、あたしが負けちゃったダイモンだ。へへ、今度は倒してやる。」

「手伝おうか？」

「ごめんね。パワーの勝負は、アタシがするんだ。」

「ほうほう、アンタどこかで見た顔と思えば、アタシに挑もうとしたお嬢さんか。だったら、その根性に免じて相手になってやろう。」

「おかしなポーズをとるダイモンに、バシーン」と、エル・マタドーラの巨大ハリセンが突っ込みを入れた。アイアンダーは頭を押さえつつエル・マタドーラを睨んだ。

「痛いだろうが！」

「そっちこそ何アホなポーズ取ってんだよ。」

「アホなポーズとは何だ！アホなポーズとは！」

エル・マタドーラとダイモンの言い争いが始まった。

「あいつ、結構お茶目だな・・・。」

「うん・・・。」

言い争いの末に。

「もー怒ったー！こうなったら、お前からやつつけてやる！」

エル・マタドーラに飛び掛ろうとしたが、両腕をつかまれて。

「そうかいそうかい。そこまで言うんならやってみる！」

ダイモンを遠くまで投げ飛ばしてしまった。アイアンダーは目を回してしまった。

「はらひれはらほれ。」

「お見事・・・。」

ダイモーンは息を吹き返した。

「よくもやったな〜！この狸鬼！」

「誰が狸鬼だ！」

じたばた暴れるエル・マタドーラをジュピターは押さえる。

「怒る気持ちはわかるよ。でも、落ち着いて。ねっ。」

エル・マタドーラの怪力をみてさっきの自信はなくなった。

「ふふ、自分より強い怪力の持ち主見たら大人しくなったか。」

「でも、どうしよう。今度は本気で攻撃するらしいよ。」

「これは、一斉攻撃だな。」

「よし、判った。俺が囷になる。」

エル・マタドーラはヒリマントを取り出しダイモーンに立ち向かう。

ダイモーンは、エル・マタドーラに突進した。エル・マタドーラはヒリリとかわす。突進した方向には剣をかまえたウラヌス達が待ち伏せていた。

「スペース・ソード・ブラスター！」

ダイモーンを切りつけた。ダイモーンは飛ばさせ、エル・マタドーラにヒリリと左に飛ばされた。その方向にジェドーラが待ち伏せている。ジェドーラは、コック帽から芭蕉扇を取り出した。

「いっくよー！」

アイアンダーは上へ放り投げられた。

「食らえ！シュープリーム・サンダー・ドラゴン！」

雷の竜がダイモーンを飲み込んだ。

「ギャー！」

ダイモーンは、アイロンに戻り、それをジュピターは片手で受け止めた。

一行は微笑んだ。

夕方

「ダイモーンは倒したものの、カルミンたちは眠ったままだ。」

「やっぱり、眠りにつくというのは、人々が心を失うことだったんだ。」

「あのテルルとかいう子、コンクールに表れるんじゃないか。」

「もし、そうだったらあたし達が守ってみせる。」

「そうと判れば、帰ったらお菓子作りだな。」

「ああ。そうだ、エルちゃん。あんたも一緒にどう?。」

「いいのかなあ。俺、ドジだけど。」

「どうでもいいよ。そういうの。」

「じゃあ、よろしく。」

握手をかわす一行だった。

夕方 洋菓子店

エル・マタドーラを加えたチームは、おいしいお菓子を作るには、チームワークが大切ということが判った。みんなが楽しくなれるお菓子を作ることにした。

「みんなは、なんのお菓子がいい。」

手をあげたのはエル・マタドーラだった。

「マジパンはどうかなあ。女の子にはふわふわ顔がよく似合うから。」

「ふわふわ顔か。判った。」

「じゃあ、決まり。」

自分達のテーマはマジパンになった。

かくしてネフライターとジュピター達のマジパン作りが始まった。焦がしたり、材料の分量の間違えたりもあつたが、笑顔が灯るおいしいマジパンができた。試食するとおいしかった。

「これなら優勝間違いなしだ。」

ジュピターの言葉に頷くジェドーラたちだった。

城のサロン

サロンでは、金色のシニヨンのメイドが窓を拭いている。壺や、

床を磨いているのは、狐顔の少年と賢そうな少年だ。2人は不服だ。
「どうして、僕達がこんなことしなきゃいけないんだ。」

「お手伝いさんが、ぶつくさ文句言わないの。しょうがないでしょ。家出姫のボディガードするんだから。普段は、この城の役割の担当で敵が出たら戦闘にでるの。」

「でも、聞いてないよ。しずかくんや野比くんはお目付け役担当だなんて。」

その時、狐顔の猫が足裏を埃をつけてサロンにきた。メイドは、それをキツと睨み、ベランダに手足を固定して宙吊りにした。メイドは、パンパンと重なるように手を叩いた

「わく、チルチルく！」

飼い主の少年が止めようとしたが、メイドに止められ、サロンに入れ戻された。

猫はチルチルで飼い主はスネ夫だ。床を拭いている少年は、出来杉。メイドはうさぎだ。

うさぎ達は、ブローチと残りの虹水晶を探しにこの時代に来たのだ。着いた所は、城の中で幸い目撃者は城の王妃で捕まることはなく、すぐに打ち解けられた。

「貴方ね。あの狐猫の仕付けが悪すぎるわよ。せつかく拭いた床をまた汚したんだから。イタズラ猫はこういうお仕置きが必要よ。」

「だって……。」

「誰だっけ？人の虹水晶を取ったのは？」

「……僕達です。」

「判ったら、バカ猫の仕付けしなさい。」

うさぎはスネ夫の頭を左の拳で強く叩いた。

「はい。」

スネ夫は泣き顔だ。

ちなみに先日の探偵の少女はうさぎで国王の依頼でジェニー姫を搜索に来たのだ。もちろん持っている変装ペンで探偵に変装した。連れて帰れたものの、ジェニー姫は嫌な予感がするため、うさぎ達

が守ってあげることにしたのだ。ちなみにお手伝いをする時は、ヴィーナスたちセーラー戦士は変身を解いているのだ。

そんなうさぎの横をジトーとウェスタン風の衣装を纏ったネコ型ロボットが、はたきを手にしながら睨んでいる。

「おいおい。いくらなんでもやりすぎだぞ。変身出来ねえからって八つ当たりもほどほどにしとけよ。」

うさぎは異を唱える。

「だめ。こういう悪い子ちゃんには、それなりにびしつといかなきゃのび太くんみたいないい子にはなれないの。」

「たく。のび太達には甘いんだから。」

「さて、窓拭きの後は、夕食の材料の買い出しつと。」

その時、・・ズ Teen、ばしゃーん・・と転んだ音と水を被ったような音が聞こえた。

「美奈子ちゃんだ・・・。」

美奈子は掃除に自信満々のうさぎと違って家事全般は苦手だった。以前うさぎ達が風邪を引いたときも彼女に看病してもらったが、逆効果だった。

スネ夫たちも呆れている。

大広間

「美奈子さん、大丈夫？」

予想通り、美奈子は掃除の最中に足を滑らせ水の入った桶を巻き添えにして転んだのだ。その場にはほたとドラミもいるのだ。美奈子はずぶ濡れになり目を回している。

買い物籠を持ったうさぎが現れ、

「やっぱりだ・・・。」

と呆れている。

「あら、うさぎさん。お出かけ。」

「うん、買い出しついでにパトロールに行ってくる。テルルが何を企んでいるか気になるし。」

「だったら、護衛でも付けておけば。」

「護衛？」

町の中

護衛はムーン・スティックを所持していたドラニコフだった。

「なんで、アンタ？」

「がうがう。（細かいことは気にしない。）」

ドラニコフはうさぎと手を繋いでいる。とりあえず、買い物は済ませて帰ろうとしているとき、ムーンスティックは反応している。

「あれ、ムーン・スティックが。」

洋菓子店に反応している。

「あそこに虹水晶が。」

うさぎとドラニコフは、店に入っていた。

第二九章スペインのオカシナナ参（後書き）

オカシナナまで後4日。間に合うでしょうか。
あと少しでテルルとの戦いです。

第三〇章スペインのオカシナナ四（前書き）

あと少しで魔女テルルとの戦いです。ジェニー姫の笑顔は無事に取り戻せるのでしょうか。

第三〇章スペインのオカシナナ四

洋菓子店の前

「この店って、ジェニーちゃんが此処に逃げ込んだ店だ。」

ジェニー姫は、店の青年・ネフライターと兄妹のように仲良しだったので、姫はよくこの店に来ている。国王は、うさぎに搜索を依頼する時姫の行きそうなところをマークした。もちろんネフライターと仲良しだということ知っている。洋菓子店は特に知っている。うさぎは此処だと思いジェニーを迎えに来た。

「まさか、こんなところにあるなんて気付かなかった。」

「がうがうがう。（とにかく此処を探してから帰ろう。）」

「うん。そうしよう。」

うさぎも翻訳こんにやくを食べたため、ドラニコフの言葉が判る。

店の中

チャリンチャリン。

「ごめんください。」

「がう。」

店に入るうさぎたちだった。店から同じ年頃のセーラー服風のコスチュームの少女が出てきた。

「はい。ってあれうさぎちゃん？」

「あらま、ジュピターちゃん。」

「がう。」

ジュピターと思わぬ再会（ただしドラニコフは初対面）だった。

店の厨房

うさぎ達はジェドーラやペロと再会した。でも、うさぎはエル・マタドーラとは初対面だ。

「ほう、今度のセニョリータは、チャイナ少女みたいな髪型がチ

ヤムポイントだな。」

「セニヨリータ？チャイナ少女みたいな髪型？」

うさぎは、困惑している。

「エルちゃん……。」

「がう。」

ジュピターとドラニコフは突っ込む。

ウラヌスとネフライターはくすくすと笑う。

「随分と個性的で可愛いお嬢さんだ。まさかあの探偵さんがこの子とは知らなかった。」

「個性的がこの子の最大な特徴です。」

「うう。」

うさぎは、更に混乱だ。

「ねえ、うさぎちゃん、どうして此处に？」

「実はね……。」

うさぎは事情を話した。

「そうか。すまない、君を困らせるようなことしてしまつて。」

「そんな、私こそ聖杯を壊してすいません。直ったら後でお返しします。」

「いや、そのまま持つていてくれ。」

「……はい。」

うさぎは、なんとなく頷く。

「そういえば、数日後に御菓子のコンクールがあるんだ。課題はマジパンで、試しにそのマジパンを1つどうぞ。」

ネフライターは、トレーのマジパンをうさぎに見せた。形は、色とりどりの薔薇やハート型、あと三日月状の形、どれも個性的で笑顔いっぱいだ。試しにうさぎは、ハート型を試食する。

「おいひー！」

うさぎはもうほわほわだ。

「がうがう？」

「くコンクールって、4日後に城で開催されるコンクール？>だ

って、そうだよ。」

ジュピターはドラニコフの言葉がなんとなく判るのだ。

「そういえば、ネフライターさんだっけ、コンクールに出るって
言ってませんでしたか？」

「そうだよ。」

「確か審査委員は、ジェニーちゃん達城の王家の人たちでしたね。」

「そうだよ。」

「なるほど。お話は国王様から伺いました。あたし達は国王様の
頼みでジェニーちゃんのボディーガードをしているんです。」

「頼もしいお嬢さんだな。」

「だったら、今度のコンクールで落ち合おうか。」

「はい。」

「忘れるところだった。これを渡さなきゃ。」

ウラヌスは、懷から聖杯の蓋と虹水晶をだし、うさぎは受け止める。

「虹水晶と聖杯の蓋だ。ありがとう、ウラヌス。」

「どういたしまして。」

ドラニコフは、こそそそと残りのマジパンを食べようとするが、
どこでもドアが現れ、ドアからキッドが飛び出し、

「うさぎ！ドラニコフ！」

怒鳴り声にうさぎ達は、吃驚した。ドラニコフは、こそそそと逃
げるも襟首を捕まれてしまう。

「帰りが遅いと思って探しに来たら、こんなむさい店で油売りや
がって。」

「そんなにむさいのかな。」

ネフライターは、ぽかんとした。うさぎも捕まり、引きづられて
しまう。

「美奈子みてえなドジ扱きやがって！帰るぞ！」

「はひー！ごめんなさーい！またね、ジュピターちゃん。」

「がうがう！」

うさぎとドラニコフはキッドに連行されながら手を振る。

「う、うん。今度のコンクールでまた会おうね……。」

ジュピターも手を振る。どこでもドアが消え、嵐が収まった。

「全く、キッドは短気だぜ。」

「うん、うさぎちゃん達大丈夫かなあ？」

「どうせ、今頃あのキッドとか言う奴に絞られてるだろう。」

「もう、やめてよ。ウラヌス……。あれ、マジパンが……消えた？」

確かに机のマジパンがトレーごと消えている。

「なぬ!？」

「キッドだな！キッドのドアホー！マジパン持ってくな！」

城内

「うめえな。このマジパン。」

キッドは、マジパンを食べている。もちろんうさぎ達も一緒だ。

エル・マタドーラの感は当った。

コンクールまで後4日、うさぎ達はとう戦うか。

第三〇章スペインのオカシナナ四（後書き）

コンクールの日が来ます。うさぎちゃん達は、どう困難を乗り越えるのでしょうか。

第三章スペインのオカシナナ五（前書き）

今、思ったら王ドラ達、どうしたんでしょう。アラビアかブラジルで迷子になってなければいいんですが。

第三章スペインのオカシナナ五

夜・城内・ジェニー姫の部屋

ジェニー姫はかなり浮かない顔だ。いつ魔女が自分を狙うか判らないからだ。そんな、ジェニーに、

コンコンとノックがする。

「どうぞ。」

「失礼します。」

入ってきたのはうさぎだった。うさぎは、にこやかな笑顔で最後に残ったマジパンを差し出す。

「はい。これ、キーちゃんが態々お土産として持ってきたマジパンなんだ。」

正確には、キッドがくすねてきたものだ。（後でエル・マタドールと大喧嘩になってしまう。）

ジェニーはそれを口にする。

「わあ、おいしい。」

ジェニーは、無邪気な笑顔を見せる。

「わあ、笑った笑った。ジェニーちゃん、貴方みたいなお姫様は、笑顔が大事だから、恐いなんて思わず希望を強く持とうよ。町の人もお城の人もおたしたちもジェニーちゃんの見方なんだから。」

「見方？」

ジェニー姫は、仲間がいることを忘れていたらしい。しかし今は仲間がいて友達もいる。

「ありがとう。うさぎさん。」

コンクール当日 城内 宴会室

出場者のチームは集まっていた。ネフライター達の番号は、31番だ。

「うわー。こんなに人が集まっている。」

「町の人たちは、みんなあのお姫様が大好きだからな。」

「中には求婚者達もいたりして……。」

ネフライターがからかう。

「ヘンなこと言わないでよ。」

ジュピターの突込みが入る。

ラッパの音色が聞こえた。

「国王様・王妃様・お姫様のおな-りー。」

影から面白い外見の男性と美人で朗らかな女性、後問題の愛らしい女の子が姿を表す。傍らにはメイド服の3人娘（そのうち一人は白猫をもう一人は黒猫を肩にのせている）が微笑んでいる。

「美奈子ちゃんたちだ。」

「せつなだ。彼女もいっしょか。」

ジュピター達も微笑む。しかしそのうち一人にウラヌスはギョツとした。

「土萌ほたる。どうして此处に？あの子は赤ん坊になったはずだ。」

「

ラッパを吹いているのは、二人の子供達（一人は肩に猫をのせた

狐顔 スネ夫 もう一人は賢そう 出来杉）だった。

「うさぎさんは、人使い荒いな。何もラッパを吹かせるなんて。」

「ホント、やな人。」

今の台詞は肩に小鳥をのせたタキシードの青年。彼は手を振っている。

その人たちにネフライター以外は見覚えがあった。思わずジュピターたちも手をふる。

「サタ国王だ。」

「ジュリ王妃よ。」

「ジェニー姫です。」

「うさぎちゃん、ちゃんと説得できたんだ。」

「可愛さの裏腹に説得力が強いな。」

「関係ないない。」

エル・マタドーラに突っ込むジェドーラだ。

傍らには仔犬のペロもいるがそつとドラニコフが回収した。エル・マタドーラと目が合い、……頼むな。……というように合図してドラニコフはにこにこしたペロと退散した。

「今日は、年に1度開かれるパシエコンクール！」

「人々の望む平和を導く御菓子を作るコンクール！」

「わが娘ジェニーのためにお越しくださって本当に感謝します。」

「そんな姫に笑顔をお与えください。」

「ジェニーの不安を解消してください。」

「姫が特大の笑顔ができれば優勝です。みなさん、お願いします。」

「よし、姫様の笑顔のために頑張るぞ！」

「オー。」

「つとその前に着替えた。」

ウラヌスは気が重かった。その様子を2体の黄色いネコ型ロボットが透明マントで覗いている。

「なんかまずいぞ。ドラミが復活させたことがわかったら苛められちまうぞ。」

「外部太陽系三戦士っていったかしら、あの人たちほたるさんが嫌いなのかな。でもあの人はその力を利用していただけなんだわ。あの人たちにそれを判ってもらえばいいのよ。」

「でも、万が一ドラミを苛めようとしたら俺が説得してやる。オメーもサターンも悪くないことは、みんなわかってる。」

「ありがとう。」

見つめ合う二人に目に炎を灯したドラえもんが割り込む。

「いちやつく暇があるなら、監視に専念しろ！」

《はい。ごめんなさい。》

「ドラえもん、落ち着いて。」

ドラえもんを取り成すノラミヤーコだ。

一方その横では審査員がジェニー姫を睨んでいる。そこを同じく透明マントを被ったのび太とじろくが見ている。

「あれが、ウィッチーズ5のテルルか」

「大人しそうに見えるけど、強そうね。どんなダイヤモンドを使うのかしら。」

「まさか、御菓子に取り付こうってことはないよね。」
「へでも、僕は、しずかちゃんと一緒によかった。うさぎさんは恋のキューピッドだ。」

のび太は嬉しそうだ。

「とりあえず、うさぎさんに報告しましょう。」

のび太は頷く。糸なし電話を使う。

「こちらのび太。うさぎさん聞こえますか。」

特別席の影

「こちらうさぎ。テルルが表れたのね。こっちの方は異常ないわ。ただいやな予感がすることだけが確かだわ。それにしてもせつなさ。んっ。たらしい加減ほたるちゃんに慣れてもらいたいわ。さつきからずっと監視してて。」

その時、誰かの声がした。

「ちよいとそこの怪しいウェイトレスさん。」

ひーっとうさぎの顔が引きつる。振り向くとカンフー衣装のネコ型ロボットがうさぎを睨んでいる。

「あの。私この城のメイドです。」

うさぎは訂正するがロボットは今だうさぎを睨んでいる。

「メイドなら、なんでレストランのウェイトレスの服を着ているんですか？」

「ウェイトレスとは限らないでしょう。あはははは。」

笑うが、ロボットに応接間に連行されてしまう。

「あの、ちよつと放してください。私は怪しくありません。」

「話はあちらで伺います。」

そこで連絡は途切れてしまった。

宴会室

ジューピターとウラヌスはコンクール開始前に城の執事に使用人の部屋をかしてもらい、変身を解き、メイド服に着替えた。はるか、セーラー戦士時以外の女性着（中でもスカート）は初めてだ。

「ほう、二人とも変身の時と全然かわんねえ可愛さだな。」

「エルちゃん、褒めるか貶すかどちらかにしてくれよ。」

「まあまあ、僕もセーラーウラヌス時以外の女装は初めてだから。」

「

「まあまあ、とにかく頑張って姫様の笑顔を取り替えそう。」

「そうだね。とくかく作業開始。」

そんなまことたちの様子を特別席から見守るルナ・アルテミスは微笑むのだった。

第三章スペインのオカシナナ五（後書き）

次回はテルルとの戦いです。スペインの平和を彼女達は取り戻せるのでしょうか。

第三章スペインのオカシナナ六（前書き）

うさぎちゃんは、監視中にカンフーロボットに連れ去られてしまいいりタイア。ジェニー姫の運命はいかに。ジュピターたちの戦いは今始まるうとしている。

第三章スペインのオカシナナ六

応接間

応接間の外を眺めるセワシ・マーキュリーとネプチューン。見事にスペインにたどり着いたらしい。スペインに来た理由は王ドラが分かれて行動しては危険だと言った。だからみんな一緒に力を合わせれ行動すれば、事件は無事に解決という案で最初にスペインに来たのだ。

「此処がスペインか。なんか豪華な国ね。」

「豪華というより綺麗な国と言ったほうがいいと思うわ。」

「似たようなものじゃない。」

笑いあう3人に、ドアが開き連れの王ドラがメイド服の少女を引きずっている。

「王ちゃん。」

「うさぎ、どうして此処に？」

「お知り合いですか？」

「ええ、まあ。」

うさぎ達は互いに事情を説明しあった。

「それで、メイドさんになって様子を伺ってたの。」

「うん。でも、その王ちゃんとか言う猫ちゃんに捕まってリタイアしちゃった。でも、事情が判ったから監視に戻ります。失礼します。」

「ちよつと、待って。貴方に返さなきゃいけないものがあるの。」
ネプチューンは特別席に向かううさぎを呼び止め、虹水晶と聖杯の欠片を渡す。

「ありがとう。」

「いいえ、私こそごめんね。うさぎのためとはいえ、虹水晶をとってしまうなんて戦士失格ね。」

「そんなことはありません。虹水晶が見つかっただけでいいんです。」

では、今度こそ監視に戻ります。」

うさぎは部屋を出ようとするが王ドラにスカートを引っ張られてしまう。

「ちよつとなにすんの！？放してよ！」

「だめですう！変身が出来ない以上此処で待機していなさい！」

「やだやだ！」

スカートを押えながら監視に戻ろうとするうさぎであった。

宴会部屋

チャレンジャーのチームが次々と御菓子を出す。両親と姫は味見に専念する。どれも姫の口に会うのでなかなか勝負がつかないのだ。

「よほど好かれるんだな。」

「みんな姫様を元氣付けようと必死なんだ。」

「まるでうさぎちゃんだよ。」

「あの女、うさぎっていったけ。説得力が強いから誰とでも仲良くなれるだろ。」

「それより、そろそろマジパンが焼きあがる頃だ。」

ジエドーラは、マジパンを焼いている竈を開けようとしたが、火は消えておりしかも蛻の殻だ。

「あれ、マジパンがまた消えた……。」

「まさか……。」

マジパンはふわふわ浮いている。そこへ、ピー子が突付いてきた。「いててて。何すんだよ。」

賺さず布のようなものとマジパンを取られる。取ったのは部屋の隅に隠れているネプチューンだった。その横にマーキュリーがいる。

「ネプチューン？」

「盗み食いはいけないことよ。狸ちゃん。」

「いてて。俺は猫なんだけどな。」

なんと犯人はキッドだった。

「出たなキッド。」

「何が『出たな。』だ。」

「1度ならず2度までもマジパン摘み食いしようとしやがって。」

「いいだろう。マジパンの1個や2個。」

ぐぬぬぬ。キッドとエル・マタドーラはにらみ合う。ドラミは「そこそとするが、王ドラに透明マントと剥がされる。」

「ドラミさん。」

「はい……。」

ドラミは喧嘩の仲裁に入る。

「ネプチューンとマーキュリーかな？君達の名前は。で、この子達は？」

「こいつらに関しては俺が説明する。まず、このリボンの女の子はドラミ。友達の妹だ。続いてマジパンを取ろうとしたロボットはキッド。正確にはドラ・ザ・キッド。特技は射的とさつきみたいな摘み食い。」

「余計なこというな。」

「最後に王ドラ。特技はカンフーと頭を捻ることだけど、時には悪知恵を出すんだ。」

そこへ王ドラのハリセンが炸裂。

「いつ、私が悪知恵出したんですか！？」

「いいじゃんか！減るもんじゃなし！」

「まあまあ、二人とも。」

またもや仲裁に入るドラミ。

「それより、亜美ちゃん達、此处でなにしているんだ。」

「隅から隠れて監視してるの。」

「オメーらも透明マント着て監視すりゃいいのに。」

ピー子に頭に乗られたキッドは呆れている。

「こうした方がしやすいのよ。」

「あんな。」

そういえば、うさぎはどうしてるんだろう。」

キッドは糸なし電話で連絡を取る。

キーちゃん、助けて〜！

「どうしたうさぎ？ダイモーンか!？」

違うよ〜！ネプチューン達の連れのネコ型ロボットに応接間に閉じ込められた〜！

「ひでえことすんな〜。」

「ひどくありません。変身できないお嬢さんが戦いにでたら怪我だけじゃすみません。」

王ドラはキッドから電話を取り、

「しばらく、そこで頭でも冷やしていなさい。」

連絡を切り、電話をキッドに返した。

「ドケチなロボットだな。ドラちゃんは、もっといい仲間持てないのか。」

ジュピターは聞こえないようにぶつぶつ言ったが、王ドラに聞こえてしまい、

「文句言う暇があるならそのマジパンを姫に届けたらどうですか？」

と怒られてしまった。

廊下

セワシはうさぎをこっさり逃がした。彼は見張りをしていたが、うさぎが可愛そうなためにうさぎを出して、特別席に向かった。そこでドラニコフと遭遇する。

「ドラニコフ。」

「がう。」

微笑むドラニコフだった。

宴会部屋

いよいよネフライター達のマジパンが発表される。今度は、どら焼きに似せたものだ。

「これで2度目だな。」

「マジパンなんて食べるだけで笑顔がいつぱいになるわ。」

ジェニー姫はその1つを食べようとするが、シニヨンの女性が卵のようなものを飛ばす。卵ははるか達に気付かれないようにマジパンに取り付いたが、うさぎの代理で監視していたドラえもん達に見られてしまった。

マジパンが光りだした。

「何!?!」

姫はパンを放す。パンはドロイドのマジパンの瓜二つのダイヤモンドになった。

「マジパン!」

「くそ、ダイヤモンドが表れたか!ノラミャーコさん、うさぎちゃんに連絡して!」

「わかった。」

ドラえもんは戦いにたつ。

「うさぎちゃん、大変よ!ダイヤモンドが出たのよ。」

廊下

セワシ・ドラニコフとうさぎは特別席に向かおうとした。

「うん、わかった。」

「すぐに行く。」

「がう。」

ドラニコフ達も頷く。

宴会室

王家の人はかなり怯えている。マジパンが怪物になれば誰でも怯えてしまう。

マジパンは両親に生クリームをかけてクリームの像にしてしまった。

「キヤー!お父様、お母様!」

駆け寄るジェニー姫の手をダイヤモンドは掴んだ。

「平和を望むお前のピュアな心を頂くぞ。」

「そうはさせるか！」

はるかには駆け寄ろうとしたが、蔓にまこと・美奈子・せつな・ほたと捕まってしまった。振り向くと黄緑のシニヨンの少女が腕から蔓をだしてはるかたちを締め付けている

「ふふふ。邪魔者は私が必要とかするから、マジパーンはお姫様からピュアな心を回収して。」

「はい。マジパーン。」

マジパーンは右掌の星からビームを出した。

「キヤー！」

「ジェニーちゃん！」

苦しむジェニーからピュアな心の結晶が表れ、テルルの星の飾りに収納された。

その時、

「ちよつと待った！」

ドラえもんが高い場所で登場した。頭を下に向け、飛び降りた。

「どりゃー！ー！」

石頭を食らわせるつもりらしい。しかし、彼もまたテルルの蔓に捕まってしまった。

「うぐぐ。」

「馬鹿な狸ちゃん。私にそんなせこいのが聞かないわよ。」

「いい加減にしなさい！」

彼女の前に現れたのはタケコプターをつけてモップを片手にしたうさぎだった。うさぎは、モップでテルルの左頬を殴り落とした。同時に蔓は緩んだ。ドラえもんは落ちてしまうが同じくタケコプターをつけたドラニコフとノラミャーコに受け止められた。

「うさぎちゃん。」

「みんな大丈夫。」

「はい。ありがとうございました。」

「でも、どうしよう。大勢の人の前じゃ変身できない。」

「あたしに任せて。タキシード仮面様。マーキュリー達と協力して出場者の人たちを中庭に避難させて！」

「判った。」

うさぎは糸なし電話で、

「しずかちゃんとのび太くんはネフライターさんと協力して城の人たちの非難をお願い。」

はい！

うさぎは、下にきた出来杉たちの目に届くくらいに降りて。

「アンタ達は、ジェニーちゃんを連れて応接間に行ってなさい。」

「でも・・・うさぎさんが・・・。」

「償いはどうするの!？」

「わゝ、行きます行きますゝ!」

スネ夫は泣きそうな声を出して、出来杉と一緒にジェニー姫を応接間に運んだ。

「みなさーん。危ないから中庭に非難してください。」

ネフライターたちは、自分達以外の人間を非難させた。

「ドラえもん、城の中にいた人たちは全員中庭に非難して今、のび太やペロ達・動物達が守ってるぜ。」

エル・マタドーラがキッド達を連れて駆けつけた。

ドラえもんたちも降りてきた。

「よし、みんな変身よ。」

「オー!」

第三章スペインのオカシナナ六（後書き）

マジパーンとセーラー戦士の戦いが始まります。
ジェニー姫達の心は、取り返されるのでしょうか。

第三章スペインのオカシナナ七（前書き）

テルルとの対決が来ました。聖杯の欠片もスネ夫達が盗んだ虹水晶も大分集まってきました。

のび太くんもうさぎちゃんも大分しつかりものになってきました。

第三章スペインのオカシナナ七

宴会部屋

「ヴィーナス・スターパワー！」

「ジュピター・スターパワー！」

「メイク・アップ！」

美奈子はセーラーヴィーナスに、まことはセーラージュピターに変身した。

「ウラヌス・プラネットパワー！」

「プルート・プラネットパワー！」

「サターン・プラネットパワー！」

はるかにはセーラーウラヌスに、せつなはセーラープルートに、そしてはたるはセーラーサターンに変身した。

「ドラセロナのみんなやジェニーちゃんの笑顔とピュアな心を奪うなんてこれはあまりにも酷すぎるぞ。そんな魔女は、木星に代わってヤキ入れてやるよ！」

「随分とやる気満々ね。この城にいた人たちの心も奪っておこうとおもったのに・・・。」

扉が開きネフライターが戻ってきた。

「ジュピター！」

「丁度いいのが来たわ。」

テルルはぱちんと指をならすと天井から薔薇の怪物が現れた。

「う・バーラ！」

「畜生！もう一体ダイモーンがいやがったか！」

ダイモーンは、ネフライターの襟首を掴み、口からピュアな心を奪って飲み込んだ。当然ネフライターは倒れる。

「ネフライター！くそ、あの人まで。」

「卑怯だぞ！」

セワシは怒鳴った。

「何とでもおっしやい。う・バーラは、この出来損ないの犬や狸ちゃんをお願い。マジパーンはセーラー戦士をお願い。」

「了解！」

「セワシくん、ネフライターを頼む。」

「はい。」

セワシは、ネフライターを背負って応接間に向かう。

う・バーラ対ドラえもんズ、マジパーン対セーラー戦士の戦いが始まった。

「ワールド・シェイティング！」

地の球体がマジパーンを襲ったが、ホイップになった手から出す生クリーム液で固められてしまった。

「ワールド・シェイティグが……。」

「くっ、シュープリーム・サンダー！」

雷の衝撃波も、生クリームで消されてしまう。

「技が効かない。どうしよう。」

ホイップの腕から数量のドーナツが発射され命中されたジュピターとウラヌスは巨大ドーナツにはまってしまった。

「こういうの前にもあったような……。」

「僕は初めてだけど……。」

一方ドラえもん達は。

「えい。」

ノラミャーコは年代物の弓矢をだし、う・バーラを射ようとしたが、

「ふん。そんなもの。」

う・バーラは弾いて、矢はエル・マタドーラに向けられた。

「危ない。マタドーラさん！」

「大丈夫だ。そりゃ！」

マタドーラは、剣で矢を切った。

「なかなかやるわね。」

「お前もな。おぼはん。」

「おばはんねえ。言ってくれるじゃない。」

蔓になった腕を伸ばした。

「痴漢撃退バリアー！」

ドラミたちの周囲にドーム状のバリアーが張られ、蔓を防ぐ。

「やるじゃない。だったらこれでどう!？」

地面から蔓が出る。

「お兄ちゃん、危ない！」

ドラミはドラえもんを突き飛ばした。ドラミとエル・マタドローラは、う・バーラの蔓につかまってしまった。

「ドラミ、エル・マタドローラ。」

「あらまあ。なんとも弱そうな子達ね。」

「んだと!？どかー・・・、うぐ!？」

キッドも捕まってしまった。

「キッド・・・。きゃ。」

ノラミヤーコも捕まってしまった。

「キッド、ノラミヤーコ!こいつめ!」

ジェドローラは巨大フォークをダイヤモンドに向けて突進してきた。

しかし簡単にかわされ、蔓になった手に捕まる。

ヴィーナス・プルート・サターンは苦戦中だ。

「これなら、どう?クレッセント・ビーム・シャワー!」

光の雨はダイヤモンドに降り注ぐが、ケーキバリアーでかわされてしまう。

「デッド・スクリーム。」

赤紫の球体で迎え撃つがかわされてしまう。

マジパンのケーキのマシガンにあたり、ヴィーナスとプルートはケーキのデコレーションにされた。

「なんかドロイドのマジパンに似てない。」

「そうでしょうか。」

ヴィーナスたちも苦戦である。

とうとう怒ったドラえもんは、

「もう許さないぞ。ショットガン！これでも食らえ。」

ショットガンをう・バーラに向けて攻撃した。う・バーラ地面から数本の蔓を出し厚い壁を作った。この厚さだと、ショットガンの光線が効かない。結局ドラえもんは、う・バーラの蔓の手に捕まっていた。

「ほほほ、なんかカンダで全然対したことないじゃないの。」

「テヤー！」

うさぎのモップがテルルを殴ろうとした。テルルはそれを避ける。「私としたことがもう一人威勢がいいのがいることを忘れていたわ。」

「元気で悪かったわね！この！」

うさぎはモップを振り回す。テルルは何度も避け、遂に手から蔓をだす。

「マンドラゴラバスター！」

「あう！」

「うさぎちゃん！」

うさぎは、テルルの蔓に捕まってしまふ。テルルはうさぎの背後に回り、首筋にも蔓を巻きつけた。

「変身できなくても勇気まで失わないなんて対した子だわ。でももう終わりよ。」

蔓で更に首を絞めようとした。そこへ

「ハチャー！」

王ドラのカンフー蹴りが炸裂した。テルルはけりとはされて、うさぎは蔓から解放された。王ドラの後、頭にアルテミス達を乗せたタキシード仮面とタンコブだらけのドラニコフが降りてきた。

「うさぎちゃん、大丈夫？」

「大丈夫。ニコちゃんこそ大丈夫？コブだらけだけど。」

「うん大丈夫。実は王ドラに怒られた。」

「うさぎさんを此処に案内したからです。貴方も貴方です。変身できないから大人しくしてください。」

「はい。」

「まあまあ。」

「うさ子には悪いが、やつぱり君を放つてはおけなかった。」

「ドラえもんやまこちゃんたちは、私達が助けるからうさぎちゃんは今早く逃げて。」

「ごめんなさい。私のために。」

うさぎは特別席の影に隠れる。

その後、

「シャインアクア・イリユージョン！」

「ディープ・サブマージ！」

海の球体はう・バーラに、水流はマジパーンにかかり2体はドロドロに溶けるような形と萎れた感じになった。とたんにウラヌス達は、元の姿に戻り、ドラえもん達は蔓から解き放たれた。

「お待たせ。」

「うさぎ、遅れてすまなかったわ。」

助けたのは、ネプチューンとマーキュリーだった。

「マーキュリー。」

「ネプチューン。」

「よし、今のうちに。」

うさぎは、ムーン・スティックを取り出した。

「お願い、ムーン・スティック。力を貸して。」

今まで集めた虹水晶と聖杯の欠片が輝きうさぎは再びセレニティに変身した。

「お団子頭？」

「これが、プリンセス・セレニティ。」

「綺麗！」

ウラヌス達は、プリンセスの姿は初めてだ。

「あれが、例のセレニティか。女神様みたい。」

セレニティは、ムーン・スティックを掲げる。

「おい、うさぎー！その可愛い姿で敵をやっつけちゃえー！」

マタドローラは下から歓声を上げる。セレニティは笑顔で頷く。

「ムーンヒーリング・エスカーション！」

ムーン・スティックから光が進る。

「んぐぐ。」

「くうう。」

「「リフレッッシュユー！」」

う・バーラは黄色の薔薇、マジパンは元のマジパンに戻った。

マジパンは、ジェドローラが皿で受け止めた。

「全く。食べ物に乗り移るダイモーンなんて聞いたことないぞ。」

「いいのよ。ジェイちゃん。」

セレニティは、高いところから仙女のようにゆっくりふわりと舞い降りてきた。

「マジパンは無事だったんだから。」

「よくありません。」

王ドラが割り込んだ。

「なんて余計に戦いにくい格好をしているんですか。」

「いいじゃんか。可愛いんだから。」

「そういう問題じゃありません。」

王ドラとマタドローラのやり取りの間にテルルが震えだした。

第三章スペインのオカシナナ七（後書き）

あと少しでスペイン編は終わります。
テルルは次回で消え去ります。

第三章スペインのオカシナナハ（前書き）

テルルの最後です。スペインに平和が戻ります。

第三章スペインのオカシナナハ

宴会部屋

「やってくれるじゃないの。セーラー戦士、プリンセス・セレニティ。これで勝ったと思わないでよ。」

テルルは、どこからか珍しい妖花を取り出した。

「それは、闘牛場でインチキ商売してた花じゃなか。」

「これは、テルルンよ。」

テルルは、テルルンに魔法をかけた。テルルンはみるみる大きくなって、強大な吸血花になった。

「このハイパーテルルンが君達の相手をしてくれわ。この子はピュアな心に反応するの。ピュアな心を吸い取ると捕まえた人と自爆してしまうほど恐いのよ。死にたくなければ。その角狸ちゃん。ポケットに隠してある聖杯の欠片をちょうだい。」

マタドローラは1本の薔薇を掴んだ。狸と言われたことと、町の平和を乱そうとしたことに腹が立った。

「そこまでいうなら、くれてやるよ。この薔薇をな！」

テルルに向かって薔薇を投げた。薔薇はテルルから星を弾いた。星は床に落ちて砕け、ピュアな心の結晶が飛び散った。その心をテルルは集めようとするが、ハイパーテルルンが反応してしまい、捕まってしまった。

「またしてもこんなことに。」

「自業自得だ。その格好で頭冷やしやがれ。」

「マタドローラさん。」

「なんだよ。ドラミ。」

「あの植物は確か捕まえた人と一緒に自爆するんだと言ってたわ。」

「だから？」

「私たちも巻き込まれるかもしれないわ。」

「なぬ！？お前の痴漢撃退バリアーでも防げないほど、強い威力か！？」

「そう。」

「わわわ、大変だ。」

「ドラえもんの地球破壊爆弾より強力な爆発はごめんだぜ。」

ゴツンッとドラえもんはキッドの頭を殴った。

「大きなお世話だ！」

爆発が起きた。

「もうだめだ！」

一同は目を瞑った。しかし全員は無傷だった。なぜならば、テルルは強力な球体型の結界に覆われた。セーラーサターンのサイレント・ウォールがテルルを包んだ。テルルは結界の中で自爆した。

一同は目を開け、サターンは一同に微笑んだ。

「よかったわ。」

「ありがとう。」

礼をいうマタドローだった。

「ねえ、ウラヌス。セーラーサターンは、ファラオ90を倒した後、赤ちゃんに戻ったはずよね。」

「ああ、そうだ。」

「そのことは彼女に聞いたほうがいいです。」

彼女？

ブルートは無言でドラミにロッドを指した。

「ドラミちゃんという子ね。」

ブルートは頷いた。

夕方

町の人々はピュアな心を返してもらい、ジェニー姫もネフライタも心を取り戻した。

結局、コンクールは中止になったが、姫の笑顔が戻り、変身を解いた美奈子達も含めた出場者達とこのまま宴会を開くことになった。

「全く、泥セロ名の町の人々の心を返すのに一苦労したよ。」

「ドラセロナだよ。ハーファップの天然娘。」

美奈子のボケに突っ込みを入れるマタドーラだった。

一方ドラミはほたるのことではるか達に非難されている。

「どうして、セーラーサターンを甦らせたんだ。彼女は危険な存在だぞ。」

「だって、サターンと一緒に戦おうと言われた時は、破滅の戦士って知った時は怖かったから戸惑ったけど世界が危ないって言われた時は悪い人じゃないって思ったんですもの。」

「セーラーサターンを庇う人間はうさぎだけでたくさんよ。」

「もうやめてあげようよ。」

ドラミを庇ったのはドラえもん・キッド・ジェドーラ・まことだった。

「そうだよ。第一破滅の戦士だったって、俺達を守ってくれたじゃないか。」

「ほたるちゃんもアタシ達にとって今は大切な仲間だよ。」

「仲間？」

「そうそう、アンやエイルを人間にして許してあげるほど、キミはやさしい子だよ。さっきだってキミの防御術で僕達は助かったじゃないか。」

「なんか、滅びの戦士っていうより守りの戦士って感じたよ。」

「そう。そこまで言われると照れちゃうわ。」

はるか達以外は笑う。

「しばらく様子見ておいたほうがいいわね。」

「ええ。」

「そういえば、ドラミお前確かエル・マタドーラのことを『マタドーラ』って呼んでなかったか？」

「え、言ってたけ。」

「言ってたよ。」

キッドとドラえもんはドラミを睨む。ドラミは焦る。

「えっと、マタドローだっけ。」

「なんだ、アルテミスとか云う猫。」

「これから僕達と聖杯の欠片探しに行かないかな。」

「聖杯？まことやジェドローが言ってたアレか？」

「そうそう。」

「あれがあれば世界に平和をもたらすなら。協力するぜ。」

「ありがとう。」

「そのかわり、はるかと仲良しの女の子は許してやれ。」

「実はそのつもりよ。私達の仲間のセーラー戦士なんだから。」

うさぎのマタドロー・アルテミスの話し合いにスネ夫達は不貞腐れてしまう。

「なにさ。僕達はいいい様にこき使うのに、はるかさんたちはただ許すなんて。」

「不公平にもほどがあるよ。」

楽しむまこと達に、ネフライターとジェニー姫が現れる。

「ありがとうございます。この町を救ってください。」

「俺からもありがとう。町の人たちも大助かりだ。」

「いや、結局は仲間に助けられたよ。ジェニーちゃん、どんなことがあっても仲間を信じるんだよ。」

「はい。」

「もちろん、ネフライターも。」

「判った。ありがとう。」

こうしてドラセロナの人々の笑顔と町の平和が無事に取り戻せたのだった。

第三章スペインのオカシナナハ（後書き）

ジュピターちゃん達のオカシナナ物語は終わりました。

聖杯の欠片は大分直ってきたようです。みちるさんもはるかさんもうさぎちゃんの罰を受けなくて本当によかったです。

第三章 アラビアの怪盗 01 (前書き)

マーズのアラビアンアドベンチャーが始まります。
もしかしたら、老人シンドバットと遭遇します。
果たして、聖杯の欠片はどこにあるのでしょうか。

第三章アラビアの怪盗01

古代アラビア・砂漠の上

ジャー、ピシャピシャ。レイのペットのデimosとフォボスは探検セットの泥水浄水器で水遊び。当のマーズは水分補給している。

「はー、生き返った。アラビアってのは鳥取みたいに砂漠いっぱい
の国でそんなに暑いとは思ひもなかった。」

「エジプトだって、同じだよ。」

「ドラちゃんに探検セットを借りたかいはあったわ。フォボス達もあんなにはしゃいでるし、こういうのをからすの行水つていう
にかしら。」

「そういうんなら、せめて水溜りが必要だよ。」

「あらそう・・・。」

マーズたちは文字通りにアラビアに着いたが、中途半端な場所に到着してしまった。あまりの暑さに一行は何度も水分補給や水遊びをする羽目になった。

「砂嵐が来なければいいけど。後、塵気楼っていうお約束があったらうさぎみたいなギャグは控えたいわ。」

「まさかと思うけど、うさぎちゃんもドジなんだ。」

「『も』って?」

「ドラえもんも結構ドジなんだ。」

「なるほど、似たもの同士って感じね。」

パウえもんと笑いあうマーズだった。

「えーっと、聖杯の欠片は。」

マーズは羅針盤をだす。光は遠くを指している。

「かなり遠いわ。」

「羅針盤を頼りにいってみるか。」

マーズとパウえもん達は、羅針盤を頼りに進もうとしている。その時、空中に巨大な魔人が表れた。

「何あれ？アラビアンナイトの魔人？」

「そうみたいだ。」

「挨拶だけでもしましょうか。はあーい！」

マーズは無邪気に手を振る。魔人はそれに気付いたのか、マーズたちの前に降り立った。

「あれ、僕らの前に来ちゃった・・・。」

魔人はマーズたちに興味を持ったのか、マーズ達をみて両手で包むかのように抱き上げた。

「あわわわ。僕達は人形じゃないぞ。降ろしてくれ。」

魔人は自分のターバンに乗せて、再び飛び立った。

「何だか気に入られたみたいね。どこに連れて行くのかしら。」

「僕にも判らない。悪い奴じゃないことは確かだ。ご主人の頼みごとかな？」

そうしているうちに彼女達は魔人に連れられ、目先に綺麗な黄金の宮殿が見えた。

魔人は宮殿の中にマーズ達を降ろして、手を振って去った。マーズ達も手を振った。

「やっぱり、いい人だった。」

「それは、そうと此処どこだ。勝手に入っちゃったから、謝っておこう。」

「そうね。」

「すいませーん。何方かいらっしゃいますかー。」

「はい。」

奥から美青年の声がした。

「やっぱりだれかいたんだ。」

奥から美青年が出てきた。

声の主は鮮やかな金髪をターバンでまとめた綺麗な青年だった。

「どうもいっらしやいませ。」

「ジェライト？」

その美青年はダークキングダムジェライトにそっくりだった。

「あのどうかありませんでした。」

「すいません。私達、あるターバンを巻いた空飛ぶ巨人に連れてこられたんです。」

「空飛ぶ巨人ですか？承知しました。しばしお待ちを。王様。」

「ここだよ。ジェライツ。」

「「えっ？」」

「王様。」

どこからか男性の低い声がした。

「此处、此处。」

ライオンの像から声がした。なんとというか、ライオンの像が喋っている。その像はマーズ達の前に降りた。

「王様。ヘンな冗談は控えてください。」

像は、直立二足になって、両手を合わせてお辞儀をした。

「ごめんごめん。」

ライオンは、白ひげの男性になった。

「ワシは、この宮殿・黄金宮の主のシンドバッド。久々の客なものでつい驚かしてしまつて。」

「ワタクシは、お目付け役のジェライツ・ナイトと申します。大変申し訳ございません。」

「いえ、こちらこそ此处にきてしまつてすいません。」

「実は・・・。」

「あの巨人か。立ち話もなんじゃが中でゆっくり話し合おう。」
シンドバッドとジェライツは彼女達を宮殿に招き入れた。

コレクションルーム

シンドバッドは、マーズ達に自分のコレクションを紹介する。

「これは、空飛ぶ木馬。殆どの場合、空の散歩、偵察、及び空中戦に使つておる。不思議な単体用の乗り物じゃ。」

「確かにこの乗り物は一人しか乗れないわね。」

「お嬢さん、いい感想を言つてくれたな。」

シンドバッドは、ニヤニヤしながらマーズに詰め寄る。

「あはは……。王様、他のはないんですか。」

「いろいろあるぞ。例えば、この瓶じゃ。」

王様は一つの小瓶を見せた。中には黒人の男が入っている。

「これは、あの時の魔人。」

「この魔人は、瓶の蓋を開けると16mに大きくなり主人の命令に従えるが、強すぎて使いこなすのが難しいんだ。」

「これは、ちょっと弱いが……。」

シンドバッドがランプをマーズ達に見せた。

「扱いやすいのがこのランプなんじゃ。」

「へー、なんか面白そう。こすつてもいいですか。」

「どうぞどうぞ。」

王様はマーズにランプを渡した。マーズは丁寧にこすつた。中から可愛らしい精霊が寝ながら出てきた。

「確かに弱そう。」

「こら！何真昼間から寝ておる。お客さんに失礼だろう。」

王様の怒鳴り声に精霊は目を覚ました。

「わあ、すいません。い、いらっしやいませ。只今、食事の用意を致します。」

精霊は食堂に向かった。パウえもんはくすくす笑う。

「意外とドジな精霊さんだな。そういえば、お腹すいたな。」
パウえもんはお腹を押える。

食堂

マーズ達は、様々な料理を勧められた。全部精霊の作ったものだ。

「いやはや、すまん。あれは確かに使いこなせるがそっかしいのが玉に傷なんじゃよ。」

「いえ、こんなにご馳走になってうれしいです。」

その時、数人の踊り子達が出てきて踊り始めた。

「彼女達もこの城の人ですか。」

「そうじゃ、わしのコレクションじゃ。」

「え！」

そういつている間に踊り子の一人が倒れた。

「あちゃー、またネジを巻かないといかな。」

「確かにコレクションだわ。」

「お城の人たちはみんなコレクションか。」

そこへジェライツが話に加わった。

「いえ、私は真正正銘の人間です。先日、砂漠で旅してた時に王様に助けられ、それ以来は此処で働いているんです。」

そこへぜんまいを巻き終えた王様が来た。

「じつは、このコレクションはある遠い時代から来た男のお礼のものなんじゃ。」

その人は、ワシの冒険で助けた男でそのお礼にこの機械の城と機械の品を貰ったんじゃ。ああ、この城は実は機械でできてるんじや。」

「もしかしたら、その人って僕同様の未来の訪問者じゃないですか。」

「なるほど。そうじゃったのか。すると君は未来から来た……。」

「ロボットです。」

「ロボットか。それなら納得じゃ。来たついでになんだが頼みがあるんじゃ。」

「頼みですか？」

海岸

浜辺に一人の男がへばりついている。男は出っ歯が特徴で赤い帽子を被り、青い服を着ている。起き上がりながら男はぶつくさ言った。

「まったく、酷い目に遭った。こんな日の夜に嵐が来るなんて、ついてないぞ。」

男は嵐にあつて遭難したのだ。その傍らに駱駝がいる。

「あーあー。せっかく貯めた財産や売り物がどつかにいつちまった。わしゃ、一体どうしたらいいんだ。」

「おい、その男!？」

「誰だ!？」

「その駱駝を置いて、砂漠へ行け!さもなくば、首を切るぞ!」

男が3人剣を構えて現れた。1人は黒ひげのクリーム色の服を着た男。2人目は大柄で帽子を被った男。最後は小柄でスキンヘッドの男。

「お前は、カシム!」

「なんだ、アブジルか。驚かしてすまなかった。」

3人は剣を納めた。

数秒後

「なるほど、お前達も嵐に逢つて、この通り3人だけになったか。」

「そうなんだ。そこであんたに頼みがあるんです。オヤビン。」

「オヤビン?そうかわしの子分になりたいのか。よし、わかった。子分でもなんでも構わん。」

「「「ありがとうございます。オヤビン。」」」

頭を下げる3人だった。

「これから、わしと黄金宮に行かないか。」

「黄金宮?」

黄金宮とは、その名の通り金色に輝く宮殿だった。

アブジルはそこに言ったことがあるのだ。以前その主に砂嵐にあったところを救われて世話になった。此処を出る前に忘れ薬を飲んだ。しかし、飲んだ振りをしてこっそり吐き出したのだ。

宮殿には、様々なコレクションや財宝があり、中でも瓶の魔人は強大なのだ。

主はその秘密を邪な心の持ち主から守るために訪問者が宮殿を出る前にその薬を飲ませたのだ。

「その王になろうってんすか？」

「その通り。」

「だったら、俺をお目付け役にしてくだせえ。」

「俺達は大臣にしてください。」

「よしよし。」

こうしてアブジル一行の冒険が始まった。

第三章アラビアの怪盗01（後書き）

魔人に連れて行かれたレイちゃん達、今度はユーギアルと戦闘になります。

第三十六章アラビアの怪盗02（前書き）

ドラビアンナイトのようにアブジル達盗賊の登場です。
怪盗って言ったらドラパンが出てきます。

第三十六章アラビアの怪盗02

砂漠の洞窟前

アブジルたちはある洞窟の前に来た。

「この洞窟を通れば黄金宮に着くんだ。」

「なるほど。」

「でも、どうやって通るんすか？」

「うーん、確かに扉が閉まってるな。」

「なーに、任せろ。開けーゴマ！」

ゴゴゴ、岩の扉が開いた。

「な。」

「おー！」

手下達とカシムは大喜びで入った。

「でも、どうやって閉じるんだ。」

「あら、いけない。閉じよーゴマー！」

ゴゴゴ、扉は閉まった。とたんに中がキラキラ輝き始めた。

「うえー、きれいなところだな。すげー神秘的だ。」

そついいながら一行は奥に進んだ。もうすぐ出口だ。一行は扉を開けて、外に出てまた閉める。

「見ろ。あれが黄金宮だ。」

宮殿

「助っ人？」

「ですか？」

「そうなんじゃ。実は八日前にコレクションの1つ・月の冠をある泥棒に取られたのじゃ。その泥棒からわしらと一緒に取り返しにいかないかな？」

「それは、いいんですけど……。私達もお手伝いいたします。」
「良かるう。数は多い方が助かる。」

そこへ精霊が出てきた。

「お取り込み中ですが、ご用件はなんでしたっけ。」

「ちょうど、よかった。精霊さん、泥棒の特徴を教えてください。」

「はいわかりました。」

精霊は、紙と筆記品を持ってきた。紙に描き始めた。

「黒い服と黒い帽子を身につけて、あと体が紫で片手に金の杖を持った狸みたいな姿をしています。」

精霊は絵をマーズたちに見せた。驚いたのはパワえもんだった。

「こいつは、怪盗ドラパン。」

「怪盗ドラパン？知ってるの？」

「22世紀のフランスで有名な大泥棒らしいんだ。」

「ひどい奴。もしかしたら、聖杯の欠片を持ってるに違いないわ。」

「なんじゃ、その聖杯とは。」

「はい、実は。」

マーズはこれまでの事情を話した。

「なに、その欠片を探しにこの時代に来たのか！？よし、判った。」

コレクシヨンと欠片を取り返そう！

「ありがとうございます。王様。」

「そういえば、お嬢さんとお連れさんたちの名前は聞いとらんかったな。」

「そうでした。わたしは、セーラーマーズ。この子達は、フォボスとデイモス。」

「僕はパワえもん。」

「いい名前じゃな。ははは。」

船の乗り場

マーズたちは船で泥棒の居場所を探すことになった。その船にマーズは感動をしている。

「すごい船。」

「驚いたか。砂船じゃ。その名の通りに砂の上を渡る船じゃ。時間には掛かるが凄いスピードじゃ。」

「いつになるか判らないけど、この羅針盤で探した方が早いわ。」

「随分といいものですね。なんか知りませんが、行きましよう。」

『はい！』

「ともかじいっぱい！」

「はい。」

精霊がかじを回した。船は宮殿を後にした。その間マーズ達は船の上で面白いものを見た。砂いるかや砂鯨など、どれも素晴らしい王様のコレクションだった。その間のことを知らずに。

夜 バグダッドの宮殿

アラシンの召使を務めるドラメッド？世はいつものようにタロットカードで占いをしている。

「ドラメーディア、タロトーリア、うーらないーの、ぱ。」

1枚のカードが出る。戦車のカードだ。

「なぬ？なにかヘンなことが起るぞよ。戦車だなんてまさか何かとんでもないことが・・・。」

そこへ、背後から低い声がした。

「こんばんわ。」

「ひえ！」

ドラメッドは飛び上がり、床に頭をぶつけた。タンコブつけたドラメッドは起き上がり怒鳴った。

「なにするアルかドラパン！」

「すまんすまん。」

犯人はドラパンだった。

「久しぶりにお前に会いたかったもので一発驚かそうと思ったんだ。」

「ホントにもう。」

「すまんすまん。お詫びにこれを見せてやろう。」

ドラパンはシルクハットから冠のようなものを取り出す。

「なにアルかこれは？」

「黄金宮のシンバッド王からくすねたものだが、名前は月の冠らしいんだ。」

「月の冠？これは、何か深い意味があるぞよ。これは我輩が預かるアル。」

ドラメッドはそれを腹部のポケットにしまった。その時、奥から少女の声がした。

「見つけたわよ。このこそ泥！」

振り向くとロングストレートの髪を下ろした少女が立っていた。

「王様の大事なコレクションを盗み出すなんてなんて下劣なやつ。フランスの怪盗だが、アラビアの盗賊だが知らないけど、このセーラーマーズが火星に代わって折檻してやる！」

「生憎だが、哀れな少女のためにこれは預からせてもらっ。」

「返しなさい！」

マーズはお札を一枚取り出した。

「りん・びよう・とう・しゃ・かい・じん・れつ・ざい・ぜん！
むん！ファイヤー・ソウル・バード！」

炎の鳥がドラメッド達に襲い掛かった。2体は火の海の餌食だ。

「あちゃちゃあちゃあちゃ！」

その時、デュモスが月の冠を取り返した。

「わあ、やった聖杯の欠片を取り返したわ。」

その時、火の海からハートの物体と宝石が飛び出し、フォボスは
その2つを受け止めた。

「これは、うさぎのブローチと虹水晶？どうして此处に！」

その時窓から王様の呼び声がした。

「マーズちゃん。急ぐんじゃ！」

「はい。」

マーズ達は、船に戻った。

船の上

「ともかじいっぱい。」

「はい。」

船は宮殿の方へ向かった。

「はー、助かった。」

「マーズ、コレクションはどうした？」

「とりあえず、取り返したんだけど、聖杯の欠片でもあったわ。」

「そうか、残念じゃった。これは、あなたに返そう。」

「ありがとうございます。それから、あの泥棒、なぜかうさぎのブローチと虹水晶を持っていたわ。」

マーズはブローチと虹水晶を見せる。

「ブローチはともかく、虹水晶は初めて見たよ。」

「そのうさぎとは・・・。」

「月野うさぎ。私の友達です。」

「なんかよく知らないけど、明日の朝にイタリアに出発しようぜ。」

「ええ。」

そのときシンドバッドの胸のブローチが響いた。

「これは・・・？」

「コレクションの胸騒ぎブローチじゃ。」

「いい年こいたおっさんでも、ブローチをつけるアルか？」

「細かいことは気にせんでくれ。って、なんなんだ！お前さんたちは。」

いつの間にか、黒焦げになったドラメッドとドラパンが乗っていた。

「あんた達、さっきのこそ泥コンビ！」

「誰が、こそ泥だ！ブローチと聖杯の欠片を探しに来たんだ！」

「なに、言ってるの！？これは、うさぎとメシアのものよ！」

「まあまあ、それでシンドバッドさん。何が大変ですか。」

「判らない。しかしいやな予感がするのは確かじゃ。こいつらも

連れて行きたくはないが・・・。」

「「こんなやつとはどんな奴だ！（アルか！）」」

突込みを入れるドラメッド達だが王様は何も聞いてはいない。

「しかたあるまい。急ぐぞ！」

「はー！」

ドラメッドたちを加えた一行は黄金宮に向かう。

宮殿内

宮殿内で赤い髪を二つに分けて毛先の近くで金具で留めた女性がうろついている。

「この辺りに聖杯の欠片があるはずだが。どこだろう。」

女性は、コレクシヨナルームに入り込んだ。

コレクシヨナルーム

「これは、世にも珍しいものばかりだ。さて例の奴は・・・。」

男共が入ってきた。

「ひえ、ホントに金持ちの家だ。」

「感心してないで。瓶の魔人を探すぞ。」

さらに。

「こら、お前達、何をしておる！」

王様達が帰ってきた。もちろんマーズたちも一緒だ。

「あー、お前はアブジル！」

あの恩知らず、砂嵐から救ってやったことの恩を忘れおって！」

「まずい、王様達だ。」

「なにがまずいよ。食らいなさい！ファイヤー・ソウル！」

炎がアブジル達に襲う。

「あちち。火の海に囲まれちゃった。」

「後は、わしに任せてくれ。それ。」

シンバッドは箱を取り出した。種は槍を持った兵士になった。

「それは。」

「兵士の種だ。これを撒けば種は兵士になる。」

兵士達はアブリルたちを捕らえた。その間に精霊はランプに入った。ところが、女性が卵のようなものをランプに乗り移させた。ランプは光輝いた。

「な、何じゃ!？」

「ぐわ、眩しい!」

アブリルたちは、兵士達に簀巻みたいに拘束されていた。

「ま、まさか。」

ランプは、紫がかったライトブルーの踊り子系の衣装を纏った、純白の肌の少女に変わった。

「ランプル!」

なんとランプはダイモンになってしまった。

「なんてことだ。わしのコレクションが。」

「たかがコレクションで大騒ぎしないで頂戴。」

女性が腰に手を当てている。

「あなたは。」

「ウィッチーズ5のユーリアルだよ。」

「そうか、ウラスやネプチューンがいつてたウィッチーズ5とかいうのはお前達だったのか。」

「あの人たち、知ってるの?」

「ほう、私達も有名になったか。」

ユーリアルは、銃先の口に黒い星を付けた銃をシンドバッドに向ける。

「おい、お嬢さん。何をするんじゃ。」

「捕獲!」

銃弾が飛び出し。王様を打ち、中からピュアな心が出た。そこをランプルが受け止める。

「陛下!」

ジェライツが抱き上げる。

「ためアル。魂を抜かれた後である。」

「なんて奴。」

「此処は、引き上げよう。」

「はい。」

「兵士よ、種に戻れ！」

兵士達は種に戻り、箱に収まった。

マーズやドラパン達は王様と魔人が入った小瓶を抱えて逃げ出した。

「おいこら、待て！」

アブジルたちは、取り残された。

残されたユージアルたちは。

「さてこの親父共は、そうだな・・・。」

ユージアルはアブジル達に銃を向ける。

『ひー！』

銃口が月に照らされ、きらつと輝いている。

第三十六章アラビアの怪盗02（後書き）

マーズ達が船旅をしてる間にアブジル達が来てしまいます。果たして宮殿の運命は。

第三十七章アラビアの怪盗03（前書き）

アブジルたちは黄金宮に置いてきてしまい、マーズちゃん達は砂漠に逃げ出した。

どこに逃げたかお楽しみに。

第三十七章アラビアの怪盗03

アラシンの客部屋

王様は空き部屋のベッドで横たわっている。マーズ達はこの館に「なんてことだ。ランプを取られた上に王様の心までが奪われてしまうなんて。」

ジェライツは頭を抱えて崩れてしまう。マーズはそんな彼を慰める。

「元気を出して。ジェライツさん。あんな化け物はきっと私が追い返しますから。」

「問題はそれだけではないぞよ。」

「何よ？盗人狸その2。」

「盗人狸じゃないアル。」

「どうやって黄金宮に戻るかである。」

「何、言ってるの？旅芸人に化ければいいじゃない。」

「バカを言え！気配でバレルかも知れないんだぞ！」

ドラパンの言うとおりあのダイモーンは魔女の姿をしてるから、魔法で暴かれる恐れがある。

「どうやって、入ればいいんだ。」

「そうだね。うさぎと衛さんに来てもらえばいいんだわ。」

「なるほど、うさぎちゃんに退治してもらえばいいんだ。」

「それは、無理だ。」

ドラパンは異を唱えた。

「なんでよ。」

「ブローチがあつたとしても幻の銀水晶がなければ、変身は不可能だ。」

「幻の銀水晶？なんであるか？」

「うさぎのブローチにはめてあつた宝石よ。虹水晶はその欠片よ。」

「欠片はいくつあるんだ？」

「7つよ。7つ揃わないと銀水晶は完成しないの。」

「ということは、当分あの子は戦えないのか。」

「そういうこと。」

そうだ、思い出したわ。貴方、うさぎのブローチと虹水晶を持つてたじゃない。どうして、ブローチと虹水晶を盗んだの。まさか、自分の思いのままに・・・。」

「違う。先ほども言ったが、哀れな少女を守るためだと。」

「ドラパン、詳しく話してほしいある。」

ドラパンはこれまでのことを話した。

「そんなことをしたら、うさぎが困るじゃないの！ああ、どうしよう。」

「そうある、透明マントで潜入するある。」

翌日

宮殿に戻りドラメッドの提案でシンドバッドを除いた一行は透明マントをかぶり通り抜けフープで城に潜入した。

廊下

「ちよつと三ちゃん。こんなんで大丈夫なの。」

「なにいうか、念のために守り星を授けたでないアルか。」

「そうだけど、その道具も破られたりしたらどうするのかが問題よ。」

「マーズ殿。自分を信じるアル。」

ドラメッド達は、コレクションルームに向かう。

「まったく、あのアホ狸。こういう仲間持つてんのよ。」

牢屋内

アブリル達は、元々悪人なためにピュアな心は奪われなかったもののその代わり簀巻のまま牢に放り込まれた。

「まったく、なんちゅう娘さんだ。」

回想

「わー、やめてくださーい。神様、御代官様！命ばかりはお助けを。」

ユージアルは銃を下ろした。

「だったら・・・。」

ニヤリとユージアルは笑った。

牢屋

でこの有様だった。

「簀巻のままでこんなところに入れられるなんて・・・。」

「かつこわるーい・・・。」

「泣くな！男だろー！」

カシムに怒られた2人の手下達。

「それにしても・・・。」

「なんすか？オヤビン？」

「腹減った。」

ズルつと扱けるカシムたちだった。

「でも、オヤビンの言うとおり・・・。」

「グー・・・」

「腹減った・・・。」

簀巻のままで、ろくにご飯にありつけられない盗賊たちだった。

コレクションルーム

マーズ達は侵入に成功した。木馬や絨毯にも以上はなかった。ただ、アブジル達の姿はなかった。

「問題はランプだけのようね。ユージアルの奴、どこにいるのかしら。」

「アブジル達もいないな。」

「油断は、禁物だぜ。」

「デュモス・フォボス、上空をよろしく。」

「カアカア。」

2羽のカラスは上空に舞い上がった。

「便利なカラス達だな。」

「私のボディガードなんです。」

「こんなで大丈夫あるか？」

ドラメッドは少々不安である。その時、ディモスが何かを感じた。なんとユーギアルが背後から火炎銃を構えているのである。ディモスはすぐに一行に教えた。フォボスは、ユーギアルを突付き始めたのだ。

「いて、いてて。何すんのよ！」

「ユーギアル！」

フォボスはマーズの肩に舞い戻った。

「こんな所で何をするつもりでアルか？」

「ばれたら仕方ない。あんた等を殺すんだよ。聖杯の欠片さえ渡せば、助けてあげられるのに。」

「煩い。アンタみたいな魔女に誰が渡すもんですか。」

「第一、アブリルとか言うおっさん達はどうしたんだよ。」

「あいつらは、簀巻のまま牢に入れてやったわ。」

『簀巻のまま……』

「まさか、あいつらろくに食事をとつとらんのでは……。」

「おそらく……。」

「あんた等なんか想像してない……。」

呆れるユーギアルはミメット以上お茶目で個性的な性質だ。

「とにかく、まずは王様のコレクションを返してよ！」

「いいでしょう。ランプルー、お遊びの時間よ。」

ランプルーは姿を表す。

「はい。」

ランプルーは自分の額を擦った。影からランプの精霊が出てきた。

「ランプ。無事だったの。」

微笑むマーズをよそにランプは彼女に拳を向けてきた。

「危ない！」

ジェライツはマーズを抱えて横に跳んだ。

「ちよつと、ランプどうしたの。貴方王様のコレクションでしょう。ダイヤモンドなんかには操られないで。」

「やなこつた。ベー！」

ランプはマーズに下を突き出した。

「僕は、自分の意思で行動したいだけなんだ。自由に慣れたのは彼女のお陰なんだ。」

「なんてこと、ランプの中にいたから、ダイヤモンドに影響されたんだ。」

「パワちゃん。何とかならないの。」

「そういわれても……。」

その時

「ファイヤーバスター！」

巨大な炎がパワえもん達ネコ型ロボットに襲い掛かってきた。

「むん。」

ドラメッドは地面から巨大な壁を召喚した。数mの暑さなので大体は防げた。

「狸の分際ですべてくれるじゃないの。」

「狸じゃないぞよ！ウィッチーズだか、ゴーゴーだか知らぬが、お主みたいな悪党は許さんアル！」

「言ってくれるじゃない。それじゃ、もう一発。」

ドラメッド達がユーギアルと戦っている間にマーズは、ランプと戦っている。

「行くわよ。バーニング・マンダラー！」

役8輪の炎の輪を飛ばすが、ランプルの腰を剣でかわされてしまった。ランプルーは剣を振りマーズに襲い掛かった。マーズは、お札を出した。

「元に戻って。むん。ファイヤー・ソウル・バード！」

火の鳥がダイモーンを包み込もうとしたが、ランプがあらかじめ庭の噴水から持ってきた器の水で消された。

「そうはいかないぞ。」

「ランプ、目を覚まして！」

マーズの声に耳も入らないランプはマーズを押さえつけてしまった。

「しまった。」

ダイモーンは剣を構える。マーズに近寄り、剣を喉笛に突きつけようとする。

「これで終わりよ。」

そこへ剣を持ったジェライツがやってくる。ジェライツはみねうちでランプを気絶させる。

「仲間がもう一人いたのね。」

「マーズさん、お怪我は？」

「大丈夫。ありがとう。ジェライツさんは、ランプを押えて。」

「はい。」

「させるか。」

ランプルは、ダイモーンに飛びかかるうとしたが、上空のフォボスたちに左右それぞれの腕をつかまれてしまった。

「フォボス、デイモス。何したいか知らないけど、そんなところにいたら、アンタ達を焼き鳥にしちゃうわ。」

「だったら、炎の能力なんか持つな。」

いつの間にかマーズの後にいたドラパンが突っ込みを入れた。マーズの鉄拳が下る。

「突っ込む暇があるなら、パワちゃんと三ちゃんの手伝いに行きなさい！盗人狸1号！」

「誰が、狸だ……。」

ドラパンは呻いた。

「かあかあ。」

「かあ。」

カラス達は、頼むと言っている。

「判った。でも、炎は今は使わないわ。」

マーズは、お札を数枚出した。

「りん・ぴよう・とう・しゃ・かい・じん・れつ・ざい・ぜん！
ねん！悪霊退散！」

数枚のお札を投げて張り付かせた。ダイモーンは動かなくなり、
カラス2羽はマーズのもとに帰ってきた。

「これで戦えるわ。」

また、数枚のお札を出した。

「王様の城やコレクションを汚した悪霊は折檻してやる。ねん！
バーニング・フェニックス・マンダラー！」

八つの輪が終結して不死鳥になり、ダイモーンを飲み込んだ。

「キヤー！」

ランプルーは、ランプに戻り、ダイモーンの卵が出た。ランプは
気がついた。

「あれ？」

「ランプ、気がついたか。」

「僕、何してたんだろ。」

「ダイモーンが消えたから、自分も元に戻ったんだわ。」
ほっとするマーズ達だった。だが。

「全員、そのまま手をあげなさい。」

ユージアルが火炎中を突きつけるのだった。

第三十七章アラビアの怪盗03（後書き）

ドラえもん仲間もだんだんと増えています。最後の世界でドラリ
ヨーニヨを出したいと思います。

第三十八章アラビアの怪盗04（前書き）

ユージアルに追い詰められたマーズ達。彼女達の冒険もいよいよフイナールです。

ところでアブリル達は、どうなるのでしょうか。

第三十八章アラビアの怪盗04

宮殿内 コレクションルーム

ユーギアルに火炎銃を突きつけられたマーズ達は、身動きが取れない。ドラメッドとパワえもんは、ユーギアルの足元で目を回している。負けたらしいのだ。

「あの役立たず。」

マーズ達は仕方なく手をあげたのだ。その時、ユーギアルの足の色が変わり始めた。

「ちよつと、何これ!？」

「まんまと引っかけりおったアルな。ユーギアル殿。」

「お前は。」

「お主には、石になつてもらおうぞよ。」

ドラメッドは、負けた振りをしてこつそりユーギアルを石に変えようとしている。ユーギアルは、足を動かすが、動かない状態になっている。どんどん、腰まで来ている。ユーギアルはファイアーバスターを撃とうとするが、それをパワえもんのショットガンが火炎銃を貫いた。

「へへへ。そうはいかないよ。」

「何!？」

とうとう、首筋まで来てしまった。

「くそ、最後の最後までミスしてしまつた……た……。」

とうとうユーギアルは石になってしまった。

「やった。ユーギアルを倒したわ。」

「やったな。」

「後は、あの盗賊だな。」

牢屋

アブジル達は中で伸びている。しかも目にクマを付けている。

「あー、腹減ったー。」

「オヤビン。これからどうしやしよう。」

その時、牢屋が開いて女の子が表れた。

「アンタは、あの時の娘さん。」

「どうやら無事のようなね。まってて、縄を解いてあげる。」

マーズはアブリル達の縄を解く。

「例の女は三ちゃんがやつつけたわ。」

「ほんと。」

「やったー。」

「嘘だと思ったらコレクションルームを見てって。」

マーズは牢屋の外に連れ出す。その時、金色のビームがアブリル達を襲った。ドラパンのキンキンステッキのビームだ。アブリルはブロンズ像になった。

「大成功。」

「仕置き完了ですね。」

こうして、石になったユーギアルとブロンズ像になったアブリル達は、シンドバッドの庭や門に飾られることになったのだ。なお、アブリルの連れの駱駝は王様の庭で飼われることになった。

夕方 大昼間

ピユアな心を取り戻したシンドバッドは宮殿に帰り、マーズ達と夕食をとった。

「いや、本当にありがとう。君達のお陰で宮殿に平和が戻ったよ。」

「いえ、こちらこそ。ありがとうございます。お陰で聖杯の欠片が見つかりました。」

「それは、よかった。」

「良くないアル。ワシ等を黒焦げにしようとしたくせに。」

「ごめんごめん。」

「もういいじゃないか。聖杯の冠も見つかったし。明日の朝、イ

タリアに帰ろうぜ。」

「その前に虹水晶のことを報告しなきゃいけないじゃない。」

「あっそうか。」

「その前に我輩たちは、ブラジルに向かうアル。」

「そうだ。あいつのところに行こう。」

「「はあ?」「」

マーズ達は、訳わかれだつた。

第三十八章 アラビアの怪盗 04 (後書き)

いよいよ最終ラウンドブラジルです。聖杯や銀水晶の完成もあとわずかです。ドラえもんズ及びセーラー戦士の集合もそろそろです。

第三章倒れ行く仲間PARTO（前書き）

ちびうさちゃんの大冒険が始まりました。彼女はどんな旅をするのかは後にしてその前にうさぎちゃん達から始めましょう。

第三十九章 倒れ行く仲間PARTO

ブラジル 公園

うさぎ達はブラジルに來たのだ。虹水晶の搜索のために手分けして探すことになった。

うさぎ・衛・のび太・しずか・ルナ・しずかちゃんのペットトリオのグループ。プルート・サターン・ウラヌス・ネプチューンのグループ。セワシ・スネ夫・チルチル・出来杉のグループ。ヴィナス・マーキュリー・ジュピター・アルテミスのグループ。そしてドラえもん達ネコ型ロボットのグループ。なお、グループ分けはうさぎが決めたことだった。

「虹水晶の反応はないわね。」

「本当にどこにあるのかしら。」

「ジャイアンのやつ、本当にしょうがないやつだよ。」

「ちょっと、のび太さん。」

「いいの。うさぎさんが無茶するようになってしまったのは、みんなスネ夫達が悪いんだから。こうでも言わないと。」

「気持ちには判るけど、あんまり攻めないでやってくれよ。」

そのとき、遠くから人々の悲鳴が聞こえた。

「なにかしら。」

うさぎ達は駆け出した。

大きな木の周りに人が集まっている。うさぎ達は人々をかき分け、木の傍についた。そこで出来杉とスネ夫が倒れている。

「出来杉、スネ夫……。」

そこへセワシがチルチルを抱えてやってきた。

「おじいちゃん……。」

「セワシ。」

「おじいちゃん。スネ夫くんたち知らない。ちょっと目を離れたすきにいなくなっただけ……。」

のび太はうつむいた。

病院の室内

病院に運ばれた2人は、2人部屋のベッドで横になっている。のび太やセワシも一緒だ。うさぎ達は引き続きしずかと搜索を続けた。「スネ夫さん。出来杉さん。ピユアな心を取られたのね。」
「なんて奴だ。仲間をこんな目に合わせてただですむと思ったか。」

のび太は拳を握りしめる。

「おじいちゃん。怒ってもしょうがないよ。彼らのためにデス・バスターズを倒そうよ。」

「うん。わかった。」

「ところでコイツどうしよう。」

スネ夫の愛猫・チルチルは主人に寄り添っている。

「そうだな。近くの動物ホテルに預けておこう。」

動物ホテル

セワシたちは、ドラえもん和合流してチルチルを動物ホテルに預けることになった。ドラミたちはそのまま搜索を続けた。お金はドラえもん達が持っていたので困らなかった。ただ、チルチルは嫌がっていた。

「だめだよ。外でダイモーンがうろついてるから何が起こるか判らないよ。」

それでも、チルチルはダダを捏ねた。とうとうのび太はカッとなつて。

「だめだ!」

つとチルチルの首輪を掴んで地面に叩き付けた。チルチルは失神している。のび太は外に出た。

外では、ドラえもん和セワシが待っている。

「ちゃんと預けてきた？」

「うん。」

「じゃあ行こうか。」

のび太達は搜索に戻った。

広場

ちびムーンたちは、ブラジルにやってきた。

「此处がブラジルか。本当にあたしたちの時代とあんまり変わらないわ。」

「本当にこんな面白い風景なら漫画にしたいくらいだわ。」

ジャイ子の言葉にずっこけるちびムーン。

「ジャイ子ちゃん。気持ちは判るけど、今は聖杯の欠片を探さなきゃいけないのよ。」

「あつそうか。ごめんごめん。」

ちびムーンの突っ込みにペロを出すジャイ子だった。

その時、犬の鳴き声がする。ちびムーンには判らないが、ジャイ子には効き慣れた鳴き声だ。

「こら、ムク。静かにしてくれ。ダイモーンに見つかったらどうするんだ。」

「あれは、お兄ちゃんの声だ。」

「えっ？」

ちびうさとジャイ子は駆け出す。なんとあのび太の友人のジャイアンだった。

「お兄ちゃん。」

「ジャイ子、どうして此处にいるんだ。」

「ダイモーンって化け物の襲撃にあったのよ。」

「そうか。実は俺もダイモーンのせいで迷子になったんだ。」

「父ちゃんや母ちゃんは？」

「ダイモーンに襲われて魂を抜かれたらしい。」

「そんな。」

「なんてひどい。」

「あれ、お前どつかで見た顔だな。」

ジャイアンはちびムーンのわき腹を持って抱える。

「あの・・・。」
「へなんか、この子どつかで会ったような・・・。」

「

「おにいちゃん。」

「あれ？ごめんごめん。人違いだった。」

「いいのいいの。間違いないでよくあることよ。」

「「あははは・・・。」」

笑いあうジャイアンとちびムーン。

「あたし、セーラーちびムーン。ちびムーンって呼んで。この子はルナPボール。愛称ルナP。」

「俺、綱田武。ジャイアン。コイツはムク。」

ジャイアンはちびムーンを降ろした。

「よろしく、ジャイアンくん。」

「あだ名で君付けなんて初めてだ。よろしく。ちびムーン。」

すっかり、ジャイアンと仲良しになったちびムーンだった。

「で、ジャイアンくんにお願いがあるの。」

ちびムーンはこれまでの事情を全部話した。

「そういうことが。判った。ジャイ子のお礼を含めて手伝ってやる。」

「ありがとう。」

「ワンワン。」

ムクがちびムーンの足元で鳴いている。どうやらお礼がしたいらしい。

「何だ。ムク。お礼って。」

ムクは前足でハート型の宝石を見せた。ジャイアンはぎょっとした。

「あら、きれいな石ね。」

「ムクの奴。ちびムーンやジャイ子は知らないからよかったもの

の、持ち主にばれたら殺されちまうだろうが……。」

「これをあたしにくれるの？」

「くう……。」

「ありがとう。ムク。」

「いい子ね。」

ちびムーンに宝石を取られてしまった。ムクはお礼ではなく頼みをしたかったらしい。この宝石を守ってもらいたかったらしい。

その時、サッカーのユニフォーム姿の数人の男の子達が走っているのを目撃した。

「少年サッカー隊かな？なんかランニングしてる。わー、ちょっとだけでも見学してこよう。」

後を追うかのようにちびムーンは駆け出した。

「待って、ちびムーンちゃん。」

ジャイ子も駆け出した。ジャイアンとムクは呆然としている。ジャイアンはムクを叩いた。

「ムクのアホ！お前のせいで虹水晶が取られたんだぜ。責任もって、取り返しに行くぞ！」

「あーん！」

ムクもジャイアンも駆け出した。少年達は何処に向かうのである。

第三章倒れ行く仲間PARTO（後書き）

ちびっさちゃんの冒険が始まります。これからどうなるのでしょうか。

第四〇章倒れ行く仲間PART1（前書き）

ちびうさちゃんがサッカーの少年選手の見学に行ったらいいです。
どんな事件が起こるのでしょうか。

第四〇章倒れ行く仲間PART1

競技場の前

ちびムーンたちは競技場の前に来てしまった。

「今日は此処でサッカーの試合でもするのかな？」

「判らないわ。確かに此処に入っていったのは事実よ。」

ジャイ子はもうへとへとだった。

「大丈夫？」

ジャイアンもムクもクタクタで目が舞いそうだった。

「大丈夫じゃねえわい。ちびのくせに足が速すぎるんだよ。お前は。」

ジャイアンはちびムーンを睨む。

「ごめんごめん。せつかくだから試合でも見てみましょうよ。」

「それならいいけど、いたずらだけはすんなよ。」

「判ってるよ……。あはは。」

会場の観客席

どうやらお客は3人と1匹だった。

「どうなってんのかな？ひょっとしてダイモーンの仕業じゃないの。」

「さあ判らない。」

「とにかく此処で様子を見た方がいいんじゃないね。」

一行は様子を見ることにした。

試合場

少年達が出てきた。その戦闘にオレンジのユニフォームを着た黄緑色のネコ型が立っている。少年達の内の一人はのび太そっくりだった。

「ありゃ、あいつ。のび太そっくりの間抜け面だ。」

「ジャイアンくん。失礼よ。」

「だってよ。」

「友達は大切にしてよ。」

「ちえ。」

ちびムーンに注意されジャイアンは膨れている。その時、羅針盤が輝いた。

「あの子達の誰かが持つてるのね。」

少年達の前におかしな覆面を被ったサッカー選手が表れた。ちびムーンたちの向かいの観客席には白髪のおっさんがニヤニヤしながら座っている。

「何、あのおじさん。あれもデス・バスターズの一人？」

「となるとあいつらダイモーンなのか。」

「そうみたい。」

試合場ではロボットと少年が睨みあっている。

「遂にここまで来たね。ドラリーニヨ。」

「押しついて。ノビーニヨ。あのおっさんの部下に負けたら、大変だよ。全く、いきなりずかずかブラジルに来て、『聖杯の欠片寄越せ。』なんて変なことって。そんなもの知らないのに。」

「サッカーの勝負に負けたら、聖杯のありかを教えてもらう。勝ったらこのまま帰るなら、なんとしてでも勝負をつけなきゃ。」

ピー。笛の音がなった。

1番最初は大柄の少年が蹴った。敵選手の一人がそれを受け取った。選手はノビーニヨたちを擦り抜けシュートを決めた。しかし、ゴールキーパーは顔で受け止めて、1点は取られなかった。ただ、少年は額に大きなコブを付けている。

「うえー。痛そう。」

ボールはノビーニヨのところに飛んできてノビーニヨはおっさんの手下を次々と擦り抜けた。当のおっさんはおかしな形のリモコンを取り出し、黄のボタンを押した。とたんに地面の一部がバネのようにはねた、同時にドラリーニヨの方もはねた。ノビーニヨは空中

でボールを足で掴んだ。地上に降り立った途端にいつの間にか玉乗りをしていた。そこへドラリーニヨが落下して頭をぶつけて、タンコブを作って目を回してしまう。長身の少年がゴールまで蹴り進むが今度は巨大扇風機の餌食になってしまう。これもあのおっさんの仕業らしい。

「何、あのおっさん！試合場にあんなせこい仕掛け作ってたの！？汚いじゃない！おしおきしてやる。」

ちびムーンはルナPボールを取り出した。

扇風機の餌食になった少年は催眠術にかけられたように目を回した。

向かいの観客席

「きひひ。坊主共の實力は対したことないつしよ。」

その時、おっさんの真上に大きな影が降りてきた。影の正体は。

「ひえ〜！大きなヤタガラスつしよ〜！」

ヤタガラスは後の1本足でおっさんの体を簀巻拘束するかのよう
に空中まで掴みあげた。

「ぎゃー！」

ヤタガラスは、向かいの観客席までつれて行った。その席にピンク・ムーン・スティックを構えたちびムーンが待っていた。

「あんたね。この2つのトラップの元は。」

「誰か知らんが、この競技場はこのわし、Dr・アチモフが手下達と頑張って1週間かけて作りだした競技場だつしよ。あそこに落つことしたりモコンを使えば、こちらが優先のはずだが、この状態じゃ妨害不可能つしよ。」

確かにこちらの少年達は不正なく有意義に戦っている。なかでもノビーニヨはゴールまで慎重に進んでいる。

「それは、好都合。それじゃ。」

ピンク・ムーン・スティックを構える。

「ピンク・シュガー・ハート・アタック！」

「わわわ。待つつしよー！」

ピンクムーンロードの力は止まった。

「もうしないから。降ろして。かわいいお嬢ちゃん。」

「アンタ、デス・バスターズの仲間。」

アチモフは首を傾げる。

「違うの？」

「違うつしよ。」

「なるほど。」

「ほつ。」

アチモフは安心したが・・。

「と見せかけて、おらおら。」

ハートの集団がアチモフの顔を打ち続ける。どうやら自分で力を止めたのだった。

「あててて・・・！やめるつしよー！」

続いてムクがアチモフのお尻を噛む。

「いちー！」

試合場

いよいよ、ノビーニヨがゴールを決めた。ピー。笛が鳴り響く。どうやら1点とれば、勝利だったのだ。

「やったー！」

ちびムーンは力を止め、おおはしゃぎした。

「ちびムーンは凄い・・・とジャイアンたちは思っていた。」

「うぐ。負けたつしよ。」

「さて、アンタたちをどうしましょう。」

大きなヤタガラスを持つ女の子を見たら、手下達も振るえ上がってしまふ。

その時、バニーちゃんの姿をした女性が出てきた。

「君達強いのね。」

「誰、コイツ？」

「さあ。」

少年達は顔を見合わせるが、ちびムーンははつきり気付いている。
「ダイモーン。」

「あれもダイモーンか？」

「そうなのよ。」

「大変だわ。」

ちびムーンは飛び降りた。ジャイアンたちも後に続こうとしたが2人は何者かに口を塞がれ連れて行かれた。ムクは犯人の後を追った。

試合場では、女性はノビーニヨと唇を交わすかのようにピュアな心を奪い取った。ノビーニヨは倒れてしまった。

「わー、ノビーニヨ！」

ドラリーニヨたちは駆け寄る。

「しまった。遅かったわ。」

女性は一目散に逃げ出した。

「あはははは・・・。」

「こうなったら追いかけましょうって。みんなが・・・。まさか別のダイモーンに・・・。」

ちびムーンは拳を握り締めてついに決心をした。

「ルナP。そのおっさん。どっかに放り出して、あいつらのアジトを探すのよ。」

「かー。」

ヤタガラスは飛び上がり、アチモフを地面に放り出した。

「ギャ~~~~~！」

アチモフはまっ逆さまに落ちた。地面にいる手下達と衝突して互いに目を回した。ちびムーンはヤタガラスに飛び乗り上空に舞い上がり、ダイモーンが逃げた方に飛んだ。

町の中

ドラえもん・のび太・セワシはジャイアンを求めて探している。

「ジャイアンの奴、何処に行ったんだ。見つけたらうさぎさんに

謝るように言わなきゃ。」

「のび太くん。そう怒らないで。ジャイアンたちとちゃんと話し合おうよ。」

「そうだよ。武くんたちだって。悪気があったわけないし。」

「もし、あつたら口なんか聞いてあげない。」

その時、街角の方で犬の声が出た。

のび太達は行ってみるとジャイアンたち兄妹が倒れていた。

ペットホテル

「ムク、大人しくしてろ。しょうがないだろう。お前がやられたらジャイアンやジャイ子ちゃんに顔向けができないだろう・・・。」

ジャイアンもジャイ子もピュアな心を奪われて病院に運ばれて、その間ムクは町のペットホテルに預けられることになった。ムクは嫌がっている。

「いい加減にしろ！」

のび太はムクの頬を叩いて気絶させた。
窓からドラえもん達が見ている。

「のび太くん。」

「なんか恐いね・・・。」

のび太は妙に活発になってきた。普段ののび太は大人しいはずだが、しっかりしているうちに時折勝気な性質になってきた。まるでのび太は別人になっているかのようだ。

「それに・・・。」

病院の病室

兄妹はスネ夫達と同室だ。ただジャイアンは額に『盗人少年』とのび太に書かれてしまった。

ペットホテルの外

「いくらなんでもやりすぎだよ。」

「
ねえ。
」

第四〇章倒れ行く仲間PART1（後書き）

ドラリーニヨ登場です。ちびムーンと行動をともにして最後の魔女に戦いを挑みます。あと少しで銀水晶と聖杯の完成です。

第四章倒れ行く仲間PART 2（前書き）

大変申し訳ございませんでした。なかなかいいアイデアが思い浮かびませんでした。

ちびうさちゃんは、ダイモーンを追ってしまいました。

第四章 倒れ行く仲間PART 2

公園

のび太はドラミたちと合流したドラえもんにもセワシを預けて、しずかたちと合流した。

「のび太さん。今なんていったの？」

「もう1度いうよ。ペロたちを動物ホテルに預けようといったんだ。」

「どうして？ペロたちまで、危険な目に遭うから。」

「そうなんだ。」

「言われてみれば。ペロたちに随分と世話になったし。」

「今度は動物同士でピュアな心を取られた子達を守ることか。」

「はい。」

「そうと判れば・・・。」

しずかも自分のペットをホテルに預ける気だ。そこへうさぎの静止が来た。

「待つて。のび太くん。あたしにそのジャイアンくんの所に案内してくれるかな。」

何かうさぎは良くないことを考えたらしい。

ペットホテルの前

しずかはペロたちを預けて、外で待つてる衛たちと合流した。

「お待たせ。」

「よし、じゃあ行きますか。」

「ええ。」

「うさこの奴。病院に行って何がしたかったんだ？」
「これがしたかったのだ。」

病室

ジャイアンの右頬にデブチンと書いてやったうさぎだった。

上空

マーズとドラメッドたちが空飛ぶ絨毯で……あいつ……を探している。

「此処がブラジルか。なんか賑やかそうな町ね。」

「賑やかでもダイモーンは来るアル。油断は禁物アル。」

「判ってるわよ。そんなこと。」

「それより、あいつは今どうしてるかな？」

「あいつって？」

彼らの横を巨大なヤタガラスが猛スピードで通り過ぎた。

「わわわ。」

マーズ達は落ちないように絨毯を押えたから落ちなかった。

「あー、危なかった。」

「あれ、なんか横にいなかったかな。」

からすの上の少女は不思議に思い先に進んだ。

誰も絨毯からおちなかったものの……。

「なんでブラジルの上空にヤタガラスがいるの？ていうかあんな大きさだっけ？」

「ぐぬぬ……。あのカラスめ……。よくもやってくれたアルな……！」

絨毯はからすの向かった方向に向かった。

「待て………………！」

カラスを追いかけるドラメッドたちであった。

ヤタガラスと言えば。

「ダイモーンの向かった方向は……。」

からすの上にはちびムーンが乗っている。ちびムーンは南西を指差した。

「こっちなね。」

南西に向かった。

「あの女、どつかで見たと思ったたらダイヤモンドだったんだ。迂闊だったわ……。」

羅針盤の反応が速くなった。

「聖杯の欠片がこの近くにあるの？」

「何、聖杯って？」

「救世主用のアイテムよ。」

「へー。」

ちびムーンの後には、ドラリーニヨが乗っていた。

「なんで、アンタがいんのよ！しかも無断で乗り込んで！」

「無断では何だよ！無断では！」

「どうやって乗り込んだのよ！ていうかノビーニヨとかいう子の介護はどうしたのよ！？」

「ノビーニヨを魂とった怪物退治が先だ〜！」

「サツカーオタク！」

「手品マニア！」

ちびムーンたちの言い争いはアジトに着くまで続いた。

数分後

口論を終えたちびムーンはドラリーニヨに聖杯のことを話した。

「その欠片をさがしてるんだ。そうなのよ。なんか反応が速まってるし。」

「もしかしてこれのこと？」

ドラリーニヨは服の中のポケットからピンクの器を出した。

「聖杯の欠片。それよそれ。」

「で、ダイヤモンドのアジトは？」

「えっと。ん。あのボ口館が怪しいわ。」

ちびムーンとドラリーニヨは館に降りていく。

館の前

その館は随分昔に造られたものだった。数年もたっていたからボ

口も当然だ。どうやら占いの館のようだった。

「ホントにボロイ。」

「この中にダイヤモンドがいるのよ。早くピュアな心を取り返さなきゃ。えっと、そういえば自己紹介まだだったね。あたし、ちびムーン。」

ヤタガラスは、ルナPになった。これはルナPが化けていたのだった。

「この子はルナP。」

「僕、ドラリーニョ。」

「よろしく。リニョちゃん。」

「きやは。さて、自己紹介も済んだことだし。」

『レッツゴー!』

二人と一個は館に入る。

館の廊下

「ちびムーンちゃん。なんか此处怖いよ。お化けでもそうだよ。」

「何、怯えてるのよ。あんた男でしょ。」

「子供だよ。」

ズルツ。ちびムーンはこけた。

「どう見てもロボットでしょ。」

「とにかく、ダイヤモンドが見つかるまであたしは諦めないから・・

・。」「あたしだって戦士よ。やる時はやるわよ。」

そういつてる間に灯りのある部屋が見え2人は入った。

部屋

2人は部屋に入った。

「何、この部屋？ 気味が悪いわ。」

「いらつしゃーい。」

声の主は先ほどの女性だった。女性は青い三つ網付きのサイドシ

ニヨンの少女と一緒にテーブルについている。

「始めまして、ウィッチーズ5のシプリン。」

「私は、う・イカサマン。ダイモーンです。」

「お前だな。ノビーニヨ達のピュアな心を奪い取った張本人は。」

「確かにあの男の子の心を奪い取ったのは私だけど、間抜け軍団の方は別のダイモーンが盗んだわ。」

「なんですって。」

「今頃もうファラオ90様のところについているでしょうよ。」

「なんてことを。」

「とにかく、ノビーニヨとか云う子の心を返して欲しくば……。」

ちびムーンとドラリーニヨは……ゴクリ……と唾を飲む。

「私達とのギャンプル戦で勝負しなさい。」

「……なんでギャンプル？」

「私、暴力だけは苦手だから。」

「なんだ……。」

「だったら、ジジ抜きで勝負よ。」

「OK。」

そんなこんなでジジ抜きで勝負をすることになったちびムーンとドラリーニヨ。

「勝負。」

4人はテーブルについた。

廊下

ようやく館に辿り着いたドラマッドとマーズ達は、廊下を歩いている。

「此処に私たちを跳ね飛ばした張本人がいるのね。それにしても……、なんか怪しい感じだわ。」

「お主は未だ若いのに、感が強いアル。」

「この子は、様々な霊感を持っているんだ。だから、お札などの

「靈力を持つてるんだよ。」

「確かにドラメツドの魔法よりはすごい。」

「ドラパン……。」

「ごめん。」

その時、奥の部屋から元気な声が聞こえた。

「この声は……、ちびうさちゃん！」

マーズは駆け出す。

もう1人の声がした。

「こっちは、ドラリーニョアル。」

ドラメツドも駆け出した。

「オイ待てよ。」

パワえもんも駆け出した。

部屋の中

ちびムーンたちとシプリンたちが戦っている。

「さあ、今度は貴方の番よ。」

ちびムーンはカードを指し出す。

う・イカサマンは取ろうと選ぶ。

「えっと、これかな？」

上に立っている真ん中のカードを取ろうとする。笑顔のちびムーン。

「これだ。」

その隣のカードを取ろうとする。泣き顔のちびムーン。

「いひひ。こんなズルはチヨロイチヨロイ。」

引いたカードを見ると、ジョーカーだった。

「しまった。」

「わーい。騙されてヤンの！」

「へだらしないの？」

次はドラリーニョの番だ。

ドラリーリヨは真ん中のカードを取ろうとする。

「きゃあ。それを取ってくれるの待ってたの。」

「そうなの。」

ドラリーニヨが引くと2枚揃っていた。

「ぐぐぐ、普通ジョーカーだと思えるだろうが。」

シプリンは。

「今度はおばちゃんの番だよ。」

「誰がおばちゃんよ。」

ぶつくさいいながらシプリンが引くとジョーカーだった。

「しまった。」

そして、ちびムーンの番。

「ほら、次は貴方よ。」

ちびムーンは、目を閉じカードを引いた。カードを引いた後目を開くと数ぴったりのカードだった。

「やったー。上がり。」

「くそー。」

シプリンの手には、ジョーカーだけが残った。

「どうする。おばちゃん。」

「勝負はこれからよ。」

う・イカサマンはカードをドラリーニヨに突きつけた。

「えつと。ど・れ・に・し・よ・う・か・な・し・よ・う・り・の・め・が・み・さ・ま・の・い・う・と・お・り。つと。」

ドラリーリヨはカードを引くと上がりになり。シプリンから引くとダイモーンの手には死を意味するスペードのエースだけが残った。

「くそ、負けた。」

「わーい。勝った勝った。」

ドラリーリヨは勝利をダンスを踊った。すると、ドラの傍でマーズ一行がずっこけていた。

「御主等、何をしてあるか！」

「あれ、ドラメッド。お久しぶり。」

「何が、お久しぶりであるか！ドサクサ紛れに敵とトランプなん

ぞしおつて！」

「あれ、マーズとパワちゃんじゃない。どうして此処に？」

「事情は後で話すわ。」

「そうだな。」

「この魔女をどうにかするかだな。」

「あら、誰かと思えばセーラー戦士の1人じゃない。」

「貴方は、シプリン？」

再会をしてしまったマーズであった。

第四章倒れ行く仲間PART2（後書き）

最後の魔女の対決です。レイちゃん。いっそ、フォボスたちもペットホテルに預けてきたら。

第四章倒れ行く仲間PART3（前書き）

そつえば、エドがいまね。もしかしたら置いてけぼりかもし
れません。エドも出します。

第四章 倒れ行く仲間 PART 3

町の中

ドラえもん・ドラミ・キッド・マタドーラ・王ドラ・ドラニコフ・ジェドーラ・ノラミヤークの猫型ロボットとセワシは町の中を創作中だ。ジャイアンたちのことを知らされたドラミたちはドラえもんやセワシと共にダイモーンを追っている。

「まったく、ダイモーンの野郎、何処に逃げやがったんだ。」

「のび太やしずかの仲間のピュアな心を奪い取るなんて最低な奴らだ。」

「もしかしたら、今頃ファラオ90の手の中にあるのかもしれないわ。」

「ちよつとノラミヤーク。それはないよ。」

「いえ、セワシさん。ノラミヤークさんの言うとおりだったら、絶対にそいつからピュアな心を奪い返してやる。これ以上、あいつらの好きにはさせないから。」

「どうやって取り返すんだよ。カオリナイトって女もいるんだぜ。そいつにあつたら返り討ちに遭うのがオチってもんだ。」

「そうですよ。ウィッチーズがいなくてもその女はとても強そうですよ。」

「そういえば、なんかその女の人いたわね。とても強そうだったわ。」

「だろ？ そうなる前に虹水晶と聖杯の欠片を全部集めないといけねえだろ。」

「キッドの言うとおりだ。早く銀水晶と聖杯の修理をしなくちゃいけないよ。」

「でも、武さんは虹水晶を持ってないんじゃないですか。」

「そういえばそうだ。」

ドラえもんはジャイアンを調べたところ、虹水晶はなかったのだ。

「何処にいったのかな。」

その時、ドラニコフは空の方を指差した。

「がう。」

「どうしました？ドラニコフ。」

空から、あんさん、と声が響き、その声の主が舞い降りてきた。

「エド！？」

エドはキッドの胸元を掴んで抗議した。

「酷いでっせ、あんさん！ワテを置いてけぼりにするなんて！」

「ごめんごめん。オメーにも十分世話になったもので……。」

「それでも、連れて行ってあげないとだめですよ。」

「がう。」

「へえへえ。そうしますよ。ごめんなエド。」

結局エドも仲間になったのだ。その時、町中に騒ぎが起こった。

「なんでっしやる？」

「さあ。」

新たな騒ぎが起ころうとしている。

館内

「こやつはシプリンと云うのでアルか？」

「あいつは妹のプチロルとコンビネーションを組むからとても手強いのよ。」

パワえもん達は、黙りこくる。

「大丈夫よ。あたしたちには、こんなに仲間がいるじゃない。みんなで力を合わせれば、なんとかなるよ。」

「ちびムーン……。」

「あたしは、実を言つとね。本当は一人はいやなんだ。傍にいたお友達が二人もいなくなつて、怖いと思った。でも、今は違う。マーズやリニョちゃん。そして、パワちゃんやその仲間がいてあたしは恐くなんかない。1人じゃないんだ。」

「ちびムーン……。」

「なんだかんだ言つて。本当は一人じゃ何もできないじゃん。」
その台詞はマーズと同年代の少女のものだった。

「うさぎ……。」

うさぎだけじゃなく、のび太やしずかそれにタキシード仮面やルナがいた。

「ぼくたちも虹水晶をダイヤモンドに盗られたのかと思って……。」

「此処に来ちゃった。」

しずかは舌を出した。

「ちびムーンの友達は、絶対に助け出して見せる。」

「ちびうさちゃん。一緒に戦いましょう。」

「みんな……。うん、判った。」

「決まりだな。」

「うさぎ、これ。」

マーズは虹水晶とブローチそして聖杯の冠を渡す。

「マーズもその宝石持ってるの？」

「『も』って？」

「あたし、ジャイアンくんこれと同じ宝石を貰ったんだ。」

ちびムーンはマーズ達と同じ石を見せる。

「虹水晶。やった。これで全部揃った。」

「これが虹水晶なんだ。」

「知らなかったのか……。」

「ちびムーンは虹水晶は初めてだったんだ。」

「うさぎ、今ならセーラームーンに変身できるわ。」

ちびムーンは聖杯の器を出す。

「聖杯の器。これで欠片が全部揃った。よし。」

「あら。御邪魔虫がいっぱいね。まとめて相手してあげる。」

「掛かって来い！ムーン・コスミックパワー！メイクアップ！」

変身呪文の掛け声と共に虹水晶がブローチに収まり、銀水晶にな

り輝いた。うさぎは久しぶりに変身した。

「うわー、可愛い。」

ドラリーリヨはセーラームーンの周りをクルクル回った。賺さず、ドラメツドの鉄拳がとんだ。

「静かにするアル。」

「はい。」

「人々のピュアな心及び世界の平和を奪う悪人。例えファラオ90が許してもこのセーラームーンが許したりしないわ。

愛と正義のセーラー服美少女戦士。セーラームーン！平和を願う人々に代わっておしおきよ！」

「久しぶりのセーラームーンだー！」

「かつこいー！」

セーラームーンはハート・ムーン・ロッドとムーン・スティックを掲げる。

「ムーン・ヒーリング・ハート・アタック！」

2つの杖から大量の三日月とハートの群れがダイモーンに襲い掛かる。

「暴力反対。ラブラブリー！」

う・イカサマンはトランプの束と卵の2つに分離した。残ったのはピュアな心唯一つだった。

「やっぱりジャイアン達のはなかったんだ。」

「でも、ノビーニヨのがあってよかった。」

ドラリーニヨは素早くピュアな心を回収した。

「後はお願いな。」

ドラリーニヨのポケットから猫耳のドラえもとよく似た黄緑色の猫型ロボットが4体出てきた。

「何これ？」

「これ、ミニドラえもん。略してミニドラ。」

「ミニドラ、これをノビーニヨに返してきて。」

『ドララ〜。』

ミニドラは何処でもドアでピュアな心をノビーニョに返しに行った。

「さてと、次はアンタを何とかしないとね。」

「ふふふ、できるかしら。」

シプリンは杖から電撃を出す。

「おーっと！」

ムーニー行はそれを避ける。

タキシード仮面はのび太としずかを抱えて後ろに逃げる。

「げげ、こいつ強すぎる。」

「だからって諦めたりしないわ。」

「アンタ、随分と強気ね。いつもなら怖がるのに。」

「成長したのね。」

「タキシード仮面様。ドラちゃん達を呼んできて。のび太くんとしずかちゃんの下がつて。ルナ、二人をお願い。」

「判った。」

タキシード仮面は外に向かった。

「フォボス、デイモス。マーキュリー達を呼んできて。」

2羽のカラスも速やかに館に出た。

上空

フォボスたちはドラえもん達に知らせようとした。そんな彼らにある飛行物体が襲ってきた。

館内

「随分と頼もしい仲間達ね。」

「まあね。ここからが本番なんだからね。」

「よし、ぬん。ファイヤー・ソウル・バード！」

火の鳥がシプリンに襲い掛かってきた。

「こんなもの。」

電撃で火の鳥を消した。

「うそ、効かない。」

「これならどうだ！シュート！」

ドラリーニヨのサッカーボールが襲うがこっちはかわされた。

「うきー、こっちも効かない！」

「これならどう！」

ちびムーンはルナPを取り出した。

「ルナP変化！」

ルナPはロケットランチャーになった。

「これでも食らえ！」

ロケットランチャーを放つ。その弾は電撃で爆破されてしまった。

『キヤー！』

『ワー！』

セーラームーン達は飛ばされてしまい、ムーンから八つの聖杯の欠片が飛び出した。

「しまった。」

「とうとう、聖杯が手に入る。」

シプリンが欠片に手を伸ばそうとした時、

「サイレント・ウォール！」

強大なドームが阻んだ。

「誰だ！」

ドアの前にヴィーナスたちが立っている。

「うさぎちゃん、おまたせ。」

「怪我はなかったか。」

「アルテミス。」

「みんな。」

「この子達が教えてくれたわ。」

「この子達が？」

『ドララ。』

アルテミスの背に7体のミニドラが乗っている。

「万が一のためにこっそりだしたんだ。特徴をちびムーンちゃん

に教えてもらったから。」

「ありがとう。ミニドラたち。」

『ドラァ。』

「でも、デイモスたちがいないわ。あの子達に会わなかった？」

「いいや。のび太くん達から連絡が来ただけなんだ。」

確かにフォボスとデイモスがいない。

「変ね。」

「それより、早くスーパーセーラームーンに。」

「はい。」

「お願いね。セーラームーン。」

「世界の運命は貴方に掛かっています。」

「頑張つて。セーラームーン。」

セーラームーンは欠片を拾ってそれを掲げる。

「クライシス！メイクアップ！」

ところがなんの反応はなかった。

「変身できない……。。」

『えー！？』

第四章倒れ行く仲間PART3（後書き）

久しぶりにセーラーMoonが登場しました。でも、やっと聖杯が全部揃ったのに、スーパーセーラーMoonに変身出来ません。どうなるのでしょうか？

第三章倒れ行く仲間PART4（前書き）

セーラームーンは聖杯の修理がまだだったため二段階変身ができません。これからどうなるのでしょうか。
早く聖杯の修理をしなければなりません。

第四章 倒れ行く仲間PART 4

館内

「聖杯が壊れたままじゃ変身できない……。」

「しょうがない。みんな聖杯が直るまであたしただけでなんとかしよう。」

「ちびムーン……。」

「ムーンは僕としずかちゃんを守るよ。」

「その間に我輩たちがタイム風呂敷で聖杯を直すアル。」

ドラメッドはターバンからタイム風呂敷を取り出す。

「だつたら僕も。」

「パワえもんも風呂敷を取り出す。」

「これまでの償いとして私も手伝おう！」

ドラパンも風呂敷を取り出す。

「ムーンちゃんのためなんでもしちゃう。」

ドラリーニョも風呂敷を出す。欠片を4枚の風呂敷で包む。

「頼むね。」

「OK！」

セーラームーンはのび太達に託される。

「ごめんね。のび太くんやしずかちゃんは守るつもりだったのに。」

「いいんです。私もうさぎさんに助けてもらいましたから。」

「僕だつて。それに戦うって自分から決めたんですから。」

「ありがとう。みんな。」

話を元に戻す。

「スモール・レディ。先ほど『あたしたち』といましたが……。」

「そうだよ。あたしとヴィーナス・マーズ・ジュピター・マーキュリー。そしてプー・ウラヌス・ネプチューン・サターンのみんな。」

よ。」

「サターンもですか？」

「そうよ！なによ！？プーたちは未だほたるちゃんを疑ってるの！？ほたるちゃんはいいい子だよ！あたしの修行を邪魔しないで！」

「そういつつもりは・・・。」

「ないなら、これ以上ほたるちゃんを疑わないで！ほら行くよ！」

『うん！』

ウラヌス・ネプチューン・プルートは乗り気ではないが、マーズ達は乗り気だ。

「ふふふ、どうやらやる気満々ね。」

「うるさい。よくもあたしの友達を！アンタだけは絶対に許さない！」

ちびうさは、ロケットランチャーを像並みの大きさのヤタガラスに変えた。

「みんな、突撃！」

『オー！』

ちびムーンたちの総攻撃が始まった。

「シャインアクア・イリユージョン！」

「ヴィーナス・ラブ・ミー・チェーン！」

「スパークリング・ワイド・プレッシャー！」

電撃入りの光と氷の鎖がシプリンの動きを止めようとした。しかし、シプリンはそれを交わす。

「デッド・スクリーム。」

赤紫の球体がシプリンに襲い掛かった。

「こんなもの。」

電撃で消し去った。

「「これならどう（だ）！？」」

「ワールド・シェイキング！」

「デープ・サブマージ！」

2つの球体がシプリンに飛んでくるがこれも電撃でかわされた。

「9人かがりでもこの程度なのたわいもないわね。」

「まだまだ。これからよ。」

ヤタガラスに乗ったちびムーンがシプリンの前に現れた。

「ピンク・シュガー・ハート・アタック！」

ハートの集団がシプリンに飛んできた。シプリンは杖を回転させガードした。

「そんな……。効かない！」

「今度はこちらの番よ。」

杖を振り下ろそうとしたところを。

「サイレント・ウォール！」

サターン紫の球体を守った。

「大丈夫ちびムーン？」

「ありがとう。サターン。」

互いに微笑みあう2人。

「どうやら、貴方からやつつけなきやいけないようね。」

シプリンはサターンのところに向かった。そこをちびムーンが阻む。

「サターンは、あたしが守る！」

ちびムーンはシプリンに突っ込んできた。これが元で激しい戦いになった。

ドラリーニョたちは、一生懸命聖杯を直そうとしたが、全然直りそうもない。

「だめだよ。」

「どうなっているでアルか。」

「判らない。」

「どうすればいいのだ。タキシード仮面とやらの青年はいないし。フォボスたちは何をしているんだ。」

こうしてる間にも。

「キヤー！」

等々ちびムーンは空中から叩き落された。当然ルナPボールは元

に戻った。

「ちびムーン。」

マーズはちびムーンを抱き起こす。

「だめだわ。この人強すぎるわ。」

「もう我慢できない。」

ムーンは飛び出そうとするがのび太に止められた。

「ちよつと、のび太くん。放してよ。」

「だめです。下手をすれば貴方もやられてしまいます。」

「だからって、このまま引き下がるわけじゃないじゃないの。」

「でも……。」

ムーンとのび太の口論にシプリンが表れる。シプリンは杖を振るうとする。

「うさぎちゃん!」

「危ない!」

ルナとアルテミスが飛び掛ったが。

「邪魔よ。猫ちゃん!」

シプリンの電撃で弾かれてしまい、地面に叩きつけられる。

「アルテミスさん。ルナちゃん。」

しずかは2匹を回収する。

「これでおしまいよ。」

そのとき、赤い薔薇が振り二人を救った。

「セーラームーン。遅くなってすまない。」

シルクハットを手にしてタケコプターをつけて浮いているのはタ

キシード仮面だった。

「タキシード仮面様!」

「タキシード仮面さん!」

「己!」

そこへ

「ドラ・ザ・キッド、とーちやーく!」

エドにまたがったキッドが現れた。

「エル・マタドーラ参上。」

マタドーラは恭しくお辞儀をした。

「ホアチョチョチョー！フリー！王ドラ見参いたしました。」
忍者みたいなスピードで王ドラが見参した。

ドラニコフがコサツクダンスでチョコンと表れた。

「がう。」

そこへ

「ジエドーラも一緒だよ。」

ドアからジエドーラが顔を出した。

天井からノラミャーコが舞い降りた。

「お待たせ。うさぎちゃん。」

タキシード仮面の後にドラミとセワシが顔を出した。

「うさぎさん。」

「のび太おじいちゃん。」

そして、

「のび太くん。みんなお待たせ。」

何処でもドアからドラえもんが現れる。

「ドラえもんズ、全員集合アル。」

ドラえもんズが此処に集結した。

「ドラちゃん。」

「ドラえもん。」

第四章倒れ行く仲間PART4（後書き）

いよいよドラえもんズ編はラストに近づいています。
スパーセーラームーンが復活します。

第四章倒れ行く仲間PART5（前書き）

3月までかと思ったら4月もありました。

私ったら何を慌ててたんでしょう。

全く、馬鹿な私です。

さて、いよいよブラジル編及びドラえもんズ編も最終回に近づきました。

ドジで不器用な上に未熟だけど、一生懸命な私。絶対に諦めません。

第四章倒れ行く仲間PART5

館内

ドラえもんズはやつと全員集合した。

「ドラえもん、みんな。」

「のび太くん、ごめんよ。遅くなってしまつて。」

「いいんだよ。ドラえもん達が来てくれただけで僕達は満足なんだ。」

「のび太くん。再会のところ、悪いけど、いい加減放してくれな
いかな。」

のび太はまだセーラームーンを押えたままだった。のび太はムーンを放した。

「ごめんなさい。」

「いいのよ。」

ドラリーニョが泣きながらドラえもんたちのところに飛んできた。

「ドラえもん！ちょうどよかった！」

「どうした。ドラリーニョ！」

ドラメッドたちも飛んできた。

「聖杯の欠片が全部揃ったというのに、修理がなぜかできないんじゃないー！」

『えー！』

「どういうことなんだ！？」

「判らない。何度もタイム風呂敷を試してみたが、全然効果がないんだ。」

「そんなー。」

「このままじゃ、うさぎちゃんのパワーアップできないの！？」

「がうー！」

「それはないと思うけど、ただどうやったら聖杯が直るかが問題だ。」

「全く、せっかく聖杯が直るって時に・・・。」

そうしてる間にもシプリンがセーラームーンやのび太に襲い掛かるうとしている。

「のび太、うさぎ、前！」

「えっ！」

タキシード仮面とセワシが間一発のところで二人を救った。

「セーラームーン、大丈夫か？」

「おじいちゃん、怪我はない？」

「大丈夫。ありがとう（ございます）。」

「あらあら、運のいい子たちね。」

シプリンはまた二人に襲い掛かるうとした。そこヘルナPボールが二人を守った。ちびムーンのルナPシュートが救ったのだった。

「アンタの相手はこっちょ。」

「威勢のいいこと。」

シプリンは杖をトンと軽く叩いた。

「なに？」

ちびムーンたちの周りから一個ずつ球体が表れ彼女達を包み上空に浮かび上がった。

「きゃあ。」

なんとちびムーン達はシプリンに捕えられてしまったのだ。

「みんな。」

「おっと、動かないで。動いたら彼女達の命はないのよ。」

「くそ、拙いことになったな。」

「どうしよう。ドラえもん。」

「そんなの。僕に言われても・・・。」

「こうなったら一か八か……！」

「何をするの!？」

ムーンはハート・ムーン・ロッドを構える。

「みんなを助ける！」

「な!何をバカなことを・・・。」

「判ってる！下手をすれば、私が死ぬんでしょ！？でも、みんなを助けるためにはこうすること以外ないわ！」

ムーンは、当初はドジで弱者な少女だったが、今は泣くところを一つも見せずに前向きに戦おうとしている。ムーンはシプリンに立ち向かおうとしている。

「シプリン、1対1の決着を付けましょう。アタシが勝ったら、みんなを下ろして。アタシが負けたら聖杯を渡す。」

「いいでしょう。その手に乗ったわ。」

シプリンも杖を構える。女同士の一対一の一騎打ちが始まろうとしている。その時、キッドはシプリンの顔に反応した。

「おまえは、プチロル？こいつ、生きていやがったか！」

キッドはムーンの前に立ち空気を構えた。

「私は、プチロルの姉のシプリン。死んじゃったのね、あの子。可愛そうに……。此処で妹の敵を打ってあげるわ。」

「上等だ。掛かって来い！」

「待ってくださいキッド。此処は私達みんなで力を合わせましょう。」

「そうだよ。久しぶりにドラえもんズが全員揃ったし、みんなであのおばちゃんに一泡吹かせてやろうよ。」

「そうよ。キッド。」

「……。おし判った。」

「それじゃ。みんなで……。」

ドラえもん達はノラミヤコ・ドラパン・パワエモン・ジエドールにセーラームーンを託し、タキシード仮面にのび太たちを託してドラミは聖杯の欠片を手に行っている。結局直らなかったのもそのままだ。預かることになった。ドラえもんたちは親友テレカを所持している。

「行くよ。」

『うん。』

ドラミを中心に円を作り、ドラえもんズは親友テレカを掲げる。

『われ等、ドラえもんズ!』

テレカが輝いた同時に聖杯の欠片が宙に浮き、合体して聖杯になった。聖杯はムーンの前に降り立った。

「これが、聖杯?」

「キレー。」

セーラームーンは聖杯を手取る。

「聖杯が直った。これで戦える。」

セーラームーンは呪文を唱える。

「クライシス!メイクアップ!」

セーラームーンは蝶のような羽を身にまとった少女・スーパーセーラームーンに変身した。

「なに。」

スーパームーンはハート・ムーン・ロッドとムーン・スティックを掲げる。

「レインボー・ムーン・ハート・エスカレーション!」

三日月とハートと虹の集団がシプリンに襲い掛かる。シプリンは杖で防ごうとするが押されてしまい、球体にヒビが入り、壊れて彼女達は脱出した。

「やった。出られた。よし、反撃開始。」

ちびムーンはルナPボールを弾ませる。

「ルナP変化!」

ルナPは聖杯になった。

「そんな聖杯がもう1つ!」

「クライシス!メイクアップ!」

ちびムーンはスーパーちびムーンに変身した。ピンク・ムーン・スティックを構える

「ピンク・シュガー・ハート・エイク!」

ハートの集団がシプリンの杖を破壊した。

「そんな。」

「それ、おまけだシュート!」

ドラリーニヨのサッカーボールが腹部に命中した。さらに押されたシプリンは。

「そんな。この私が狸や小娘共にまけるなんてー！」
シプリンは消滅した。

「やったー！」

「ウィッチーズ5は全部倒したぞ！」

『ばんざーい！』

のび太たちは、大喜びだ。ただマーズたちは気を失っている。落ちた時らしい。

「みんな大丈夫かな？」

「大丈夫よ。」

「みんな君を守ろうと必死だったんだよ。」

「そうだよ。ドラえもんズみんな。ありがとう。」

「いや。そんな。」

ドラリーニヨは照れている。ただキッドたちは。

「あのさ、セーラームーン。」

「なに？」

「ペロたちのことだけど、Dr・アチモフって悪い奴に捕まったんだ。」

「何ですって！？」

「アチモフって、あの白髪のおっさん！？」

「ちびムーンちゃん。知ってるの？」

「此処に来る前にあったわ。ていうか、アンタもあのおっさんに会ったんでしょうが。」

「あれ……。そうだった？」

「そうよ。」「ふうさぎより物忘れが激しいわ。」

「それで何者なの？あいつもデス・バスターズの一味なの？」

「ううん。ちがうの。あいつはそのことについて何も知らないし。」

「だとしたら、一体何者なんだろう？」

「そんなことより、早くイタリアに戻りましょう。聖杯や銀水晶は直ったんだから。」

セーラームーンとドラえもんズはマーズ達を起こしてイタリアに引き上げるのだった。

第四章倒れ行く仲間PART5（後書き）

シブリンとプチロルのコンビネーションは今回は見られませんでした。

残念です・・・。

用語集2（前書き）

ドラえもんズ編の用語辞典です。
あまり覚えていないらしいですが、とりあえず紹介だけはしておきます。

用語集2

光羅針盤・・・探し物をするときに、何かを見つけないと念じると光が探し物に反応する。
オリジナル秘密道具。

電気大砲・・・ドラミのオリジナル道具。空気砲と見た目は同じだが、大砲から電気の球が飛び出して敵を痺れさせる。

スーパーセーラームーン・・・セーラームーンの2段階変身した姿。後のssで通常系で活躍する。別名スーパームーン。

レインボー・ムーン・ハート・エスカレーション・・・スーパームーンのオリジナル必殺技。
ムーン・スティックとハート・ムーン・ロッドを合わせ持った技。
ハートと月と虹の集団で敵を浄化する。

マジパーン・・・マジパンから誕生したオリジナルダイヤモンドドロイドのマジパーンと同じ姿と能力を持つ。
弱点も同じでマーキュリーの攻撃で力が低下してセレニティに倒された

痣の位置は右掌。

アイアンダー・・・sの105話の冒頭（回想）で登場したダイヤモンド。アイロンから誕生した。怪力技はピカイチでジュピターを負かした相手。マタドール達の連携で敗れた。

ムーン・スティック・・・セーラームーンの最初のアイテム。敵を浄化させる技。今作ではハート・ムーン・ロッドと同時に使って

いる。

う・ンディーネ・・・オリジナルダイモーンで、珍しく動物から誕生した人魚の姿をしたダイモーン。スナメリから誕生した。水中戦が得意で口から水を吐く。長い髪は切ってもすぐに元通りに生えてくる。その髪で相手を拘束する。姿容は人魚であり、水中では素早い地上ではスピードが落ちるため地上戦が苦手。王ドラの作戦でビリユイと相打ちになる。

スナメリは王ドラ達に海に帰された。

ハーチーフ・・・ハンカチから誕生したオリジナルダイモーン。容姿はスカーと瓜二つ。能力も同じ。ただし、痣の位置は右胸の上部で服装は青のドレス。

ドラニコフの炎に倒される。

ランプルー・・・シンドバッド王のコレクションのランプから誕生したオリジナルダイモーン。踊り子の姿をしており、剣術が得意。影からランプの精霊を出す。

マーズにお札で動きを封じられ、倒された。

バーニング・フェニックス・マンダラー・・・マーズのオリジナル技。ファイヤー・ソウル・バードに類似する。数枚のお札を合わせ持った。バーニング・マンダラーの強化技。炎の不死鳥で敵を焼き払う。

ムーン・ヒーリング・ハート・アタック・・・ムーンステイックとハート・ムーン・ロッドを合わせ持った、ムーンのオリジナル技。ハートと月の集団で敵を浄化する。

用語集2（後書き）

念のためにオリジナルキャラクターも出しておきます。

ゲストキャラクター（前書き）

ドラえもんズのキャラクターとドラえもんの映画をあわせて登場させたのですが、オリジナルキャラクターも追加しました。
ついでだからエイルとアンも紹介いたします。

ゲストキャラクター

エイル・・・水色の長い髪の青年エイリアン。吹奏が得意で、カイディアンを呼び出す際は、いつも葉で作られた笛を吹いている。セーラーサターンによって、地球人になる。

アン・・・うさぎと年代と思われる。桃色の長い髪の乙女エイリアン。うさぎとは、仲が良く、うさぎと戦うのを最後まで拒んでいた。

エイル同様、セーラーサターンによって、地球人になる。

ジャイポラ・・・ドラニコフの所属する映画監督。怒ると無理難題を出してしまう始末。ヴィーナスの魅力に惹かれて今作の映画のヒロインに選んだ。

クンツアーツ・アイシーズ・・・映画の大道具係。ヴィーナスと大の仲良し。ダイモーンの標的にされる。
クンツアイトと瓜二つ。

アニー・・・キッドの就職先の保安官の孫娘。見た目は綺麗だが、料理は苦手。ダイモーンの標的にされる。

添採炭・・・ゾイサイトと瓜二つの美青年。村の骨董品屋を営んでいる。ポニーテールのゾイサイトと違い、毛先で髪をまとめている。マーキュリーとネプチューンに音楽大会の出場を奨める。

添茶御茶御・・・王ドラの恋人の少女。採炭とは従兄妹。マーキュリーたちと音楽大会に出場する。商人によってダイモーンの生贄に捧げられる。

商人のおじさん・・・採炭たちを自分の子供のように可愛がる優しい男性。茶御茶御の生贄が決まったときは、哀しそうな顔をした。

ネフライター・アリエール・・・洋菓子屋を経営している、ネフライトそっくりの青年。パテシエコンクールにジュピター達と出場する。ダイモーンの餌食にされる。

ジェニー・フルーチェ・・・ネフライターと仲良しの少女。ドラセロナのお姫様。町の人々に人気がある。容姿は『オカシナナ』のヒロインのハニー姫と瓜二つ。コンクールでテルルの手から逃れるために家出をしてしまったが、うさぎたちの励ましでコンクールで審査を担うようになる。しかし、最終的にダイモーンの餌食になってしまう。

テルルが来てから笑顔を失ってしまったが、セーラー戦士の活躍で笑顔を取り戻す。

カルミン・・・ネフライターの洋菓子店の常連客でマタドーラの恋人の少女。テルルンの餌食にされる。

シンドバッド・・・『ドラビアンナイト』のゲストキャラクターで『船乗りシンドバッド』の主人公。お茶目な性質。黄金宮の王様。嘗て、一人の未来人と知り合い、黄金宮を貰う。様々なコレクションを持っているが、ドラパンにそのうちの一つ・月の冠を取られてしまい、マーズ達と一時的に行動する。冠がセーラームーンの聖杯の欠片と知ってから冠を託すがユーギアルの捕獲銃の餌食にあってしまう。

ジェライツ・ナイト・・・ジェライトに類似する青年。シンドバッドのお目付け役。マーズ達と共に行動した。城の住人の中で珍し

く人間。

ランプの精霊・・・愛称・ランプ。うさぎやドラえもんやのび太並みのドジでマーズ達の前で居眠りをしてしまい、大慌てだった。料理と絵が得意。ランプの中に入っていたためランプがダイモーンになるときに一緒に操られて、マーズ達に襲い掛かった。ランプが浄化されたとき、一緒に元に戻った。

盗賊・・・首領のアブジル。副首領のカシムと二人彼の手下。シンドバッドの黄金宮を乗っ取るうとしたところ、ユーギアルに捕獲された。ユーギアルが敗れたあとは、ドラパンによってブロンズ像に変えられ、彼のコレクションに加えられる。シンバッド同様『ドラビアンナイト』のキャラクター。

ノビーニョ・・・ドラリーニョの仲良しの少年。ダイモーンにピュアな心を奪い取られる。

Dr・アチモフ・・・ドラえもんズの天敵の悪の科学者。デス・バスターズ同様、ドラリーニョの聖杯の欠片を奪おうとして、ノビーニョたちにサッカーを挑む。その最中にトラップを仕掛けるがセーラーちびムーンに妨害される。後に、フォボスたちを誘拐する。

ゲストキャラクター（後書き）

こんにちは。ついでだから、デス・バスターズも次回に紹介します。

デス・バスターズ（前書き）

セーラームーンsで登場した敵組織。各時代の人間のピュアな心や聖杯を狙って、世界を沈黙に招こうとする。

今作ではセーラー戦士がドラえもん達、サターンを加えて再戦を行う。

デス・バスターズ

上層部

ファラオ90・・・デス・バスターズのボス。嘗てセーラーサターンに封印されたが、後に復活を遂げる。復活の方法は不明。

カオリナイト・・・デス・バスターズの秘術士の女性。長い髪を武器とする。何処を支配しているかは不明。ほたるをいつも苛めている。

ウィッチーズ5

カオリナイトの部下の5人（6人）の魔女。それぞれの時代の国を襲撃している。1度はセーラー戦士に倒されたが今作で復活する。なお双子の魔女のシプリン・プチロルは今作では別々に行動してしまっただためにセーラー戦士やドラえもんズに倒されてしまう。

ユーリアル・・・アラビアに登場した赤毛の娘。炎の能力を持っている。様々な機械を扱っている。シンバッドが聖杯の欠片を持っていると突き止め、黄金宮に乗り込み、彼のコレクションの1つにダイモーンの卵を植えた上に、彼のピュアな心を奪った。ドラメッドたちを人質にとろうとするが、反対にドラメッドの策略により、石像に変えられる。

ミメット・・・ロシアに登場したアイドルのような容姿を持つ橙のセミショートウェーブの娘。闇の能力を持っている。魔女らしく黒い星のついた杖を所持している。ドラニコフの撮影の終了後、ダイモーンと共に襲撃するが、ドラニコフが持っていたムーンステイ

ツクで杖を折られた上に炎の餌食になった。

テルル・・・スペインに登場した黄緑色の筒風シニヨン付きの短めのクルクルツインテールの少女。

植物の能力を持ち、ダイモーンだけじゃなく妖花テルルンを使ってドラセロナの人々のピュアな心を奪ったり、ドラえもんズやセーラー戦士を苦しめたが王ドラたちの機転でピンチに追い込まれ、ハイパーテルルンにドラえもんズやセーラー戦士と戦わせて集めたピュアな心で退散しようとするがマタドーラに邪魔をされ前回同様、ハイパーテルルンに捕まり、サターンのサイレント・ウォールの中で爆死した。

ビリユイ・・・中国に登場した水色がかったセミロングの亜美たちと同年代の少女。氷の能力を持っている。王ドラの拳を受け止めるなど、防御力が高い。音里の少女達のピュアな心を集めようとしていた。次第に王ドラたちに暴かれ、王ドラの策略でダイモーンと相打ちになる。

シプリン・・・双子の姉魔女。ブラジルに登場した青色の三つ編みつきライトシニヨンの少女。ミメット同様杖を所持している。電気の能力を持つ。ドラリーニョにおばちゃん呼ばわりされる。ダイモーンと共にちびムーンとドラリーニョとジジ抜きで勝負するが敗れてしまう。ダイモーンが敗れた後、セーラー戦士に襲い掛かるが、スーパーチビムーン・ドラリーニョ・スーパームーンの連携で倒される。

プチロル・・・双子の妹魔女。アメリカに登場した赤色の三つ編みつきレフトシニヨンの少女。姉やミメット同様杖を所持している。姉と同じ能力を持つ。キッドが聖杯の欠片を持っていると知り、ドラミを人質にしようとして、四次元の世界でキッドと死闘を繰り広

げるが、うさぎに妨害され、ドラミは救い出されてしまう。サターンと先代プリンセス・セレニティとキッドに倒される。

ダイモーン・・・カオリナイトやウィッチーズ5が指揮する怪物。

再登場

ミクージ・・・レイの庭の神木から誕生したダイモーン。前作と同じく最初に登場したダイモーン。

のび太やセワシを人質にしたり、タキシード仮面のピュアな心を奪い取ったりするが、スーパーちびムーン・内部太陽系四戦士・セーラームーン・ドラえもん達の連携プレーで倒される。痣の位置は胸部。

アイアンダー・・・用語集2を参照

う・バーラ・・・黄の薔薇から誕生したダイモーン。花の属性も持っているため、海水に弱く、ネプチューンの攻撃で萎れてしまい、倒された。

う・タヒメー・・・ロシアで登場したダイモーン。マイクから誕生。その名の通り歌を歌う。歌の威力は耳バンドXを破るほど強い。ノラミヤーコとヴィーナスのタッグに敗れる。

う・イカサマン・・・ギャンブル道具から生まれたダイモーン。性格は前回と変わっていない。今作はシプリンと共にちびムーンとドラリーニョのタッグに挑むが敗れてしまい、セーラームーンの新必殺技に敗れた。

オリジナル

用語集1&2を参照。

デス・バスターズ（後書き）

以上で人物紹介終了。次は最終章に入ります。デス・バスターズやアチモフの戦いもいよいよです。

第四章捕えられたほたる（前書き）

お待たせしました。いよいよ最終編に入ります。

のび太くんの仲間の殆どがダイモーンに襲われ、動物達はアチモフに捕えられてしまいました。残されたセーラー戦士とタキシード仮面こと衛さん・ドラえもんズそしてのび太くん・しずかちゃん・セワシくん（もちろんエドやルナたちも）はデス・バスターズとの最終決戦をイタリアで控えています。

ほたるちゃんはいつになったらはるかさんと和解できるのでしょうか。

第四章捕えられたほたる

21世紀中期 昼ごろ イタリア飲食店 リビング
うさぎ達一行はピュアな心の結晶を失ったジャイアン達をブラジルに残して、21世紀中期のイタリアに戻ってきた。

キッドたちによるとブラジルのペットホテルからアチモフとその手下の娘たちが嫌がるペロたちを連れ出しているところを目撃したと言っらしい。ちなみにアチモフの顔にはあちこちの絆創膏が張ってあった。ちびムーンに叩き落された後のようだ。おそらく、ちびムーンへの仕返しとして利用する気らしい。アチモフはちびムーンに散々コケにされたらしい。

「全く、どうしようもないおっさんだわ。あいつがりニョちゃんたちの試合を妨害しようとしたからじゃない。」

「よく、そのアチモフのとか言う奴の行動を見てたわね。貴方。」

「ねえ、ちびうさちゃん。僕達そのアチモフの顔をよく知らないんだ。特徴だけでも詳しく教えてもらえないかな？」

「それなら、簡単よ。紙となんか書けそうなものを頂戴。」

「紙を筆記用具だね。判った。」

ジェドーラは紙と筆記用具を取りに行った。

「ごめんね。ジェイちゃん。」

ジェドーラを見送るちびうさだった。

厨房

レイたち内部太陽系四戦士は厨房で働くことなり、はるかたち外部太陽系戦士はウェイトレスとして働くことになった。はるかにとっては2度目の女装であり、当初は固まっていたが、あつという間にお客様に気にいられて堂々としている。ほたるは持ち前の笑顔でお客様に早くも気に入られた。

ジェドーラが紙と筆記用具を取りにきた。

「どうしたの？ ジエイちゃん。」

「やあ、みんな。」

「何か用事？」

「なんというのか筆記用具と紙を取りに来たんだ。ちびうさちゃん
が絵を描きたいって。」

「ちびうさちゃんが？」

美奈子は首を傾げる。

「半紙と筆ペンならあるけど……。貸してあげようか？」

レイは荷物のポケットから数枚の半紙と筆ペンを取り出し、ジェ
ドーラに貸した。戦士たちは旅立ちの時に荷物も持ってきたらしい。

「ありがとう。レイちゃん。」

ジェドーラは厨房を後にした。

「何の絵を描くのだろう？」

『さあ。』

リビング

リビングではルナとアルテミスがマタドーラと一緒に居眠りして
いる。

「何やってだか……。あのバカは……。」

その上、ドラリーニョ・ドラニコフ・うさぎは呑気にジジ抜きを
している。

「おまけにこの人たちは何をしているんでしょうかね。」

「お待たせ。ちびうさちゃん。」

ジェドーラが半紙と筆ペンを持って戻ってきた。

「おかえり。あら、面白そうなものね。」

「半紙と筆ペンっていうんだ。」

「ちびうさちゃんは、見るのは初めて？」

「うん、あたし書道は聞いたことはあるけど、見るのは初めてな
んだ。」

「だったら、此处で描いてみなよ。」

「わかった。」

ちびうさは半紙と筆ペンを受け取り、キャップを開いてうさぎ達の隣につき絵を描こうとする。そこをドラメッドに止められた。

「スモール・レディ、ちょっと待つでアル。まずは準備を整えねばいかんでアル。」

「準備？」

「そうである。書道をする時は墨がついているか判らない黒い服装をせねばならないアル。」

パウえもとノラミヤコが付け加えた。

「後、新聞紙もいるし・・・。」

「布の下敷きをいるな。」

「下敷きなら取り寄せバッグで取り寄せたらいいんじゃない。」

「新聞紙なら古新聞だけで十分だよ。」

「後は、着替えか。よし、私に任せて。」

ドラミはちびうさをつれて2階に向かった。一度部屋に戻ってきたちびうさは。

「ドラえもんズみんなに行っておきたいけど、あたしのことはスモール・レディじゃなくてちびうさって呼んでね。」

それだけ言つとちびうさは2階に引込んだ。

ドラえもんたちは、書道の準備をしている。うさぎ達のジジ抜きは中止に終わった。

「なにが、ちびうさだよ。スモール・レディってのが本名だろ。」

「しょうがないでしょう。ちびうさはこのあだ名が気に入ってる

んだから。」

「でも、スモール・レディの方がとっても可愛いよ。」

「がう。」

昼寝から目を覚ましたマタドローは。

「じゃあ、俺もあの桃髪のセニョリータをスモール・レディって呼んじゃおうかな。」

彼らに同意した。

「よく言いますよ。さつきまで三日月はげ猫2匹と寝てた癖に。」
ムツとなったマタドローは王ドラを取っ組み合いのケンカになっ
た。

「お待たせ。」

ちびうさは、ドラミのお手製の黒いワンピースに着替えた。まるで西洋の巫女のような。

「ええもん着とりまん。ちびうさはん。」

「えへへ、ありがとう。」

「では、スモール・レディ。アチモフの似顔絵を。」
マタドローとケンカを済ませた王ドラは勧める。

「ちびうさだつて。」

「細かいことはいいからどうぞ。スモール・レディ。」

結局ちびうさはドラえもん達以外のネコ型ロボットからそのまま
『スモール・レディ』と呼ばれることになった。

ちびうさは習字を書くかのように半紙にアチモフの絵を描いた。
その絵を見たドラえもんズ以外は。

『きやはははは〜!』

「なんて個性豊かで間抜けなの〜!」

うさぎ達は噴出してしまった。何しろアチモフの顔は初めて見る
ものだから。

「こんなに間抜けならあつといい間にやつつけてしまつよ〜!」
うさぎたちの笑い声は居眠り中のルナたちや、厨房にいるレイた

ちまで響き渡った。

厨房

「何、騒いでいるのかしら?」

『さあ。』

リビング

「なんか賑やかだな。」

「私達も混ざりましょう。」

昼寝から覚めたルナたちはうさぎ達に駆け寄る。

「ルナ、ひいひい。見てよこれ。」

ルナたちに絵を見せるうさぎ。

アチモフの顔は確かに間抜けでその上、ご丁寧にアッカンベーをしていた。

「なんで、アッカンベー？」

「誰が描いたんだ？」

「あたし……。」

「この絵がどうしたの？」

「のび太くん達にアチモフの絵を描いてあげたの。」

「そっか、アチモフの顔が判らないんだった。」

ルナたちは多少呆れている。激しい笑い声がやまないのか。王ドラとドラメツドの怒りが爆発して遂にシンバルとドラムが鳴った。

その音は、店のはるかたちにも響いた。

店

お客様が静まった。

「うさぎ達だわ。」

「遊ぶんだったら、もうちょっと静かに遊んでもらいたい。」

「スモール・レディにもいつて聞かせておきます。」

「それがいい。頼む。すまない。」

せつなはリビングに向かった。

その時、店に誰が入ってきた。

「いらっしやいませ。」

入ってきたのは、変なおっさんと赤毛の美女だった。

リビング

「いつまで笑っているんですか！」

「お客様に迷惑が掛かるである！」

『ごめんなさい……。』

「しょうがないよ。うさぎたちはあいつの顔はしらないんだから。」

「まあ、初めての人には間抜けで弱そうには見えるね。」

うさぎ達は王ドラとドラメッドに怒られてしまった。そこにせつなが表れた。

「お取り込み中失礼いたしますが、お店の方まで聞こえております。もう少し静かな遊びをなさってはいただけないのでしょうか？」

「ごめんなさい。プー。」

「それにしても、賑やかな人たちに囲まれて幸せですね。スモール・レディは。」

「あはは。」

今のちびうさは幸せものだ。その時、店からほたるの悲鳴が聞こえた。

「ほたるちゃんの声だ！」

「あの子に何かあったんだ。」

ドラえもん、うさぎ、ちびうさ、のび太、セワシ、ドラミは店の方に向かう。

店

ほたるの悲鳴が聞こえたのか、厨房のレイたちも駆けつけてきた。レイたちはほたるを守るかのように両手を広げて背に回した。

「なんだアンタは！此処に何のようだ！」

「答えは簡単。そのお嬢ちゃんを迎えに来たっしょ。」

「何ですって！？冗談じゃないわ。何処のバカオヤジだか知らないけど、アンタなんかにはほたるちゃんを渡すものですか！？」

「ほたるちゃんは私達の仲間よ。何処へも行かせはしないわ。」

「みんな……。」

「そこをどきなさい。」

赤毛の女性は長い髪でレイたちを遠くに飛ばした。お客様は全員

怯えているようだ。

「これじゃ、変身できないわ。」

「ここは一旦外に出る以外はないようだ。」

そのとき、うさぎ達が駆けつけたのだった。

「みんな、どうしたの!？」

「うさぎさん。みんな。」

「うさぎ。カオリナイトが!」

「何ですって。」

「また、会ったわね。」

「おや、まだ他に邪魔者がいたのか。おや、おまえはドラえもん。」

「

「Dr・アチモフ!」

「コイツがアチモフ!？」

「そうだっしょ。」

「よくもまあ、抜け抜けと……。」

ちびうさはアチモフを睨む。

「あり、お前は確か……。」

アチモフはちびうさの顔を見て、ブラジルの試合場でちびムーンにおしおきを食らったことを思い出す。彼女はちびムーンに似ている。いやちびムーンそのものだ。

「あの時の小娘っしょ!」

「どうやら顔を覚えていたようね。」

「当たり前っしょ。姿容が変わろうと顔や髪型までは誤魔化せられないっしょ。」

「だったら、もう一回ルナPボールでとっちめてやるわ。」

「残念だけど、貴方達の相手をしている暇はないわ。」

カオリナイトは片手から衝撃波を出し、うさぎ達を飛ばした。そこへジェドーラが飛んできた。

「なんだ、どうしたんだ!？」

「ジエイちゃん。」

はたるの背後からアチモフの眠り薬が襲った。はたるは眠りに落ちてアチモフ達に連れ去られてしまった。

「はたるちゃーーーーん！」

「はたるさーーーーん！」

ちびうさとドラミの叫び声は店いっぱいに響き渡った。

第四章捕えられたほたる（後書き）

さらわれてしまったほたるちゃんはまた敵になってしまいます。このままだと彼女は今度こそウラヌたちに倒されてしまいます。ドラえもんズ・セーラー戦士、一刻も早く彼女を救い出すのです。

第四十六章新たな旅立ち。パリへゴー！（前書き）

ほたるちゃんは、アチモフに捕まってしまいました。

カオリナイトはどうしてアチモフに付いていたのでしょうか。

何故は深まるばかりです。

第四六章新たな旅立ち。パリへゴー！

飲食店 リビング

うさぎ達・セーラー戦士とのび太達は、王ドラにカオリナイトにやられた傷の手当て（といっても重くはなかったので普通の消毒薬と絆創膏で）をしてもらい、ほたるが誘拐されたことを話した。

「そのカオリナイトって女、なんだってあのくそ爺と一緒にいたんだよ。」

「そこが謎よ。どうしてあのアチモフって爺さんというのよ。」

「なんかよく知らないけど、デス・バスターズとなにか関係があるんじゃないの。」

「だとすると、あのおっさん、自分の身を守るために嘘をついたんじゃないのかな。」

「きつとそうよ。」

「まったく、懲りん爺さんだ。」

ドラパンは悔しそうに齒噛みする。

「パンちゃんは、あのおじいさんにあつた事あるの。」

「あいつには、酷い目にあつた。友人を人質に取られてドラえもんズと戦わされたんだ。本当にやな奴だ。」

「俺達も2回や3回、酷い目に遭つた。22世紀の町中の電気を狂わされるわ、汚いサッカー勝負に付き合わされるわ。もう散々だぜ。」

「あんたたち、よくあのおっさんと戦ってきたんだね。」

「当たり前です。あのおっさんは一回は警察に捕まっただんですけど、何らかの方法で脱獄しましたからね。」

「それにしても、問題はほたるちゃんよ。」

「そうだね。あの子、アチモフに何をされか判らないから、心配だよ。」

「もしかしたら、操られるんじゃない・・・。」

「まさか……。ほたるさんは、不思議な能力があるから操られることはまずないわ。」

「しずかちゃんの言うとおりだよ。操ろうにもほたるちゃんの力で返り討ちに遭うのがオチってものよ。」

ちびうさはいつもの服に着替えた。

「ちびうさちゃんほたるちゃんのことを信じているんだな。」

「当たり前よ。アタシとほたるちゃんはとっても仲良しだもん。」

何かなんでもほたるちゃんを信じる。」

「ちびうさちゃんの言うとおり。私も信じるわ。」

「俺だって、ほたるを信じるぜ。はるか姉ちゃんにどう嫌われようとおんない子はいないぜ。」

キッドの片足をドラミが踏んづけた。

「いぢ〜！ドラミ、いてえだろうが〜！」　　「足踏まれるのはロビンだけでたくさんだ。」

キッドは飛び上がった。

「何、考えるのよ……。」「

フンツと、そっぽむいてドラミはプーッと膨れる。

「破滅っていうより守りって感じがするぜ。」

「そうそう。」

「がうがう。」

「大体、あの子はドラミを利用したりするような。そんな子じゃないよ。」

「あのような女子わらし、悪い娘さんとは到底思えないでアル。」

「みんなもそう思うのかい？」

『もっちゃん！』

「良かったね。ちびうさ。」

「後は敵の本拠地を探せばOKよね。」

「うん、みんなほたるちゃんを信じてくれてありがとう。」

『どういたしまして。』

「そうと判れば、タイムテレビで探ってみようよ。」

「そうだね。よし、タイムテレ・・・。」

「お待ちください。」

口を出したのはせつなだった。

「何よ。また、ほたるちゃんの悪口でもいうの。」

「デス・バスターズの始末は私共が引き受けます。」

「何よ。それ、まさかほたるさんを殺そうとするんじゃないでしょうね。」

「セーラーサターンを消滅させるのよ。」

「同じことよ！」

咄嗟にドラミは怒鳴った。みんな（特にキッド）は驚いている。

「ほたりさんは、私達をいつも助けてくれた・・・。貴方達だつて、彼女に何度も助けてもらったじゃない！？その恩を忘れたの！？」

「恩とかの問題じゃなく、世界を沈黙から守るのが最も大事なことなんだ。」

「何が一番大事とかそんなの関係ない！ほたるさんを助け出すのが先決よ。彼女は私達の仲間なんだから。貴方達もセーラー戦士ならもっと仲良くしたらどうなの！？」

ヒックヒックつとドラミは何度も大粒の涙を溢した。ドラミもちびうさ同様ほたるが大好きなのだ。そんなドラミの頭をちびうさは撫でる。

「ありがとう。ドラミちゃん。信じてくれて。」

せつなは顔を下に向け、冷たく言い放った。

「所詮貴方は、サターンの手助けをする疫病神なのですね・・・。」

「プー、アンタ、なんてことを！？」

「こうなると判っていたから貴方方を巻き込みたくなかったのに、ドラミさんが来てから事態が悪化してきました。」

「プー！」

ちびうさは怒鳴った。

はるか達はうさぎを見て言った。

「お団子。例の救世主^{メシア}だが、滅びの戦士を見方につけてしまうほどの優しさを持つお前が救世主^{メシア}なんだ。」

「え、あたしが。」

「黙っててごめんなさい。うさぎ。」

「私たちは貴方が救世主だと認めても、サターンを許すことはできません。」

「なので、私達は貴方を守るためにデス・バスターズを倒すわ。」

「ちよつと、待って……。」

「お前の笑顔も世界の平和も僕らが守るから安心してくれ。」

はるかたちは、笑顔で自分達の部屋に退散した。

「なんでえ、あの姐^{ねえ}ちゃんら！ほたるを殺すなんてあまりにも酷すぎるぜ。」

「しゃあないお嬢さん達やな。」

「それよりどらえもん。」

「判った。改めて、タイムテレビ！」

ドラえもんはタイムテレビで様子を伺った。

テレビには、手術台の上で寝そべってるのはストラップレスのブラジャーのほたるがアチモフに手術をさせられているところが映っている。

実験室

「いしし。この娘^この沈黙の力を使えば世界征服も夢じゃないつしよ。」

「わたくしの前世の記憶があつてよかったですわ。アチモフ博士。」

「なーに。カオリちゃんはデス・バスターズの幹部の生まれ変わりだから、転生したつら記憶まではかえられないつしよ。それにこの6人娘は……。」

周りに悪魔みたいな覆面を被った6人の娘たちがいた。娘たちは

覆面をとると、

「有村ゆう子。」

「羽生美々。」

「照野留々。」

「美堂ユイ。」

「双冬リント。」

「双冬シロ。」

『我らウィッチーズ6。此処に終結。』

なんと倒したはずの魔女6人娘だった。

「あの子らの偽者は実験用のロボットだったしょー！にやはははは……！ま、これだけの人間のピュアな心さえあれば。なんとかなるっしょ。」

リビング

ドラえもん達は、とても悔しかった。

「今度の事件の黒幕はあいつか！」

「となるとファラオ90の復活の元はあいつね。」

「おまけにあたしたちが倒したウィッチーズ5は全部偽者だったのね。」

「あの女とその部下の魔女は、アチモフの部下の未来人だったなんて……。」

「アチモフめ、いい気になって。」

「それで、そいつらのアジトは？」

「ちよつと待って。えつと……。」

カチカチ調べるとアジトは22世紀のパリの上空の以前ドラえもん達が訪れたパリだった。

「くそ、あんなところに。」

「こうなったら、ウラヌスたちより先にパリに向かいましょう。」

「ええ。」

「ちよつと待って。」

「何、のび太くん。」

「今回ののは今までと行かないよ。」

「そうね。此処は一先ず。」

「一先ず……。」

「土萌教授にほたるちゃんのことを報告しましょう。」

確かに今後のことの対策には教授の相談が必要だった。

「よし、明日の朝。日本に帰ろう。」

20世紀末期 日本 夕方 ほたるの家

ほたるの父・土萌教授は家で娘の帰りを待っていた。

「遅いな。ほたる。ダイモーンに襲われてなければいいが……。」

デス・バスターズの襲来の元は自分の研究の事故から始まったから再び過去の過ちを犯すかもしれないのだ。

「……ピンポン……。呼び鈴の音がした。」

「ほたるかな？」

教授はドアを開けてみた。

「ただいま……。土萌教授……。」

「お帰り、疲れただろう。中にお入り……。」

一行の中にさっきまで一緒にいた仲間少人数（もちろんほたるも）がいないのだった。おまけに見慣れない人物がいた。

居間

うさぎ達はこれまでのことを教授に話した。

「ほたるが敵に連れ去られてしまったのか……。」

「そうなんです。ごめんなさい。教授。」

「ドラミちゃんは悪くないよ。悪いのは……。」

「私達です。」

ちびうさの言葉を遮ったのは王ドラだった。

「私達がもう少ししっかりしていれば、こんなことにならなかったんです。」

「誰も悪くないよ。」

うさぎの言葉に驚く一同。

「うさこ。」

「大切なのはこれからどうするかを決めることよ。明日の朝、みんなでアチモフ城に乗り込むのよ。そして……。」

立ち上がった。うさぎはカーテンと窓を開ける。外の上空では満月が輝いている。

「ペロたちとほたるちゃんを取り返す。」

「うさこ。」

この冒険では泣き虫うさぎは夢のようにすっ飛んでいた。

「そうと判ればこれからのことを考えよう。」

「のび太さん。」

のび太はとてたくましい少年になっていた。

「まずは、会議だ!」

ドラえもんズとうさぎ達の会議は朝まで続いた。

3日目の朝

「「デーーーーー! 寝坊したーーーー!」」

朝まで会議をしたせいでうさぎとのび太のお約束の寝坊がぶり返した。ドタドタと駆け下りる二人は途中で転げ落ちて目を回した。それでも支度は済ませられて朝食の方は間に合った。

朝食時

うさぎとのび太は顔中痣だらけになりつつも黙々と食べている。

レイやドラえもん達はくすくすと笑っている。

「朝まで会議なんかするから寝坊しちゃうんですよ。ぷぷぷぷ。」

「……」

「でも、あたしたちは元に戻ってよかったと思う。ひひひひ……」

「「ほっというよ……。」」

朝食後 玄関

しずか・衛・ノラミヤコ・パウえもん・ルナ・アルテミスは教授の守護を任されることになった。教授までピュアな心の餌食にされたら人たまりもないからだ。

「ほたるを頼んだよ。」

「任せてください。ほたるちゃんは必ずあたしたちが取り返します。」

「これで2度目だね。」

「うさぎさん。早く、早く。」

「今、行くー！」

うさぎはドラえもん達の所に行く。

十番公園

ドラえもんズとセーラー戦士が集まっている。

「ちびムーン。お願いね。」

「うん。」

セーラーちびムーンは時空の鍵を取り出し唱える。

「時の護人よ 時空の扉天空を裂き我に開け放て 我は汝の名を呼ぶ 全能な時の神 護人の父クロノスよ 我を導きたまえ 我を守りたまえ 光の道を我に。」

一行は光の柱に吸い込まれてしまった。

「待ってて。ほたるちゃん。」

彼女達の戦いはいかに。

第四十六章新たな旅立ち。パリへゴー！（後書き）

ほたるちゃんフランスのパリの上空に浮かぶアチモフ城に捕えられてしまいました。

彼女を救うためにドラえもんズとセーラー戦士が立ち上がります。今回は特に長くなりました。

第四十七章絶対絶命（前書き）

パリにやってきたセーラー戦士とのび太くん・セワシくんとドラえもんズ。

一方はるかさん達は、どうやって敵のアジトを突き止めるのでしょうか。またセーラープルートはまた命を落とすようなことはないのでしょうか。

果たして、ペロたちとサターンの運命はいかに。

第四十七章絶対絶命

22世紀初期 パリ 上空

パリに來たセーラー戦士とドラえもんズ。

「此処が、パリ？なんだか完全に荒れ果てたようなところね。」

「ていうか、何もありませんでっしやる？」

「言われてみればそうね。」

しみじみな一行に絨毯に乗ったドラメッドが口を出した。

「みんな何、しみじみしとるか？」

キッド、お主は高所恐怖症であつたな？」

「ああ、そうだよ。」

「下を見ずにエドに乗るである。」

「なんで？」

下を見たキッド。なんと一行は上空にいたのだ。

「何これ！？上空に來たの～！」

「ひえ～、高いとこコワイ！」

「あわわわ～！ドラえもん、タケコプターを！」

「ドラえもん、僕にも！」

言い終わらないうちに、ひゅ～と落ちるのび太一行とセーラー戦士。

エドは、キッドとドラミを乗せて、ドラパンはマントを羽ばたかせ、キッド・ドラミ・ドラパン以外の猫型ロボットはドラメッドの空飛ぶ絨毯に乗る。ところが、・・・チーン・・

「定員オーバーである……。」

再び落ちるドラえもん達。

ムーンたちはと言うと

「ひえ～、落ちる～。」

「これぞ。正しくスカイダイビング！」

「そんなこと言ってる場合じゃないよ～！ヴィ～ナス～！」

「ちびムーンの間抜け！なんでこんな高いところにワープさせたのよー！」

「ムーンに間抜け呼ばわりされる筋合いはな〜い！」

「言い争いはいいから、なんとかして〜！」

「ちびムーン。お願い。」

「判った。ルナP変化！」

ルナPは、大きな風船になった。その風船にドラえもん達がしがみついた。

「助かった〜。アミーゴ、スモール・レディ。」

「それにしてもうさぎ以上のおドジなお姫様ね。」

「それを言うならドラえもん以上だよ。」

「いやいや、のび太おじいちゃん以上だよ。」

ドラリーニョ、マーズ、セワシの言い合いが始まり、ムーン・ドラえもん・のび太は、ほっとしてよ。・・と呻いた。

「うさぎ達なんかと一緒にしないで。」

ちびムーンは膨れてしまう。

「はいはい、ケンカはそこまでにして、アチモフ城を探しに行きますよ。」

「判つてるよ。それにしても・・・。」

ドラえもんは仲良くエドに乗っているキッドとドラミを睨んだ。

「え？」

「何、お兄ちゃん？」

「キッドの奴。ドラミと仲良〜。」

ドラえもんは目に炎を灯している。

「いいの。いいの。二人のムードの邪魔しちゃダメ。」

「いいな〜。ドラミちゃんは。」

「ああ、あたしも彼氏ほしいな〜。」

ドラえもんを取り成すムーンをよそにヴィーナスとジュピターは羨ましがる。

「今は、アチモフ城を探すのが先決よ。」

「羨しがってる場合じゃないわ。」

二人を注意するマーズとマーキュリーにうさぎが冷やかした。

「とか言っちゃって。本当はマーズちゃんたちもドラミちゃんが羨ましいんじゃないの？」

「う、うるさい。大きなお世話よ。」

「け、ケンカはいいから、アチモフ城を探しましょう。」

マーキュリーは多少カチンコチンの状態だ。

「何、やってんだ。あいつ等。」

「仲がいいんがが悪いんだか。能天気な娘たちだ。」

風船の上でドラえもんは。

「キッド、いい加減ドラミから離れろ！」

「がうががう、がががう。（落ち着いて、ドラえもん。）」

ドラニコフに羽交い絞めされながらもじたばた暴れていた。

「いよ、お二人さん。もっとくつつけ！」

「喉けるな！」

ドラえもん達とセーラームーンの大騒ぎはアチモフ城に着くまで続いた。

数秒後

うさぎ達は上空に浮かぶヘンな建物の近くに来了た。

「なんなの？あの建物は？」

「これがアチモフ城である。」

「僕達もそこに行ったことがあるんだ。」

「ジェドーラは初めてだよ。」

「私もよ。」

ジェドーラもドラミは此処に来たのが初めてだった。ドラえもん達はアチモフに騙されて此処に来たのだ。

「この城にほたるちゃんがいるんだ。」

「急ぎましょう。」

一行は城の中に入る。

機械室

一行は機械室に入った。風船はルナPに戻った。

部屋の中は歯車や蒸気道具でいっぱいだ。

「機械だらけの部屋に来ちゃったみたい。」

「何か、罠があるかもしれない……。」

「例えば、ギロチンとか……?」

「ヴィーナスちゃん、へんなこと言わないでよ……。」

「ごめん。冗談よ。」

「もし、アチモフが来たら、みんな親友テレカで対抗だよ。」

「判った。」

「了解。」

「がう。」

「がつてんでえ。」

「任せるアル。」

「ラジャー。」

元気な6人だった。ただ、マタドローラの指摘があった。

「でも、以前の戦いではドラメッドはタロットカードを、ドラリーニヨはサッカーの試合でよく出るイエローカードを、親友テレカと間違えて出しちまったからパワーはいつもより弱いから俺達はアチモフに脅迫されたドラパンに負けた上にキンキンにされて大災難だったぜ。」

「そうなの?」

「そうなの。」

マタドローラはニヤニヤしながら答えた。ドラメッドは多少剥れる。

「煩いアル。あの時は我輩はタロットカードを持っていたから間違えちゃったぞよ。」

「僕もイエローカードを持ってたから間違えちゃった。」

ドラパンは照れて。

「ドラメッドやドラリーニヨは親友テレカを使わなかったから、

使うまで元のままでいてもらってたんだ。」

「なるほど、パンちゃんはある時人質を取られてたんだよね。」

「無理ないわね。」

笑いあう一行。その時、マーズが。

「何か来る！みんな気をつけて！」

この部屋のもう1つの出口から赤白い光が数個光っている。光の正体は、しずかのペットのペロ・ピー子・チツチ、ジャイアンとジャイ子の愛犬のムク、スネ夫の愛猫のチルチル、そしてマーズのペットのデイモスとフォボスだった。

「ムク。無事だったの。」

「デイモス・フォボス。よかった。」

ちびムーンとマーズは座り込む。そのムクやフォボスたちが彼女達に襲い掛かってきた。王ドラは3匹を拳で殴り飛ばす。3匹は体勢を整えた。

「ちよつと、アンタなにすんのよ!？」

「鈍いですよ2人共。この動物達おかしくありませんか!？」

「おかしいって。どこがよ。フツよ。」

今度はチルチルがセーラームーンに襲い掛かってきた。ムーンは平手で猫を叩き落とす。

「ちよつと、何するのよ!バカ猫!」

「ふー!……つとチルチルがセーラームーンを睨み付けた。」

「何、やる気!」

「セーラームーン……。何も猫相手にムキにならなくても……。」

ペロがジュピターの片腕に噛み付いた。

「つつ、ペロ。どうしたんだよ。」

ドラニコフがコサツクキツクで仔犬を引き離して、両手を広げてジュピターを守る。

今度はピー子がツバメのような速さでマーキュリーの体に傷をつけた。マーキュリーはよけるのが精一杯だ。

「ピー子ちゃん、どうしたの!」

ピー子に彼女の声は届かない。ドラリーニョは猛スピードでマーカーキュリーを救い出した。

一方、ドラミは。

「痴漢撃退バリアー!」

バリアーでチツチの攻撃を防ごうとした。そのバリアーも限界に近づいてきた。

「もうだめ。バリアーが持たない。」

「ドラミ! ドカーン!」

キッドの空気砲の弾がバリアーの近くに当たりチツチは上へ退散した。バリアーの消滅後、キッドはドラミの前に背を向けて立つ。

「キッド。」

「どうやら、こいつら、あの爺に操られてるらしいぜ。」

「そんな。」

どこからともなく聞き覚えのある女性の声がした。

「そのとおりよ。」

声の主は、天井で浮いている腕組したカオリナイトだった。

「カオリナイト!」

「貴方、チツチたちに何をしたの?」

「面白いからこの子達を操り人形にしただけよ。」

「何ですって!」

「さあ、君達。この狸共と子供達をやってしまいなさい。」

動物達は一斉にのび太たちに襲い掛かってきた。

セーラー戦士はどう戦うのであろうか。

第四十七章絶対絶命（後書き）

ちよつとのあいだ。失礼しまーす。

（真夜中）

お待たせしました。

いよいよ力オリナイトとの戦いが来ました。

彼女達はペロたちを浄化できるのでしょうか。

第四十八章ファラオ90（前書き）

カオリナイトに操られた動物達に襲われたドラえもん達（ムーンと
のび太くん以外）は手も足もでません。

彼女達は、サターンと戦わなければならなくなってしまっただけでしょ
うか。

第四十八章 ファラオ90

アチモフ城 中庭

外部太陽系三戦士は、セーラープルトのガーネット・オーブでデス・バスターズの居場所を突き止め時空の扉で此処にきたのだ。

「こんなところにあのファラオ90がいるというの？」

「私の力に間違いなどはありません。オーブがそう教えたのですから。」

「今回のデス・バスターズにあの男が関わっているらしい。」

沈黙と破滅の戦士とファラオ90を倒せば完全に僕らの任務は終了する。」

「セーラームーンは破滅の戦士を見方にしてしまうほどの凄い力の持ち主だからメシアと認めたけど、破滅の戦士が見方になったとはいえ、あの力で世界を滅ぼされたら元も子もないわ。」

「だから、一刻も早くサターンを倒さなければなりません。」

「おちびちゃんには悪いけど、デス・バスターズとサターンを倒さなくては世界に沈黙が起こる。」

ウラヌスたちは中庭を搜索する。庭に池があった。

「ねえ、此处からボスの部屋に潜入するというのはどうかしら。」

「それはいい考えだ。」

「やってみましょう。」

プルトはオーブで大きな球体を出し、自分達を包み込んだ。球体は池に入り、ボスの居所へ案内しようとする。

機械室

ドラえもんズとセーラー戦士・のび太・セウシは動物の群れに襲われている。動物達は一行にたくさんの傷をつけようとしているのだ。

「くそ、一体どうしたらいいんだ。」

「この子たちから避けるだけで精一杯よ。」

「一体みんなどうしたっていうのよ。」

そんな中ドラパンは。

「ひー、犬恐いー！」

「離れてよー。前見えなーい！」

ドラリーニョにしがみついているのだ。ドラパンは暗闇と犬が大の苦手だった。

おまけにドラ・ザ・キッドは、ピー子やチツチに高いところに運ばれて。

「降ろしてくれー！ゆっくり降ろしてー！」

泣き叫ぶのがお約束だ。

ムクはセワシに襲い掛かろうとしたが、のび太が両方の張手で犬を突き飛ばした。

「セワシに何するんだ！セワシは僕の後に隠れて。」

「判った。ありがとう。」

セワシはいつもののび太じゃないと思った。今回ののび太は逞しいのだ。

それはセーラームーンも同じだ。いつもは操られた人を見るだけでも躊躇してしまうのに今回に限ってやけに強気だ。

二人は襲ってくる動物達を次々に払い落とした。動物達は次第に疲れて目を回してのびている。

「なに！」

のび太とムーンはカオリナイトに向き直った。

「カオリナイト！動物を洗脳したところで僕達が躊躇すると思ったら大間違いだぞ！」

「アンタ達がほたるちゃんやペロたちを誘拐したせいであたしたちは物凄くご機嫌斜めよ！」

そんな悪い奴は、月に代わっておしおきよ！」

ムーンとのび太は今はかなり強気な性質でドラえもん達は目を丸くした。

「あのどじで軟弱娘が今回に限って……」

「とても輝いている……」

「なんだか負けそう……」

「いつもののび太くんじゃない」

「成長したんだな」

傷だらけのムクたちが起き上がる。ムーン達に真っ向に突進してきた。

「のび太殿、セーラームーン！」

「後！」

二人は振り返った。しかしのび太はスペアポケットからヒラリマントを出して、弾き返した。

「アンタ達、こういう悪さをするバカには……！」

ムーンはムーン・スティックを取り出した。

「おしおきよ！」

ムーン・スティックから光が出る。光の中でムーンはプリンセス・セレニティになった。ムーン・スティックにはブローチにはめていたはずの銀水晶がついている。

「また、セレニティになった」

「これで3度目です」

「そっちかよ」

呆れる王ドラに突っ込みを入れるマタドール。

「あらあら、そんな可愛い姿で何ができるっていうの」

カオリナイトの言葉にお構いなくセレニティはスティックを構える。

「ムーン・ヒーリング・エスカレーション！」

銀水晶が光、動物達は光を浴び正気に戻り、気を失った。

「浄化……されたんだ……」

「凄まじい奴ね……。うさぎって……」

呆気にとられるドラえもん達。

セレニティとのび太はカオリナイトを睨む。

「観念しなさい。」

「お前の仲間はどうもない。お前一人だけだ。」

カオリナイトは悔しそうだが余裕の笑みを浮かべる。

「だったら、こいつらを盾にすれば無問題よ。」

カオリナイトはペロたちに向けて髪を伸ばす。その髪を

「ピンク・シュガー・ハート・アタック！」

ピンクのハートの集団で弾き飛ばす。

「ペロやムクたちには指一本触れさせないわよ！」

ピンク・ムーン・スティックを構えたちびムーンが立ちはだかる。

「どないします。ペロちゃんらまで危険な目に遭うたら怪我だけじゃすまされへんで。」

エドの指摘に一同は考え込む。

「しょうがない。エド、お前はこいつらと一緒に過去で待機してる。」

「ええんでしょうか・・・。」

「いいから、こいつらを連れて逃げろ。なつ。」

「判りましたで。」

エドはペロたちを担いで城を出ようとするちびムーンに止められた。

「待つて、これで行ったほうがいいわ。」

ちびムーンは時空の鍵を取り出した。

「時の護人よ 時空の扉天空を裂き我に開け放て 我は汝の名を呼ぶ 全能な時の神 護人の父クロノスよ 我を導きたまえ 我を守りたまえ 光の道を我に。」

光の柱が現れ、エドはその柱に飛び込む。そして光は消える。

「サンキュー、エド。」

「これで思う存分戦えるわね。」

「何を小癪な。」

カオリナイトは髪をセーラー戦士に向かって伸ばす。

「なんのこれしき！ルナP！」

ちびムーンはルナPを取り出す。

「はい、ニコちゃん。」

ルナPをドラニコフに回す。ドラニコフはルナPの丸い顔を見て「グアウオー！」

狼に変身して、キッドからくすねてきたケチャップやマスタード（だめでしょ。）を一遍で飲んで髪を炎で焼いた。

「バカな私の髪が・・・！」

「自業自得よ！ルナPアタック！」

ルナPをバレーボールのように投げつけ、彼女の顔に命中させた。カオリナイトは、真つ逆さまに落ち、

「今よ。みんな私に力を貸して！」

「判った。セーラー・プラネット・パワーね。」

「みんな行くよ。」

『ええ。』

ムーンスティックを構えたセレニティを囲んだちびムーン達は手を繋ぐ。

「マーズ・スターパワー！」

「マーキュリー・スターパワー！」

「ジュピター・スターパワー！」

「ヴィーナス・スターパワー！」

「ムーン・プリズムパワー！」

赤・青・緑・橙・桃の光がセレニティの銀水晶に集結する。

「ムーン・コズミックパワー！」

銀の光が加わり

「セーラー・プラネット・パワー！」

6色の光がカオリナイトを包む。

「きゃーーーーー！」

彼女は光の中で消滅する。後に残されたのは、機械の部品のようなものだった。ドラえもんはそれを回収する。

「こいつも偽者でロボットだったんだ。」

セレニティはセーラームーンに戻った。ムーンは力を全て使い果たしたようだ。そんな彼女をドラニコフが背後から支える。

「ガウ。」

ご丁寧にドラニコフはマフラーから手ぬぐいを出してセーラームーンの汗を拭く。そこをマーズの拳が飛ぶ。

「汗は拭かなくてよろしい！」

「ガウ。」

大きなコブを押えるドラニコフ。

「さすが、ムーン。こんなにいっぱい頑張ったんだもん。」

のび太はムーンに感動したのか、誇らしいと思った。

そこへ

「あんさん！」

エドが帰って来たのだ。

「エド？ お前帰ってきちゃったのか？」

「はい、うさぎはんの部屋の引き出しの中のタイムマシンで帰ってきたんですわ。」

「はえ。」 へよく見つからなかったんだね。」

「チツチちゃん達はしっかりと衛はん達に預けておきましたで。」

「それは、ごくろう。」

エドは、彼女達のところに戻ってきたのだ。和やかな一行の王ドラが割り込む。

「それはそうと、このおバカさんが起きたら即親玉の懷に潜り込みますよ。」

「おバカさんはないぜ。王ドラ。」

「黙っててくださいよ。変態。」

「誰が、変態だ~~~~~！」

王ドラとマタドローラのケンカは長時間続いたのだった。

地下室

ザバーン。

水槽の中から大きな球体が出てきた。球体は着地して消えて代わりに美人3人娘が現れた。彼女達は外部太陽系三戦士だ。

外部太陽系三戦士は、潜入に成功したのだ。

「どうやら、無事に潜入できたようね。」

「お団子やおちびちゃん、それにドラミちゃんには悪いけど、サターンは倒さなきゃいけない存在だからね。」

「スモール・レディの修行の妨げにはなりますが、仕方のないことです。」

「一刻も早く、サターンを倒さねば。」

その時、彼女達の前に不気味な笑い声が聞こえた。

「誰だ？」

【ふはははは。久しぶりだな。セーラーウラヌス、セーラーネプチューン、そしてセーラープルート。】

「お前は？」

ウラヌスたちの前に巨大な宇宙系のブラックホールのようなものが現れた。

「ついに姿を表したな。」

「ファラオ90。」

「今こそ、此処で決着をつけていただきます。」

外部戦士3人娘とファラオ90の戦いが始まったのだった。

第四八章ファラオ90（後書き）

ちよつと一旦此処で区切りまーす。

（3時間経過）

大変長らくお待たせしました。

偽者のカオリナイトを倒したムーン達とのび太くん一行。
ウラヌスたちの戦いが次回で開始します。

続きはまた数日後。

第四章 眞実（前書き）

ファラオ90との対決が今始まります。
今頃サターンはどうしておられるのでしょうか。
ほたるちゃん、ご無事でいてください。

第九章 眞実

地下室

「ファラオ90。沈黙のメシアがいない以上、聖杯はすでに伝説のメシアの手に渡つてあるわ。」

「お前に勝ち目などない。僕たちの勝ちだ。」

「成敗いたします。」

ウラヌスたちは攻撃体勢に入る。

【愚か者め。聖杯の持ち主は既にこの城に入っている。勝利は我のものだ。】

「なんですって？」

「スモール・レディ。」

【最初にお前達を倒し、聖杯の持ち主も倒し聖杯を手に入れてやる。】

ファラオ90は彼女達目掛けて突風を放つ。3人娘は風に押され気味だ。

「くうう。」

「なんて強さなの。このままじゃ全員倒す前にやられてしまうわ。」

「
遂に3人は吹き飛ばされる。」

『あー！ー！』

近くの柱に叩きつけられてしまった。

「くそ、あまりにも強すぎる。」

「真正面からじゃ攻撃しても無駄なようだわ。」

「地面の下からだったら。容易いじゃないのかな。よし、一か八か。ワールド・シェイキング！」

地面から黄色の球体でファラオ90を爆破させようとした。

「やったか。」

爆発の後、ファラオ90は全くの無傷であった。

「そんな、技が聞かない！」

「地面の下からじゃだめなのか。」

【当然だ。そのようなものは我には効かぬ。】

黒い流星団がウラヌスたちを攻撃する。3人はその攻撃に苦戦する。攻撃がやんだ頃には3人は傷だらけだ。

「受けてばかりじゃだめだわ。何か攻撃しないと。ディープ・サブマージ！」

シアンの球体がファラオ90を包もうとするが吸収されてしまう。

「え、ディープ・サブマージが吸収された。」

それを放出してネプチューンに命中させた。

「キヤー！」

「ネプチューン！」

ウラヌスはネプチューンに駆け寄る。

「大丈夫か。」

「ありがとう。でも、コイツあまりにも強すぎるわ。」

「確かに、あのような強さではとても太刀打ちできません。」

【どうした。齒ごたえのない小娘共だな。これならどうだ。】

巨大な球体をぶつける。

「デッド・スクリーム。」

赤紫の球体で弾こうとしたが逆に弾かれてしまう。その球体にウラヌスたちは飛ばされてしまう。

「なんて強い……。これじゃ手も足もでないじゃないの。」

【くくく、どうした。これで終わりか？】

ウラヌスたちはファラオ90を睨みつける。

「終わりのなものか。」

「私達の力は。」

「こんなものではありません。」

「ワールド・シェイキング！」

「ディープ・サブマージ！」

「デッド・スクリーム。」

3つの球体が合わさり1つの綺麗な色の大きな球体になりファラオ90を撃とうとする。が、その球体をファラオ90が吸収して跳ね返した。ウラヌスたちに命中して彼女達は飛ばされる。

「アーリーリー！」

ウラヌスたちは倒れこんでしまう。

「僕らの力を合わせても駄目なのか。」

「もう終わりかしら。」

「諦めてはなりません。かくなるうえは3つのタリスマンを使うのです。それでファラオ90を封印するのです。」

ブルートは最後の最後まで勇気や希望を失わなかった。

「それでいいのなら。」

「私達はやってみるわ。」

ネプチューンとウラヌスは手鏡と剣を取り出した。

「まだ、戦うのか。よかろう。御前達の根性を見せてもらおう。」

3人娘はそれぞれのタリスマンを重ねてファラオ90に翳す。

「これで終わりだ。」

「私達の力を。」

「見せて差し上げます。」

「スペース・ソード・ブラスター！」

「サブマリン・リフレクション！」

「デッド・スクリーム。」

タリスマンから3つの光線が現れ1つになり、ファラオ90を貫いた。

「【これが、こやつ等の力か！？グアーリーリー！】

ファラオ90は影となり消滅した。

「やりました。」

「ファラオ90を倒したわ。」

「ああ。後はセーラーサターンのみだな。」

その時、奥から怪しい男の声がした。

「きししし。お嬢さんたちとても強いっしょ。」

声の主が姿を表した。アチモフだった。

「Dr・アチモフ！」

「どうして此处に。」

「お前達が倒したファラオ90はワシの創った光だったっしょ。つまり偽者っしょ！」

「何ですって!？」

「よくやったっしょ。後はあの子にやってもらうからお嬢さんたちは向こうでワシらと大人しくしてるっしょ。」

アチモフが指を鳴らすと、6人の魔女と赤毛の女性が舞い降り3人を囲んだ。

「お前達は？」

「私は、紅井カオリ。貴方達が倒した女達は偽者。しいていえばロボットよ。」

「何ですって!？」

「私達は実はデス・バスターズの一員の生まれ変わりよ。デス・バスターズは初めから復活しなかったのよ。」

「なんてこと。」

6人娘は手の杖を翳すと3人娘を眠らせ、カオリはガーターの青い宝石みたいなスイッチを押すと3人を天井から出てきた黒い紐で拘束した。

「きしし。これで準備万端っしょ。サターンちゃん。ドラえもんズと小娘たちをお願いね。」

彼の背後からセーラーサターンが現れた。彼女は洗脳をされてしまっている。

「はい。Dr。」

第四十九章 眞実（後書き）

捕らわれの3戦士はどうなるのでしょうか。
今回はちよつと短めでした。

第五〇章闇の戦士セーラーサターン（前書き）

ウラヌス達は敵に捕えられ、サターンはアチモフに洗脳されてしまいました。その上、デス・バスターズの秘術師も魔女達も全員転生者の未来人でした。

そうとも知らないセーラームーン達とのび太くん達はほたるちゃん
の救助に向かいます。心配はありません。彼女には幻の銀水晶があります。これさえあれば、どんな敵も浄化されてしまいます。

第五〇章 闇の戦士セーラーサターン

機械室

王ドラとマタドローラは散々暴れ捲って目を回してダウンしてしまった。

「王ドラ、マタドローラ、大丈夫？」

「だ・だいほゝふでふゝ。」

「はらひれほゝ。」

一方ムーンは。

「うん？」

「あ、ムーン気がついた。」

疲れを癒したのだった。

「あれゝ、みんなどうしたの？」

「みんなで王ドラたちのケンカを見物していたの。」

ドラリーニヨが答えた後に、マーズのハリセンがとんだ。

「違うでしょゝ！うさが起きるのを待ってたんでしょがゝ！」

「あたしを？」

「そうである。ムーン殿は、戦いから長時間寝ていたのであるよ。」

「

「うさぎちゃんが起きたらみんなで行こうってことになったの。」

「そうだったの。みんなごめんね。」

「いいの、いいの。貴方にもエルちゃん達のケンカ見せたかった

のに、残念だったわ。」

「ちびうさちゃん、そういう話はしちゃだめよ。」

ちびムーンの能天気にもキューリーが突っ込みを入れる。

「でも、ムーンはずっとニコちゃんの膝枕にいたから。ニコちゃん

んが一番介抱してくれてたの。」

「ちよっと、ヴィーナス。」

「なぬ！？」

上半身を起こして振り返ると、マーズの鉄拳を受けた時にできたタンコブをつけたドラニコフが正座していた。

「がうがう。（もうちょっと寝てて。）」

セーラームーンは変なポーズで驚いた。

「ニコちゃん！？アタシずっとアンタの膝の上で寝ていたの！？」

「がう。」

ドラニコフは頷いた。

「ドラニコフさん、ムーンの額の汗を拭こうとしていたのよ。」

「そうだったの。ニコちゃんありがとう。」

「がう。」

ドラニコフは照れている。そこへ王ドラのハリセンがムーンを襲う。

「あいち。」

「・・・あいち。・・・じゃないでしょうが！まったくこんなに疲れが出るまで、無茶なんかして！少しは体力を抑えたらどうですか！？」

「もういいだろ。うさぎは良く頑張ったんだ。」

王ドラはドラパンの意見を聞かずにのび太も睨みつけた。

「それと、のび太くん！」

「はい！」

「貴方も貴方です！人間ですから、あまり派手に動き回らないでください！」

「いいじゃんか。のび太のお陰でもあつたんだから。」

「そうそう。」

王ドラはキッドとエドをキツと睨みつける。

「・・・・すいません・・・・。」

「・・・・すんまへん・・・・。」

キッド達は震え上がる。

「僕達は、のび太くんやムーンのお陰で助かったよ。普通操られた仲間を見れば躊躇するのに、君達は躊躇するどころか対抗したん

だ。」

「こんなところで迷ってたらほたるさんを助けられないじゃないか。」

「そうよ。ほたるちゃんを助けるには、何事にも前だけをみるべきよ。」

「偉いよ。二人とも。」

ドラえもんは感動した。

「さて、セーラームーンも起きたことだし、ほたるを助けに行こうぜ。」

「ええ。」

『オー!』

ドラパンがすすみでた。

「道案内は私に任せてくれないか。」

「貴方に?」

「城の中を一番知っているのは、私だからな。」

「だったら、安心。パンちゃん、城のご案内。お願いするね。」

「判った。」

ドラパンに導かれ一行は、アチモフのいる部屋に向かった。

迷路の前

一行は迷路の前に来た。

「うわー、こんなところに迷路があるなんて知らなかった。」

「この迷路はゴールによって、部屋が違うんだ。もしかしたらアチモフの部屋に続いているのかもしれない。」

「どうする?」

「此処は、徹底的に調べた方がいいよ。」

「それもそうだね。」

「だったら、あの塔を調べた方がいいんじゃない。」

ちびムーンが指差す方に大きな塔が建っている。

「あの塔が怪しそうだわ。」

「三ちゃんの魔法の絨毯でどーんと言きましょう。」

「よし、マハラージャ！」

ドラメッドは魔法の絨毯を出し、一行はそれに乗る。ところが、チーン。

「て、定員オーバーである……。御主等ちょっとは運動しなさい……。」

「ブチ……。ムーン達に袋叩きにされるドラメッドであつた。

「やっぱり、ルナPで行こう。」

数分後

ドラメッドはコブだらけになつて絨毯になつたルナPの上で目を回している。結局ルナPの絨毯で塔に行くことになつた。

「そういえば、ペロたちはどうしたの？」

「衛はんとところに預けておきましたで。」

「まもちちゃんたちのところに？」

「はい。あんたはんは寝取りましたから全然把握しとりまへんでしたっけな。」

「まあ、気持ちよくドラミより可愛い顔をして寝てたからな。」

「ちよつと、どういうことよ。それ。」

「まあまあ、夫婦喧嘩は後にして。」

「夫婦言つな。」

ドラえもんはハリセンでうさぎに突つ込みを入れる。

「見えてきたよ。あの塔よ。」

一行は塔が見えるところまで来ている。

「あれって、ミニミちゃんが捕まっていた塔だ。」

『ミニミちゃん？』

「私の友人だ。彼女がアチモフに捕えられていた少女だ。」

「なるほど。」

「とにかく、降りてみましょう。」

一行は塔の上に降りる。

塔の上

辺りはお花でいっぱいだ。

「うわー、綺麗なところ。」

「まもちゃんに連れてきてもらった植物園を思い出すわ。」

「あの時は、ほたるちゃんも一緒に本当に楽しかったわ。……ほたるちゃん……」

「そういえば、あそこでダイヤモンドに襲われたときにほたるちゃんに助けてもらったわね。」

「うん。そういえば……。サターンが覚醒するまでに何度もほたるちゃんに助けてもらったね。」

ムーンはちびムーンにそつと首に両腕をかける。

「ちびムーンはやっぱりほたるちゃんを助けたい？」

ちびムーンは頷く。ドラミも傍に来て。

「ほたるさんのためにも頑張りましょう。」

ちびムーンを慰める。

「ありがとう。ドラミちゃん。」

微笑む3人。その時、

「みんなー。」

懐かしい声がした。声の主はサターンだった。

「セーラーサターン。」

「ほたるさん。無事だったのね。」

ドラミはサターンに抱きつく。

「あの人に手術されそうになったときに力を使って脱出したんだ。」

「やっぱり、あたしの勘が当たったんだ。」

「よかったね。ちびムーン。」

「そうと判れば、サターンちゃん。早くあのおじさんのところに案内して、あいつにぎゃふんと謂わせてやりたいんだ。」

「判ったわ。ただその前に。」

サターンはドラミを羽交い絞めにした。

「ちよつと、何？」

「ドラミ!？」

サターンは邪な笑みをドラミ以外の一行に向けた。

「サターン、どうしたの!？」

「セーラームーン、いえ、伝説のメシア、貴方の持っている聖杯をお渡してください。さもなくば、この子を壊します。」

「サターン、一体どうしたの？」

「ドラミ、落ち着くんだ。サターン、一体きみはどうしちゃったんだ。」

「どうもしません。早く、聖杯を。」

「そんなことより、ドラミを放せ!」

キッドは叫ぶがサターンは無反応だ。

「もしかしたら、あのアチモフとか言う奴に操られているんじゃないかな。」

「そんな。てことは既に手遅れってこと。」

セワシはサーツとなった。

「サターン、貴方はあの薄汚い男に騙されているわ。はつきりいつて私達は貴方とは戦いたくないのよ。」

「アンタは本当は心の優しい子だよ。破滅の戦士って言ってもよくアタシたちを助けてくれてるじゃないか。」

「アタシたちは、ほたるちゃんを信じているのよ。」

「セーラームーンはほたるちゃんを殺せなかったのは友達だからよ。」

「もうやめて、ドラミちゃんを放して。貴方は、ファラオ90を倒すためにドラミちゃんを呼んだんでしょう。思い出して、アタシたちと楽しい時間を過ごした日々を。」

サターンは全くの無反応だ。それどころか、サイレンス・グレイブを振り回し、ちびムーン達に切りかかる。

『キヤー!』

一行は遠くへ飛ばされる。花畑に倒れこんだ。

「みんな！」

ムーンは駆け寄ろうとする。

「サイレント・ウォール！」

紫の球体がムーンを包み込んだ。

「ちよつと、サターンこれは一体？」

「安心しろ！こいつは防御系だから、たいしたことはねえって。つたく、相手を防御してどうすんだ。」

「これは、防ぐだけの技ではありません。」

「どういうこと？」

「どうしよう、出られないわ。」

ムーンは徒に壁をどんと叩いた。

「相手を封じ込める技でもあったのか！？」

「しまった。」

「ムーン、待ってて。今出してあげる。」

セワシはレーザーガンを壁に目掛けて撃った。ところが壁は跳ね返り、セワシに向かっていく。

「セワシくん。危ない！」

ドラえもんはセワシを抱えて遠くへ跳んだ。

花畑と衝突した。

「お兄ちゃん、セワシさん！」

二人は気を失っている。

「ドラちゃん！」

「セワシ！」

球体はムーンを連れ去ろうとしている。

「サターン！？」

「貴方も一緒に来てもらいます。」

「ふざけんな！ドラミを返せ！」

ドラミを取り返そうとキッドは駆け出したが、サターンはドラミを抱えてどこかに去った。球体も後を追うかのように浮遊してどこ

かに去った。

「うさぎ！」

「ドラミ！」

うさぎとドラミはセーラーサターンに捕えられてしまった。

塔に残されていたのは、ドラえもんズとのび太とセーラー戦士とセワシだった。

「ドラえもん、どうしよう。ムーンとドラミちゃんは敵に捕まったし、サターンはアチモフに洗脳されているし、もう僕たちにあいつを倒すすべはないの。」

「どうだろう。」

「畜生。ムーンはともかく何でドラミまで……。」

「多分、ドラミさんは人質ということでしょう。」

「冗談じゃないぞ。ドラミは確かに最初に関わったけど、だからって何も人質にしないでいいじゃないか！」

ドラミはこの戦いで何度も捕虜や人質になっていた。それが今回も人質になってしまふとは誰も思ってもいなかった。ドラえもんはただ叫ぶ以外はなかった。

「うさぎ……。」

ちびうさは泣き崩れるが遠くに月みたいな杖が落ちていた。ちびうさはそれを拾った。

「これは、ムーン・スティック？」

セーラームーンが連れ去られる時に落としてしまったらしい。

「ムーンちゃん、こういう肝心なアイテムを落としちゃうなんてドジだな。どうやってサターンちゃんを浄化するのさ。」

「がうがう。（全くだよ。）」

「でもさ。これは確か月の王国の姫様の生まれ変わりのムーンが使いこなせるってことはその娘のちびムーンにも使いこなせるってことじゃないか。」

「そういえば、そうだ。ちびムーン。今度試しにこれでサターンを浄化してみなよ。」

セワシは息を吹き返した。

「アタシが？」

「そうだよ。キミならできるよ。」

ドラえもんも目が覚めた。

「・・・判った。ほたるちゃんを取り返せるんだったらやってみせるよ。」

「よく言っただけムーン。」

「よし、サターンとムーンとドラミを取り返しに行くぞ！」

「オー！」

ドラえもん達はサターンたちの奪取に向かうのであった。

第五〇章闇の戦士セーラーサターン（後書き）

ドラえもん達はムーン達を取り返すために自らアチモフの懐に潜り込みます。アチモフとの最終決戦もだんだんと近づいています。ちびムーンはサターンを取り戻せるのでしょうか。

第五章捕らわれのうさぎ（前書き）

のび太くん一行は敵に捕まったセーラームーンとドラミちゃんを助けにアチモフの懷に飛び込もうとしています。

ちびムーンはムーン・スティックをちゃんと使いこなせるのでしょうか。

第五章捕らわれのうさぎ

エネルギールーム

「うさぎ。うさぎ。」

効き慣れた娘の声に反応してうさぎは意識を取り戻した。捕まったときに変身が解けてしまったらしい。

「うん。」

目を開くと機械いっぱいの部屋だった。

「ここは？」

「気がついたようだ。」

下を見ると手足をケーブルのようなもので拘束されたウラヌスがいた。

「ウラヌス！」

「貴方も捕まってしまったのね。」

「ネプチューン。プルートも。」

彼女の左右真横にはそれぞれプルート、ネプチューンがウラヌスと同じ状態になっている。

「待つてで。今、助ける。」

彼女もたすけようとするが……。

「あれ、動かない。何これ……？」

よく見るとうさぎもケーブルみたいなもので拘束されている。

「なんなの。これじゃ何もできない。」

うさぎはもがくがケーブルは外れないのだった。もがくうちに……。

「あれ、ブローチがない！どうしようこれじゃ変身できない。

は。そういえば、ドラミちゃん！？」

ドラミはうさぎと一緒に捕まってしまったのだ。

「うさぎさ……ん……？」

真上にうさぎ達同様ケーブルで拘束されていたドラミがいる。ド

ラミも意識を失っていたそうだ。

「ドラミちゃん。」

「大丈夫、うさぎさん？」

「ドラミちゃんこそ、大丈夫？」

「私は大丈夫。」

でも、うさぎさんが気絶している間にブローチと聖杯がサターンに盗られちゃった。」

「何ですって！？」

「聖杯を！？」

何処からともなく、怪しい男の笑い声が聞こえた。

「誰！？Dr・アチモフ！？どこにいるかは、知らないけど、姿を見せなさい。アツカンベーオヤジ！」

「誰が、アツカンベーオヤジっしょ。」

呆れ声と共にDr・アチモフが姿を見せた。片手にうさぎのブローチを持っている。

「お目覚めいかがかな。月のお姫様。」

「アタシは、月野うさぎ！一体、ブローチを如何する気よ！？」

「ブローチはたった今、おまえさんの持っている聖杯と融合させたっしょ。ただし外見だけは変わってないっしょ。」

この中にお姫様の幻の銀水晶が入っているから、この力を利用して世界征服に使うと思って拝借したっしょ。」

確かにブローチに変わったところは特になかった。

「冗談じゃないわ。どうやって銀水晶の力を調べたのか知らないけど、アンタみたいな個性的なオヤジに悪用されてたまるもんですか！？」

「個性的で悪かったっしょ。アツカンベー！」

アチモフはちびうさの絵の通りにアツカンベーをした。

「まるつきしアツカンベーオヤジだわ……。」

「うん……。」

「アツカンベーオヤジ言っな！」

それは、それとして銀水晶はもうワシのものっしょ。お姫様はそこでそのお嬢さんがたと高みの見物でもしてなさいっしょ。」

「ふざけないでよ！サターンは何処なのよ！？」

ドラミは喚き散らした。

「そう喚かなくても逢わせてあげるっしょ。」

アチモフは指を鳴らすとセーラーサターンが姿を表した。

「お呼びですか？Dr.」

「お姫様がサターンちゃんに会いたいって言ってるっしょ。」

サターンはムーン達の前に立つ。

「セーラーサターン？」

「お目覚めいかがですか？プリンセス。」

「サターン！プリンセスに手を出すな！」

サターンを睨んで怒鳴りつけたのはウラヌス！

「貴方方もお目覚めでしたか？」

「私達のメシアに何かしたら、許さないわよ！」

「次は本気で貴方を葬ります！」

ブルートもネプチューンも口々に罵声を投げつける。

「3人とも、やめて！彼女はあの人に洗脳されているだけなのよ！」

ドラミは3人を取り成すが3人はそのことに耳を傾けず、

「お前さえ、いなければ世界は破滅になりかけたりはしなくて済んだんだ！」

「・・・そうですか・・・ならば、今すぐ・・・。」

サターンは白い鎌を振り上げる。

「貴方の方から先に・・・。」

「ちよつと待ったー！ー！」

何処からか少女達の声がした。

突然、光の玉が現れた光の奥から手を繋いだ5人の少女達と囲まれた10体のロボット、そして10代前半の男の子達が現れた。

「みんな！」

「お兄ちゃん、キッド！」

「お待たせ！」

「遅れてごめんね！」

のび太達がセーラー・テレポートで此処まで来たのだった。

「お、お前達は！」

「世界の平和を乱す極悪爺さん！」

「良い子の笑顔を奪う悪いおじさん！」

「乙女に手をあげる変態爺さん！」

「人間のピュアな心を奪うお間抜け爺さん！」

「ほたるちゃんの力を悪用するアホなおっさん！」

『世界征服を狙うなんてとってもいけないことよ！愛と正義のセーラー服美少女戦士。セーラーチームが、月に代わってお仕置きよ！』

「『極悪』と『悪い』はともかく、『変態』と『お間抜け』と『アホ』はどういう意味っしょ！」

「この方がたは、私にお任せください。Dr。」

「貴方の相手はアタシだよ、サターン！」

ちびムーンはサターンの前に立った。

「サターンはアタシが助けるから、みんなはうさぎやドラミちゃんを救助して！」

「判った！」

守護戦士たちはうさぎ達の救助に向かった。

「馬鹿めが、こっちは特殊部隊がいるっしょ。」

天井の上にカオリと6人の魔女達が待機していた。彼女達は下に降りるとちびムーンを捕獲しようとするが……。

「おっと。」

「そうはいきませんよ。」

「未来のセニョリータ達。」

ドラパンやジェドーラを除いたドラえもんズは立ちふさがった。

「御主等の相手は我輩たちでアル。」

「ちびムーンちゃんには、指一本もふれされないもんね。」
「がうがう。」

「ちびムーン。あいつらは僕たちが何とかするから、早くサターンを。」

「判った。みんなありがとう。」

「あらあら、思わぬ邪魔が入ってしまいました。」

「どうします。カオリ様。」

「せっかくだからこの狸さんたちも。」

「やつつけちゃいましょう。」

「それ、いい考えだわ。」

「面白くなりそうね。」

「いいでしょう。手加減はしまいわよ。」

ドラえもんズと彼女達の戦いが始まった。

「ふー、やれやれっしょ。早いところ行動を実行しなければ・・・」

「そうはさせないぞ！」

ドラパンが正義のタロットカードをアチモフ目掛けて手裏剣のよう
うに投げてきた

「うわっ」と

アチモフはカードによるけてしまっ

「えい。」

「プス・・・」

背後にジェドーラのフォークがアチモフの尻を指した。

「イジーーーーー！」

アチモフは飛び上がった。

そのまま、ドラパンとジェドーラに追い回される。
のび太とセワシはというと。

「ワテらはお嬢はんたちの援護ですわ」

「「オー！」」

エドの背でマーズ達の援護をしている。

「ドラミちゃん、待ってて。今、助ける。」

セワシとのび太はドラミを、マーズ達はうさぎを助けようとしている。

「うさぎちゃん、大丈夫？怪我はない？」

「大丈夫。でも・・・。」

「待ってて。今とつてあげる。」

ジュピターは両手でケーブルを引きちぎった。うさぎは解放された。

一方のび太達は、工作用のカッターでケーブルを切ってドラミを助けた。

「ドラミちゃん。ありがとう。のび太さん。セワシさん。エドさん。」

「どういたまして。」

ドラミも背中に乗せるエド。

「そうだ、ウラヌスたちも助けてあげなきゃ。」

「え、ウラヌスたちも？」

「あの人たちも捕まっているらしいの。」

「そんな。」

ちびムーンはサターンと対峙している。

「ほたるちゃん。ううん、セーラーサターン。これ以上みんなを傷つけないで。」

「Drの命を背くわけには参りません。」

サターンはサイレンス・グレイブを振り回し、ちびムーンに襲い掛かる。ちびムーンはムーン・スティックを取り出して鎌を受け止める。

「やめて、サターン。貴方はあのおっさんに操られているのよ。思い出してアタシたちと共に過ごした日々を。そして、一緒にデス・バスターズと戦った日々を。」

「デス・バスターズは最初から復活などしていません。」

二人は互いに身を引いた。

「どういうこと。」

「ファラオ90は最初から存在しなかったのです。」
のび太達に解放されたウラヌスが答えた。

「ファラオ90はあの男が創った偽者だからなんだ。」

「偽者？」

「どういうことだ。」

「私たちもまんまと引つかりました。ファラオ90が復活したと見せかけて私たちを倒そうとしたのです。」

「初めからそのおじさんの世界征服のためだったの。そのために人間のピュアな心を様々な時代から取り寄せてきたのよ。」

「そうだったんだ。」

「未来のプリンセス。今、此处で死んで頂きます。」

「そうはいかないよ。」

サターンとちびムーンは互いに鎌とスティックを交じり続ける。

さすがのちびムーンは鎌で体中傷だらけになってしまう。

「スモール・レディ！もうおやめに……！」

「なれないよ！ほたるちゃんは絶対にアタシが元に戻すんだ！」

ムーンスティックが輝き、光の中でセレニティとお揃いの純白のドレスを纏った少女になった。ムーン・スティックにちびムーンの銀水晶がついている。

「プリンセス……セレニティ……？」

「ちびうさちゃん……。」

「ほたるちゃん。待ってて。元に戻してあげる。」「ムーン・ヒールリング・エスカレーション！」

銀水晶から帯のような光が現れてサターンを包んだ。

光の中

「ほたるちゃん。ほたるちゃん。」

ほたるは光の中で眠っている。目を開くとプリンセス・セレニティ姿のちびうさが微笑を浮かべて立っている。

「ちびうさちゃん・・・。」

「もう大丈夫だよ。さあ帰ろう。みんなのいる世界へ。」
ちびうさはほたるの手を取る。

「いいの、私はみんなに迷惑をかけてしまったのに。」

「ほたるちゃんは、何度もアタシたちを助けてくれたじゃない。戦士に覚醒してからもずっと。だから心配しないで。それに戦いが始まるうとしているときにドラちゃん達に助けを求めたんでしよう。もしプーたちが苛めようとしたらアタシが怒ってあげるから。」

「ありがとう。ちびうさちゃん。」

「帰ろう。ほたるちゃん。」

「ええ。」

エネルギールーム

光が消え、サターンは我を取り戻したかのように優しい表情に戻った。

「ほたるちゃん！」

ちびうさはとてもうれしそうだ。

「ありがとう。ちびうさちゃん。いいえ、未来のプリンス・セレニティ。最後の最後まで私を信じてくれて。みなさんもありがとう。」

「いいえ、私達は何もしていなかったわ。」

「みなさんは、私を最後の最後まで信じてくれました。」

「いやそんな。」

ちびうさはウラヌスたちを険しい目で睨む。

「ウラヌス、ネプチューン、プルート。ほたるちゃんはね、アタシのたいせつな友達なのよ。破滅とか誕生とかそんな関係ない。大切なのは人を思いやる優しい心よ。それでも、ほたるちゃんを苛めるのなら、3人とも戦士の資格なんてどこにもないわ。」

ちびムーンの宣言にウラヌスたちは戸惑ってしまう。

「申し訳ございません。」

「貴方の言うとおりでした。」

「我々はセーラーサターンを仲間として認めます。」

「ありがとう。セーラーウラヌス、ネプチューン、プルート。」

「よかったね。はたるちゃ……ん……。」

「ちびうさちゃん!？」

ちびうさは倒れようとする。途中で変身が解けて通常の姿になってしまう。そこを7人の女性達と戦いを中断したドラえもんズの内の1人王ドラに支えられた。その時に胸に着けてあったブローチが取れてしまうが誰も気付かない。

「全く、母親譲りのじゃじゃ馬なお姫様なんですから。」

「いいじゃない。サターンも無事に取り返したんだから。」

散々アチモフを追い掛け回したジェドーラは王ドラを取り成す。ドラパンも同じ意見だ。

「そうだ。後はアチモフを倒せば全ては解決するんだ。」

しかし、うさは浮かない顔だ。

「それが、変身ブローチと聖杯。あのおっさんに取られちゃった。」

「

「なんだって!？」

「アチモフは世界征服のために聖杯や銀水晶の力も利用しようとしているのよ。」

「なんだと!」

「酷い奴だ!」

「早く、アチモフから銀水晶と聖杯を取り返しましょう。」

「そうはいかないつし……!」

彼女達の背後にアチモフが立っていた。

「アチモフ、よくもわたしを……あ、それは、ルナPボールとちびうさちゃんのブローチ!」

アチモフの腕にはルナPボールとちびうさが落としたブローチが抱えられている。

「ルナPボールっていうんだ。コイツは確か小娘専用の聖杯にな

るんだっとなつしょ。」

「知ってやがったのか。」

「知ってるつしょ。未来と過去の銀水晶さえあればもう恐いものなしつしょー！さあ、みんな持ち場に行くつしょー！」

『はい！』

アチモフたちは下に引つ込んだ。

「待て！アチモフ！」

ドラパンは叫ぶが既にいない。

「どうしよう。ちびうさちゃんは既にこんなんだし。」

「こうなったら僕たちだけで銀水晶と聖杯を取り返しにいかなくちゃ。」

「だめだよ。どんな銃を持っているか判らないんだ。」

「おじいちゃんが行くなら僕も行く。これまで助けられたお礼だ。」

「銀水晶と聖杯を取り返すぞ。」

「オー！」

のび太とセワシはアチモフを探しに行った。

「ちよつと、のび太くん。」

「セワシさん、何処行くの？」

ドラミとドラえもんはセワシたちを追う。

「ドラちゃん、ドラミちゃん……。」

うさぎ達は呆然とする。

その時、地震があつた。

「な、なんなの？」

「まさか……。」

上空

アチモフ城がUFOみたいな飛行物体に変形した。UFOは宇宙に舞い上がった。

第五章捕らわれのうさぎ（後書き）

サターンは取り返せたものの、未来と過去の銀水晶と聖杯はアチモフに盗られてしまいました。

うさぎちゃんとちびうさちゃんはどっやって戦うのでしょうか。

第五章決戦アチモフマシン（前書き）

うさぎちゃんと傷だらけのちびうさちゃんは幻の銀水晶と聖杯をアチモフの一味に盗られてしまい戦闘不能に陥ってしまいました。それを取り返そうとドラえもん達はアチモフのいる操縦室に向かいます。ドラえもんズとセーラー戦士の最終決戦が今始まろうとしています。

第五二章決戦アチモフマシン

エネルギールーム

ちびうさは王ドラの腕の中でまだ、ぐったりしていた。

「ちびうさちゃん、まだ目が覚めないんだね。」

「ああ、彼女はセーラーサターンを浄化させようと必死で一人で頑張ったんだからな。」

「私のせいで……。」

「サターンのせいじゃないよ。」

うさぎは左手をサターンの右肩に置く。

「うさぎさん。」

「悪いのはあのオヤジよ。あのオヤジがサターンの力を悪用しようとするからだよ。」

「今回のうさぎ。なんだか逞しくなったみたい。」

「なんかうさぎちゃんじゃないみたい。」

「むしろ、優秀な戦士になってる気がするよ。」

「アタシも少しはうさぎちゃんを見習わなくちゃ。」

四守護戦士はうさぎを慕うように褒めている。

「セーラーサターン。」

ウラヌスたちは畏まっている。

「ごめんなさい。貴方のことを散々誤解してしまっで。」

「サターンは沈黙と破滅の戦士なのは確かですが、誕生の戦士でもあったことは今、ようやく知りました。」

「今かよ……。」

マタドローは激しい突込みを入れる。

「私たちは、貴方を第4の外部戦士として受け入れます。」

「ありがとうございます。」

セーラー戦士は新たな絆を結ぶのだった。

「よかったね。サターンちゃん。ウラヌスちゃん達と仲直りがで

きて。」

「がうがう。」

そこへ王ドラの指摘があった。

「和んでいるところをすみませんが。この御転婆娘を如何しますか？」

「あ、そうだ。忘れていた。」

うさぎ達はちびうさを介抱する。

「凄い傷である。」

「お医者カバンじゃ間に合いませんよ。」

「ほんまに、偉い傷だらけや。」

ちびうさの体はあちこちに鎌で掠ったような傷があった。

「あの、私でよろしければ……。」

「そういえば、ほたるちゃん。回復能力も持っていたんだっけ。

よし、ほたるちゃん。お願いね。」

「はい。」

サターンはサイレント・グレイブをちびうさに翳した。

「サイレント・ヒール！」

鎌から紫色の小さな球体が出る。球体はちびうさを包む。ちびうさの傷はみるみる内に回復していった。彼女は目を覚ました。

「ちびうさ！」

「ちびうさちゃん！」

「うさぎ。サターン。」

「よかった。ありがとう、ちびうさちゃん。助けてくれて。」

サターンはちびうさに抱きついた。ちびうさもほたるに抱きついた。

「あたしこそ、ありがとう。」

二人の絆はまえより深くなった。

操縦室

アチモフは忌々しそうにその光景をモニターで視聴していた。

「うぐぐ、あの小娘共が、いい気になっちゃってまー。行っちゃいなさい。」

アチモフは5つのボタンのうち、髑髏のボタンを押した。
うさぎ達のいた床に大穴が置いて宇宙に落とされた。

宇宙

ドラパンはテキオートーを出し、自分達に光線を指した。

「テキオートー！よし、これで宇宙空間でも平気だ。みんな離れるなよ。」

うさぎ達は、サイレント・ウォールで守られて、王ドラたちはエドに捕まった。

操縦室

「諦めの悪い子達ですね。」

「如何します。」

「決まってるっしょ！やっつけるっしょ！」

「「はは！」」

娘たちの1人はロボットのボタンを押した。

円盤はたちまちロボットになった。

宇宙

宇宙ではうさぎ達とその光景を見ている。

「一体どうしたらいいの？」

「困ったな。聖杯も銀水晶もおっさんの手の中にあるし。」

「何、心配はない。ドラえもんズが力を合わせれば何とかなる。」

『よし、一か八か！』

「その間にアタシたちはうさぎちゃん達を。」

「エド、お前もだ！」

「ハイな！アンさん！」

「「よっしやー!」」

ドラメッドとドラリーニヨは上部の両足になる。いや太ももとい
うべきか。マタドーラは胸部になる。

「おっし!」

「いえーい!」

「あちょー!」

キッドは右腕、王ドラは左腕になる。

「がうー!」

「僕も!」

ドラニコフは左足で、ジェドーラは右足になる。そしてドラパン
は頭部になる。

「グラッチ!」

『合体ドラえもんズ!』

「馬鹿めが、銀水晶はこっちにあるっしょ。お前らなんか手典範
にやつつけてやるっしょ。」

王ドラたちはロボットと睨みあっている。

「それはこっちの台詞だ。今までの礼、倍にして返してやる。」

「じゃあ、試してやるっしょ。」

ロボットは片手を平手にして振り上げる。

「誰か、何とかして頂戴!」

「えっと、スルーライト!」

ジェドーラはコック帽から枝の赤いライトを出して、自分達に当
てる。手は彼らを擦り抜けた。

「アレー!」

もう、何するっしょー!げんこつつしょー!」

今度は拳が襲ってきた。

「それなら、スペシャルドカーンだ!」

キッドの空気砲が手を破壊した。

「なに、酷いっしょー!もう怒ったっしょー!吹き飛ばっしょ

」！

胸元からドリルをだしてドラパン達を貫こうとしたが、

「ヒラリ。」

マタドールのヒリリマントで反射されてロボットに大穴を開けた。

「うそっしょー！なんてことするんしょー！」

「やゝゝゝい。ざまゝみる！」

「こいつめー！」

もう片方の手で叩きのめそうとしたがドラニコフの炎で焼かれてしまい、更に王ドラのヌンチャクで頭を潰された。

「いでよ。魔法道具達。」

ドラメッドは巨大な工具を召喚してロボットを解体した。

操縦室

アチモフたちは大慌てだ。

「Dr如何しましょう！？」

「このままじゃばらばらになるっしょー！」

その時、4つの影がこそこそしている。

「ちよつと君達、何してるのよ！？」

影は立ち止まった。正体はのび太達だった。

「見つかったか？」

「悪いけど、この2つのブローチは返してもらっよ。」

「これがないとうさぎさんもちびうささんも戦えないのよ。」

「お前の野望は此処までだ。」

みんな脱出だ。」

「ぎー、もうなったらヤケっしょーっしょー！」

ロボットは駒のように回りだした。

のび太達は、いつの間にか拘束されていた。

「うひょひょひょ。狸共、散り散りにしてやるっしょー。」

宇宙

セーラー戦士たちは宇宙で見守っている。

「ああ、王ちゃんたちが。」

「私達も彼らの援護をしましょう。」

「そうだ。今まで助けてもらった礼1つもしていなかったな。」

「エド。うさぎちゃん達を頼む。」

「はいな。お任せ下はれ。」

マーズ達は、アチモフマシーンに立ち向かう。

「みんな、頑張つて。」

「負けないで。」

「シャイン・アクア・イリュージョン！」

「スパーク・リング・ワイドプレッシャー！」

水の矢と雷のボールがロボットを攻撃しようとしたが効果なし。

「デッド・スクリーム。」

赤紫の球体が襲うがこれも効果なし。

「ああ、だめだ。」

「大変だー！如何しよう！」

「ドララ、ドラドラドラ。」

11体のミニドラがドラリーニョのポケットから出てきた。

操縦席

『むぐむぐむぐ。』

「全く、まだ仲間が残っていたなんて知らなかったっしょ。いひひ・・・。でも、もう御終いっしょか。」

「ドラドラ。」

「そうかそうか。ドラドラ？」

なんと数体のミニドラがブローチを持ち出したり、ドラえもん達を助けようとしているのではないか。

「げげ、お前達は。」

「ドラ？ドララ！」

アチモフたちとミニドラたちは鬼ごっこを始めている。

「コラ！ブローチを持っていくな～～～！」
自由になったのび太達は。

「みんな、この隙に脱出だ！」
「判った！」

ドラえもんは何処でもドアを出して、ミニドラたちはのび太やセワシの頭や肩に乗って全員ドアを潜った。

「今度こそ、じゃーねー！」
「待つっしょー！」

アチモフも潜ろうとするが時遅く、ドアが閉まり衝突してドアは消えた。

宇宙

「お待たせ。」

「ありがとう。みんな。」

「みんなご苦労様！うさぎちゃん、スモール・レディ。これで変身出来るよ！」

「行くよ！ちびうさ！」

「OK！うさぎ！」

二人はブローチを掲げる

「ムーン・コズミックパワー！」

「ムーン・プリズムパワー！」

「メイクアップ！」

二人は変身する。更に。

「銀水晶は聖杯と融合したから。」

「そのまま、2段階変身できるかもしれない。」

2人は銀水晶を掲げる！

「クライシス！メイクアップ！」

二段階変身を遂げる2人は戦士たちに微笑を見せる。

『スーパースーラームーン！スーパースーラーちびムーン！』

「お待たせ。」

「みんな。」

ドラえもんは左手にドラミは右手になり、のび太とセワシはエドに預ける。

「セーラー戦士とドラえもんズの友情パワーを！」

「今、見せてやるわ！」

セーラー戦士たちは武器を構えたスーパーラームーンとスーパーセーラーちびムーンを囲み手を繋ぎ、ドラえもんズは親友テレカを自分達の周りに輪みたいに並べる。

「みんなを苦しめた極悪科学者！」

「ここでお仕置きしてやる！」

『我らドラえもんズ！』

親友テレカの光が彼女達に降り注ぐ。

「マーキュリー・スターパワー！」

「マーズ・スターパワー！」

「ジュピター・スターパワー！」

「ヴィーナス・スターパワー！」

「ウラヌス・プラネットパワー！」

「ネプチューン・プラネットパワー！」

「プルート・プラネットパワー！」

「サターン・プラネットパワー！」

八つの光も降り注ぐ。

二人はハート・ムーン・ロッドとピンク・ムーン・スティックを掲げる。

「「レインボー・ダブルムーン・ハート・エイク！」」

虹とハートの大集団がアチモフマシーンを真つ二つにする。

「なに~~~~~！」

『いつけ~~~~~！』

更にもう半分を消し去る。後に残ったのは大きなジェット機である。

「うき~~~~~！覚えろっしょ~~~~~！」

アチモフたちは逃げ出した。

「「やった~~~~~！」」

みんなは大喜びだ。

テレカはドラえもんズの元に帰る。

二段階変身が解けて通常時に戻る。ただ、2人とも元気だ。

「やったな。セーラームーン。いや、伝説のメシア。」

「ちびムーン、ありがとう。そしてドラえもんズのみなさんも本当にありがとう。」

「いやいや、最初に戦おうとしたのはドラミの方だったんだ。」

「確かに最初に飛び出しゃがったのは、ドラミだ。」

「ドラミがサターンのメッセージに導かれたんだ。」

「でも、途中でみんなに助けてもらっちゃった。」

「というかあの人たちに誘われて加わりました。」

「彼女達のお陰だよ。」

「うさぎちゃん達は強いよ。」

「我輩、疲れたである。」

「がうがう。」

「さあ、帰ろう。僕たちの故郷へ。」

「うん。」

「見て！」

セワシが指を指した方向には大量のピュアな心が流星になり、持ち主の所に帰ろうとしている。

20世紀末期 夜 土萌家の庭

しずかたちは星空を見ている。

「うさぎちゃん。」

「美奈。」

「頑張ったな。」

「ええ。」

「……ほたる、よくやった……。」

屋根の上

ノラミヤーコとパワえもんが屋根の上に座っている。

「ドラえもん。」

「みんな。」

21世紀半ば

人間のなつた、エイルとアンは流れ星の多い星空を眺めた。

「勝つたのね……。うさぎちゃん。」

「ああ、彼女達は勝つたんだ。」

二人は抱き合い、流れ星を見続けた。

夜 ブラジルの病院 病室

「なんだこりや~~~~~!」

ジャイアンの怒鳴り声が室内に響いた。

スネ夫はジャイアンに胸倉を捕まれている。

ジャイアンの顔に落書きがされていたことに気付いたのだった。

「ちよつと、お兄ちゃん。」

「落ち着いて。剛田くん」

4人はピュアな心が戻り目が覚めたのだった。

「僕じゃないよ~~~~~!多分のび太だよ~~~~~!」

「嘘こけ~~~~~!お前がしたんだろうが~~~~~!薄情者が~~~~~!」

ジャイアン達の大騒ぎは続いたのだった。

夜 パリの草原

ブイーン。何処でもドアが表れ、一行はどやどやと満員電車のホールダッシュ並に出てきてしまい、脱出後にズッコケ3人組みたいにずっこけた。

「ウギユ~~~~~!」

「あいてて。」

一行は無事にパリに戻ってきた。

「此処は……。」

「パリだわ。戻って来れたのよ。」

辺りを見回すと何処も彼処のパリだ。町中に英雄を祝福するかのよう
に灯を灯している。ダイヤモンドはアチモフマシンの破壊後に
いなくなっていた。

「やった~~~~~！バンザ~~~~~イ！」

ムーンやちびうさ以外は大はしゃぎだ。

そんな中ムーンとちびムーンは。

「うさぎ。ムーン・スティックを勝手に使ってごめんね。これを
返すね。」

「いいのよ。頑張った御褒美にこれをあげる。一人前のレディと
しての印として。」

「判った。ありがとう。」

ムーン・スティックは彼女の思い出の品となった。

「さあ、ジャイアン達を迎えに行こう。」

『オー！』

第五章決戦アチモフマシン（後書き）

ドラえもんズとセーラー戦士は遂にアチモフ一味を倒しました。最終話の前に最後の用語集と行きます。

用語集3（前書き）

ドラえもんズとセーラー戦士の戦いは済みました。
最後の用語集が来ました。

サターンはこの後どうなるのでしょうか。
仲間との再会も間近です。

用語集3

アツカンベーオヤジ・・・Dr・アチモフを意味している。ちびうさはアチモフの似顔絵を描く時にアツカンベーした表情をかいてしまい、アチモフはうさぎにこう呼ばれている。

サイレント・ヒール・・・サターンのオリジナル技。サイレント・グレイブから小さな紫の球体を出し、体を回復させる。

スルーライト・・・ジェドローラが出したオリジナル道具。使用者自身及び相手に光を当てると、5秒間の間だけ、擦り抜ける能力を得られる。ジェドローラが使ったときはタイミングがよかった。

レインボー・ダブルムーン・ハート・エイク・・・スーパーセーラームーンとスーパーセーラーちびムーンの合体技。虹とハートの集団で敵を浄化させる。原作オリジナル技だが、今作で使用された。

ルナPアタック・・・ちびムーンのオリジナル技。ルナPボールを相手にバレーボールのようにぶつける。本来はちびうさのゲームオリジナル技だったが、今作ではちびムーンの技にもなった。

アチモフマシーン・・・『怪盗ドラパン謎の挑戦状』で登場したロボット。前作は8体のネコ型ロボットに破壊されたが、今作は10体のネコ型ロボット及びセーラー戦士の力に敗れて破壊された。破壊後はピュアな心は流星となりそれぞれの持ち主に帰っていった。

ルナPボール・・・ちびうさのアイテム。セーラー戦士になった時でも戦闘用に使っている。

様々な道具や人物に変身する能力（のうりょく）（主にちびうさ専用の聖杯）や、

セーラー戦士との通信にも使っている。後にアチモフにより、銀水晶と融合させられる。

ガーネット・ロッド・・・セーラープルートがいつも持っている巨大な鍵型の武器。別名時空の鍵。頂上にタリスマンの1つガーネット・オーブを乗せている。様々な技を繰り出している。ちびうさの時空の鍵同様時空の扉を開くことができる。

ガーネット・オーブ・・・セーラープルトのタリスマン。過去の未来の出来事を察知できる。

ガーネット・ロッドに取り付けてある。取り外しが可能。

スペース・ソード・・・セーラーウラヌスのタリスマン。普段は鞘に入っている。スペース・ソード・ブラスターを発射できる。普通の剣の働きも持っている。

ディープ・アクア・ミラー・・・セーラーネプチューンのタリスマン。占いや防御、読心術に使っている。サブマリン・リフレクシオンを発する。

用語集3（後書き）

次回は感動のクライマックスです。
ドラえもんの誕生日ももうすぐです。

最終章誕生日（前書き）

ドラえもんズとセーラー戦士の戦いはようやく幕を閉じました。

いよいよドラえもんの誕生日です。

のび太くんたちも元の世界に帰れます。

そういえば、今月は我侬のうそつきの悪餓鬼のスネ夫くんの誕生日でしたね。今月はのび太くんみたいにいい子になってもらわないといけませんね。

スネ夫くんみたいに我侬な子供は撥が当って、第2期1作の中編映画の主人公に選ばれませんでした。

全く哀れな子でした。

最終章 誕生日

ブラジル 病院前

辺りは怪物たちがいなくなっている。平和になったのだ。

ジャイアンたちはようやく退院することになった。スネ夫はもうボロボロになっていた。

「僕じゃないのに。」

油性で書かれたためにジャイアンの顔の落書きはなかなか落ちなかった。

「スネ夫さん、大丈夫？」

「大丈夫だよ。」

「それにしても、ムクやチルチルは如何したんだろう？」

「さあな。まさかあの怪物に……。」

遠くから、……おい……と声がした。声の方を見ると10人の少女達と11体のロボットそして自分達と変わらない年頃の少年2人が自分達の方へ歩いてくる。

「のび太！はるかさん！」

「みちるさん！せつなさん！」

「ドラえもん！ドラパン！」

「ちびムーン！」

彼らも夢中に駆け出した。

「スネ夫くん。」

「出来杉くん。」

「ジャイアンくん。」

「ジャイ子ちゃん。」

「心の友よ！よく、無事だったな。」

ジャイアンはのび太とちびムーンに抱きついた。

「無事に決まってるじゃない。もう苦しいよ。」

「それにジャイアンその落書き、なんとかならない。」

のび太たちは、ジャイアンを見るなりくすくす笑った。セーラー戦士やドラえもん達も笑った。

「なるうにも、スネ夫の奴、油性で書きやがったんだよ。」

「だから、僕じゃないってば。」

「こら、スネ夫くん。言い訳してないで、素直に謝りなさい。」

「でも……え？」

スネ夫はセーラーMoonを見るなり目を丸くした。出来杉やジャイアンも同じだ。

「貴方、まさか……。」

「そのまさかよ。この子はうさぎちゃんよ。」

「これが、うさぎさん！キレー過ぎる〜！」

「あの人そっくりだ。」

「あの人って？」

「いや、俺達の時代で店に来たときに蜂蜜を買った女の人だよ。

確か、ちびMoonそっくりの赤ちゃんを連れていた人なんだと思うんだ。」

「そういえば、貴方に良く似た人にあったような気がするんだけど……。」

思い出そうとするちびうさをキッドが遮る。

「そんなの後々。」

「ジャイアンはん達を迎えにきはったんだから。」

「元の時代に帰ろうぜ。」

「ああ、そうだな。」

「でも、チルチルたちが。」

「あの子達なら20世紀にいるよ。」

「本当に。」

「家のデimosやフォボス、しずかちゃんのペット達も無事よ。」

「やった〜〜〜！」

ジャイアンたちはおおはしゃぎ。

「よかったわね。」

「ええ。貴方方の友達にもうすぐ会えるでしょう。」

「それじゃ、時空の扉にレッツ・ゴー！」

『オー！』

「と、その前に……。」

「だよな。」

ジャイアンは数時間かけて落書きを落として、みんなで20世紀末期にむかった。

20世紀末期 土萌家 庭

うさぎたちは元の時代に帰ってきた。教授の家の庭はもう緑いっぱい^ぽの庭になっている。

「うさこ。」

「のび太さん。武さん。スネ夫さん。ジャイ子ちゃん。出来杉さん^ん。」

「美奈。」

「みんな。」

「ドラえもん。」

「ドラミちゃん。みんな。」

「ほたる。」

「まもちゃん。ルナ。」

「アルテミス。」

「パパ。」

「しずかちゃん。」

「パワえもん。ノラミヤコ。」

「ムク。」

「チルチル。」

衛たちは一行を出迎える。

みんなはそれぞれの再会を果たす。

特に、ジャイ子・ジャイアンの兄弟・スネ夫・ほたる・レイにとつては感動の再会だった。

「おかえり、ほたる。」

「ただいま、パパ。」

「みんな良く頑張ったわね。」

「ええ、これもみんな。ドラえもんズやのび太くんたちのお陰よ。」

「いえ、私達も貴方に助けてもらいました。」

「あれ、そうだった。」

ドラリーニヨはすっからかに忘れていた。ドラマッドは突っ込みを入れる。

「そうだったぞよ。お主忘れたのであるか？」

「がうがう。」

ドラニコフは呆れ顔だ。

「何はともあれ、みなさん。本当にありがとうございました。お陰で私の役目も終わりました。」

「役目って？」

ドラミは戸惑う。

「私の役目は世界をいえ全時代を沈黙から救うのが役目でした。ただ、私1人じゃなにもできなかったので、こうやって救援メッセージを送っていたんです。様々な人と触れ合うために。」

「そうだったのね。」

「ドラミちゃん、ちびうさちゃん。今まで本当にありがとう。私はもう昔の私じゃない。これからは、本当の友達を作るために新しい人生を始めることにしたの。」

「今度会う時はまた一緒に遊ぼうね。」

「うん、判った。アタシが立派なプリンセスになったらドラちゃん達と一緒に宴会をしようね。」

「ほたるさん。貴方のことは一生忘れないわ。」

「ありがとう。」

そついい残すとはたるの体が輝き小さくなり赤ちゃんの姿になった。手にはサターンのリップ・スティックが握られている。

「可愛い！これがほたるちゃん！？お人形みたいだ！」

うさぎ達は、大はしゃぎだ。

「ほたる。沈黙の力を使い果たしてまた赤ん坊になったのか・・・」

夕方 公園

ドラえもん達の分かれの時が来た。プルートも再び時空の扉を守る役目を与えられた。うさぎ達は見送りに来た。

「本当に帰っちゃうんだ。」

「うん。僕達も本当はもう少し此処にいたいんだけど、家族が心配するんだ。」

「そうそう、俺達も早く帰らないと2人と1匹仲良く父ちゃんと母ちゃんに叱られるぜ。」

「言われてみれば、そうね。」

うさぎはのび太達の傍に来了。ぶられるらしい。しかし、うさぎはのび太としずかの手を取り。

「二人とも。元に時代に帰ったら仲良くしなさいよ。」

2人の手を重ねた。しずかは戸惑うが、のび太は嬉しそうだ。

「はい。」

「はい・・・。」

「よし。それとその3人。」

ジャイアンたちを睨む。

「あんまり、のび太くに意地悪はしないでね。特に恋路の邪魔は絶対にしないように。悪さばかりするとちびうさみたいに我侭になるわよ。」

「・・・は・・・い。」

3人、特にスネ夫とジャイアンは不服だ。ちびうさはムツとしている。

「一体、どういうことよ。」

「まあまあ。では行きますか。」

『はい。』

プルートは天に杖を翳すと光の柱が舞い降り、3人は柱に導かれ浮遊した。

『さようならーーーーー！また、来てねーーーーー！』

『さようならーーーーー！お元気でーーーーー！』

ドラえもん達は元の時代に帰っていった。

21世紀初期　夕方　のび太の家　玄関

のび太達が着いた頃は辺りは平和になっていた。

「ママー！ただいまー！」

しずかたちはそれぞれの時代や家に帰ったのだった。

「お帰りなさい。遅かったのね。2人とも。うさぎさんって言う人がお買い物をお届けにきてくれたのよ。」

のび太たちは帰宅するとママはお使い籠をのび太に差し出した。

「ドラえもんの誕生日プレゼントだ。知ってたのか。」
「ありがとう。」

「ただいま。」

「おかえりなさい。早かったね。」

パパも帰ってきた。パパは1通の封筒をのび太に差し出した。

「郵便受けにのび太と宛ての手紙が来てただけだ。のび太の友達からだぞ。はい。」

「ありがとう。」

のび太の部屋

部屋に入るとのび太は封を開ける。中には招待状と手紙が入っていた。のび太は手紙を読んだ。手紙にはこうかかれていた。

『のび太くんへ』

おかえりなさい。よく、頑張りましたね。デス・バスターズの復活は私の早とちりでした。

例のDr・アチモフの一味は30世紀のクリスタル・パレスの警備隊が捕獲しました。

今日はドラちゃんのお誕生日ですから、誕生パーティーをこの時代のクリスタル・パレスで行います。

ドラちゃんに内緒でプレゼントを持って彼とこの城においてください。待っております。

ドラミちゃん達も招待しております。

21世紀のうさぎことネオ・クイーン・セレニティより』

「ちびうさちゃんのお母さんのクイーン・セレニティはうさぎさんだったんだ。」

それにしても随分まともだな。」

「何、如何したの？」

ドラえもんは尋ねる。

「なんでもないよ。ねえ、ドラえもん、今からでもクリスタル・パレスに行こうよ。」

「今から？う〜〜ん……。なんだか判らないけど行こうか。」

「そうこなくちゃ。」

のび太はプレゼントを持ってドラえもとクリスタル・パレスに向かう。

廊下

「如何したの？あの人やっぱり貴方のお友達だったの？」

「そういうこと。今日はあの人家でパーティーすることにしたんだ。」

「あの人の家で？」

「そう、じゃあ行ってきました。」

2人は玄関を出た。パパもママも目をぱくりさせた。

「変わった友達だな。」

「ええ。」

クリスタル・パレス内 廊下

のび太達はクリスタル・パレスに辿り着いて警備兵の案内で宴会部屋に入った。

宴会部屋

しずかやドラミたち、そして何も変わっていない外見のセーラー戦士たちが笑顔で待っていた。

「あら、のび太さんたち。」

「全員揃ったようだな。」

「お待ちしていました。のび太くん。ドラちゃん。」

ドラミたちの内、最も笑顔で迎えていたのはのび太より年下のセーラーサターンだった。

「セーラーサターン？」

「また、急成長したの？でも、今度は小さいよ。」

「力が少し弱かったから今みたいな姿になったの。」

「なんだか、前より綺麗になったみたいだ。」

「僕達だって、最初はとってもびっくりしたよ。」

「すぐにほたるさんだなんて判らなかったんだもの。」

その時、タキシード仮面と瓜二つのグレーのタキシードを纏った男性が姿を表した。

「やあ、のび太くん。ドラえもん。久しぶりだな。」

「お久しぶり。」

「元気そうだな。」

男性の型からルナとアルテミスが表れた。

「こんばんわ。」

「ルナ、アルテミス、久しぶり。」

「私は、キング・エンディミオン。現在のスモール・レディの父だ。」

「ちびうさちゃんのか？」

「そうなんだよ。のび太、あの赤ちゃんはちびうさだったんだよ。その上、あの女の人のはうさぎの姐ちゃんだったんだよ。」

「それは、知ってる。だからあの人は僕たちを知っていたんだよ。」

「ははは、君達も妻に散々世話になったようだな。」

「おつといけない。ドラえもん、こちらに。」

「え、何処に？」

エンディミオンはドラえもんの手を取り、客席に連れて行った。ラッパが響き赤ん坊のちびうさを抱えたセレニティとキングはドラえもんと最前に立った。

「皆様。お待たせしました。」

我が友人で、世界の平和を救った英雄達の1人ドラえもんの誕生日パーティを開催いたします。」

のび太達の盛大な拍手が響いた。

「そうか。今日は僕の誕生日だったんだ。」

「ありがとう。みんな。」

最初にドラえもんへのプレゼントの献上から始まった。

「ねえ、のび太くんはどんなものを贈るのか？」

「それは、あげてからのお楽しみだよ。」

それより、ルナ。君のお腹ジャイアンより大きくない。」

確かにルナのお腹はジャイアンより大きい。

「あのね。実は数日後からアタシもママになるのよ。」

「えー。」

「つまり、僕がパパになるの。いひひひ・・・。」

「なるほど、いい仔猫ができるといいね。」

「次、野比のび太くん。」

「はい。」

のび太はプレゼントをドラえもんに贈る。

「ドラえもん。誕生日おめでとつ。」

ドラえもんは包みを開ける。中には2つの四色の糸で作られた腕輪だった。ドラえもんのび太は腕にはめた。とても似合っているようだ。

「のび太くん。ありがとう。」

ドラえもんは笑顔だ。アルテミスが話を切り出した。

「せっかくだから、みんなで記念写真をとろうよ。」

「いい考えだ。」

中庭

みんなは並んでいる。カメラはジャイアンが父から借りたものインスタントカメラを使うことにした。

のび太とドラえもんは隣になり手を繋いだ。

「これからも一緒だよ。ドラえもん。」

「みんな一緒だね。」

「ええ。」

後のちびうさを抱えたセレニティも微笑んだ。

「では、行くぞ。」

ジャイアンも集団に入った。

「ハイ、チーズ！」

シャッターの音が鳴り、光った。写真が出てきた。いいのが撮れたようだ。

世界を救った英雄達の伝説は未来で語り告がれることになったのだ。

最終章誕生日（後書き）

ドラえもんズとセーラー戦士達の戦いはこうして幕が閉じました。ジャイアンたちは結局最後の最後まで目立たない形になりました。私がちよつとお仕置きしておいたみたいでした。

この小説で私が2人をすっかりした子にしました。

ヘル・デステイニー編ではうさぎちゃんはいつものうさぎちゃんに戻ってしまうのかもしれませんが、やがてすっかりものになるのでしょう。

これで私もゆつくり休めます。

セーラームーンは終わってもドラえもんは続きますから、ドラえもんを応援してください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5821o/>

ドラえもん と セーラームーン

2011年10月6日20時27分発行